

畑田遺跡
中野遺跡
発掘調査報告書

財団法人
山形県埋蔵文化財センター

6-1995-533-01

1995

1995
533
6

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

はたけ だ
畑 田 遺 跡
なか の
中 野 遺 跡
発掘調査報告書



1995-535

平成7年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



畑田遺跡全景(南から)



中野遺跡全景



畑田遺跡SD101(Q-9)遺物出土状況(東から)



畑田遺跡出土遺物

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、畑田遺跡、中野遺跡の調査成果をまとめたものです。

畑田遺跡、中野遺跡は山形県の北西部に位置する鶴岡市にあります。鶴岡市は人口約10万の小城下町です。主な産業は豊かな自然にめぐまれた米づくりが中心ですが、近年庄内国際村を建設して、国際化をめざして活動しています。

調査では畑田遺跡から古墳時代前期を中心とする集落跡が、中野遺跡からも同じく古墳時代の集落跡が見つかり、この時代の庄内地方の貴重な資料を得ることができました。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産といえます。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し、さらに郷土の歴史の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。一方、平和で豊かなくらしは私たちが等しく切望しているところです。近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区内の遺跡の調査は、埋蔵文化財保護と開発事業実施のため、適切かつ迅速に行われることが今日求められています。こうした要請に適切に対処するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ、平成5年4月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同、県民と関係各位の要望に応え本県の埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センター発足の目的が遂行されるようご支援ご協力を賜わりたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及、学術研究、教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成7年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清 耕

例 言

- 1 本書は東北横断自動車道酒田線(朝日～酒田間)建設工事に係る「畑田遺跡」「中野遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は日本道路公団仙台建設局鶴岡工事事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。

調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター		
遺跡名	畑田遺跡(ATOH)	遺跡番号	昭和63年度登録
所在地	山形県鶴岡市大字大淀川字畑田		
調査期間	発掘調査	平成5年4月1日～平成7年3月31日	
	現地調査	平成5年5月12日～平成5年11月19日 125日間	
	報告書作成	平成6年4月1日～平成7年3月31日	
発掘調査担当	調査研究課長	佐々木洋治	
	主任調査研究員	野尻 侃	
	調査研究員	眞壁 建	丸山 晶子
		水戸 弘美	阿部 明彦 齊藤 主税
遺跡名	中野遺跡(ATON)	遺跡番号	昭和63年度登録
所在地	山形県鶴岡市大字大淀川字中野		
調査期間	発掘調査	平成5年4月1日～平成7年3月31日	
	現地調査	平成5年5月17日～平成5年9月22日 41日間	
	報告書作成	平成6年4月1日～平成7年3月31日	
発掘調査担当	調査研究課長	佐々木洋治	
	主任調査研究員	野尻 侃	
	調査研究員	眞壁 建	丸山 晶子
資料整理担当	調査研究課長	佐々木洋治	
	調査研究員	眞壁 建	丸山 晶子
	嘱託職員	黒坂 広美	
- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、日本道路公団仙台建設局鶴岡工事事務所、鶴岡市教育委員会の協力を得た。現地調査と報告書作成にあたって、金子拓男、菊地政信、小林克、坂井秀弥、田嶋明人、辻秀人、栃木英道、中屋克彦、浜崎悟司、久田正弘、藤澤敦、安英樹、柳沼憲治、吉田博行、和田聡(五十音順)の各氏からご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる。
- 5 本書の作成・執筆は眞壁建、丸山晶子、黒坂広美が担当した。編集は尾形與典、須賀井新人、水戸弘美、眞壁建が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。
- 6 委託業務は下記のとおり実施した。

畑田遺跡	遺構の写真実測	株式会社パスコ
	放射性炭素年代測定	株式会社パレオ・ラボ
	粒度分析	株式会社パレオ・ラボ
- 7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡 例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ST・・・	竪穴住居跡	SD・・・	溝跡	SG・・・	河川跡
SK・・・	土坑	SP・・・	単独の柱穴	EK・・・	遺構内土坑
EP・・・	遺構内柱穴	SX・・・	性格不明遺構		
P・・・	土器	W・・・	木製品		
RP・・・	一括・登録土器	RQ・・・	登録石製品		

なお、今次の調査では周溝をもつ住居跡としての可能性が考えられるST103、150なども、便宜上竪穴住居を示す記号であるSTを使用した。
- 2 遺構番号は現地調査段階での番号を報告書でも踏襲した。
- 3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。
 - (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
 - (2) グリッドの南北軸は、畑田遺跡はN-64°7'15"-E、中野遺跡はN-59°24'3"-Wを測る。
 - (3) 遺構実測図は1/40・1/60・1/80・1/200・1/400の縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。
 - (4) 遺構実測図のスクリーントーンは下記のとおりである。

	・・・炭化物		・・・黄灰色粘土		・・・砂
---	--------	---	----------	---	------
 - (5) 遺物実測図・拓影図・図版は1/3で採録し、遺物実測図・拓影図には各々スケールを付した。
 - (6) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表は共通のものを、図版は別番号とした。その際、便宜をはかるため遺物観察表にて対照表を付した。
 - (7) 基本層序、遺構覆土の色調の記載については、昭和45年度版農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

目次

第I章	調査に至る経過	1
第II章	遺跡の立地と環境	1
第III章	調査の方法と経過	4
第IV章	畑田遺跡	
1	遺跡の概要	6
2	遺構と遺物	
	住居跡	
	ST103住居跡・SD100溝跡	9
	ST150住居跡・SD249溝跡	16
	ST201住居跡・SD202溝跡	22
	ST181住居跡	28
	ST182住居跡	30
	ST232住居跡	32
3	土坑	35
4	柱穴	40
5	溝・畝状遺構	41
	SD101溝跡	44
6	性格不明遺構	57
7	河川跡	58
8	鞍部・遺構外遺物	64
9	まとめ	78
第V章	中野遺跡	
1	遺跡の概要	79
2	遺構と遺物	
	土坑・柱穴・溝跡	82
	SX5～7・16性格不明遺構・遺構外遺物	86
3	まとめ	91
第VI章	畑田遺跡・中野遺跡まとめ	94

表

表-1	調査工程表	4
表-2	遺構観察表 住居跡・溝跡	68
表-3	遺構観察表 土坑・柱穴	69
表-4	遺構観察表 柱穴・性格不明遺構	70
表-5	遺物観察表(1) 土師器	71
表-6	遺物観察表(2) 土師器	72
表-7	遺物観察表(3) 土師器	73
表-8	遺物観察表(4) 土師器	74
表-9	遺物観察表(5) 土師器・須恵器他	75
表-10	遺物分布表他	76
表-11	遺物点数表	77
表-12	遺構観察表	92
表-13	遺物観察表	93

挿図

第1図	遺跡位置及び周辺の遺跡	3
第2図	調査区概要図	5
第3図	畑田遺跡遺構配置図・基本層序	7
第4図	ST103住居跡・SD100溝跡	10
第5図	SD100溝跡土器出土状況(1)	11
第6図	SD100溝跡土器出土状況(2)	12
第7図	SD100溝跡土器出土状況(3)	13
第8図	SD100溝跡土器出土状況(4)	14
第9図	ST103住居跡・SD100溝跡出土遺物	15
第10図	ST150住居跡・SD249溝跡	17
第11図	SD249溝跡土器出土状況(1)	19
第12図	SD249溝跡土器出土状況(2)	20
第13図	SD100溝跡・ST150住居跡・ST201住居跡・SD202溝跡出土遺物	21
第14図	ST201住居跡・SD202溝跡	23
第15図	SD202溝跡土器出土状況(1)	24
第16図	SD202溝跡土器出土状況(2)	25
第17図	SD202溝跡土器出土状況(3)	26
第18図	ST201住居跡・SD202溝跡出土遺物	27
第19図	ST181・ST182竪穴住居跡出土遺物	28
第20図	ST181竪穴住居跡	29
第21図	ST232竪穴住居跡出土遺物	30
第22図	ST182竪穴住居跡	31
第23図	ST232竪穴住居跡土器出土状況	32
第24図	ST232竪穴住居跡	33

第25図	ST232竪穴住居跡・SK111・176・203土坑出土遺物	34
第26図	SK111・105・125・129・132・133土坑	36
第27図	SK145・165・174・175・177土坑	37
第28図	SK178・185・200・203・215・233・235土坑	38
第29図	SK111・229土坑他出土遺物	39
第30図	SP122・136・139・143・168・205・267柱穴	40
第31図	SP209・211・214・219・247・248柱穴	41
第32図	畝状遺構	42
第33図	SD128・183溝跡	43
第34図	SD101溝跡全体図	45
第35図	SD101溝跡土層断面	46
第36図	SD101溝跡土器出土状況(1)	47
第37図	SD101溝跡土器出土状況(2)	48
第38図	SD101溝跡土器出土状況(3)	49
第39図	SD101溝跡上層土器出土状況(4)	50
第40図	SD101溝跡下層土器出土状況(5)	51
第41図	SD101・SD249溝跡出土遺物(1)	52
第42図	SD101・SD249溝跡出土遺物(2)	53
第43図	SD101・SD249溝跡出土遺物(3)	54
第44図	SD101溝跡出土遺物(4)	55
第45図	SD101・SD249溝跡出土遺物(5)	56
第46図	SX107・110性格不明遺構	57

第47図	SX156・130性格不明遺構	58
第48図	河川跡	59
第49図	河川跡土層断面図	60
第50図	河川跡土器出土状況	61
第51図	河川跡出土遺物(1)	62
第52図	河川跡出土遺物(2)	63
第53図	鞍部他出土遺物(1)	64
第54図	鞍部他出土遺物(2)	65
第55図	鞍部他出土遺物(3)	66
第56図	4区鞍部土層断面	67
中野遺跡		
第57図	中野遺構配置図	80
第58図	中野基本層序	81
第59図	SK1・4・3・11・21・37・39・56土坑	83
第60図	SD9・SD31溝跡	84
第61図	遺構内出土遺物	85
第62図	SX5性格不明遺構	87
第63図	SX6性格不明遺構	88
第64図	SX7性格不明遺構	89
第65図	SX16性格不明遺構	90
第66図	遺構外出土遺物	91
第67図	土師器分類図(1)	97
第68図	土師器分類図(2)	98

図版

図版1	畑田遺跡遠景・中野遺跡調査前状況
図版2	調査風景
畑田遺跡	
図版3	基本層序・遺構検出状況
図版4	遺構検出状況
図版5	ST103住居跡・SD100溝跡
図版6	ST201住居跡・SD202溝跡
図版7	ST150住居跡
図版8	ST181竪穴住居跡
図版9	ST182竪穴住居跡
図版10	ST232竪穴住居跡
図版11	SK111土坑
図版12	SK125・132・133・145・165・175・178・200土坑
図版13	SK129・174・176・203・233土坑
図版14	SP122・139・143・168・209・207・247柱穴
図版15	SD101溝跡・Q-9～11
図版16	RP・RQ出土状況
図版17	畝状遺構・SD152・153・157・158・128・183溝跡
図版18	SX156・107・110・130・131・234性格不明遺構 他
図版19	河川跡土器出土状況・トレンチ土層断面
中野遺跡	
図版20	A区検出状況全景
図版21	SX5～7性格不明遺構
図版22	SX5～7性格不明遺構
図版23	SX10性格不明遺構
図版24	SX16性格不明遺構
図版25	SD9・31溝跡
図版26	SK1・39・21・56土坑
図版27	B区検出状況
畑田遺跡	
図版28	出土遺物 SD100溝跡・ST150住居跡 他
図版29	出土遺物 SD100溝跡・ST150住居跡・SD249溝跡 他
図版30	出土遺物 SD202溝跡・ST201・181住居跡 他
図版31	出土遺物 SD202溝跡・ST201・150住居跡

図版32	出土遺物 ST181・232住居跡・SK229・111土坑・SD100溝跡 他
図版33	出土遺物 SK111土坑・ST232住居跡・SK176土坑
図版34	出土遺物 SK185土坑・ST232住居跡・SK111土坑 他
図版35	出土遺物 SK203・111土坑・SD101溝跡 他
図版36	出土遺物 SD101溝跡 他
図版37	出土遺物 SD101溝跡
図版38	出土遺物 SD101溝跡
図版39	出土遺物 SD101溝跡
図版40	出土遺物 SD101溝跡 他
図版41	出土遺物 SD101・241・244溝跡
図版42	出土遺物 SD101溝跡 他
図版43	出土遺物 河川跡・SD101溝跡
図版44	出土遺物 河川跡
図版45	出土遺物 河川跡
図版46	出土遺物 河川跡
図版47	出土遺物 鞍部・遺構外出土遺物 他
図版48	出土遺物 遺構外出土遺物 他
図版49	出土遺物 河川跡・鞍部・遺構外出土遺物
図版50	出土遺物 SD101・202溝跡・遺構外出土遺物
図版51	出土遺物 ST181・河川跡・遺構外出土遺物
中野遺跡	
図版52	出土遺物 SK1・3土坑・SX7性格不明遺構・SD9溝跡 他
図版53	出土遺物 SX5・7性格不明遺構・SK56土坑 他

付編

I	畑田遺跡の放射性炭素年代測定	1
II	畑田・中野遺跡における堆積物について	2

第I章 調査に至る経過

昭和63年に日本道路公団より東北横断自動車道（朝日～酒田間）建設に伴う分布調査が山形県教育委員会に依頼された。これを受けてA調査（表面踏査）とB調査（試掘調査）が行われた。調査の結果、畑田遺跡では東西140m、南北180m、中野遺跡では東西150m、南北240mの範囲に遺物の散布が認められた。畑田・中野遺跡は古墳時代～中世の遺跡であることがわかり、この両遺跡を含めて31の遺跡が確認された。

平成元年に県営ほ場整備事業の用・排水路工事部分の立ち会い調査を行った。このときの調査区域は今回の発掘区に隣接している。調査は最長220m、幅約2mのトレンチをバックホーで掘り下げた。このおり畑田遺跡では、土坑や溝跡が見つかり、約2箱分の遺物が採集された。時期は土師器の器台や甕などの出土遺物の特徴から古墳時代前期のものであることが判明した。

この後、これらの遺跡が保存されるよう事業側との協議を重ねたが、路線の変更は避け難いこととなった。そのため平成2年には緊急発掘調査を前提として、遺跡の正確な範囲や遺跡のある深さなどの詳しい内容を知るためにB調査が行われた。このときの調査では、10～15mおきに1m四方の試掘坑60カ所を設定し、0.5m～1mの深さまで掘り下げ、このうち遺跡がある証拠となる遺構や遺物を26カ所で確認した。

以上のような経過を踏まえて関係機関との協議を重ね、工事に先立つ記録保存のための緊急発掘調査を財団法人山形県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施することになった。

報告書作成のための整理作業は平成6年4月1日より平成7年3月31日の期間に実施した。

第II章 遺跡の立地と環境

遺跡の立地

畑田・中野遺跡は、庄内平野の南西部、県内でも有数の稲作地帯である、鶴岡市大淀川地区に位置する。この大淀川地区は、鶴岡市街からは約2km、日本海までは約5km程で、周囲一帯に水田が広がっており、北西には高館山、南方には金峰山をはじめとする山々が連なっている。また、現在の地形から当遺跡は赤川と大山川の河間低地に位置し、湯尻川と千安川に囲まれた標高12.5mの自然堤防上に立地している⁽⁹⁾。庄内地方の遺跡は、古墳時代より低地への進出がみられ、奈良・平安時代には自然堤防に高率で分布し⁽¹⁵⁾、当遺跡もそれに当てはまる。しかし、この自然堤防も一旦、赤川や大山川が氾濫すれば、水没してしまうこともあったと思われる。現代のように河川の整備がなされていなかった古代においては、日常的に起こりうることであったであろう。

現在この地は稲作地帯となっているが、当時の稲作については、同じ庄内地方の北部から遠賀川系土器が出土し⁽⁹⁾、かなり早い時期から稲作が始められていたことが考えられる。畑田遺跡が形成された古墳時代には既に集落が立地した自然堤防の背後には、当然のごとく後背湿地が形成されそこでは稲作が行われていたと考えられる。

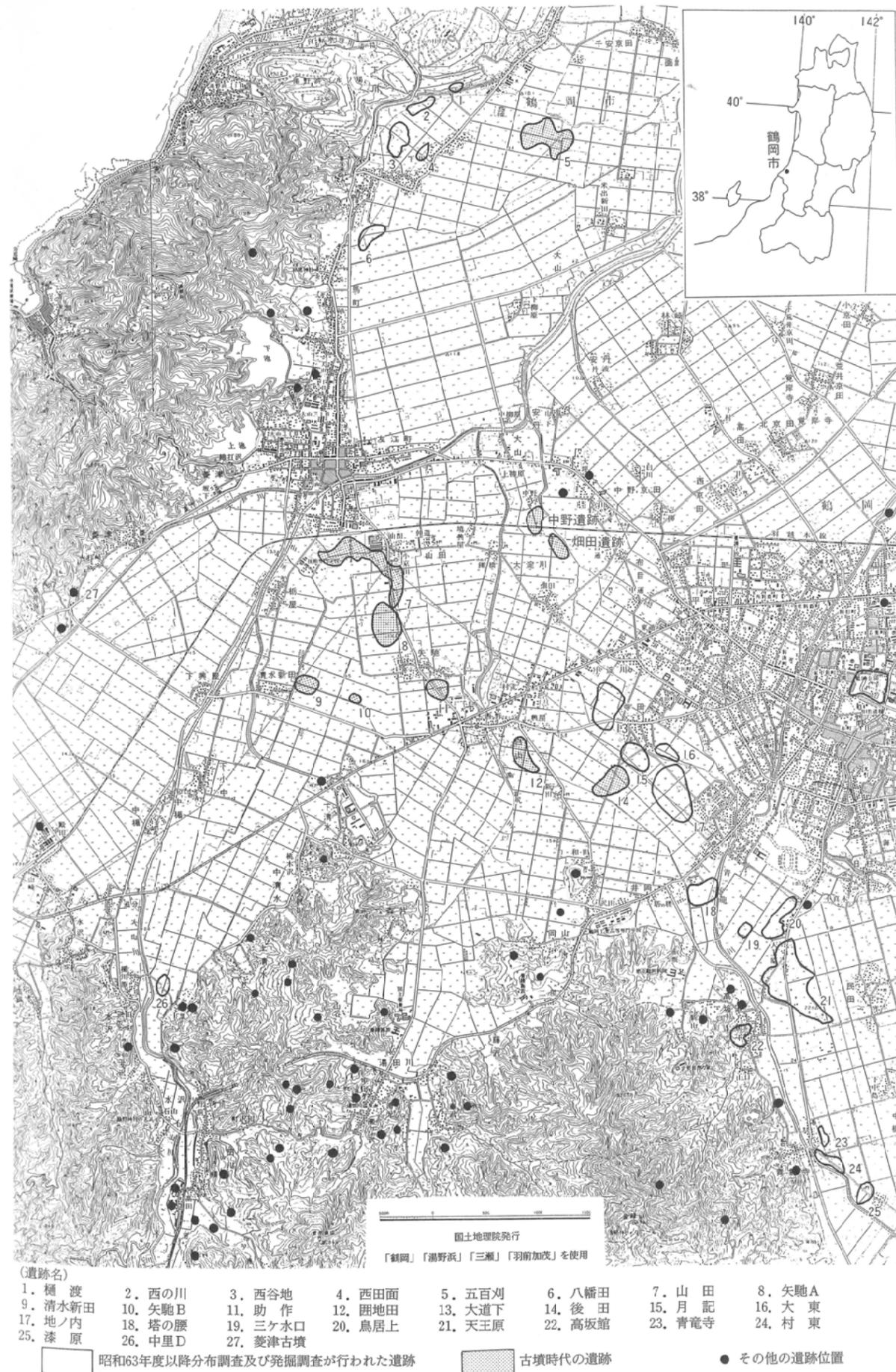
歴史的環境

第1図は、鶴岡市の東南部と南部の一部を除いた範囲で、遺跡範囲の判明しているもの、古墳時代の遺跡、その他の遺跡に分けて現在確認されている位置を示したものである。また、昭和63年度以降調査が行われ、遺跡範囲の判明しているものを線で囲み、その中でも古墳時代の遺跡はスクリーンで示した。現在、鶴岡市の遺跡は152ヶ所確認されているが、その殆どが湯田川・金峰山・虚空蔵山麓にあり、縄文時代・中世の遺跡が多く分布する。それに対して、平野には昭和62年度から始められた県営ほ場整備事業鶴岡西部地区により調査された遺跡や昭和63年度から始められた東北横断自動車道に因って発見された遺跡が数多く分布し、その殆どが古墳～平安時代の遺跡である。特に、西南部には古墳時代の遺跡が数多く分布している。

これまでの調査から、古墳時代中期後葉から後期初頭の土器が出土した矢馳B遺跡・清水新田遺跡、後期中葉の土器が出土した矢馳A遺跡・助作遺跡・山田遺跡・困地田遺跡が現在確認されている⁽¹³⁾。これらの遺跡で最も早く発見された遺跡は助作遺跡で、大正年間(1912)の県道工事の際須恵器の甕が出土した。また、清水新田、矢馳A・B遺跡、山田遺跡等の発見は昭和30年代に行われた暗渠管の埋設や水田の盤下げ工事に遡る。特に矢馳A遺跡からは、多数の土師器が出土したことにより、同様の特色を有する土師器を「矢馳式」と呼称するに至った。この矢馳A遺跡は約30年の空白を経て、昭和62年度に調査が行われ、竪穴住居跡・溝跡・土坑等数多くの遺構が確認され、古式須恵器と共に6世紀中葉から後葉の土師器が多数出土したことは記憶に新しい⁽⁶⁾。また、これらの遺跡よりやや北東の下川地区に位置する五百刈遺跡の調査が平成5年度に行われたが、ここからも中期の土師器が出土している。平成6年度に調査が行われた後田遺跡からも竪穴住居に伴って、中期頃の土師器が出土し、この地における古墳時代の様相が次第に解明されつつある。

しかし、上記の遺跡は全て古墳時代中期以降の遺跡であり、これを遡る4世紀にあたる古墳時代前期の遺跡は認められていなかったが、昭和63年度、県営ほ場整備事業に伴う排水管理設工事によって、畑田遺跡の立会い調査が行われ、庄内地方における最も早い時期の古墳時代の遺物が掘りおこされることとなった⁽¹⁰⁾。それまで、庄内地方において、前期の土師器は藤島町の三和遺跡⁽⁷⁾と酒田市の関B遺跡⁽⁵⁾のみで、土器片がわずかに確認されただけであった。昭和63年度の調査においては、トレンチ調査のみであったが、遺構に伴いまとまって古式土師器が出土した。この発見は庄内地方の古墳時代を語る上で大きな画期となったことは言うまでもない。

このように古墳時代の集落跡が次々と発見される一方、未だにこの地において古墳は確認されていない。唯一、明治43年に鶴岡市菱津字火打崎の丘陵突端から6世紀前半の凝灰岩製の長持形組合式石棺が出土しているだけである⁽¹¹⁾。この地は平野部よりやや標高が高く、古墳時代の遺跡が集中する鶴岡市西南部を見渡すことができる。しかし、古墳は既に削平され、残念ながらその姿を私たちは見ることはできない。以上のことから、日本海沿岸の古墳文化の波及については、庄内地方南西部が現在のところ最北に位置し、多少の変化はあったとしても南からの影響を受けていたことは否定できない。このことは、また和銅2年(709)『続日本紀』に記述される「出羽柵」の存在をも示唆するものと考えられる。



第1図 遺跡位置及び周辺の遺跡(1:50,000)

第三章 調査の方法と経過

畑田遺跡のグリッド設定は建設予定道路幅のセンター杭S T A 159+00とその幅杭を結んでY軸とし、これと直交する線をX軸とした。このS T A 159+00センター杭を起点として10m四方のグリッドを設定した。調査区は西側をA区、東側をB区とし、調査総面積は11,060㎡である。中野遺跡ではS T A 161+80とその幅杭を結んだ線をY軸とし、これに直交する線をX軸とした。S T A 161+80を起点として10m四方のグリッドを設定した。調査区は南側をA区、北側をB区とした。調査総面積は3,544㎡である。

畑田遺跡では重機による表土除去の1回目を5月18日から6月1日まで、2回目を7月6日から7月30日まで実施した。これと併行して面整理及び遺構検出を行い、遺構検出がほぼ終了するのは10月20日である。8月19日から河川跡の遺物集中出土地点などの遺構精査を始める。遺構検出、精査、記録作業を反復しながら、11月10日に中野遺跡と合同で調査説明会を実施し、75名の参加を得た。空中撮影は11月16日から17日まで行った。調査日数は125日間である。中野遺跡の調査は畑田遺跡と併行して行われた。重機によるトレンチ調査を6月1日から4日まで行った。長さ120~170m、幅1.8mのトレンチを7本設定して遺構の密なる部分の発見に努めた。調査区を拡張したのは7月28日から30日まで、面整理及び遺構検出が終了したのは8月5日である。遺構精査は8月23日より開始し、記録作業も含めて終了したのは9月17日である。空中撮影は11月16日に実施した。畑田遺跡、中野遺跡とも11月19日に調査を終了し器材を撤収した。調査日数は41日間である。

表-1 畑田遺跡・中野遺跡発掘調査工程表 (平成5年)

		月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
畑田遺跡	作業内容								
	器材搬入								
	トレンチ調査								
	重機械粗掘								
	面整理								
	遺構検出								
	遺構精査								
	実測図作成								
	写真撮影								
	写真実測								
現地説明会									
器材撤収									
中野遺跡	作業内容								
	トレンチ調査								
	重機械粗掘								
	面整理								
	遺構検出								
	遺構精査								
	実測図作成								
	写真撮影								
	写真実測								
	現地説明会								



第2図 調査区概要図(S=4,000)

第IV章 畑田遺跡

1. 遺跡の概要

調査区の層序

遺跡の南東部分には旧河道と見られる低地が存在したが、平成元年度のほ場整備の折瓦礫等で埋め立てられている。瓦礫の堆積がひどく除去は不可能と判断されたので調査を行うことはできなかったが、調査中この部分にトレンチを入れて堆積状況を確認してみたところ、この埋め立て部分にも包含層が続いて行く様子が見られた。

本遺跡は前章で述べられているとおり自然堤防上に立地しており、これはA区内をほぼ南北方向に横切っている。遺構が密に分布するO～W-6～11グリッドの部分は地盤が安定かつ標高も周辺に比べて高くなっている。A区中央に位置するOラインより北西部はST182の位置するF～H-9～11部分を除いて全域が旧河川であり、砂層とシルト層の互層が続く。ここからは地山は検出されていない。

調査区は発掘原因の性質上南北に長い形となる。場所によって層位の違いは大きく見られるが、層序は基本的に4層に大別できる。耕作によって既にII層より上層は削り取られて消滅している可能性が高い。耕作土である第I層、水田・畑の盤土で、平安時代以降の地山であり、遺跡のほとんどを覆っていた灰色粘土質シルトの第II層、第III層は遺物包含層である。ただし時期幅が認められかなりの遺構が重複している。また包含層が認められない部分もあり一様ではない。第IV層は地山である。第II層以下は全てグライ化しており、遺構の検出は困難を極めた。

遺構と遺物の分布

遺構は調査区南東よりに多く分布する。この部分はちょうど自然堤防上の微高地となる。調査区を南北に横切る幅50m程の部分にST103・150・201周溝をもつ住居跡が3軒、SK111・125といった土坑、柱穴、SD101大溝、畝状溝が検出されている。この地区はA区O～W-6～11グリッドにあたる。北端にあたる河川に張り出した形のI～L-6～7にはST181住居跡やSK176土坑が分布する。

調査区南東部はB区T～U間も微高地の端部にあたり、SK203などの土坑や柱穴群が検出されている。また南東に向かうと次第に標高は下がり、旧河道の鞍部に切られ大きな段差を形成する。U～Z間は次第に地形が低くなるが、ST232が検出されている。

A区の北西部はF～H-9～11グリッド付近を除いて全域が河川跡である。離れ小島のようなこの地区にはST182ほかSD183溝跡やSK185などの土坑が分布する。

今次調査での出土遺物は土師器が主体を占め7,979点を数える。その多くはA区SD101大溝Q-9・10グリッドからである。河川跡からも多くの遺物が出土した。特に住居跡の近辺に多く出土している。J～K-8、I～L-10などである。B区でもU～Z-10・11グリッドで多量の遺物の出土を見る。



第3図 畑田遺跡遺構配置図・基本層序

2. 遺構と遺物

住居跡

S T 103

位置 R～S-7～8、S D 101のほぼ中心に位置する。

平面形・規模 確認面が、既に床面下に達していたため正確な規模・平面形は不明確である。S D 100が廻る周溝を有する建物である。

覆土・床面 中央にやや粘性をもつ4層、粘土質で炭化物を多く含む3層の拡がり認められ、床面と推定される。

柱穴・炉 中央より南東側に2基（E P 230、231）の柱穴が認められる。径0.3～0.4m、深さ0.2mで、2基の柱穴間は2.4mである。中心の炭化物集中部分は、上層で東西5.3m、南北1.7mの範囲で黒色粘土質シルトが不整形に拡がり、その中心部分に径1.7×1.1m、厚さ0.1mを測る楕円形の炭化物堆積層が認められ、炉跡と考えられる。これは、周溝の中心ともほぼ一致しており、E P 230、231との距離は共に約1mを測る。炉跡を中心として西側に対象移動した柱穴が推定されるが、検出に至っていない。E P 231では、柱痕の存在を示す土層の堆積が認められ、その分層面に土師器が出土している。

貯蔵穴等の諸施設 中央東側に径0.9×0.8m、深さ0.18mの楕円形を呈する土坑が認められた。レンズ状堆積を示す。住居跡廃絶時まで空白であった可能性が高い。

S D 100

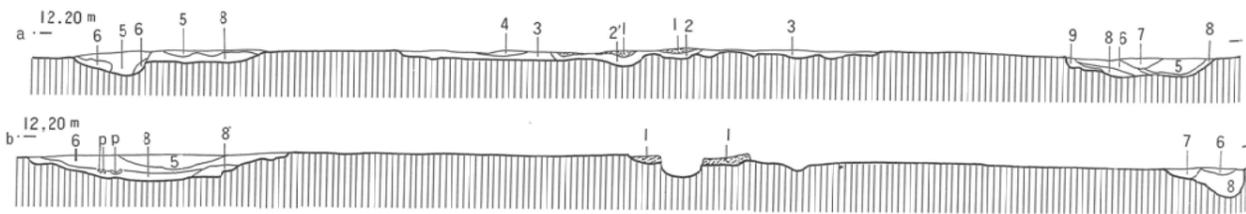
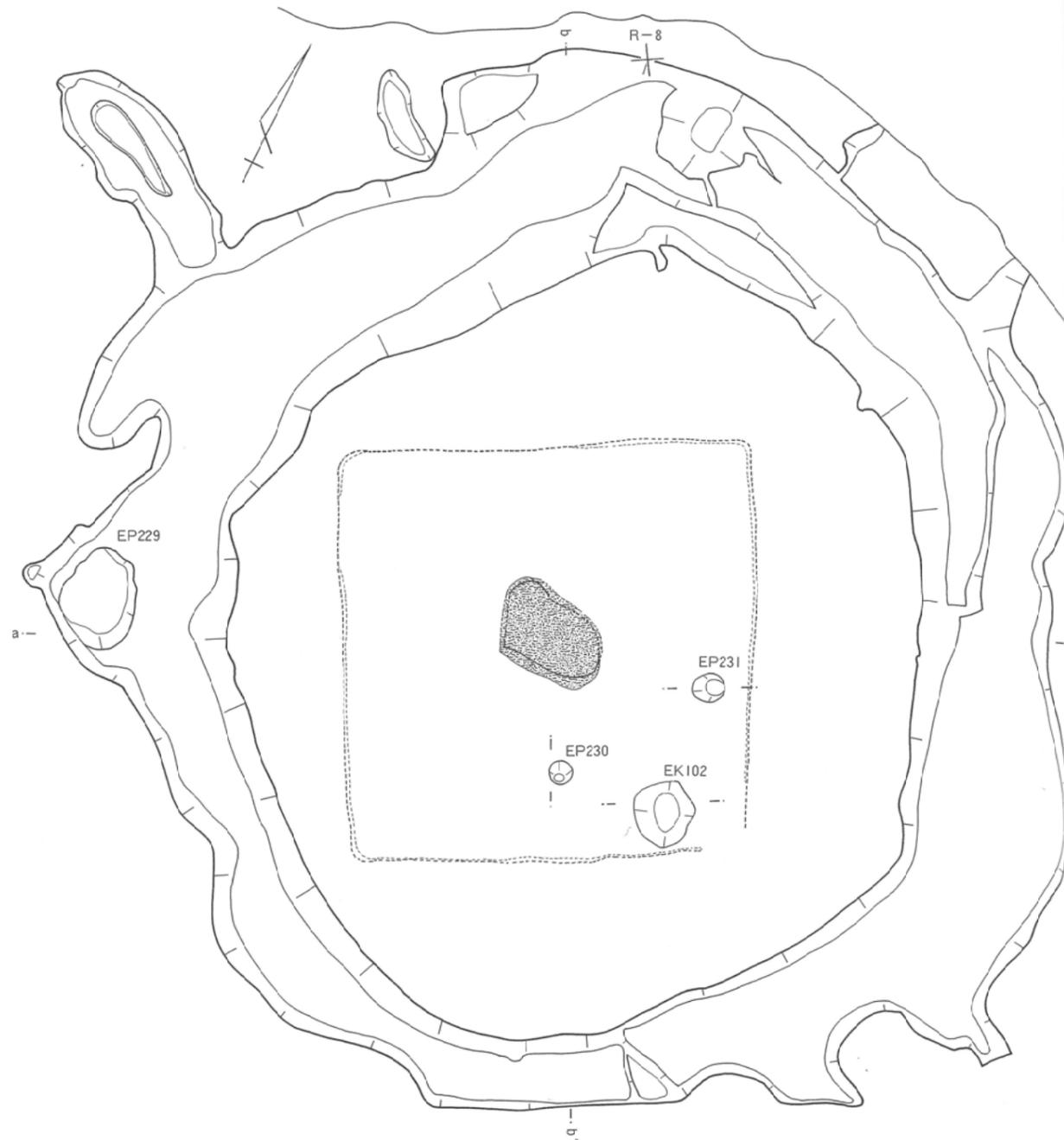
位置 R～S-7～8、S T 103を囲むように位置する。

平面形・規模 外径12～14m、内径9～10mのほぼ円形に廻っており、幅は0.88～3.04mと均一ではなく南側が狭い。深さは、0.16～0.32m程で北側に一段深くなる部分が認められる。

覆土・底面 上位層に0.03m大の炭化物が混入し、その下位に水性堆積の様相を示す土層が認められる。底面は浅く一定せず、凹凸があり土坑状に落ち込む部分がある。西側に延びる溝状の突出部や近接するS X 107、130、132の存在からS D 202、101への接続も否定できないが、検出に至っていない。開口部となるような位置は認められない。

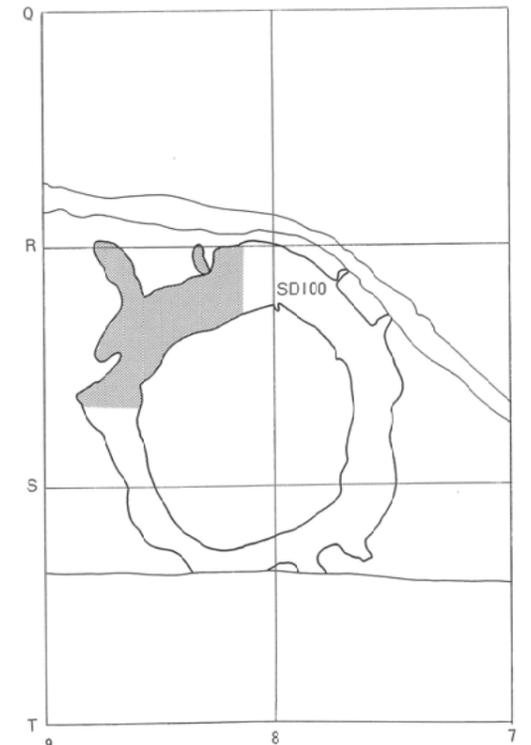
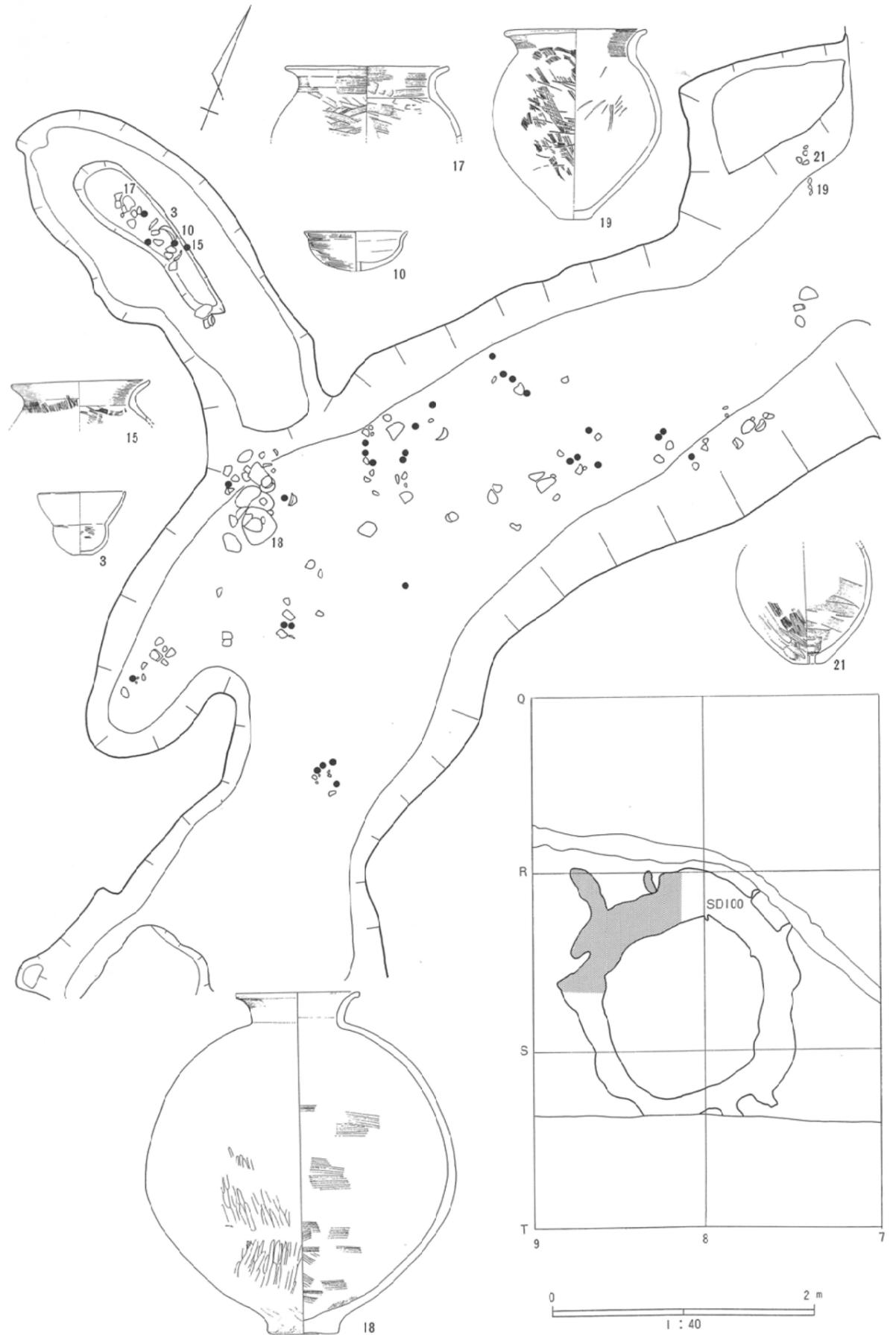
遺物の出土状況 他の遺構に比べ、かなり多くの遺物が出土したが、突出部を中心として西側からより多く、中位層に斜位の出土状況が顕著である。

遺物 1・5・6は器台である。口縁部は1・5は丸い端部、6はシャープにつまみ出し、中位に稜をもつ。2・4は高坏である。3は罎である。8～12は鉢である。大型のもの（8）、小型のもの（10・11）がある。有孔鉢は12と21である。いずれも単孔である。18は壺である。口縁部はやや急に外反し端部で面取りをする。一部つまみ出している。甕は7・13～17・19・20である。7は鉢に近い形態をもつ。口縁部の形態から丸い端部のもの（13）と面取りしているものがある。後者はさらにつまみ出しているもの（15・16・20）とそうでないもの（14・17・19）がある。15は朱彩である。精製土器と考えられる。19は胎土中に粗砂がかなり混入している。ヘラケズリ痕を消そうとしたのかハケメをその上から施しているが、消し切っていない。鉄石英が中位より出土している（図版30-32）。

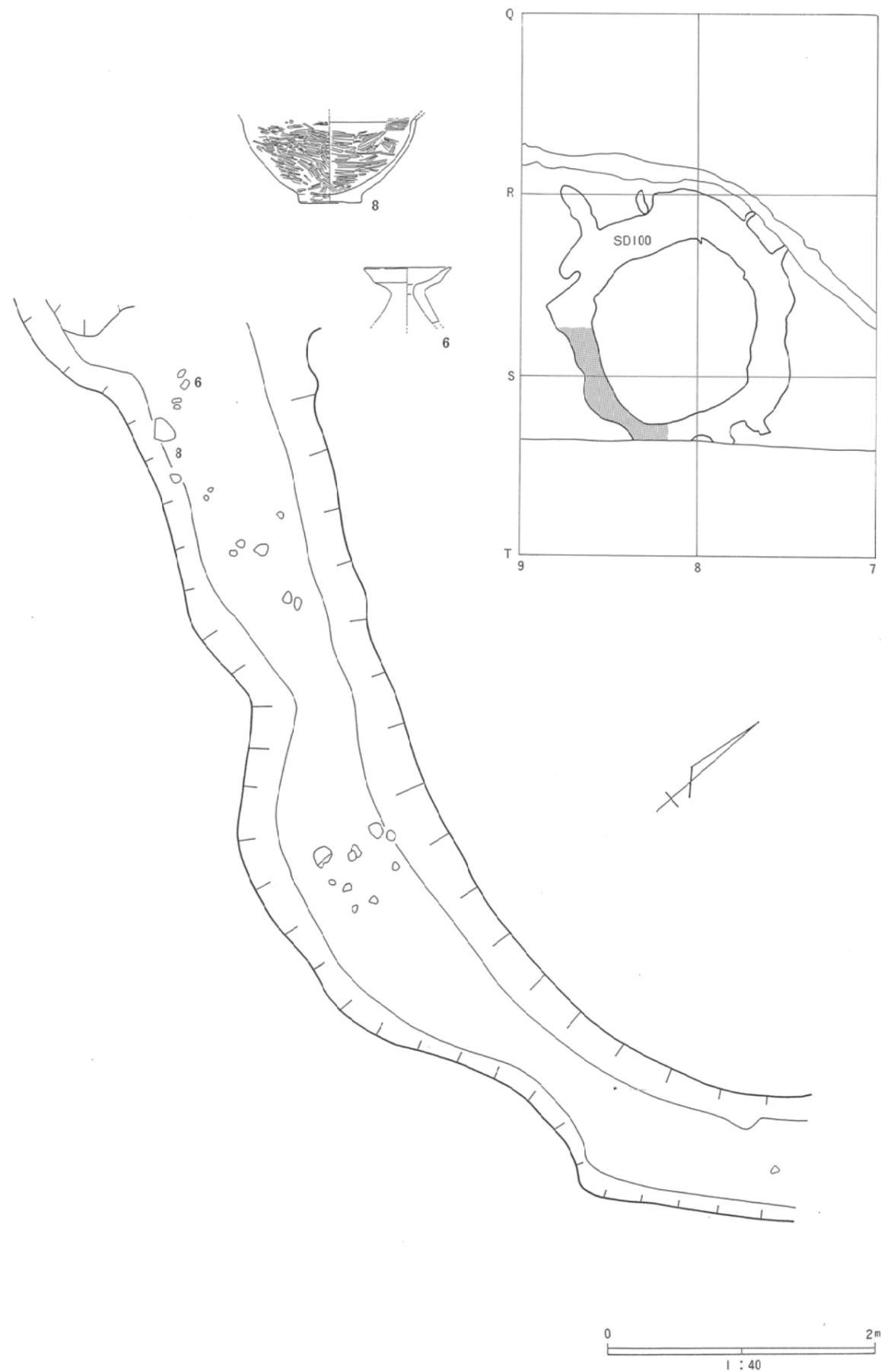


- ST103, SD100
- 10YR7/1 黒色粘土質シルト 砂を10%含む。炭化物堆積層である。
 - 5Y4/2 灰オリーブ色砂 1の土及び炭化粒を5%含む。炭化物堆積層である。
 - 2.5Y4/2 暗灰黄色砂 同色の粘質シルト粒を5%、炭化粒を1%含む。
 - 7.5Y4/2 灰オリーブ色シルト質細砂 炭化粒を1%含む、やや粘質である。
 - 2.5Y4/1 黄灰色粘質細砂
 - 5Y4/2 灰オリーブ色細砂 1の土の3cm大ブロック炭化粒をまだらに10%含む。
 - 5Y4/2 灰オリーブ色細砂
 - 5Y4/2 灰オリーブ色細砂 1の土及びオリーブ黄色シルトと5mm大ブロック炭化粒を5%含む。
 - 7.5Y4/2 灰オリーブ色細砂 炭化粒を1%含む。
- EP230
1. 5Y4/2 灰オリーブ色シルト質細砂
2. 5Y4/2 灰オリーブ色シルト質細砂
炭化粒が帯状に堆積し、下層になるにつれ量が増す。
- EK102
1. 2.5Y6/4 において黄色粘質細砂 炭化粒5%含む。
2. 2.5Y6/4 において黄色粘質細砂 炭化粒が帯状に80%堆積している。
3. 2.5Y6/3 において黄色細砂
- EP231
1. 5Y4/2 灰オリーブ色シルト質細砂 炭化粒5%、同色の粘質シルト粒10%、遺物を含む。
2. 5Y4/2 灰オリーブ色シルト質細砂 炭化粒1%含む。
- 植物繊維
- 0 5m
1:80

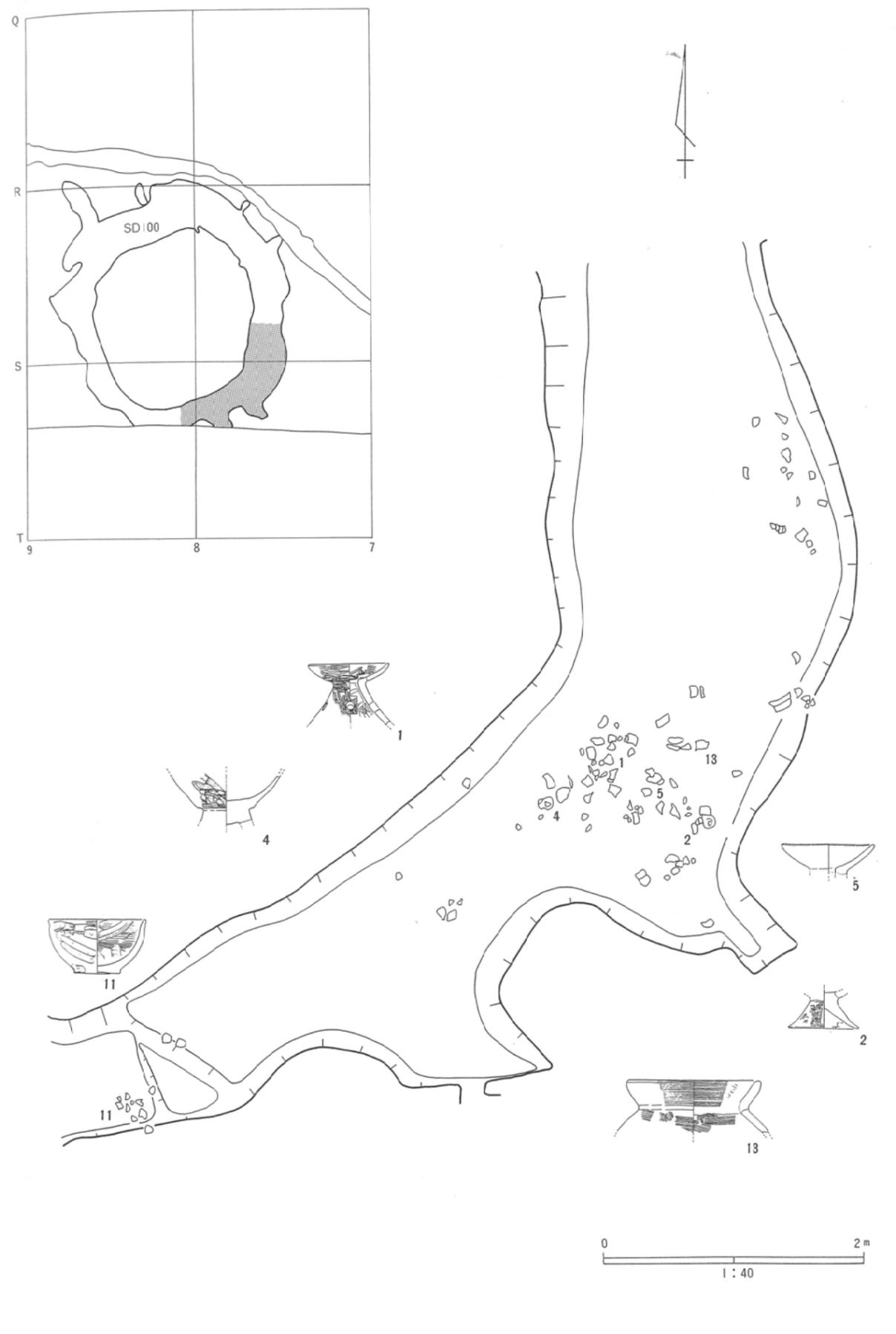
第4図 ST103住居跡・SD100



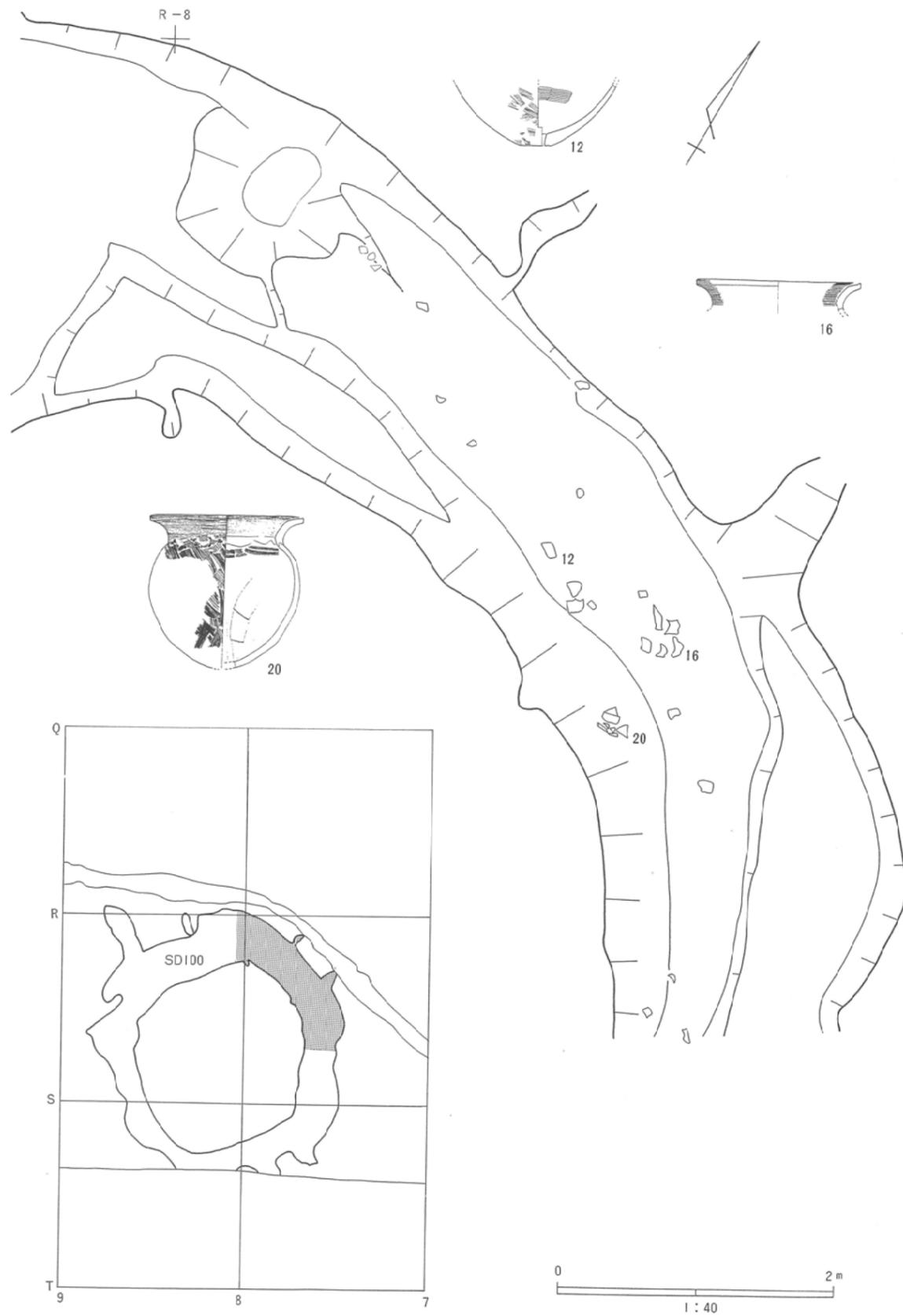
第5図 SD100溝跡土器出土状況(1)



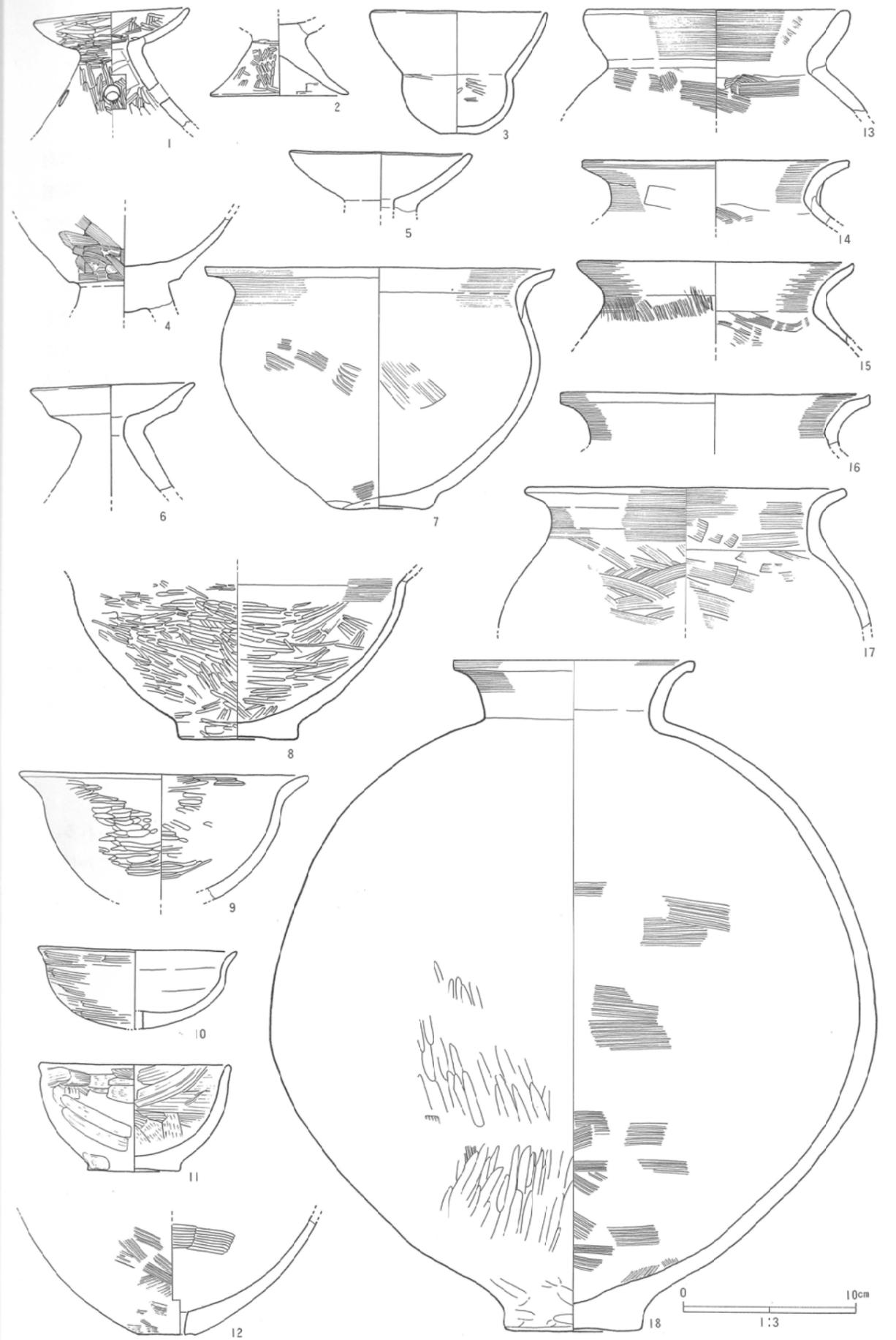
第6図 SD100溝跡土器出土状況(2)



第7図 SD100溝跡土器出土状況(3)



第8図 SD100溝跡土器出土状況(4)



第9図 ST103住居跡・SD100溝跡出土遺物

S T 150

位置 P-8、S D101の北側に位置する。

平面形・規模 長軸（東西）8.16m、短軸（南北）7.6mを測り、隅丸方形を呈する。北西、南東方向に拡がる可能性も考えられるが、壁の崩落が著しく明確なプランを把握できない。実線部分は、溝状に掘り込まれており、破線部分は不整形円形を形成するが、S T 150はS D249にも囲まれており、どの範囲を建物域とするかは検討を要する。

覆土・壁・床面 破線部分は炭化粒の混入が少なくやや固く安定しているのに対し、実線部分は炭化粒・土器片を含む。実線部分を破線部分より0.05~0.2m掘り下げたところ、底面は平坦で下端の立ち上がりの一部を確認でき、北東側が深く、南側は浅く認められた。また、東辺には長径3.3mの落ち込みが認められたが、位置・検出状況等から住居に伴う遺構かS T 150より新しい土坑と考えられる。

柱穴・炉 E P 259、260、261は、S T 150の支柱穴と考えられ、E P間の距離は約2.8mを測る。また、中央に径1.8~1.2mの楕円形に黒褐色粘土質シルトが拡がり、その下位に径0.7×0.5m、厚さ0.1mの炭化物堆積層が認められ、炉跡と考えられる。

貯蔵穴等の諸施設 破線部分の南端には、砂層が1.2×1.6mの範囲に拡がり、その中央には径0.5m範囲で粗砂が認められる。また東側には、幅0.05~0.25m、深さ約0.1mの溝が検出された。

遺物の出土状況 E P 259東側と東側土坑内にまとまった出土がみられるが、中位層に斜位で出土していることから外部からの流入が考えられる。底面からは破片数点の出土がみとめられる。

遺物 22は埴である。口縁部下端の屈曲が強い。体部中位が最も膨らみ球状を呈する。端部はやや直立する。朱彩。23~26は鉢である。25・26を除き口縁部が外反するタイプで、平底である。

S D 249

位置 O~Q-7~9に位置し、S D101より分岐し、S T 150を囲むように廻る。

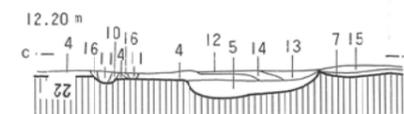
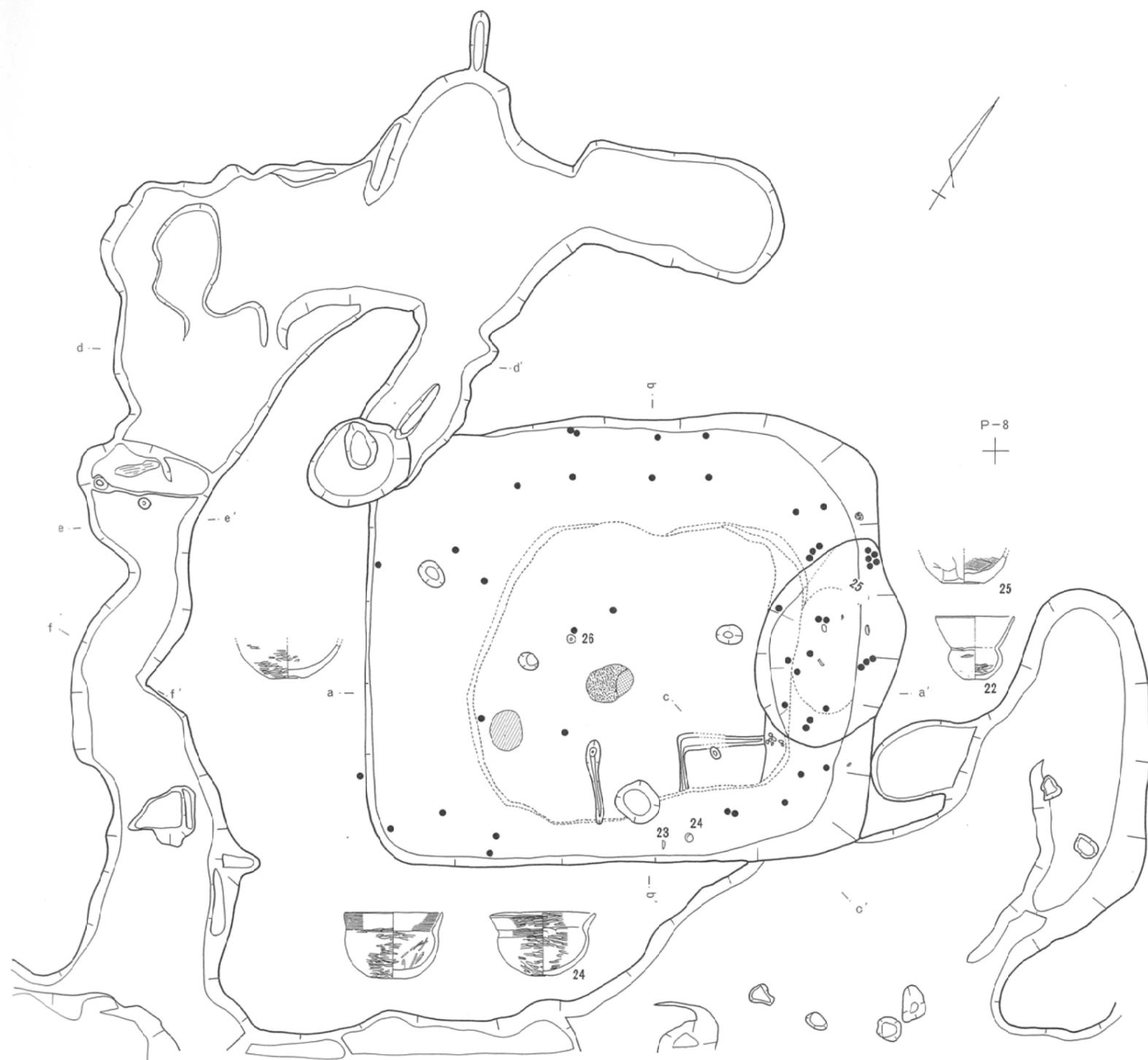
平面形・規模 内径10~13m、外径12~18mを測る不整形円形で、北側に幅7mの開口部が認められる。北西風の強いこの地で開口部が北側にあることに疑問が残るが、地山面が東~北にかけて微高となることなど地形的な要因に起因すると考えられる。開口部北側前方には、柱穴・土坑のまとまりが認められる。

覆土 レンズ状堆積を示し、壁の崩落土が見られる。深さは0.2~0.24mを測る。南側でS D 101と接続する。

遺物の出土状況 S D 101 に接続する付近の南東部分に多く、数カ所にまとめて出土している。

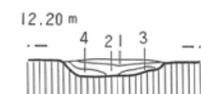
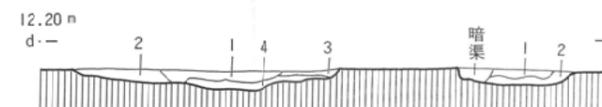
遺物 28は鉢で口縁部が外反するタイプである。29は直口壺と推定される。27は台付鉢である。口縁部はほぼ直立し端部を丸くおさめる。体部は膨らみをもつ。調整は2次焼成のため外面にミガキ、内面にハケメをわずかに確認できるにすぎない。甕は小破片のみであるため図版のみとした（図版29参照）。

与向
泉部
9に
立・
下
互に
150
。7×
で
い
は底
。て
D
る。
外
め



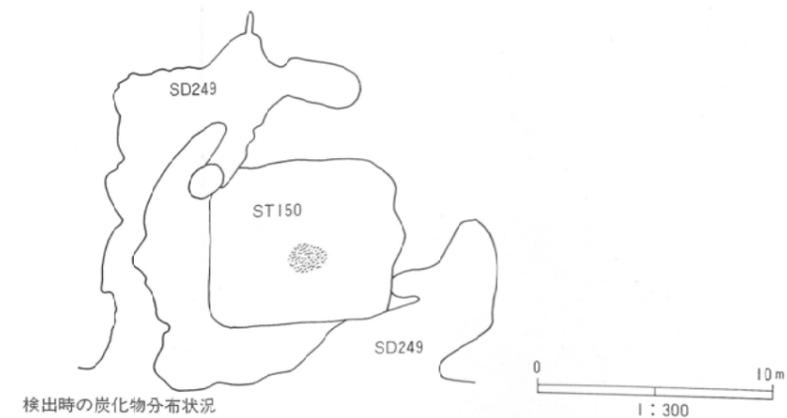
ST150

1. 2.5Y 4 / 2 暗灰黄色砂質シルト 木炭、木炭粒多量に混入。
2. 5Y R 4 / 6 赤褐色粗砂
3. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色シルト 木炭粒混入。
4. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色砂質シルト 木炭粒ごくわずかに混入。3より色調が明るい。
5. 5Y 5 / 2 灰オリーブ色砂質シルト 木炭粒わずかに混入。
6. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色砂質シルト 木炭粒多く混入。
7. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色砂質シルト 3とほぼ同様だが木炭粒多く混入。
8. 5Y 5 / 2 灰オリーブ色砂質シルト 木炭、木炭粒多く混入。
9. 5Y 5 / 2 灰オリーブ色砂質シルト 7よりも木炭粒少なく色調が若干明るい。
10. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色砂質シルト 木炭粒多量に混入。
11. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色シルト 木炭粒やや多量に混入。
12. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色砂質シルト 色調が暗く、木炭粒微量に混入。
13. 5Y 5 / 2 灰オリーブ色砂質シルト 木炭粒少量混入。
14. 5Y 5 / 2 灰オリーブ色砂質シルト 木炭粒やや多量に混入。
15. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色砂質シルト やややわらかい。
16. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色砂質シルト 木炭粒多量に混入。
17. 5Y 2 / 1 黒色炭化物層

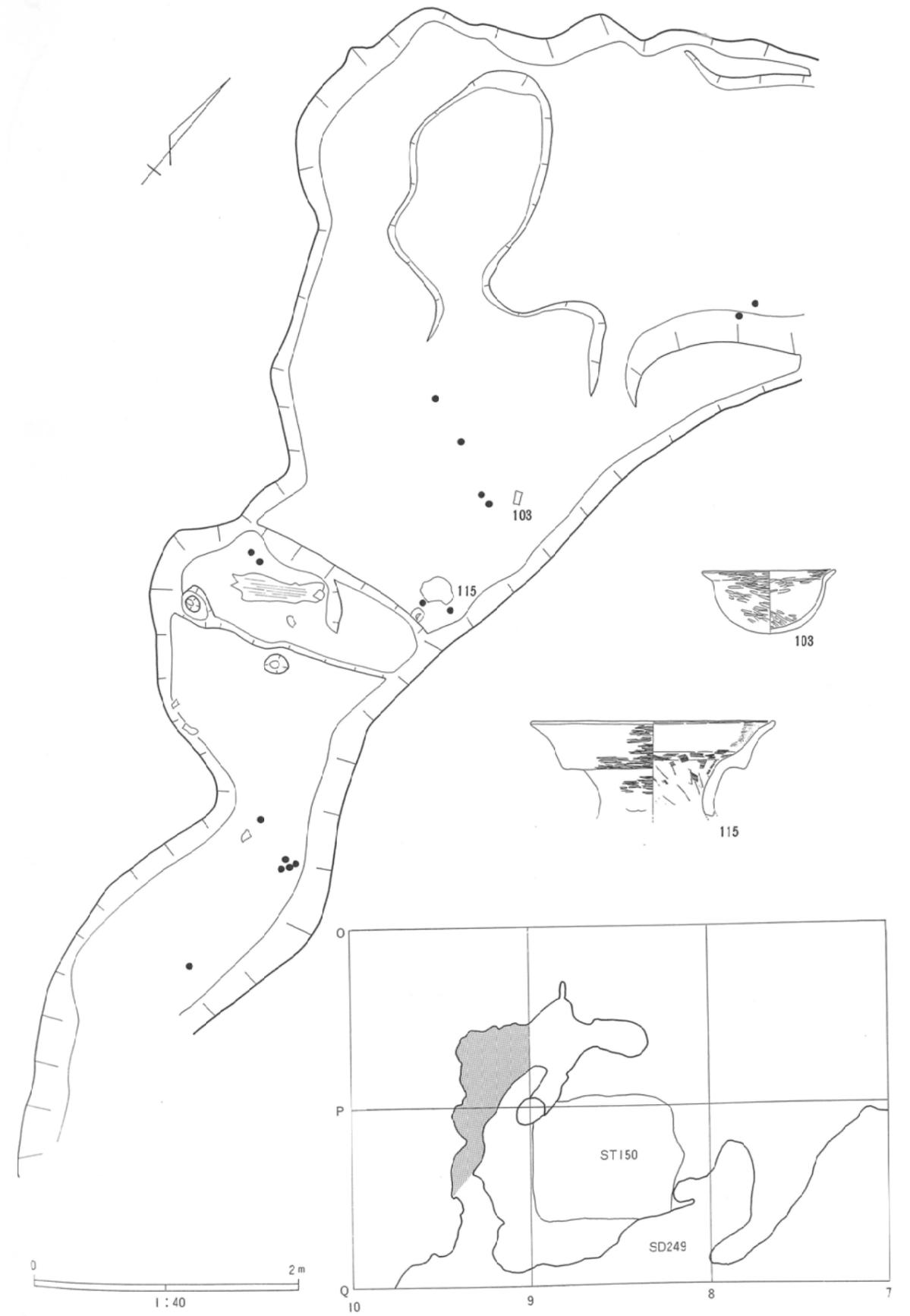


SD249

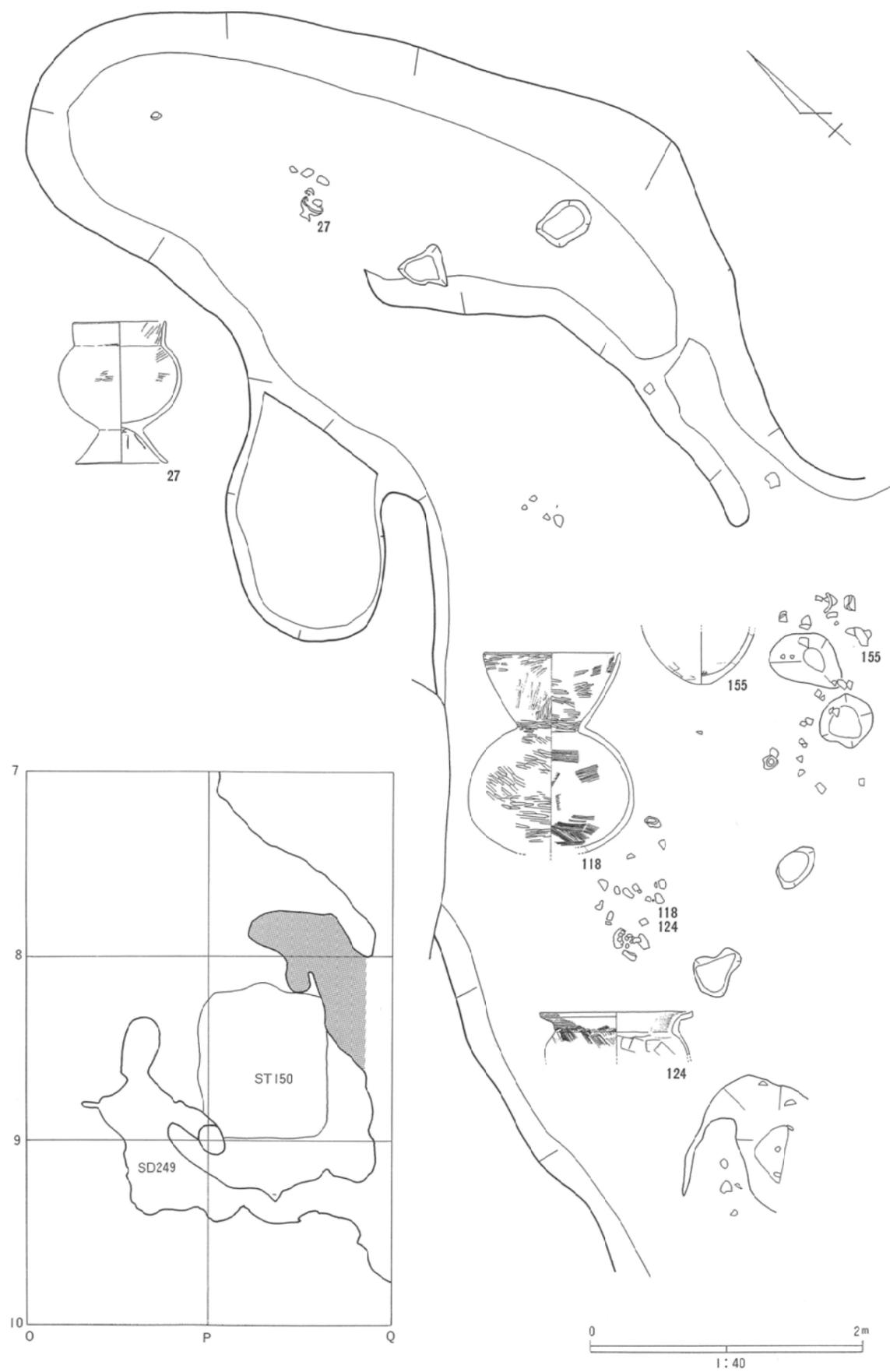
1. 10Y R 5 / 2 灰黄褐色粘質シルト 炭化粒少量含む。
2. 2.5Y 5 / 3 黄褐色シルト質細砂 炭化粒若干、土器片含む。
3. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色シルト質細砂 炭化粒若干含む。
4. 2.5Y 5 / 3 黄褐色シルト質細砂



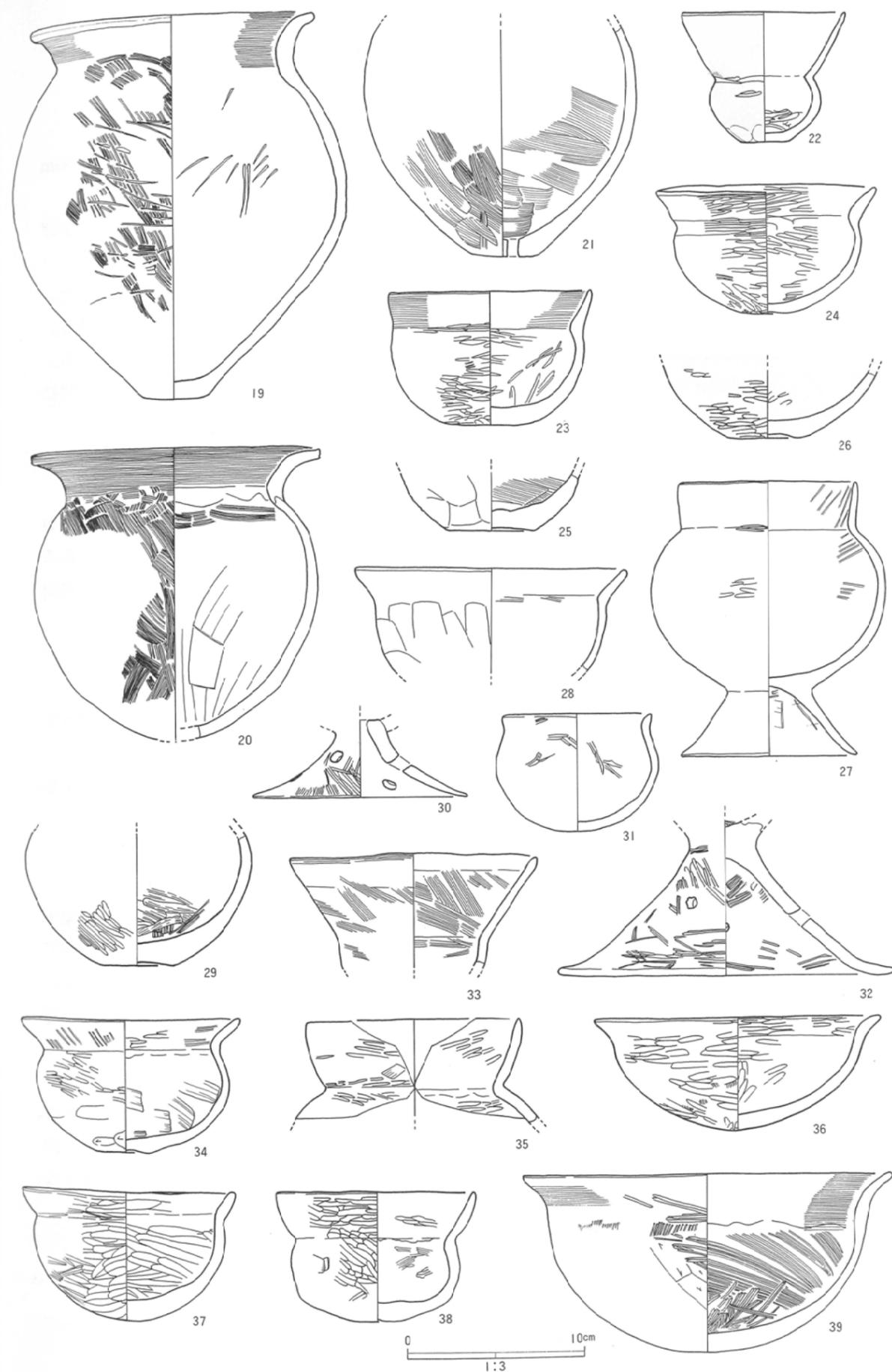
第10図 ST150住居跡・SD249溝跡



第11図 SD249溝跡土器出土状況



第12図 SD249溝跡土器出土状況(2)



第13図 SD100溝跡・ST150住居跡・ST201住居跡・SD202溝跡出土遺物

ST201

位置 Q~R-9~10、SD202内に位置する。

平面形・規模 西側が暗渠に切られているが、遺存部により長軸（東西）7.83m、短軸（南北）5.85mの長方形と推定される。

柱穴・炉 柱穴は4基検出されたものの、いずれも建物に関係しているかは明確でない。掘り下げの途中薄い粘土層の直上に炭の広がりを検出したが、炉跡とは確認できなかった。

覆土・壁・床面 3層の下部には北西に向かって若干傾斜する薄い灰色粘土層と炭化物層が確認できた。これを床面と考えるには疑問が残る。15~17はSD202覆土、9はSX110の覆土である。壁は地山に掘り込まれている。床面は中央部分の3.6m×5.6mの範囲を中心としている。壁周縁部の周溝状の窪みは掘り方と考えられるが疑問が残る。ST201とSD202の間に201を囲む周堤の残欠などの地業跡は確認できなかった。

貯蔵穴等の 検出できなかった。

諸施設

遺物 33は小型丸底の甕。浅く外反する口縁部をもつ。端部は外面にやや直立気味に立ち上がらせている。46は特大の鉢である。畑田遺跡出土の鉢形土器の部類では最大のものである。口縁部は屈曲して外反し、丸い端部をもつ。底部はやや窪み底である。この2点とも底面より10cm以上浮いた状態で出土している。他の遺物も同様であった。

SD202

位置 Q~R-9~11、ST201を囲むように位置する。

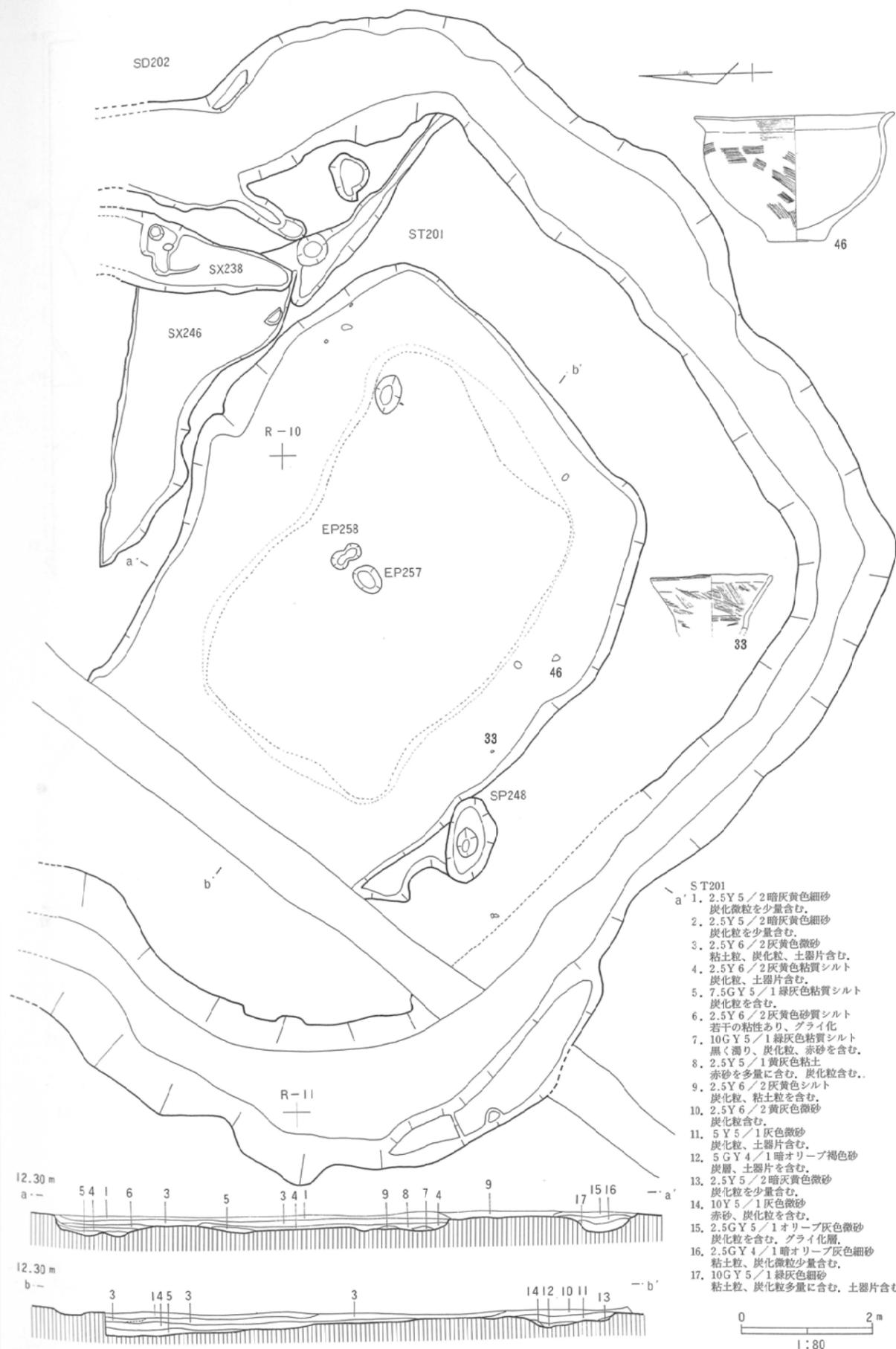
平面形・規模 北側を排水溝に切られている。外径14~18m、内径12~14mを測り隅丸長方形に廻っている。幅は1.2~2.4m、0.1~0.4mと一定しない。

覆土 3~6層に分けられる。各層に炭化物が含まれる。特に2層には極めて濃密に分布する。レンズ状ないし交互に堆積している。堆積状態は各地点で若干異なる。

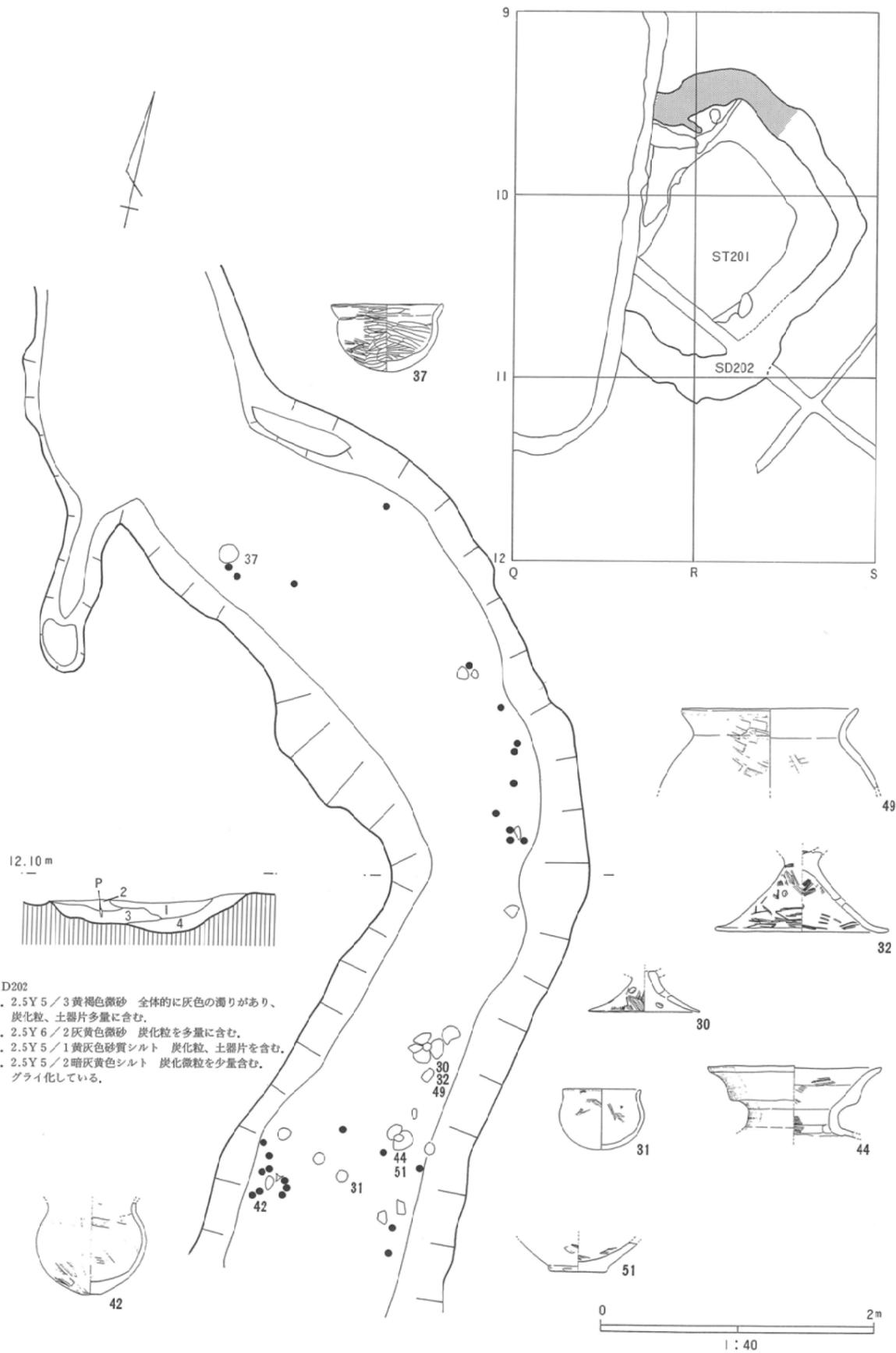
遺物の出土 遺物は1~3層に多く分布する。特に2・4・5層の下位分層面に集中して出土した。

状況 底面より0.05~0.2mほど浮いた形のものが多い。

遺物 30・32は高坏である。30は小型で6孔、32は大型で3孔のものである。甕(38)は扁平で全体に凹凸が目立つ、厚手のものである。31・34・36・37・39は鉢である。31は小型で口縁部が短いもの。34は口縁部は強く外反し、底部は平底である。40は有孔鉢である。29・35・43は直口壺である。複合口縁壺には41・44・45がある。41はやや直立気味に外弯する口縁、44は端部を面取りして緩やかに外弯する。45は口縁部中位でやや膨らみながら外反する。甕には47~52がある。いずれも単純口縁の甕。47は小型のもの。口縁が大きく開き端部は狭く面取りしている。50は口縁下部で肥厚して端部で細くなり、丸くおさめる。長い口縁をもつ。頸部で強く屈曲して内面に稜を形成する。口縁部の器形全体に対する割合は多い。52は直上で出土したものの、遺構外のものである。長い口縁をもつ。口縁部は強く外反し内面に鋭い稜を形成する。体部の最大径は比較的下位にある。



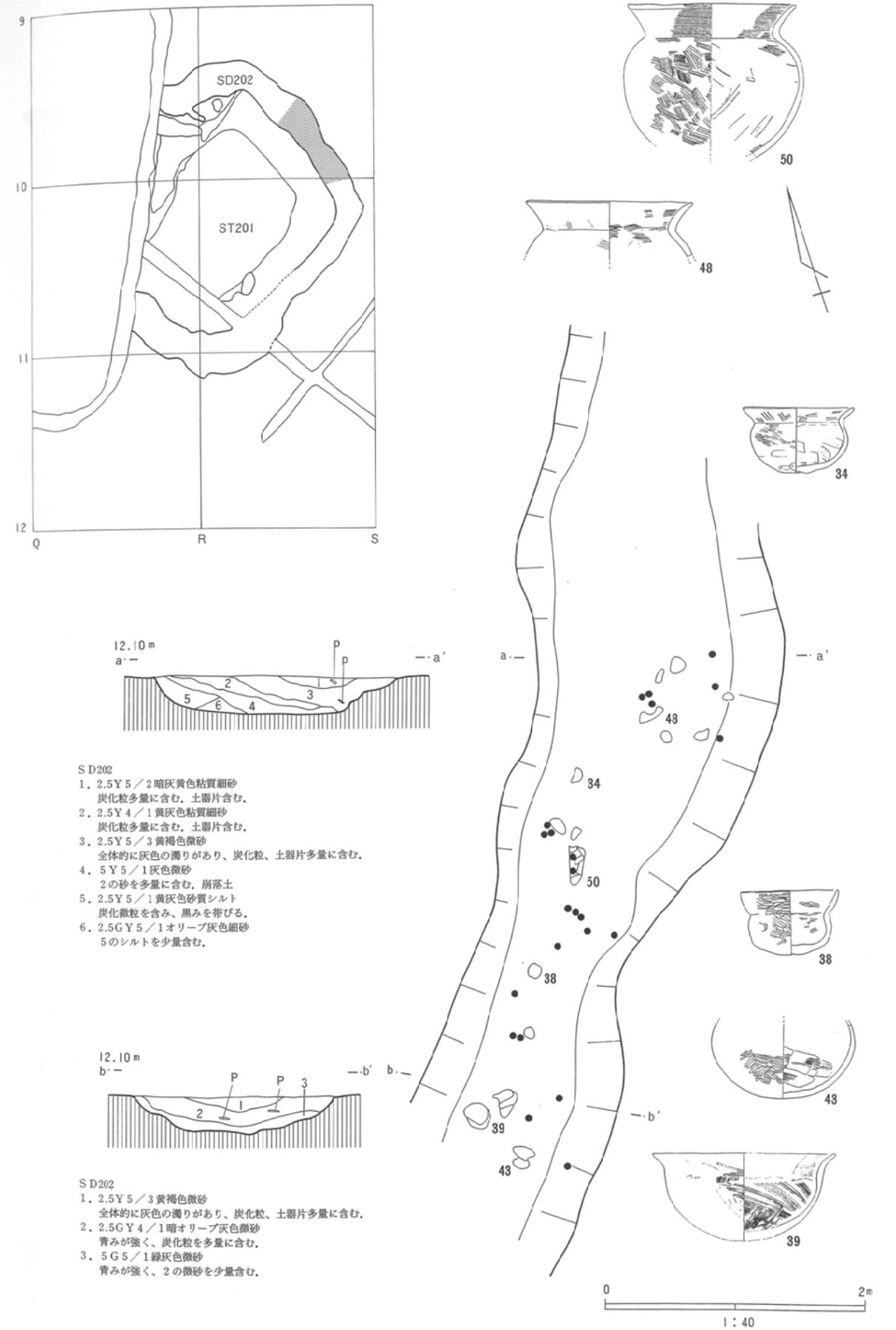
第14図 ST201住居跡・SD202溝跡



SD202

1. 2.5Y 5 / 3 黄褐色微砂 全体的に灰色の濁りがあり、炭化粒、土器片多量に含む。
2. 2.5Y 6 / 2 灰黄色微砂 炭化粒を多量に含む。
3. 2.5Y 5 / 1 黄灰色砂質シルト 炭化粒、土器片を含む。
4. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色シルト 炭化微粒を少量含む。グライ化している。

第15図 SD202溝跡土器出土状況(1)



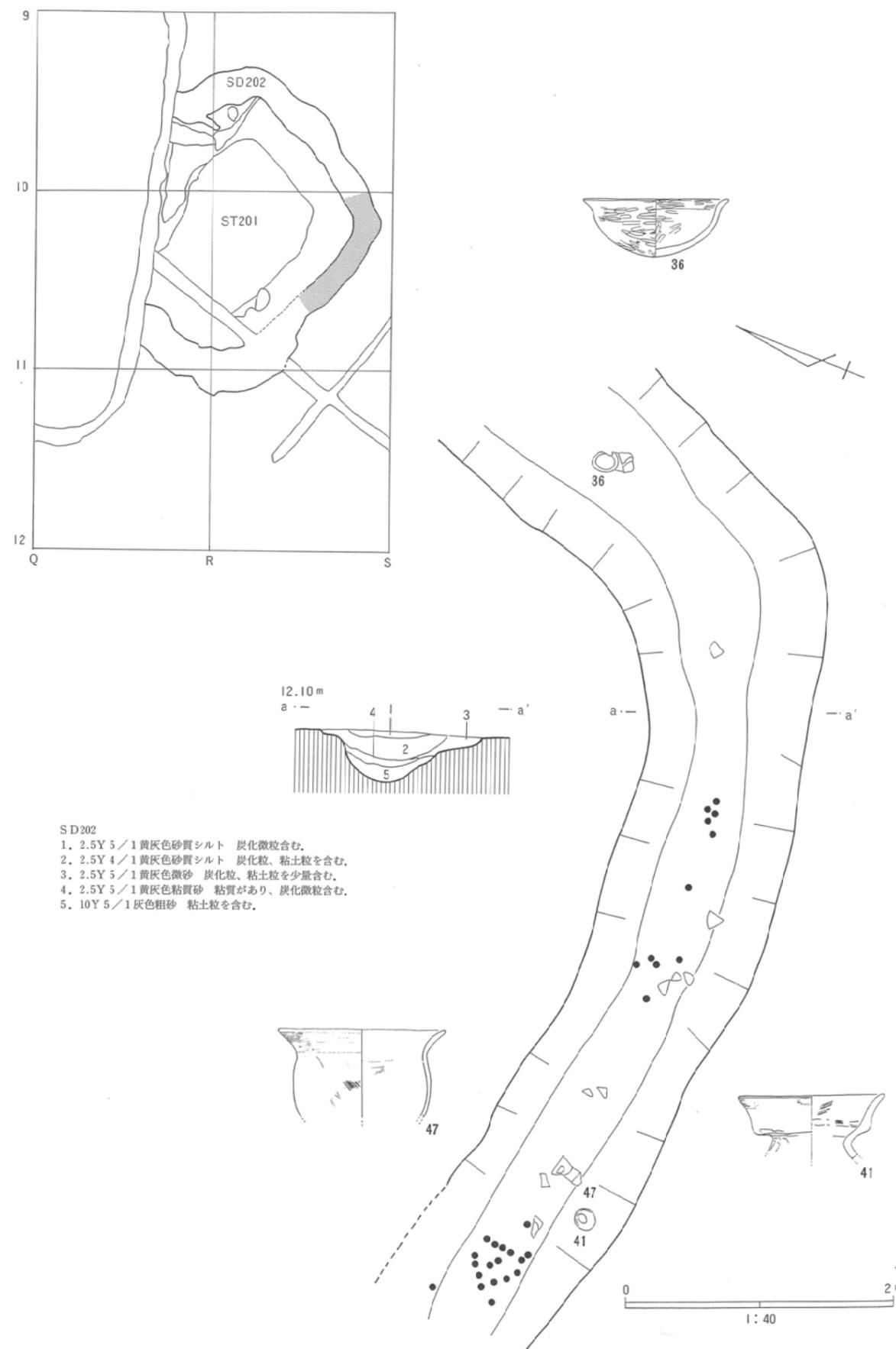
SD202

1. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色粘質細砂 炭化粒多量に含む。土器片含む。
2. 2.5Y 4 / 1 黄灰色粘質細砂 炭化粒多量に含む。土器片含む。
3. 2.5Y 5 / 3 黄褐色微砂 全体的に灰色の濁りがあり、炭化粒、土器片多量に含む。
4. 5Y 5 / 1 灰色微砂 2の砂を多量に含む。崩落土
5. 2.5Y 5 / 1 黄灰色砂質シルト 炭化微粒を含み、黒みを帯びる。
6. 2.5GY 5 / 1 オリーブ灰色細砂 5のシルトを少量含む。

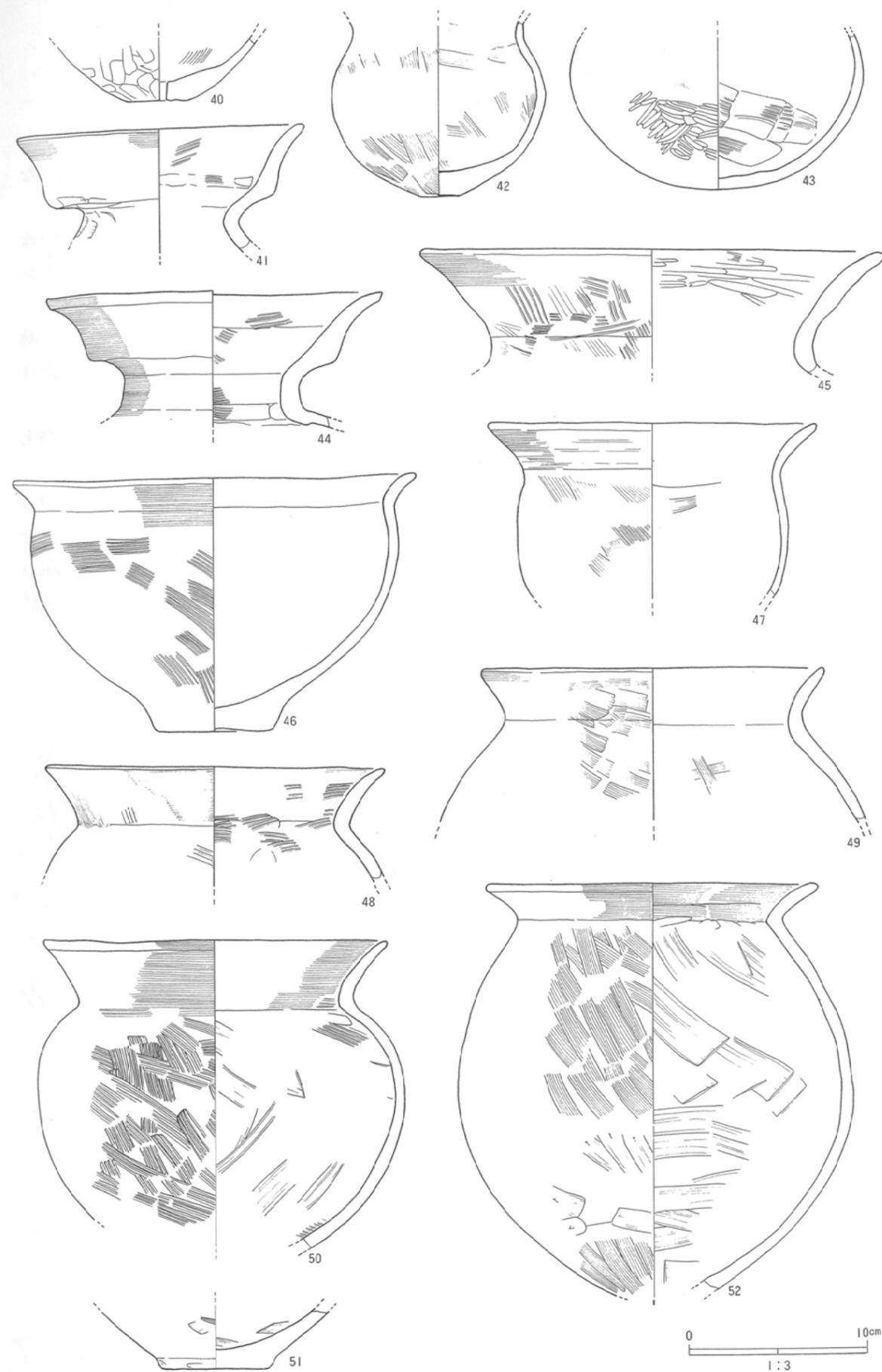
SD202

1. 2.5Y 5 / 3 黄褐色微砂 全体的に灰色の濁りがあり、炭化粒、土器片多量に含む。
2. 2.5GY 4 / 1 暗オリーブ灰色微砂 青みが強く、炭化粒を多量に含む。
3. 5G 5 / 1 緑灰色微砂 青みが強く、2の微砂を少量含む。

第16図 SD202溝跡土器出土状況(2)



第17図 SD202溝跡土器出土状況(3)



第18図 ST201住居跡・SD202溝跡出土遺物

ST181

位置 J~L-6、遺構集中区域から離れたA区の北側に位置する。

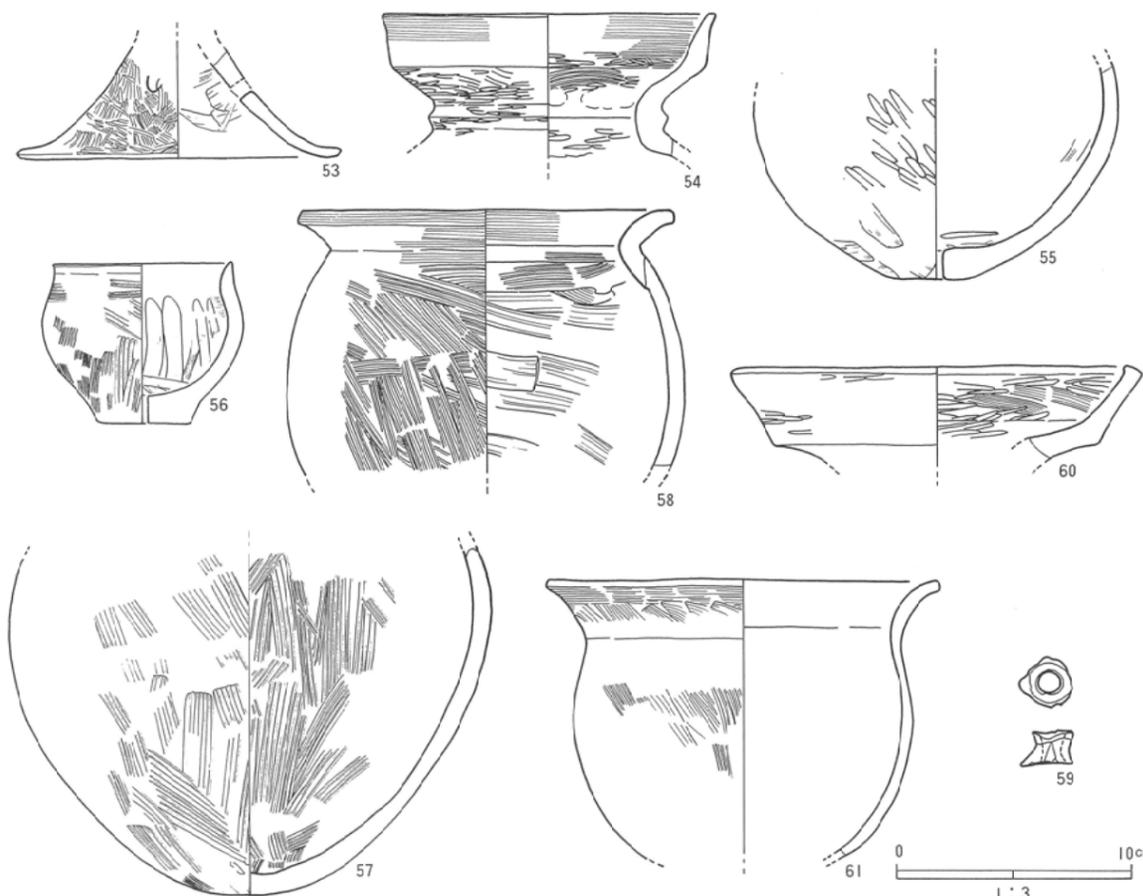
平面形・規模 a-a'より南側にかけては、確認面が既に床面に達していたと思われるため、確かな規模は判らないが、長軸5.23m、短軸5mの隅丸方形と推定される。

覆土・壁・床面 覆土は4層から成り、1・4層は中央部より拡がる炭の濁りと思われ、2・3層はほぼ同色同質で良くしまるため床と考えられる。壁は暗渠に切られ、北半分に残存するプランは、緩やかに0.1m程立ち上がる。

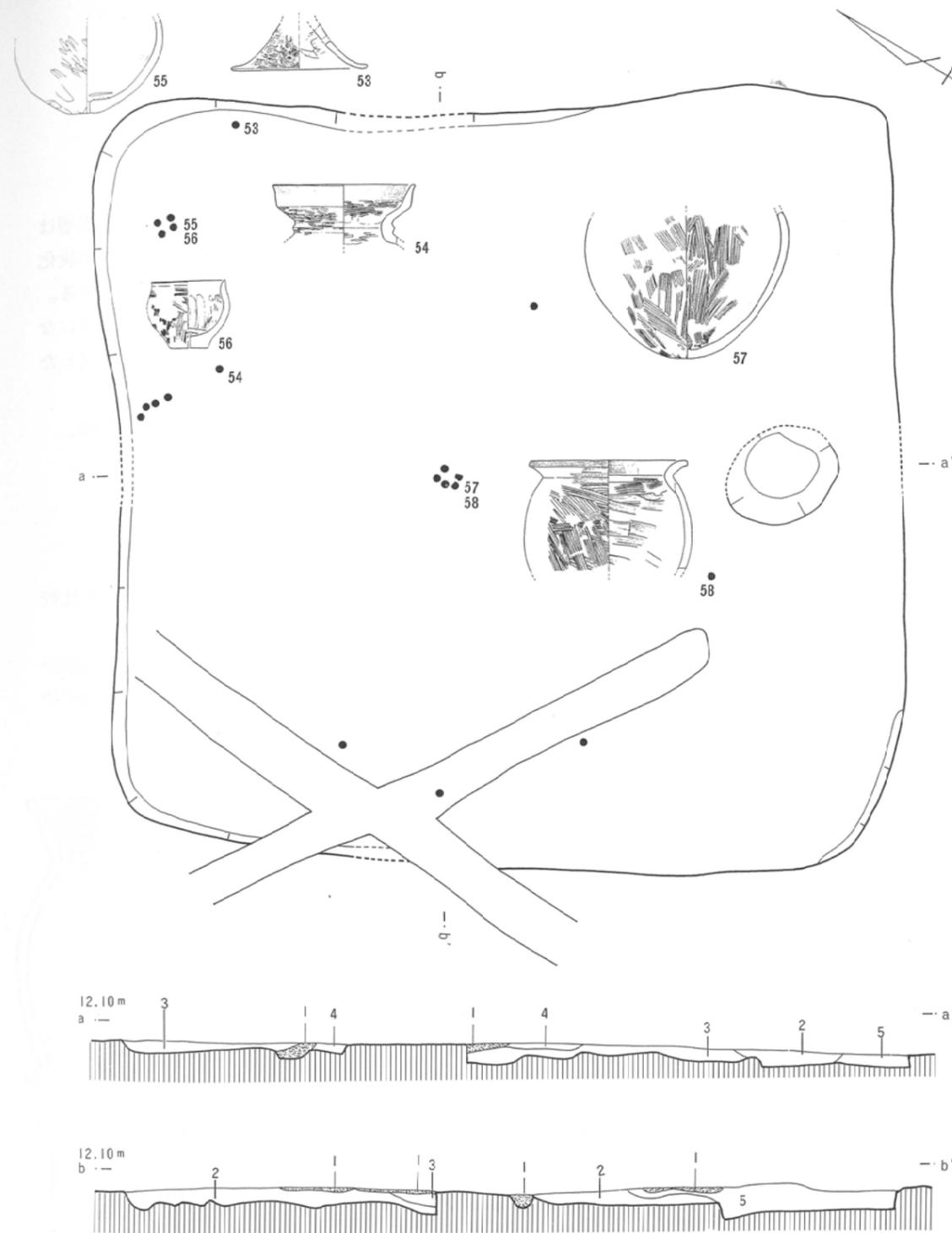
柱穴・炉 中央部分に炭の拡がり認められ、炉跡としての機能が推定される。南側に、長軸0.73m、短軸0.67m、深さ0.1m程の掘り込みが認められたが、浅めであるため柱穴とは考えにくい。

遺物の出土 中央部分を除いては、北隅に集中しているが、殆どが2・3層の上面ではなく、堆積土中からの出土である。

遺物 53は器台脚部である。裾部が屈曲する。54は壺の口縁である。直立気味に伸びる有段の口縁部をもつ。55は有孔の鉢である。単孔である。膨らんだ胴部をもつ。56は小型の鉢である。口縁部を直立させ、体部を膨らませる。平底である。57・58は甕である。丸底風の底部から内弯して立ち上がるもの(57)、口唇部外面に面取りした際にできたハケメの痕跡が残り、直線的に伸びる口縁部が途中で屈曲して外反するもの(58)がある。



第19図 ST181・ST182竪穴住居跡出土遺物



- ST181
- 2.5Y 6 / 1 黄灰色微砂 炭化粒多量に含む。中心部分の炭の統きと思われる。土器片含む。
 - 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色微砂 黄褐色砂を20%程含む。土器片含む。
 - 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色微砂 よくしまっている。土器片含む。
 - 2.5Y 6 / 2 灰黄色粘質微砂 粘質のない細砂も混入している。
 - 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色粘質微砂

第20図 ST181竪穴住居跡

ST182

位置 J-9。河川跡に挟まれた孤立した区域に位置する。

平面形・規模 長軸4.74m、短軸3.83mの隅丸方形を呈する。西隅はSD183に切られる。

覆土 住居内の堆積は1層は炭層で他は炭粒が混入したグライ化層である。特に1層の炭層は2層との境、1層下位に集中してみられる。この炭は藁など敷物になるようなものが炭化したものではなく、木炭の状態で検出された。この層に遺物が集中して出土している。2・3層は均等に線を引いているが、まとまりとして引いてしまったため22図のようになった。本来は分層面の凹凸が激しく不均一であった。4・5層は周囲とは異なる独立した堆積である。土坑が存在した可能性もあるが、平面プランを確認できなかった。

壁 地山を掘り込んで壁としている。ただし掘り方の壁である。やや急に立ち上がる。

床面 木炭粒と土器片が出土する1層下部が床面と考えられる。貼床などは行っていない。

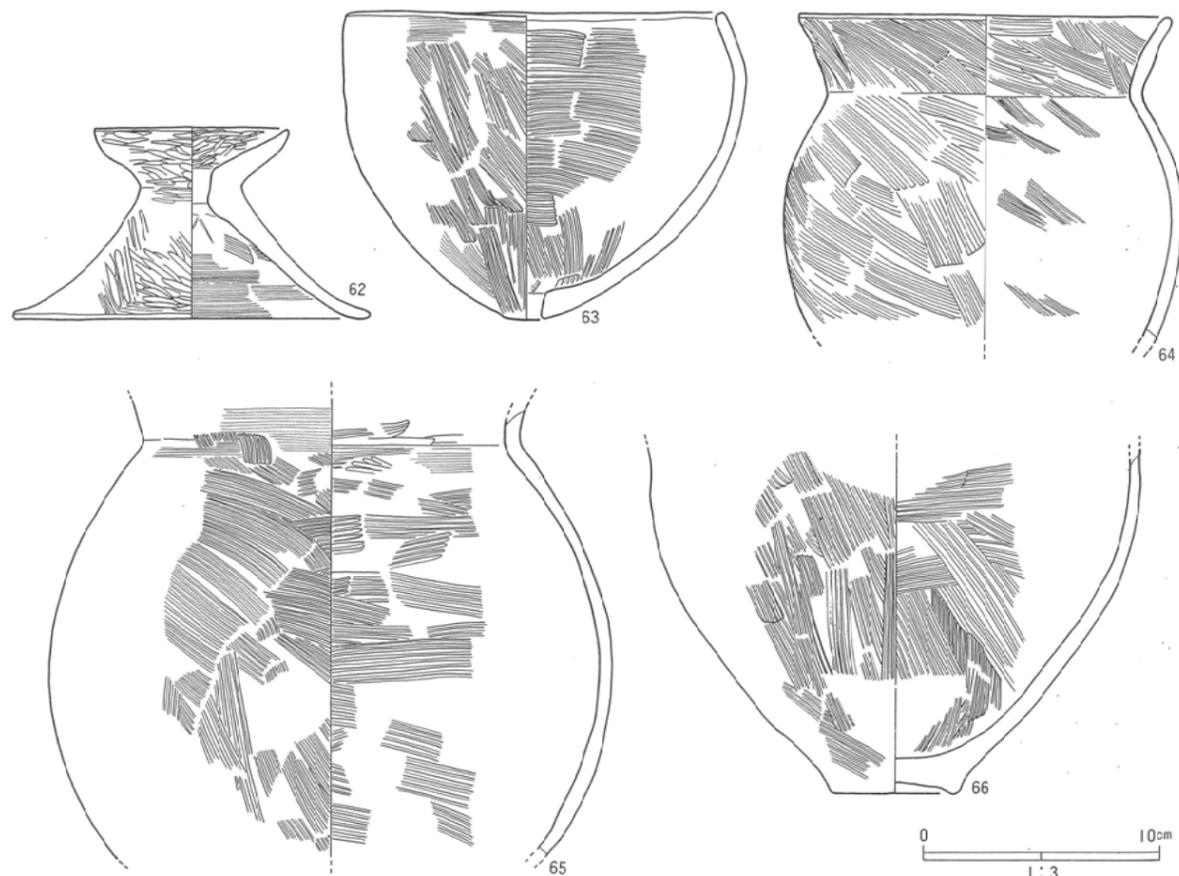
柱穴・炉 どちらも検出できなかった。

貯蔵穴等の 検出できなかった。

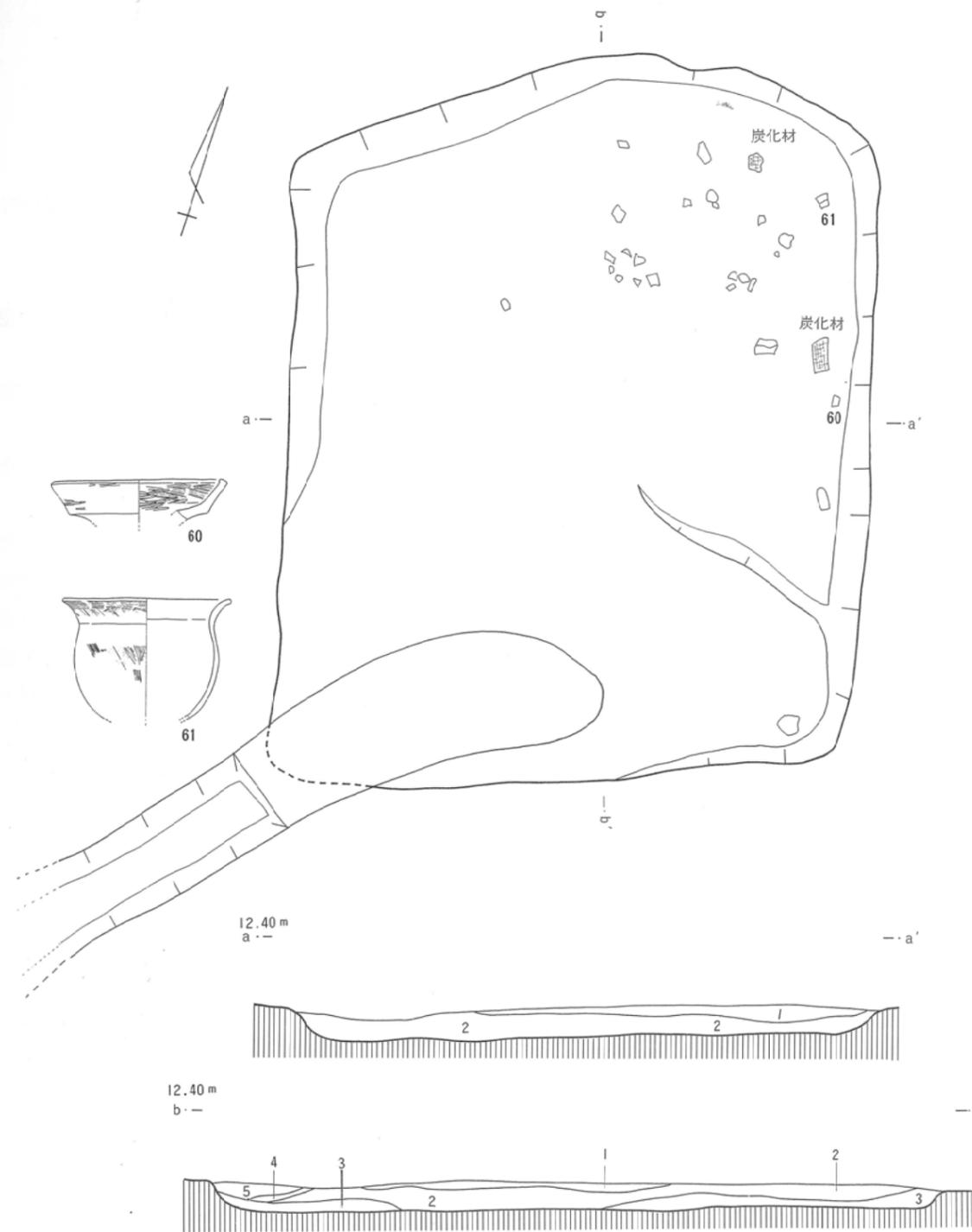
諸施設

遺物の出土 遺物が集中しているのは住居内の北東部分にあたる。これらはほぼ同レベルであり比較的まとまって出土している。炭層の直上あるいは混入した状態である。

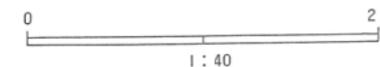
遺物 3点のみ図上復元できた。59は不明の土師器である。60は壺である。口縁部は有段部分の外側に稜をなしている。口唇部を内側につまみ出しているのが特徴的である。61はやや小型の甕である。口縁端部を面取りしている。口縁部は外反する。



第21図 ST232竪穴住居跡出土遺物



- ST182
1. 5Y4/2 灰オリブ色シルト 細砂を10%含む。炭化粒を10%含む。木材質を残すものも認められ、層下位に特に集中する。
 2. 2.5GY4/1 暗オリブ灰色細砂 土層の濁りが認められる。炭化粒を1%含む。
 3. 7.5GY4/1 暗緑灰色砂 濁りが認められず均質。2層に比べ砂粒子が粗い。
 4. 7.5GY4/1 暗緑灰色砂 炭化粒を10%含む。
 5. 5GY5/1 オリブ灰色細砂 炭化粒5%含む。



第22図 ST182竪穴住居跡

ST 232

位置 X-11~12の鞍部に位置し、西辺を南西壁に切られている。

平面形・規模 長軸（東西）4.92m、短軸（南北）の残存部分は4.12mを測る。南西隅と北西隅がやや模内側に入り込んでいるため、西側への延長は考えられずほぼ方形と推定される。

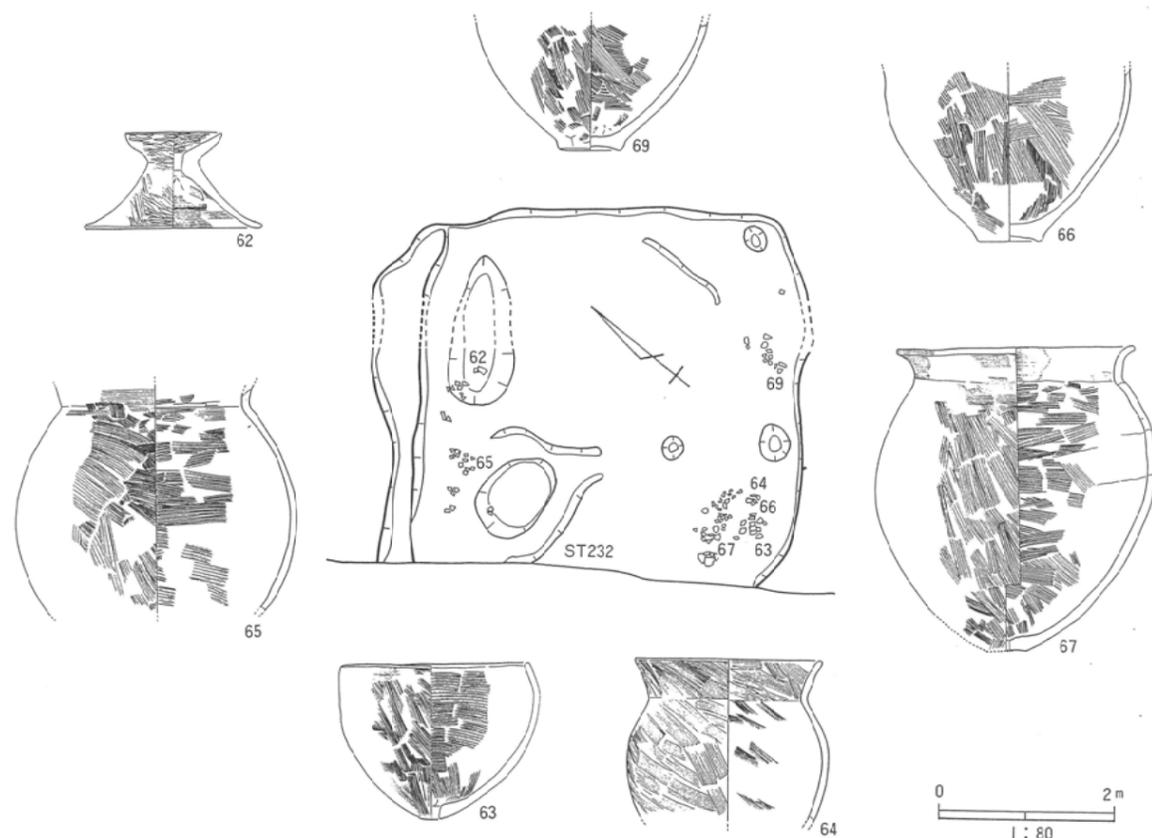
覆土・壁 覆土はほぼ1層から成り、全体に炭の濁りが見られ、土器片も多量に含む。

床面・柱穴 床面は2層上面と考えられる。柱穴は、深さ0.1~0.14mと浅く、しっかりとした掘り込みがあるものは認められない。炉も認められない。

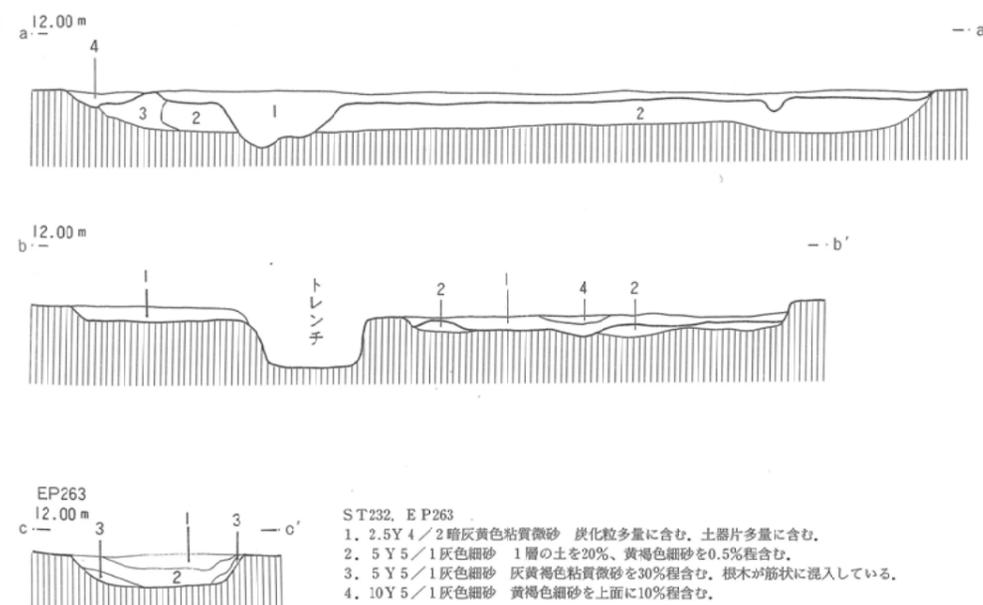
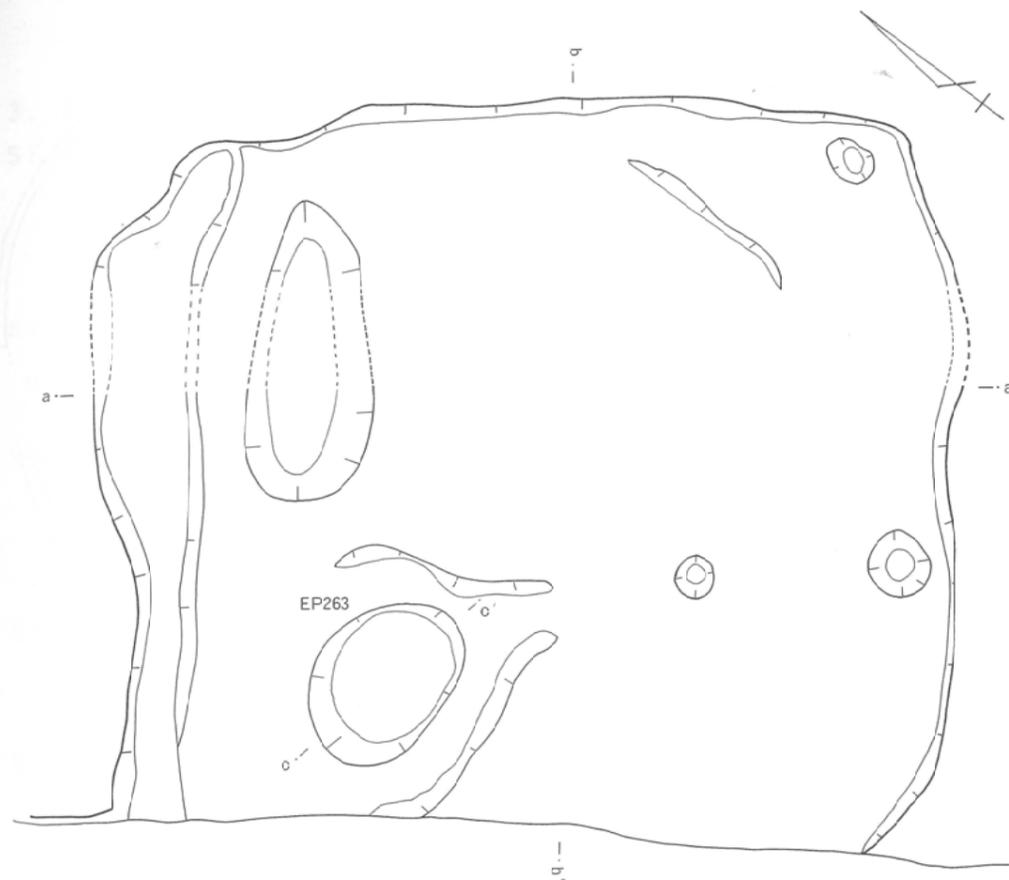
貯蔵穴等の諸施設 貯蔵穴と思われるものが2基確認されたが、床面より0.2m程掘り込んでいるSK262は、土器片を数点含む。

遺物の出土状況 遺物は、他住居に比べ堆積土・床面共に出土数が多く、床面南側と北西側の隅に集中している。

遺物 62は器台である。口縁は直立気味に立ち上がる。口縁部の端部はやや丸みを持ち、先細りしている。63は有孔鉢である。単孔である。底部より外弯しつつ立ち上がり、途中体部上位で屈曲し、内傾して口縁部に至る。内外面ともハケメ調整である。66・68・69は壺である。68・69は同一個体と考えられる。口縁部は面取りが施されている。底部は窪み底である。64・65・67は甕である。64は口縁端部を丸くおさめる。67は完形に近い。口縁・体部径に比べて底部径が小さい。口縁は外反する。端部は面取りを施す。



第23図 ST232竪穴住居跡土器出土状況



- ST232, EP263
1. 2.5Y 4/2 暗灰黄色粘質微砂 炭化粒多量に含む。土器片多量に含む。
 2. 5Y 5/1 灰色細砂 1層の土を20%、黄褐色細砂を0.5%程含む。
 3. 5Y 5/1 灰色細砂 灰黄褐色粘質微砂を30%程含む。根木が筋状に混入している。
 4. 10Y 5/1 灰色細砂 黄褐色細砂を上面に10%程含む。



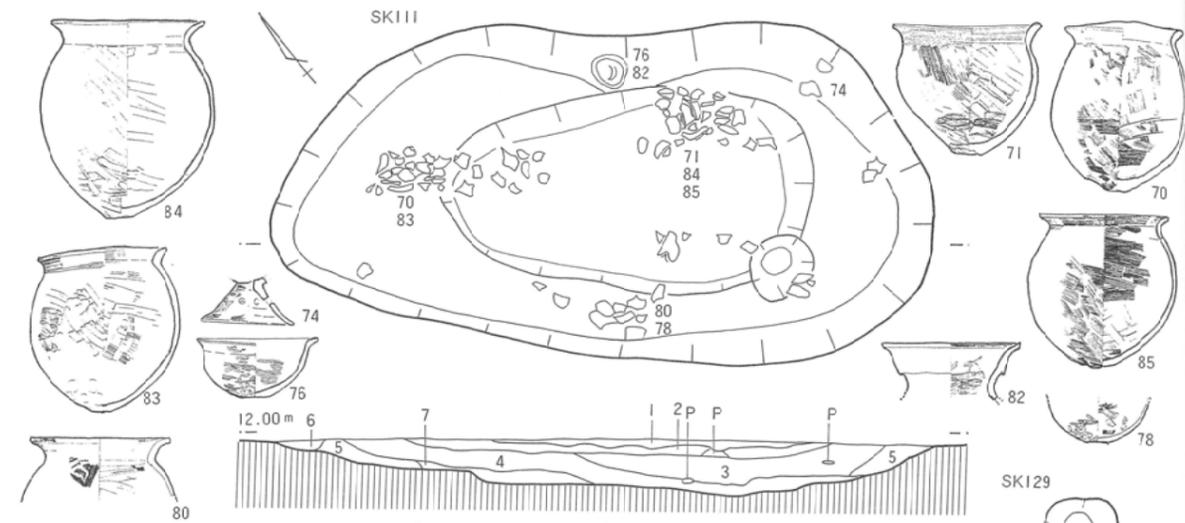
第24図 ST232竪穴住居跡



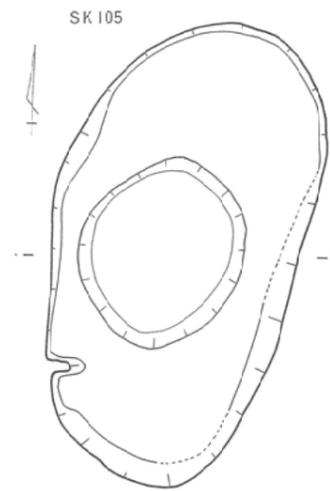
第25図 ST232竪穴住居跡・SK111・176・203 土坑出土遺物

3. 土坑

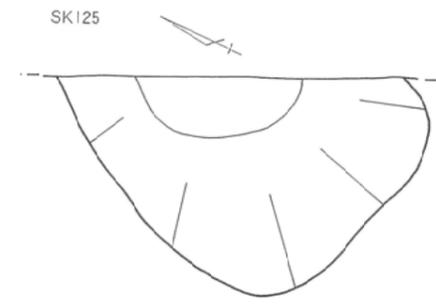
- SK 111 調査区の西壁際より検出され、長軸3.72mの不整楕円形を呈する。今回検出された土坑の中で最も規模が大きく、遺物の出土数が多い。覆土は、全体的に炭化粒を含む。遺物は、底面の他に壁の傾斜部分からも出土し、甕・小型鉢・器台等が見られる。底面の中心は一段深く掘り窪められ、緩やかに傾斜しており、その用途は判然としない。
- SK 174 ST150の西隅に位置し、SD249とST150を切って位置する。長軸1.53mの不整円形を呈し、西側は暗渠によって攪乱されている。深さは0.27mを測り、底面は凹凸がある。覆土は2層から成り、共に炭化粒を含む。
- SK 176 北側調査区のほぼ中央、ST181のすぐ南側に位置する。長軸1.7mの不整楕円形を呈するが、西側を暗渠に切られている。覆土は、全体に砂質土で炭化粒を含み、底面まで0.15mと浅い。底面には炭が貼りついており、土器の出土も認められた。ST181に付随する土坑の可能性も考えられる。
- SK 185 ST182より8m程西方に位置する。長軸3.02mの楕円形を呈し、底面はほぼ水平で、壁は緩やかに立ち上がる。深さは0.17mと浅い。覆土は灰色を基調とした微砂～粘土で炭化粒を含む。また、1層からは甕の破片が多量に出土した。
- SK 203 U-11に位置し、長軸2.27mの不整形を呈する。覆土は、2層であるが遺物が検出面で多く出土したことから、1層はもっと厚く堆積していたものと考えられる。底面までは、0.3m程掘り込んでいるが、殆ど遺物の出土は認められない。
- その他のS 長軸0.5～3.72mの不整円形・楕円形を呈し、深さ0.1～0.7mと浅いものが殆どである。
- K SK105・178・185を除いて、覆土は、2～4層から成り、灰黄褐色・黄灰色等の粘性のある細砂～シルトである。
- 遺物 土坑の出土状況はほとんどが覆土中のものであり、破片資料であるため、器種・器形を想定するのは難しいものが多かった。その中で比較的まとまりをもつ出土が見られたのはSK111である。SK111の出土遺物は器台74、鉢76・78、壺82、甕70・71・80・83・84・85である。器台は脚部の裾を外反・屈曲させたもので円窓の数は4孔である。鉢76の口縁部は屈曲して外反する。端部は丸くおさめる。底部は平底である。82は複合口縁の壺である。口縁端部を面取りしつつ、外反させて斜め方向につまみ上げているのが特徴的である。甕には大別して口縁端部を丸くおさめるもの(70・71)と、面取りを施すもの(83・84・85)とが認められる。前者には口縁部が頸部より肥厚し形態が鉢に類似するものがある(71)。後者にはつまみ出すもの(83・84)とそうでないもの(85)に細別できる。いずれの甕も口径に対する底径の割合が小さく不安定で、底部の形態は平底ないし窪み底である。SK185では甕・壺の破片が多量に出土している。壺では複合口縁のもの、甕では面取りを施してつまみ出しているものが認められる。SK176の出土遺物は甕73である。体部は球形を呈し、口縁部は短い。口縁部下端に緩やかな稜をもつ。SK200の出土遺物は鉢81である。SK203の出土遺物は甕72である。口縁部は外反して端部でやや屈曲する。底部は尖り底である。SK229の出土遺物は小型の鉢77である。



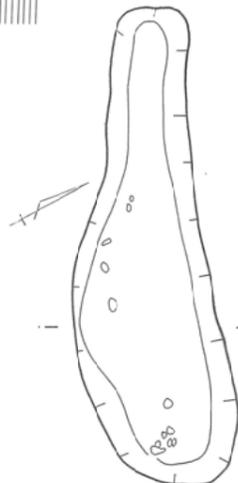
- SK111
1. 10Y R 5 / 2 灰黄褐色粘質シルト 炭化粒少量含む。土器片含む。
 2. 2.5Y 4 / 2 暗灰黄色粘質微砂 炭化粒少量含む。
 3. 2.5Y 5 / 3 黄褐色シルト質細砂 炭化粒少量含む。
 4. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色シルト質微砂 炭化粒含む。
 5. 2.5Y 6 / 2 灰黄色細砂
 6. 10Y R 6 / 3 におい黄褐色粘質シルト 炭化粒若干含む。
 7. 7.5GY 5 / 1 緑灰色細砂 根木を含む。



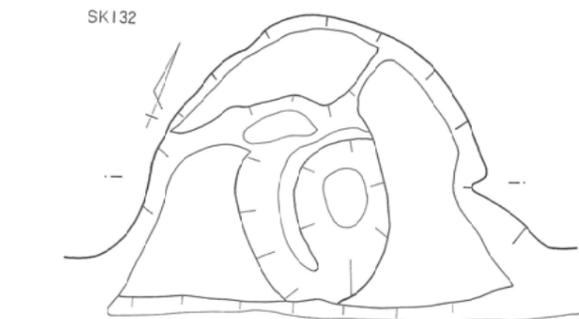
- SK105
1. 10Y R 3 / 4 暗褐色粗砂 炭化粒を少量含む。かなりしる。
 2. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色微砂 1の砂。炭化粒を含む。



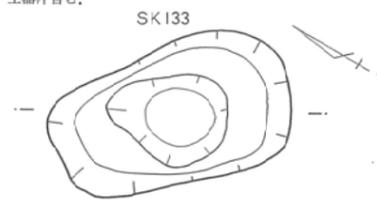
- SK125
1. 2.5Y 7 / 2 灰黄色粘質シルト 炭化粒少量含む。
 2. 2.5Y 5 / 1 黄灰色粘質シルト 炭化粒少量含む。
 3. 2.5Y 4 / 2 暗灰黄色シルト 炭化粒多量に含む。土器片含む。
 4. 10Y R 5 / 2 灰黄褐色シルト 炭化粒少量含む。



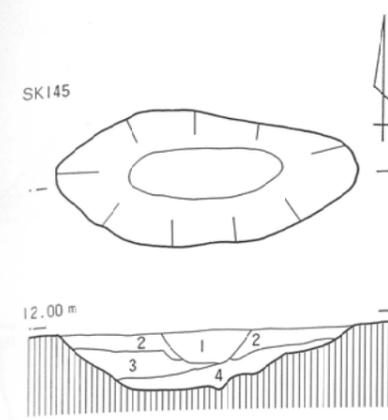
- SK129
1. 2.5Y 4 / 1 黄灰色粘質細砂 炭化粒を5%含む。
 2. 2.5Y 4 / 2 暗灰黄色細砂 粘土質シルト粒を5% 炭化粒を3%含む。



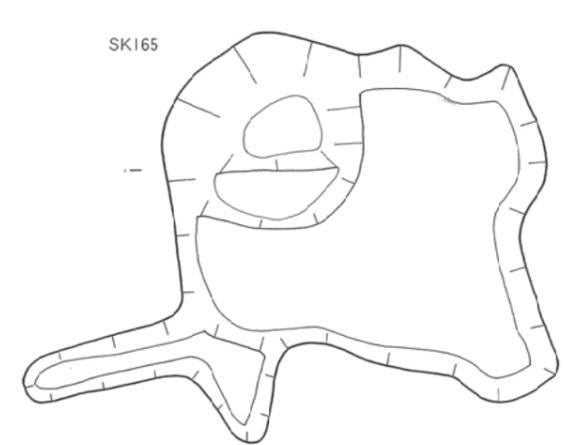
- SK132
1. 2.5Y 4 / 1 黄灰色粘質細砂 炭化粒を5%含む。
 2. 5Y 4 / 2 灰オリブ色粘土質細砂 同色の粘土質シルトを10%、炭化粒を3%含む。



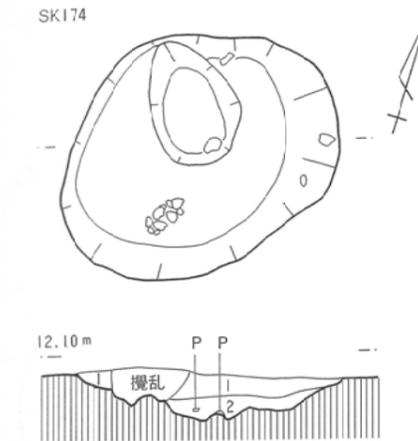
- SK133
1. 10Y R 5 / 3 におい黄褐色粘質微砂 炭化粒若干含む。土器片含む。
 2. 2.5Y 5 / 3 黄褐色粘質微砂
 3. 2.5Y 5 / 3 黄褐色粘質微砂 2よりしる。
 4. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色粘質微砂 炭化粒若干含む。



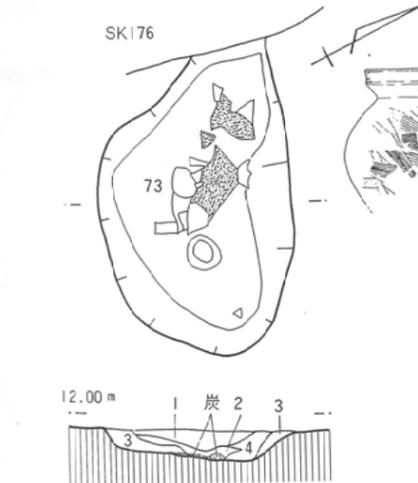
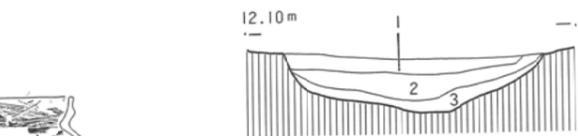
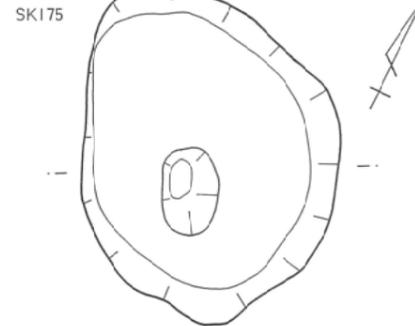
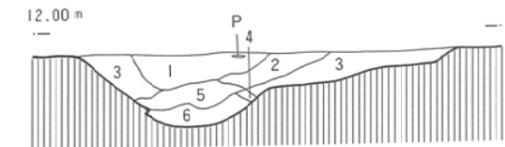
- SK145
1. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色シルト質細砂 炭化粒含む。
 2. 2.5Y 3 / 3 黄褐色シルト質細砂 炭化粒若干含む。
 3. 10Y R 5 / 2 灰黄褐色細砂
 4. 2.5GY 5 / 1 オリブ灰色シルト質微砂 炭の濁りがある。



- SK165
1. 10Y R 4 / 3 におい黄褐色粘質シルト 炭化粒少量含む。土器片、根木を含む。
 2. 2.5Y 5 / 3 黄褐色粘質細砂
 3. 2.5Y 5 / 3 黄褐色粘質細砂 炭化粒少量含む。
 4. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色粘質細砂
 5. 10Y R 4 / 2 灰黄褐色シルト質細砂 炭化粒少量含む。根木含む。
 6. 7.5Y 5 / 1 灰色シルト質細砂 全体的に黒く濁る。



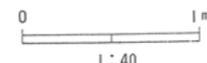
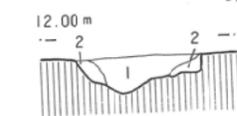
- SK174
1. 2.5Y 5 / 3 黄褐色シルト質細砂 炭化粒を5%含む。
 2. 5Y 5 / 3 灰オリブ色粘質シルト 1の土より粘性が強い。炭化粒10%、土器片含む。



- SK176
1. 10Y R 5 / 2 灰黄褐色粘質微砂 炭化粒少量含む。
 2. 10Y R 5 / 2 灰黄褐色粘質微砂 炭化粒多量に含む。土器片含む。
 3. 2.5Y 6 / 2 灰黄色粘質微砂 炭が筋状に混入。
 4. 2.5Y 6 / 2 灰黄色粘質微砂 炭化粒若干含む。

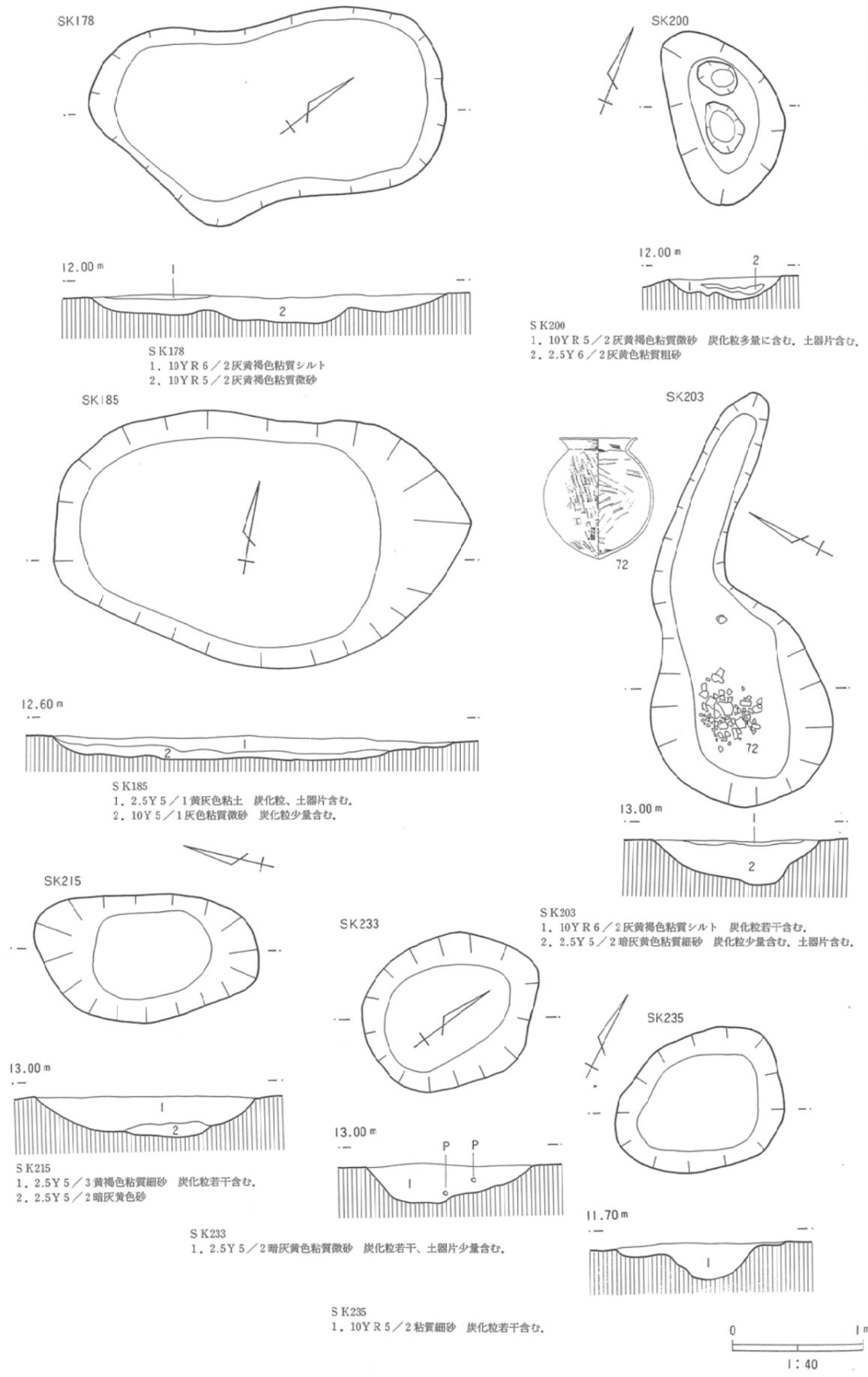
- SK175
1. 2.5Y 6 / 4 におい黄色粘質細砂 炭化粒5%含む。
 2. 2.5Y 6 / 4 におい黄色粘質細砂 炭化粒10%含む。
 3. 5GY 6 / 1 オリブ灰色粘質細砂 2の細砂がブロック状に1%混入。

- SK177
1. 10Y R 5 / 2 灰黄褐色粘質シルト 炭の濁りがある。
 2. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色微砂 1のシルトを30%程含む。

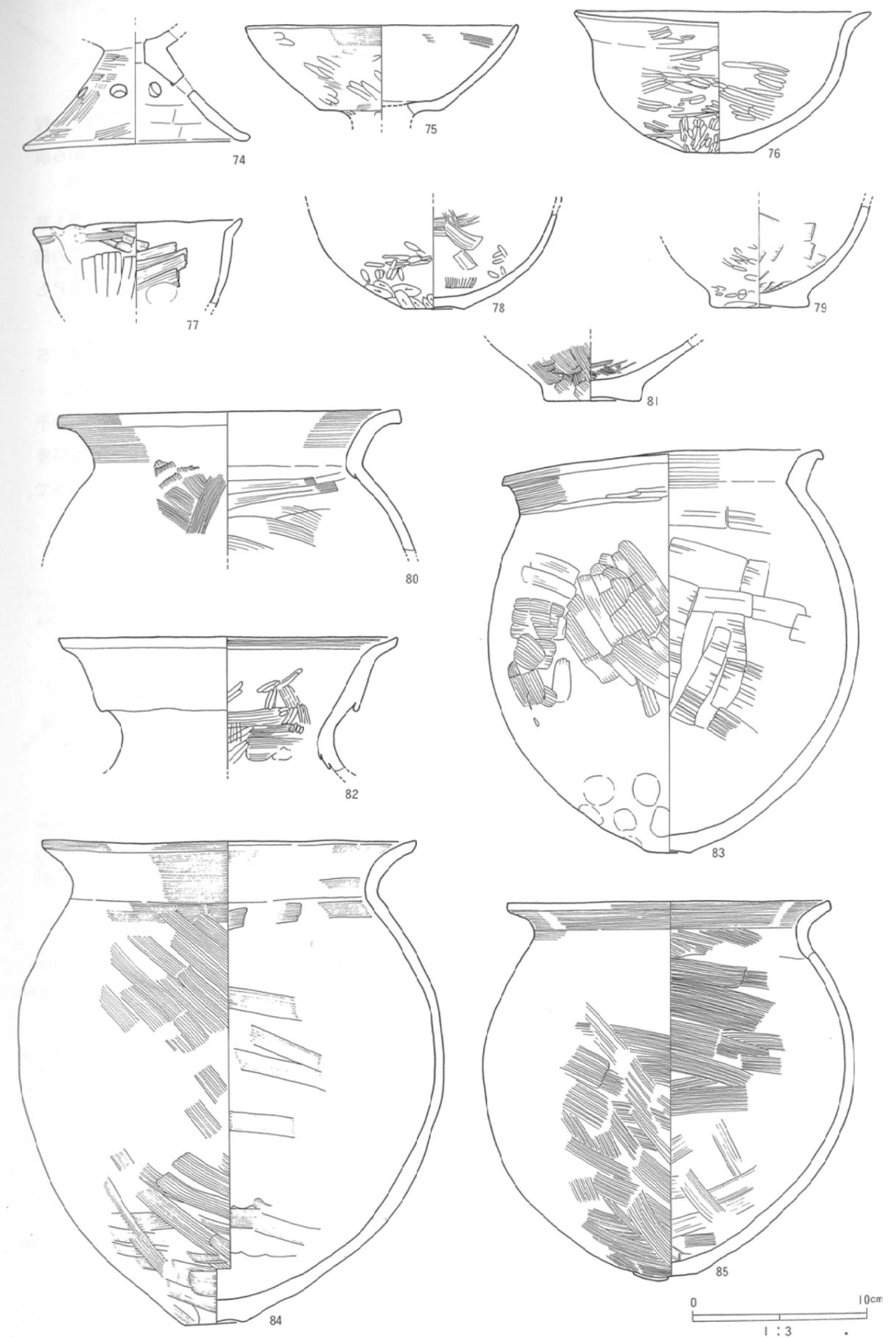


第26図 SK111・105・125・129・132・133土坑

第27図 SK145・165・174・175・176・177土坑



第28図 SK178・185・200・203・215・233・235土坑



第29図 SK111・229他土坑出土遺物

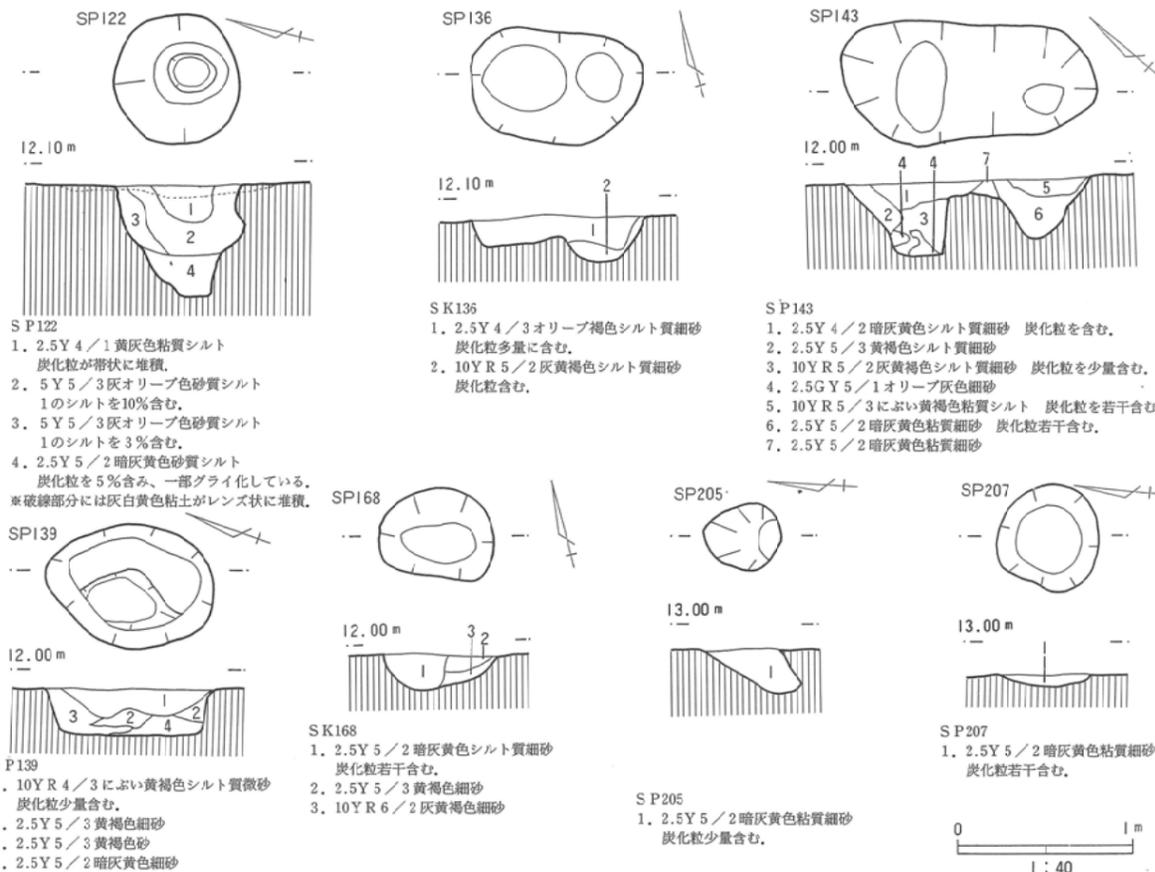
4. 柱穴

SP122 R-6、A区の南東隅に位置し、径0.72mのほぼ円形を呈する。検出時は、長軸2m程のSKと認められたが、断面よりSPと判明した。覆土は、灰オリーブ色等の4層から成り、深さ0.6m程とかなり深く掘り込んでいる。

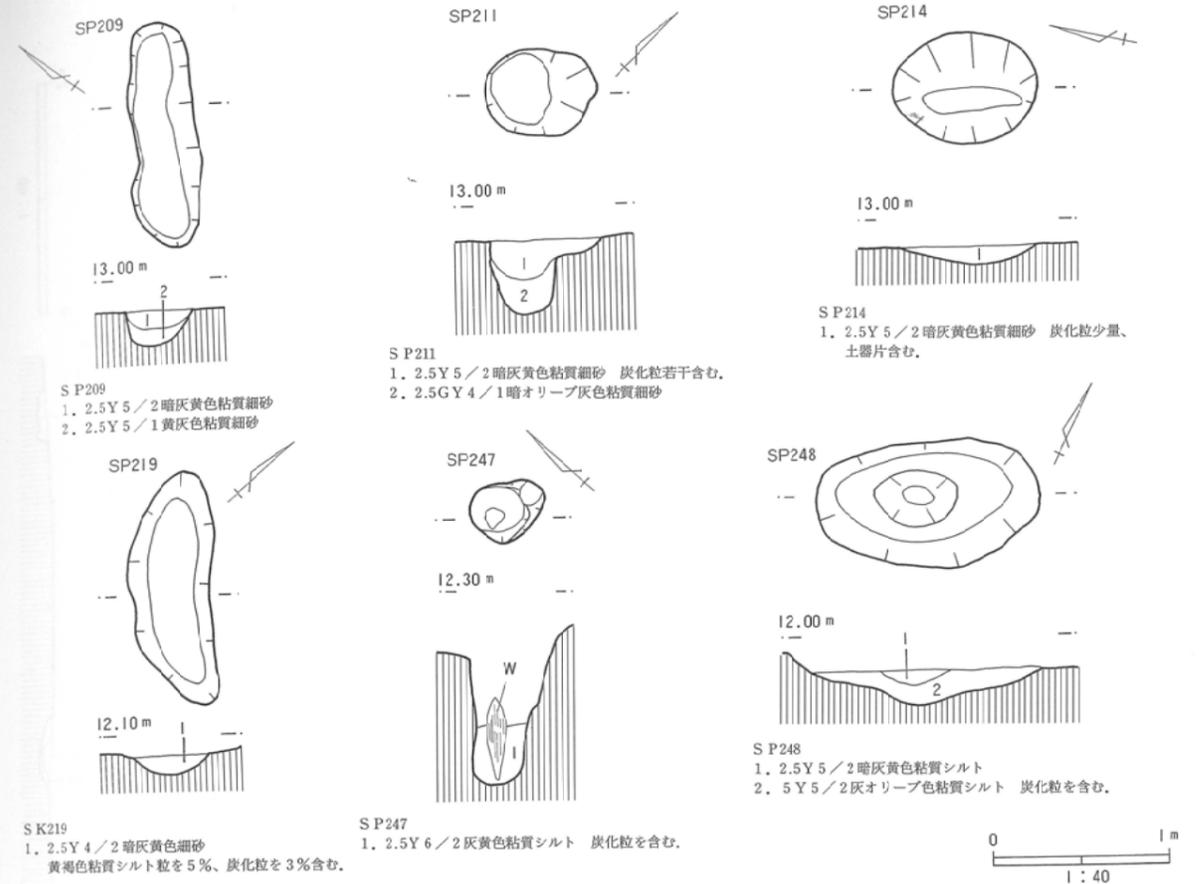
SP139 O-7のSK・SP集中地点に位置し、長軸1.41mの長楕円形を呈する。検出時は1基のSPと認められたが、断面より2基のSPが確認された。北側のSPは黄色～灰色の細砂で、南側は黄色を基調としたシルト～細砂でやや粘性をもつ覆土である。2基のSPとも覆土は異なるが、新旧は判然としない。

SP247 P-9、畝状遺構のSX154内に位置し、長軸0.35mの不整形円形を呈する。覆土は、SX154と同色の灰黄色でやや粘性がある。径0.1m、長さ0.5m程の柱痕も検出された。

その他のS 各STの周囲、A区の東中央部、B区の北西部等に多く分布し、長軸0.3～1.26mの不整形円形・楕円形を呈し、深さ0.02～0.43mと浅いものが殆どである。覆土は1～2層が多数を占め、黄灰色、暗灰色の粘性のある微砂～シルトから成る。遺物の出土は小片のみで、柱痕が認められるものは少なく、柱穴からの建物跡の存在は認められなかった。



第30図 SP122・136・139・143・168・205・207柱穴



第31図 SP209・211・214・219・247・248柱穴

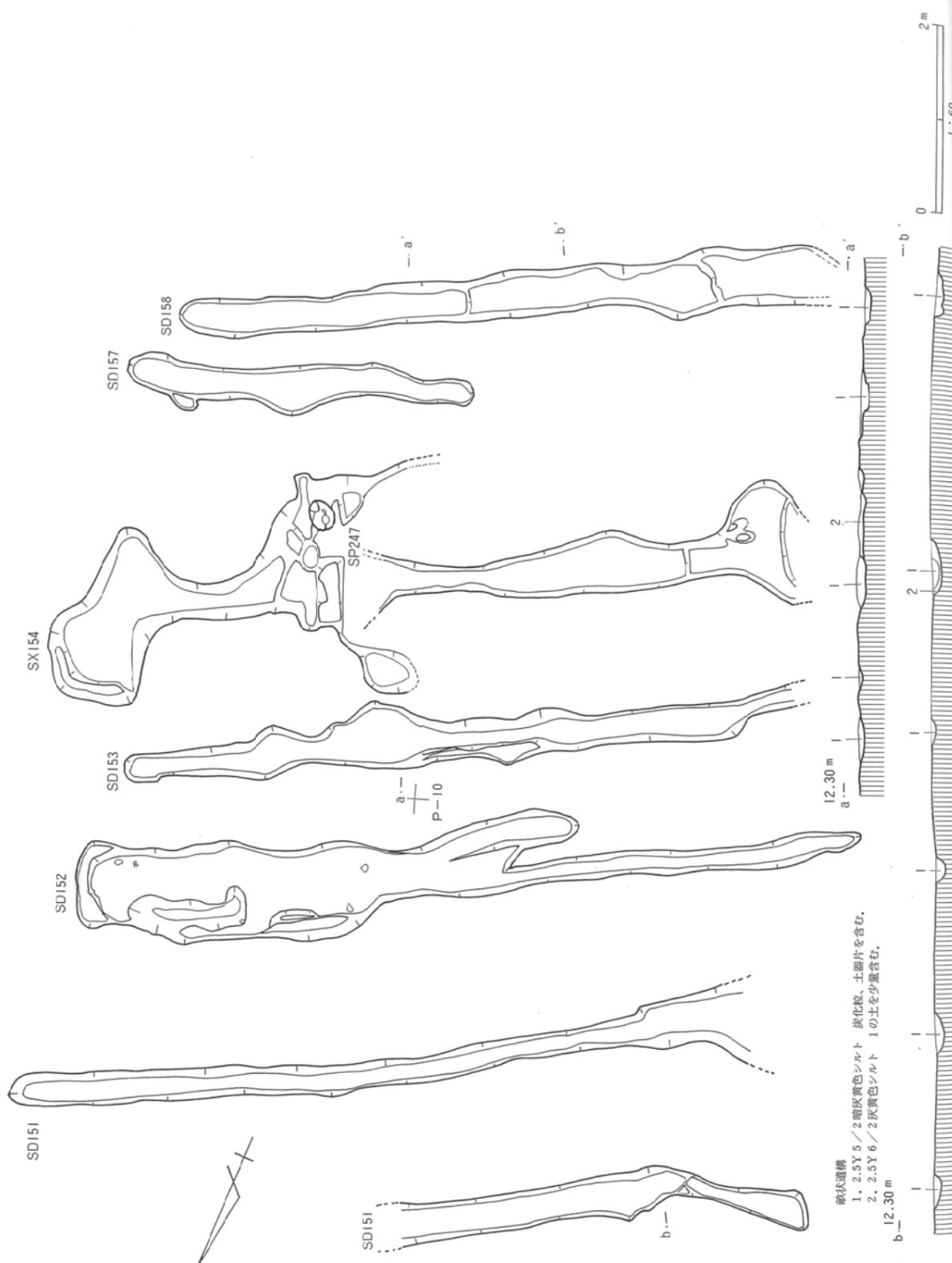
5. 溝・畝状遺構

畝状遺構 O～P-9～10 において、SD101の北側に位置する。7本の細い溝が東西に並行して縦走する。長さ5～11mと一定しないが、比較的短いSD157・245は、他の溝と同程度の長さであったものと推定される。また、SX154は、断面からSD155より古いものと考えられる。幅は、0.26～1.56mと一定しないが、深さは0.1～0.14mと浅めである。溝の東西方向よりSD101で隔てられたST150の長軸方向は、やや東に振れており、その配置から同時期の可能性が考えられる。

SD128 Q～R-7内、ST103の北側に位置する。南側は排水溝によって切られているが、SK129の存在等からSD100からSD101の連結の可能性が考えられる。長さは6.03m、幅は1.06～2.02mの不整形で、深さは約0.22mを測る。検出時は、西側の溝部分と東側の肥大部分の別々の遺構として確認された。遺物は、高坏等の土器片が数点出土している。

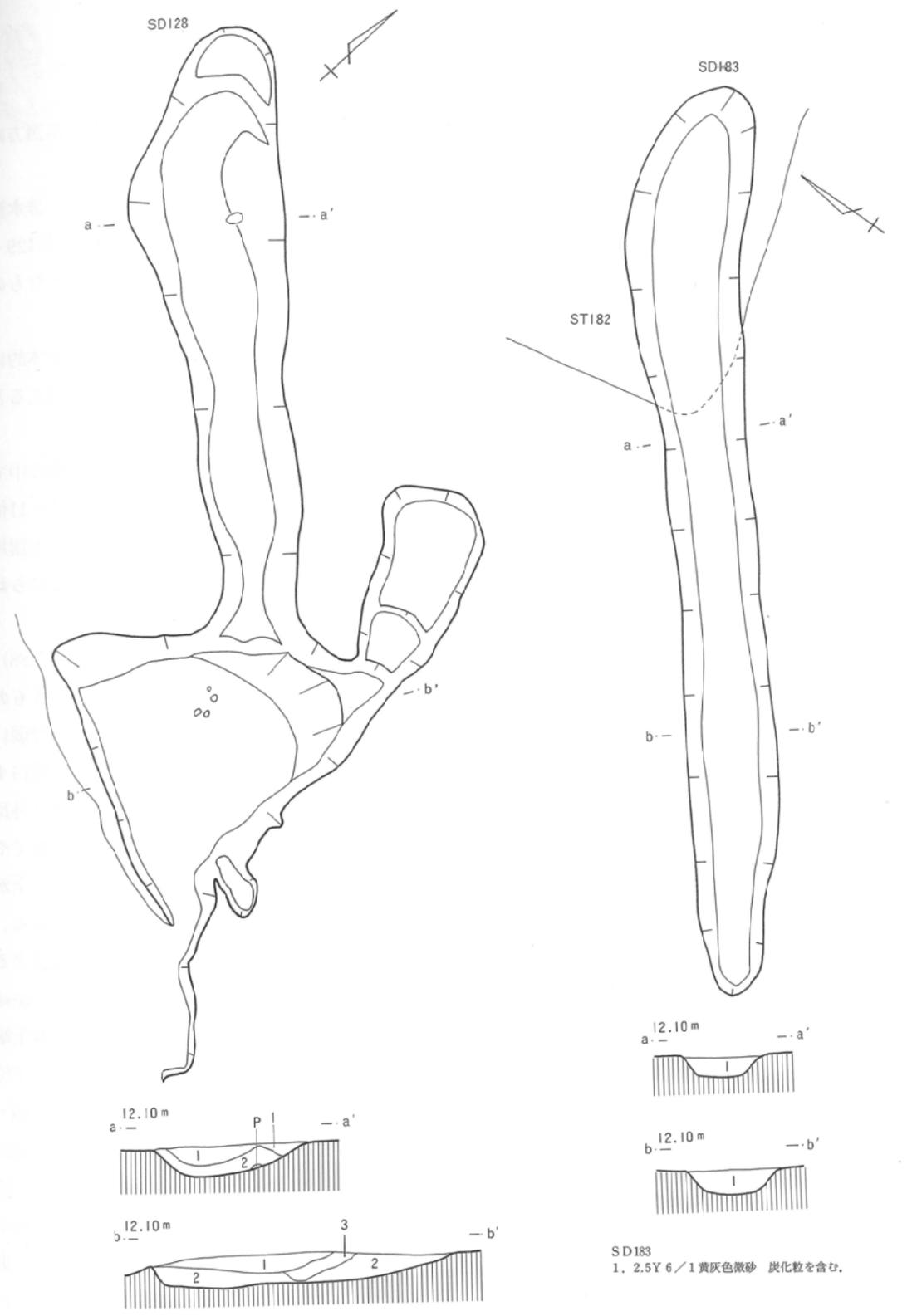
SD183 J-9～10内、ST182の西隅を切って位置する。長さは7m、幅は0.55m、深さは0.13mと浅めで、平面からST182より新しいものと考えられる。

遺物 ほとんどが破片資料である。75は高坏でSD144の出土である。口縁部下端に稜をもつ。ほかに胎土が他の甕とは異なり、内側につまみ出しのあるものや端部の丸いものなどがある。畝状溝跡では壺、甕の小破片が出土している。中にはつまみ出し口縁の甕の破片も認められる。



畝状遺構
 1. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色シルト 炭化粒を含む。
 2. 2.5Y 6 / 2 灰黄色シルト 1の土を少量含む。
 12.30 m

第32図 畝状遺構



SD128
 1. 2.5Y 5 / 1 黄灰色粘質細砂 炭化粒を5%含む。
 2. 2.5Y 4 / 2 暗灰黄色細砂 黄褐色粘土質シルト粒を5%、炭化粒を3%含む。
 3. 5Y 4 / 2 灰オリーブ色細砂

SD183
 1. 2.5Y 6 / 1 黄灰色微砂 炭化粒を含む。

第33図 SD128・183溝跡

SD101溝跡

位置 P～R-6～12に位置し、SD152～157畝状遺構と平行する形となり、北東～南西方向に縦走する。SD100・202・249が重複して形成された可能性が考えられる。

平面形・規模 幅は2.3～9.1mと一定せず、深さは0.1～0.2mと浅く、全体的に蛇行が激しい。排水溝模様に切られてはいるが、南側でSD202、北西側でSD249につながり、SD128・SK129・SX130等からSD100とのつながりも推測され、SD101との機能的な関係があったものと考えられる。

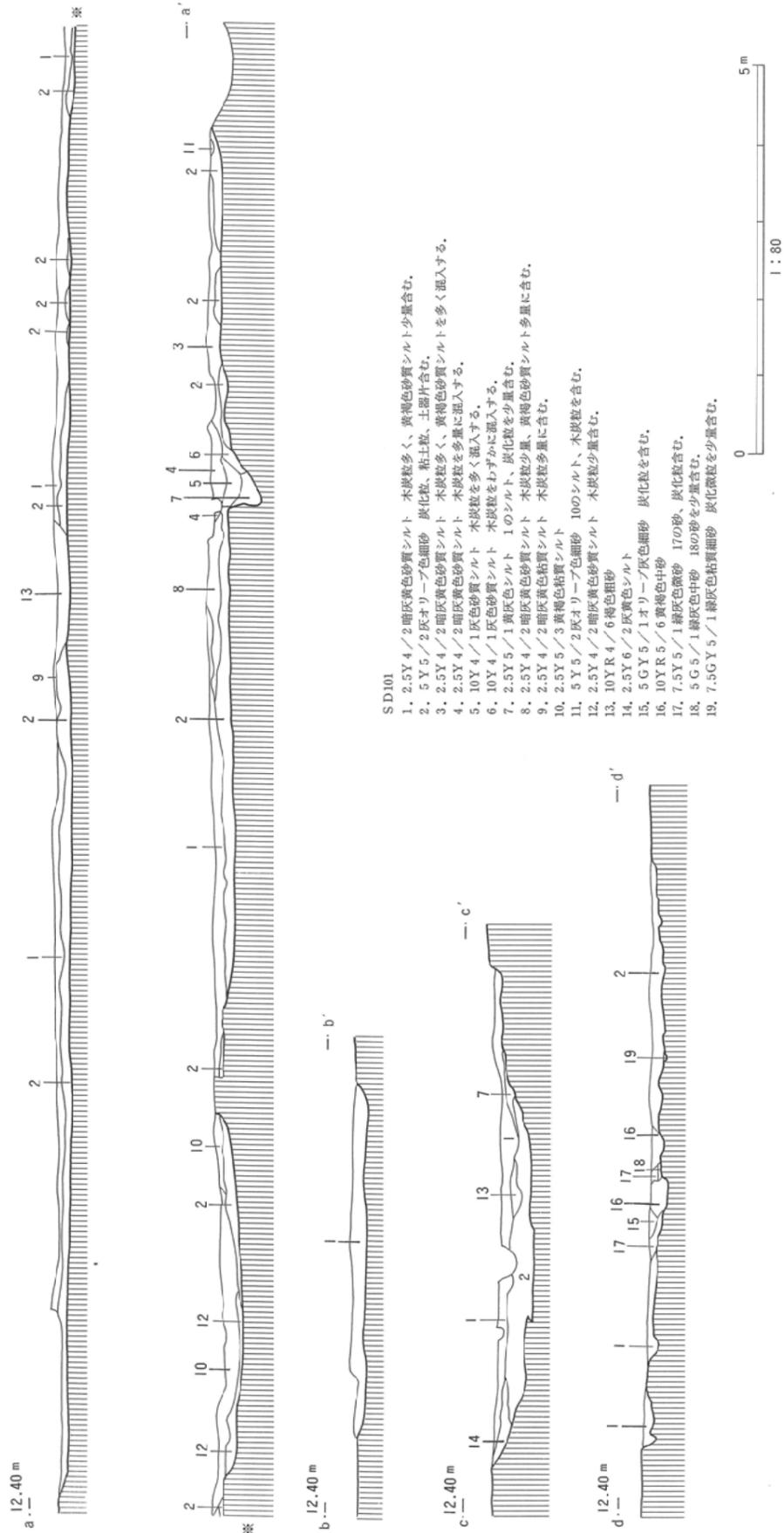
覆土・壁・底面 覆土は、黄色又は褐色を帯びた灰色シルトを基調とし、木炭粒を多量に含む。全体的に土色・土質の大きな違いは見られずほぼ一定しているが、南側においてやや砂が増えるところがある。壁は緩やかに立ち上がり、底面はかなりの凹凸が認められる。

遺物の出土状況 基本層序III層を除去した時点からかなり多量の土器が出土し、今回調査した遺構の中で最も出土量が多い遺構となった。その状況は東西壁に近づくにつれ希薄になり、Q-11付近を除けば南岸からの出土量が多い。特にQ-10においては、上層から完形を含む土器片がまとまって出土した。また下層には、長軸4m程の楕円形を呈する落ち込みが認められ、そこから多量の土器片が出土した。

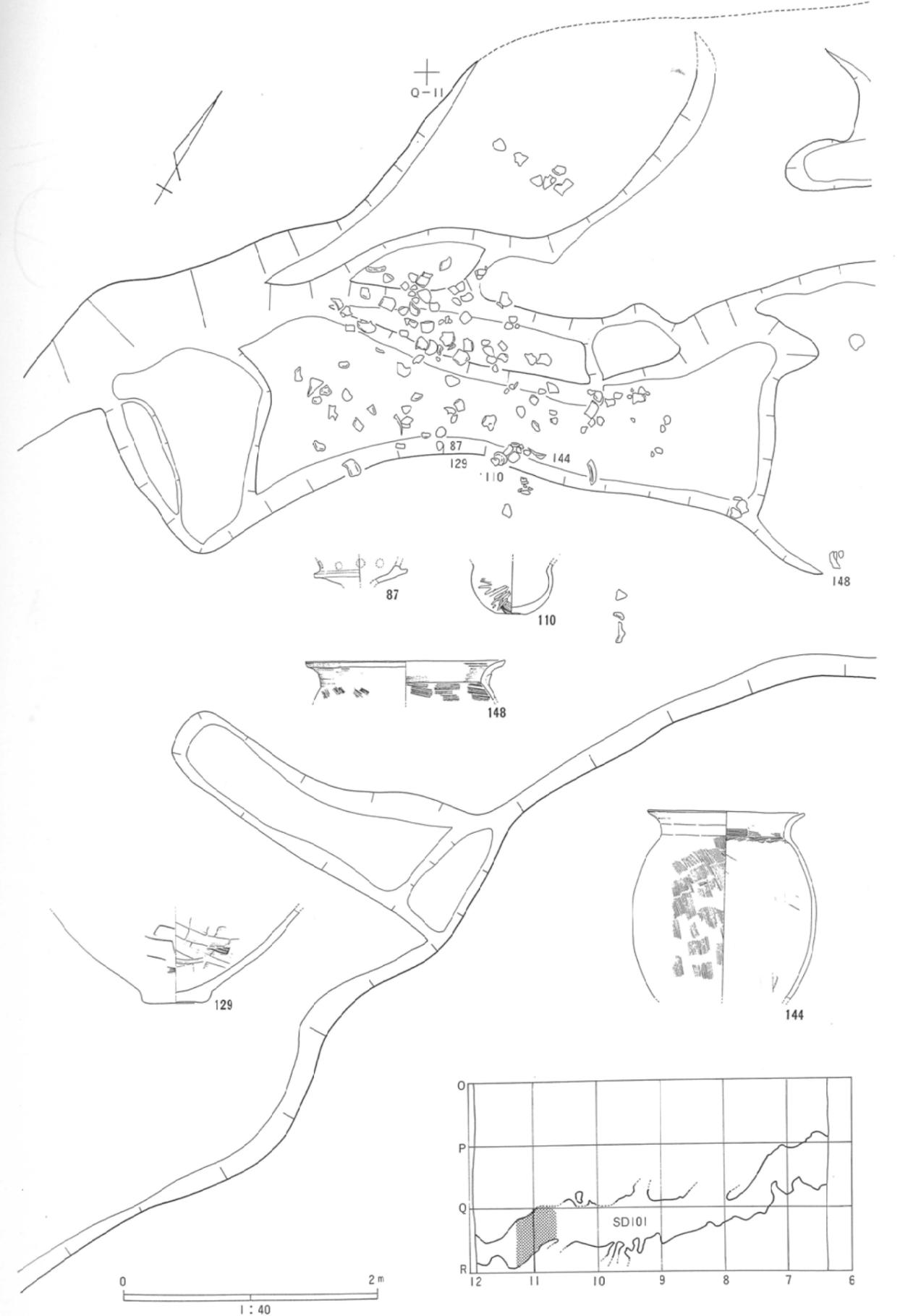
遺物 裝飾器台には結合器台と呼ばれるタイプ(86・87・89)とそうでない広口のもの(88)に分けられる。器台は口縁部に稜をもつもの(91)、内弯して端部を丸くおさめるもの(92)などがある。脚部には内弯するもの(96)も認められる。高坏は口縁部下端で弱い稜をつくり、比較的緩やかに立ち上がるもの(100)、口縁部がやや直立し、広く開口する脚部をもつもの(97)がある。鉢には、平底で体部が膨らみ口縁部が窄まり端部は外反するもの(102)、丸底で口縁部が外反するもの(103・104・107・109)、109は平底でやや直線的に外傾するものがある。甕には体部が偏平で口縁下端でくびれ外傾して立ち上がるもの(106)、器形全体が偏平で体部と口縁部下端のくびれが弱いもの(105)がある。直口壺は口縁部が直立気味のもの(111)、口縁が外傾し体部の中位に最大径が位置するもの(112・119)、体部下位に最大径のあるもの(118)がある。壺は複合口縁のものがほとんどである。口縁上端が緩やかに外弯して立ち上がるもの(114・115・117)、口縁上端が直線的に外反して立ち上がるもの(116・120)などがある。122は大型で体部のやや下位に最大径が位置する。甕は口縁部を面取りしてつまみ上げるもの(124・138～140・145・148)とつまみ上げないもの(133・125・128・141・144・148)がある。丸い端部で単純口縁のもの(128・142・147・149・150)もある。胎土・器形とも異質なのが132である。頸部で強く屈曲し外反する口縁をもつ。口唇部はやや肥厚する。調整のナデ・ハケメは細かく丁寧である。胎土は粗砂はほとんど混入せず緻密である。有孔鉢は底部のみの資料である。163は砥石である。各面に使用痕が見られるが、幅の狭い2面が特に使用されていたようである。162は須恵器である。甕体部のものと考えられる。II層とIII層の分層面で出土している。II層下で須恵器が出土したのはこれ1点のみである。



第34図 SD101溝跡全体図



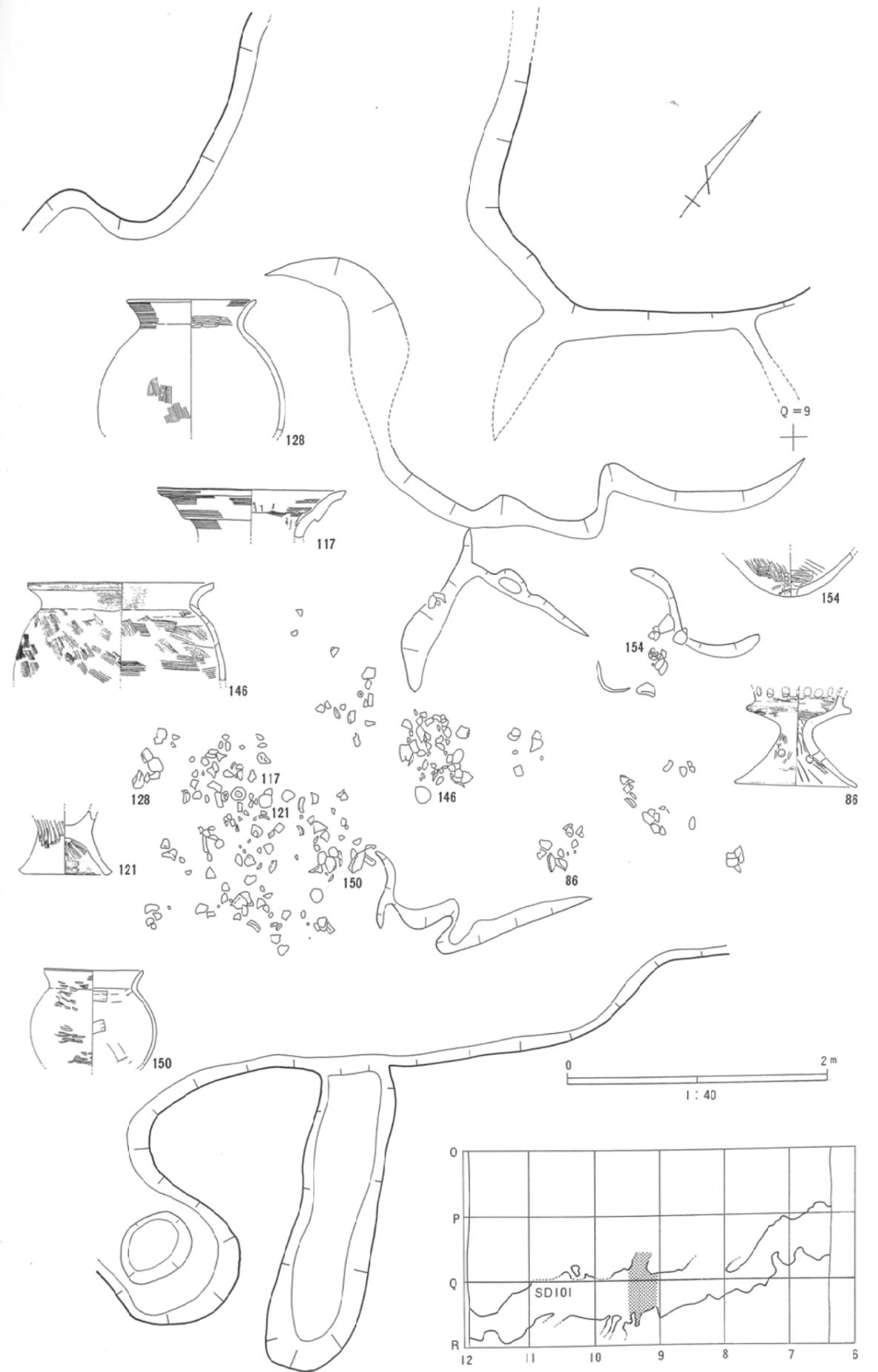
第35図 SD101溝跡土層断面図



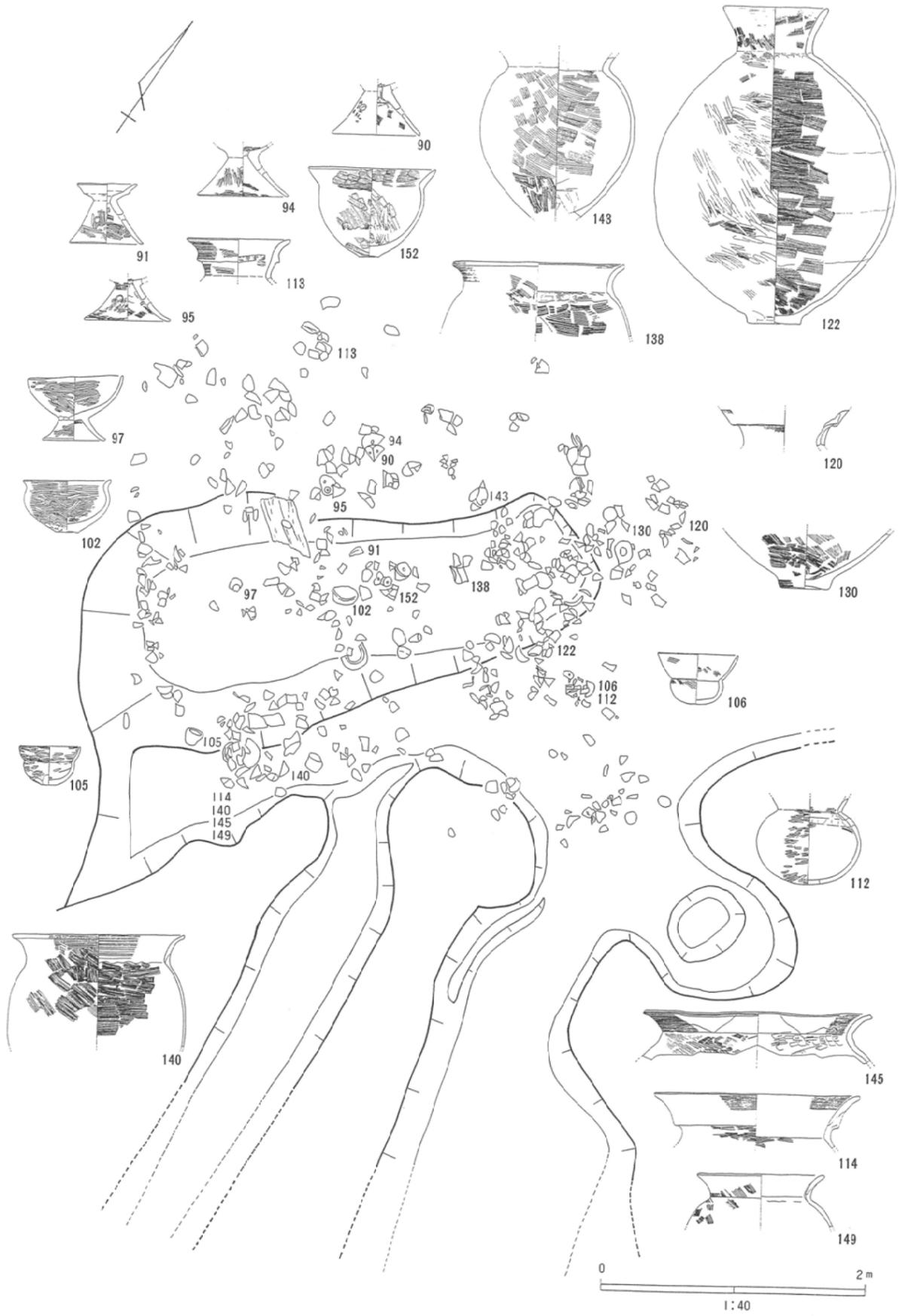
第36図 SD101溝跡土器出土状況(1)



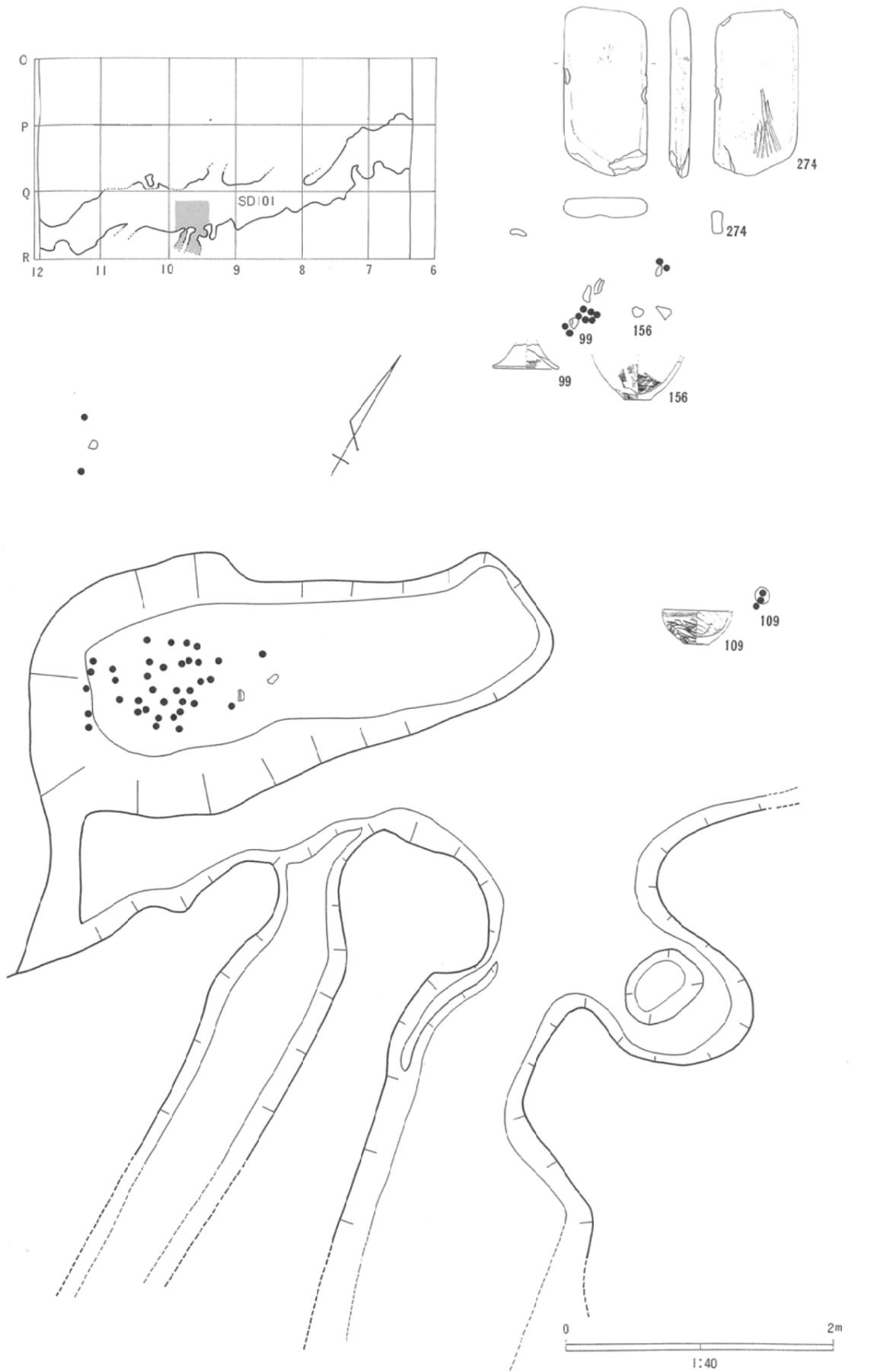
第37図 SD101溝跡(2)



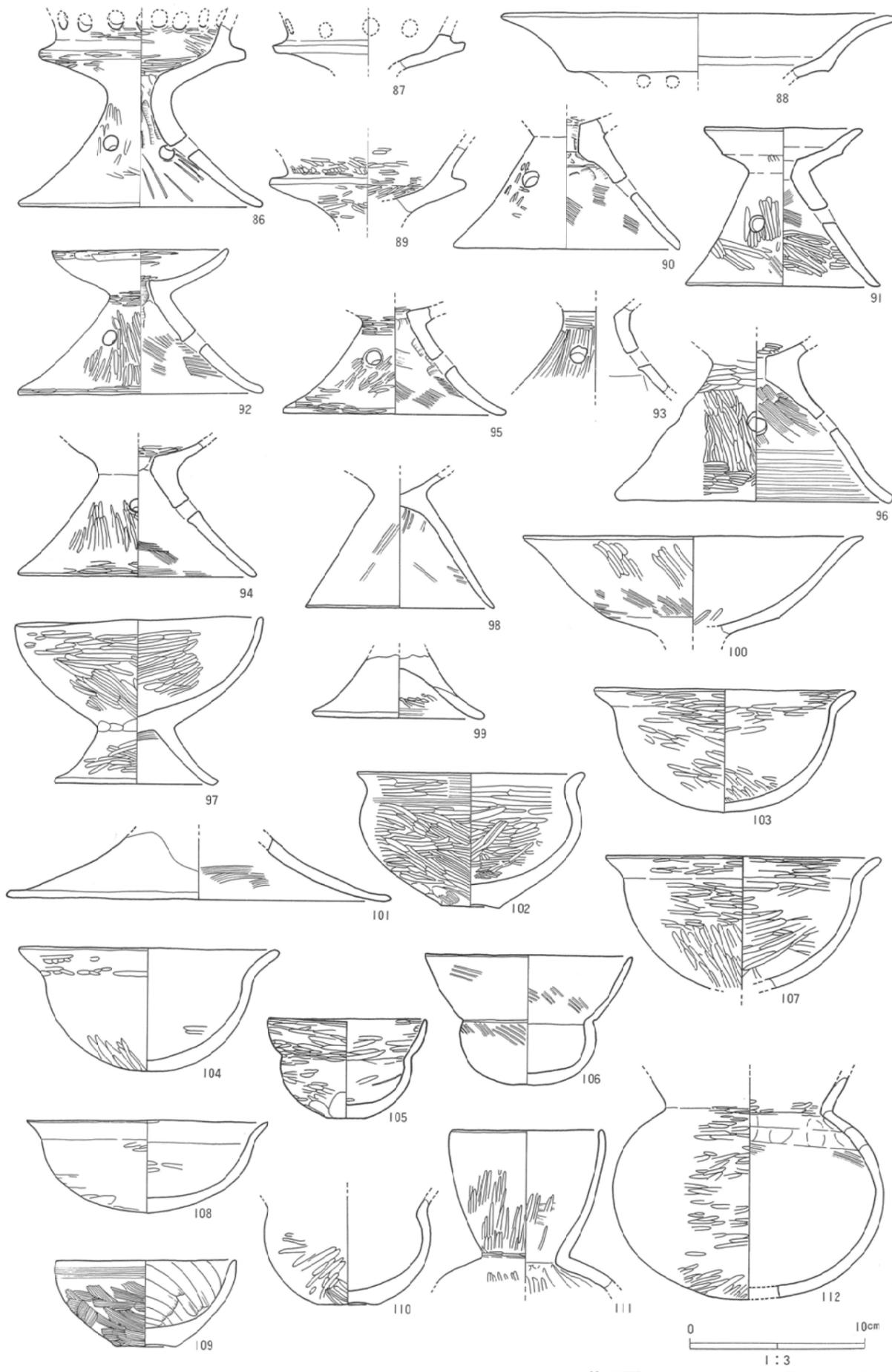
第38図 SD101溝跡土器出土状況(3)



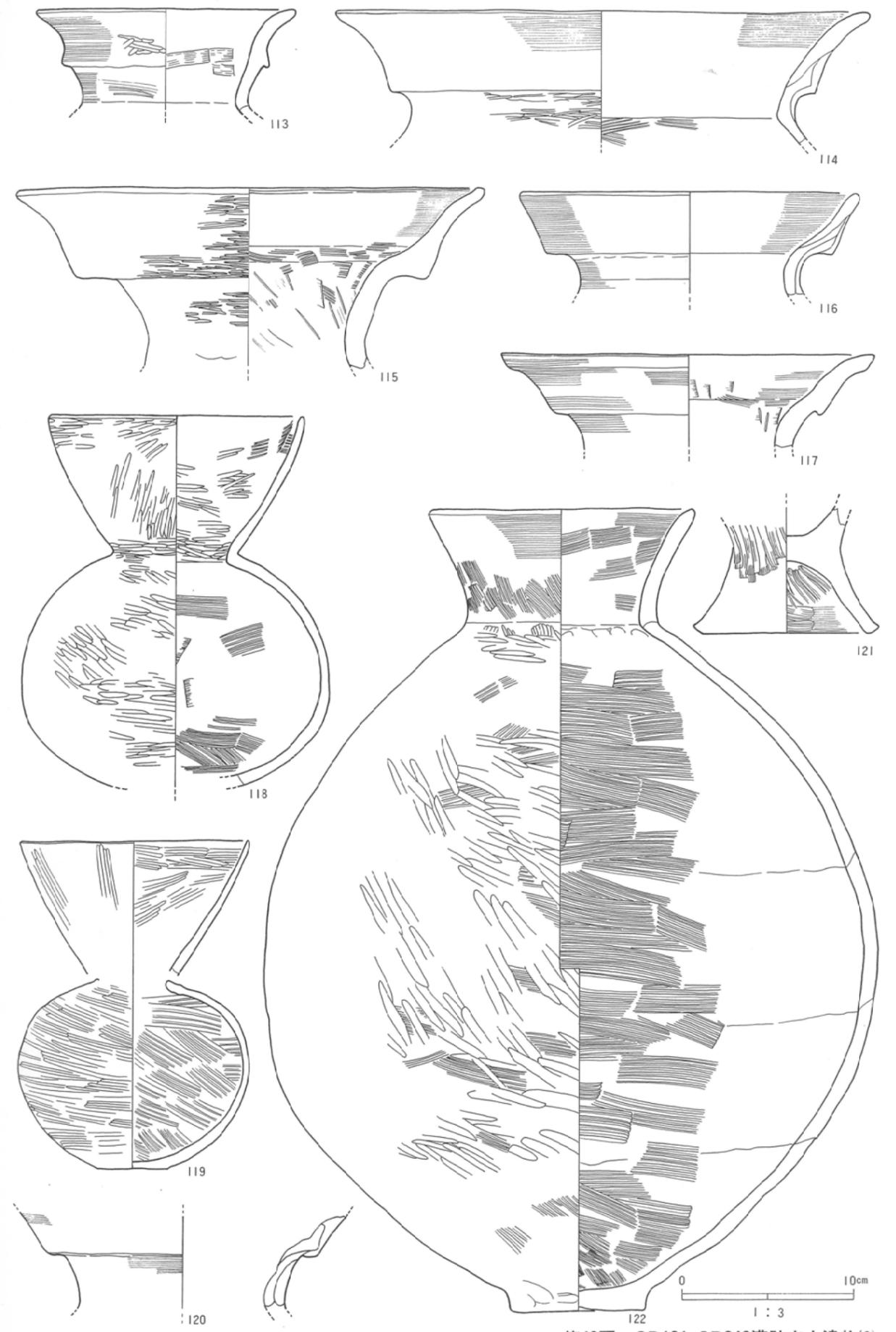
第39図 SD101溝跡上層土器出土状況(4)



第40図 SD101溝跡下層土器出土状況(5)



第41図 SD101・SD249溝跡出土遺物



第42図 SD101・SD249溝跡出土遺物(2)



第43図 SD101・SD249溝跡出土遺物(3)



第44図 SD101溝跡出土遺物(4)



第45図 SD101溝跡出土遺物(5)

6. 性格不明遺構

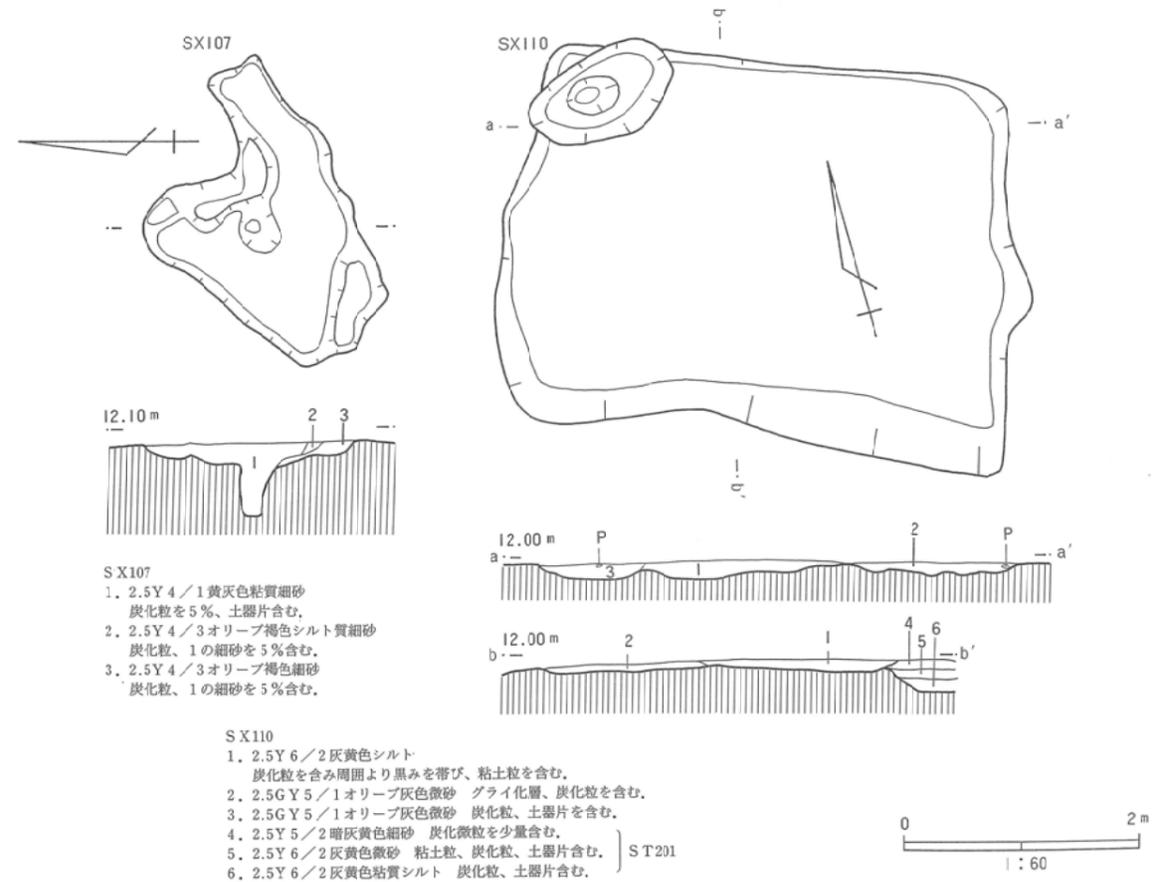
S X 107 S-8、SD100の南西に位置し、長軸1.78mの不整形を呈する。周囲は約0.1mと浅く、中心部分は0.42mと深く掘り込まれているため柱穴と考えられる。

S X 110 R-10において、SD202を切ってST201の南辺に位置する。長軸2.65m、短軸2.05m、深さ0.09mの不整形を呈する。断面・平面から、ST201・SD202より新しく、南側の壁はSD202の外壁とほぼ同じ位置・傾斜で立ち上がる。覆土は2層から成り土器片、炭化粒を含む。

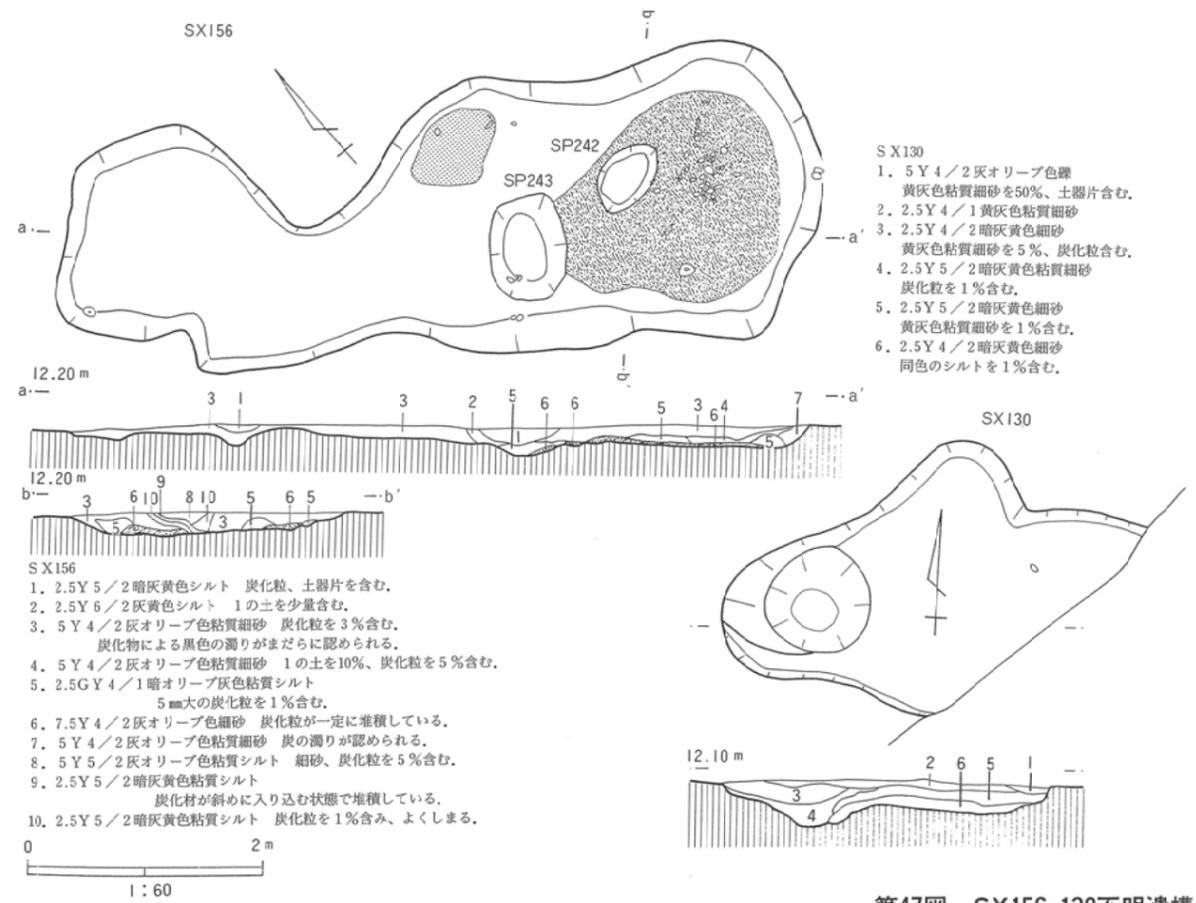
S X 156 P-10において、畝状遺構に切られて位置する。長軸4.1m、短軸1.57m、深さ0.13mの不整形を呈する。灰オリーブ色粘質細砂を基調とした覆土で、東側底面には炭が貼り付いて検出され、土器片も多く出土した。遺構内には、EP242、243が検出されたが、SX156より新しい。また、中程に黄灰色粘土塊が検出され、何らかのかたちで使用されたものと思われる。平面及び断面から、畝状遺構より古いことが判る。

その他のS 長軸0.6~5.25m、短軸0.4~2.82m、深さ0.09~0.42mと多様である。また、SX130Xのように溝とのつながりが推測される遺構も認められる。

遺物 破片資料がほとんどで復元できるものはなかった。SX107では面取り・つまみ出しの甕口縁部と鉢、甕の底部が出土している。SX110では面取り・つまみ出しの甕口縁部が出土している。SX156では端部を丸くおさめる器台口縁、有孔鉢口縁、朱彩を施した面取り・つまみ出しの甕口縁部などが出土している。



第46図 SX107・110不明遺構



第47図 SX156・130不明遺構

7. 河川跡

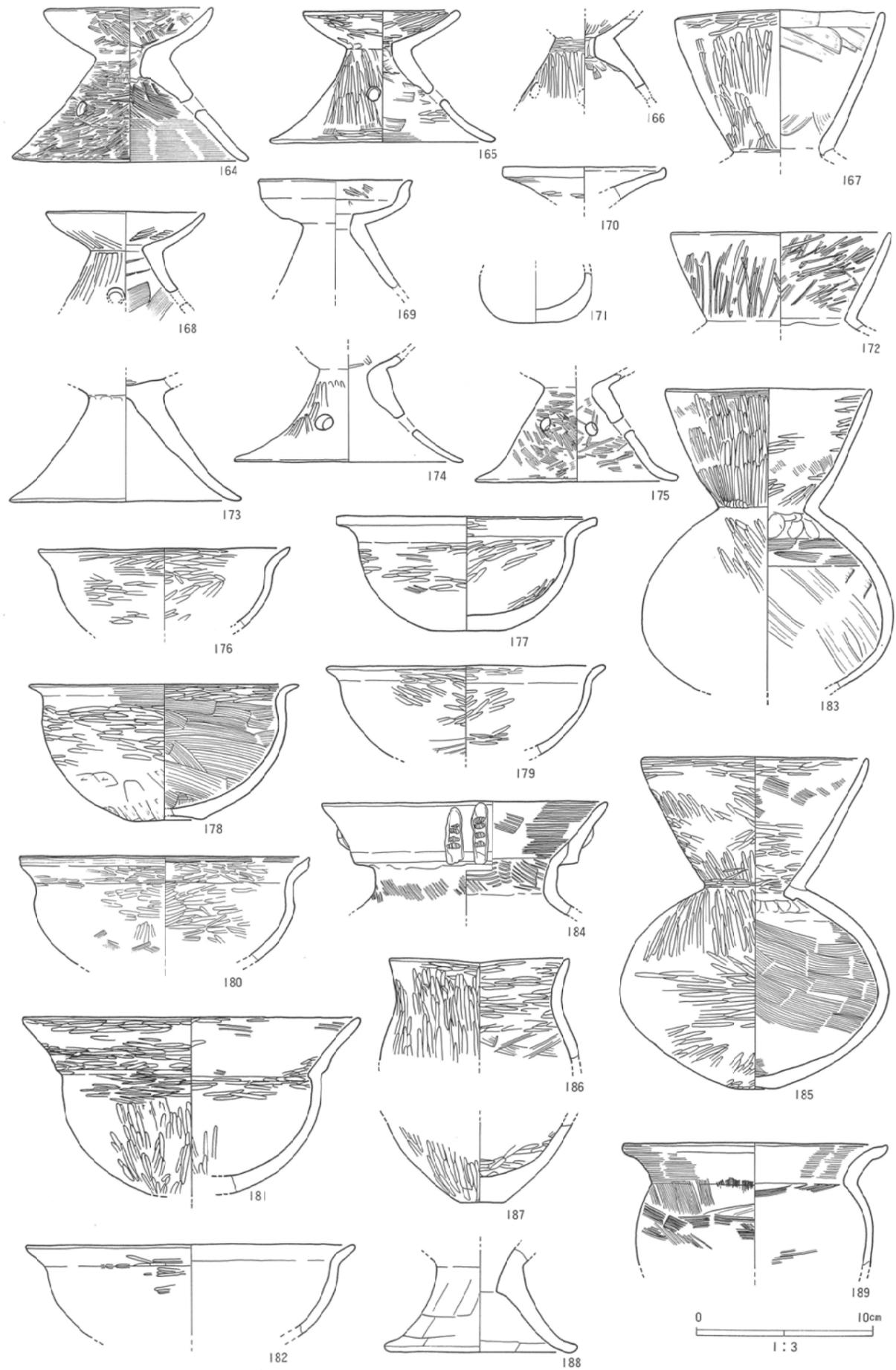
位置 D~N-6~12に位置し、A区のほぼ北西半分を占める。千安川と湯尻川の二河川に挟まれたこの地を川が何度も流路を変えて流れていたものと思われる。

平面形・規模 南西側は幅10~15m程で二条の川が確認され、北に行くにつれて交わり、次第に川幅が模 拡がる。北西岸は確認できなかった。E~H-6~12ではこの河川跡よりも新しいと考えられる小河川が南西から北西に渡って検出された。

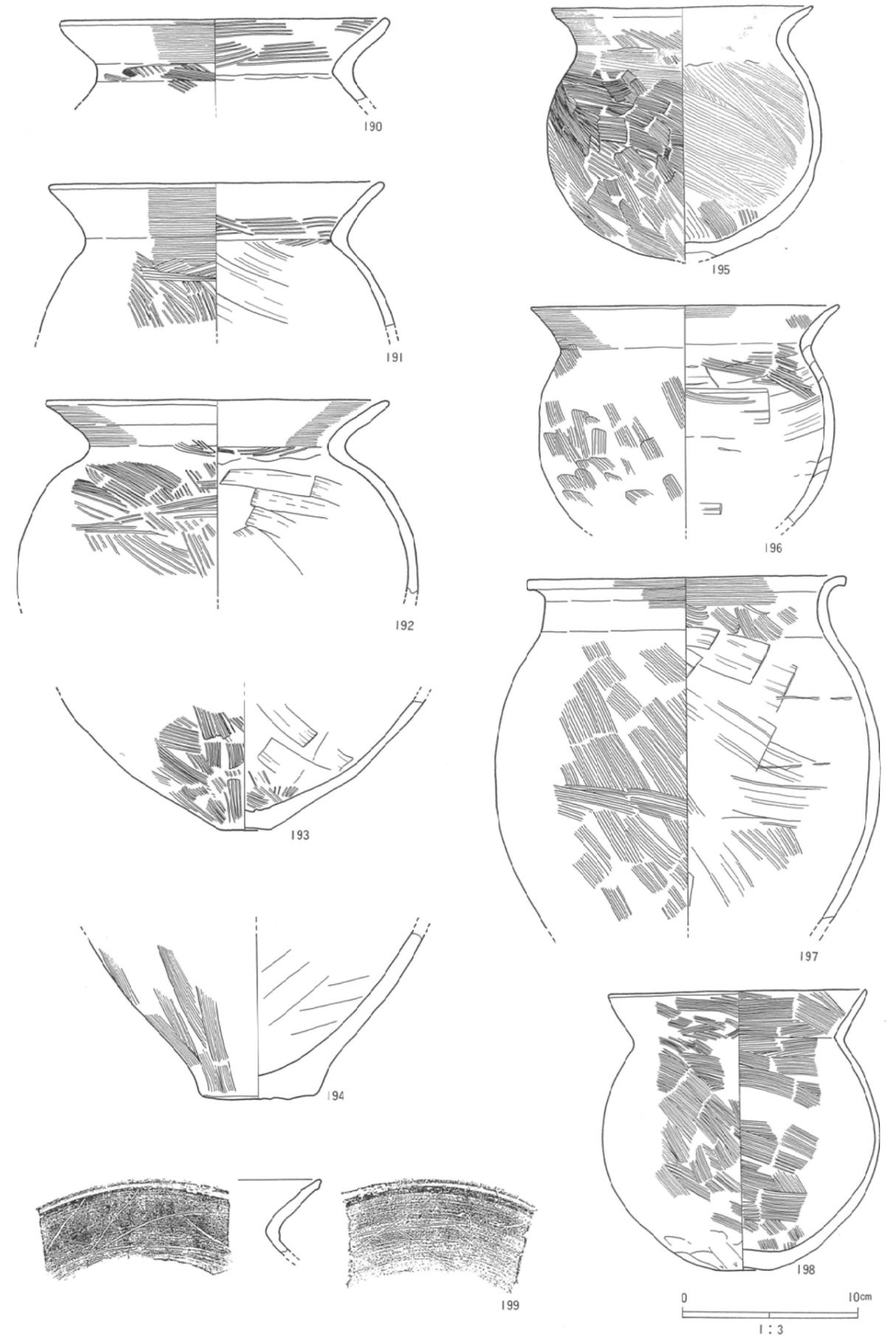
覆土・壁 長さ10mのトレンチを2基設定したが、その断面からかなり深い河川であったと推定される。覆土は、褐色~灰色を基調とした粘土と細砂の互層で、下層にいくにつれて有機物層が多くなる。西側の二条の川が交わる部分を0.7m程掘り下げると、西側の傾斜部分から多数の土器片が良好な状態で出土した。

遺物 器台は主に口縁部下端に稜をもつもの(169)とそうでないものに分けられる。鉢ではいずれも口縁部は外反するが、口縁端部を面取りするもの(177・180)としないものの2大別できる。直口壺は口縁部が短いもの(172)、体部下位に最大径の位置するもの(183)、中位に位置するもの(185)の3つに分けられる。184は壺である。複合口縁で円形浮文と棒状浮文が2対ずつ認められる。甕は内外面にミガキのある186、強く屈曲し内面に鋭い稜をもつもの(190~192・198・199)、つまみ出すもの(189・195)、「コ」字形をしたもの(197)が認められる。特に199は内外面にヘラ描きがあり、全体に薄手で作成はシャープである。





第51図 SG河川跡出土遺物(1)

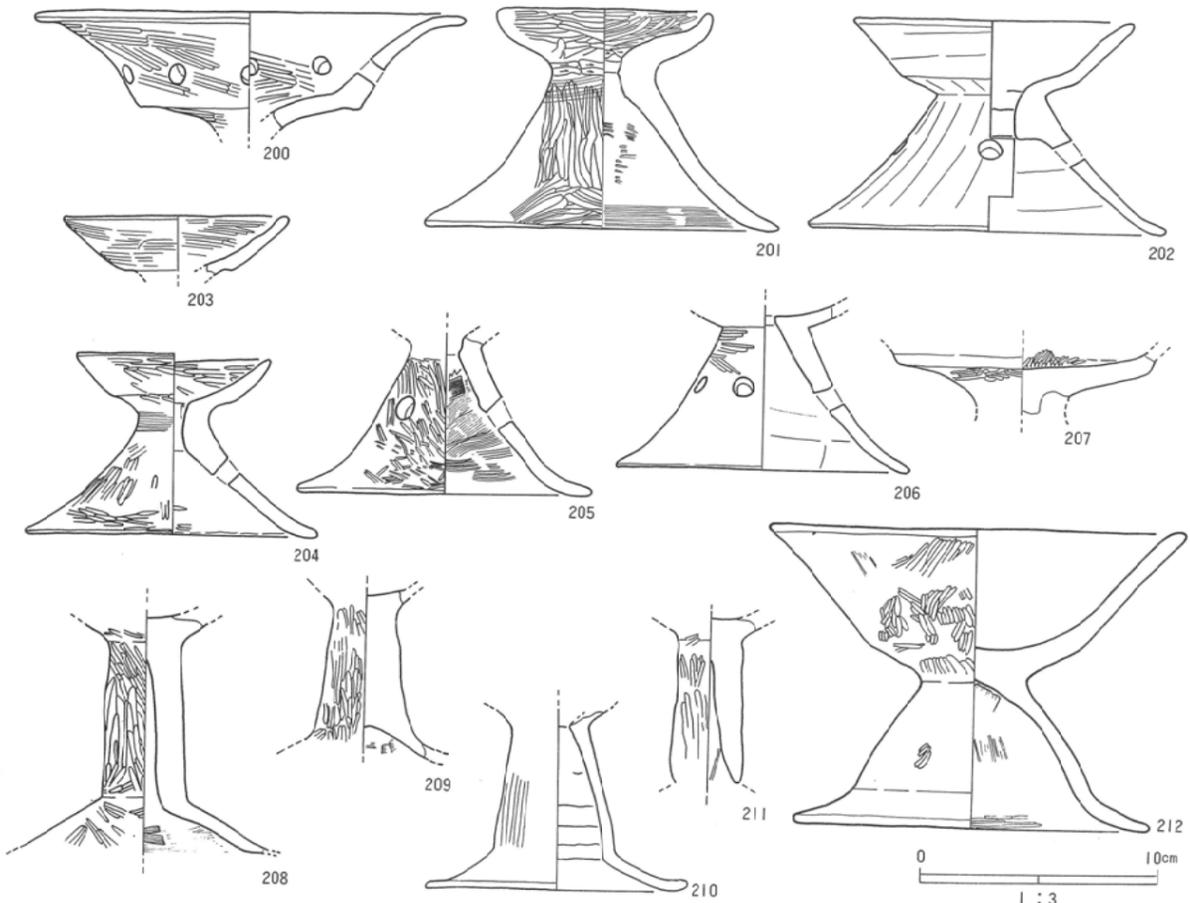


第52図 SG河川跡出土遺物(2)

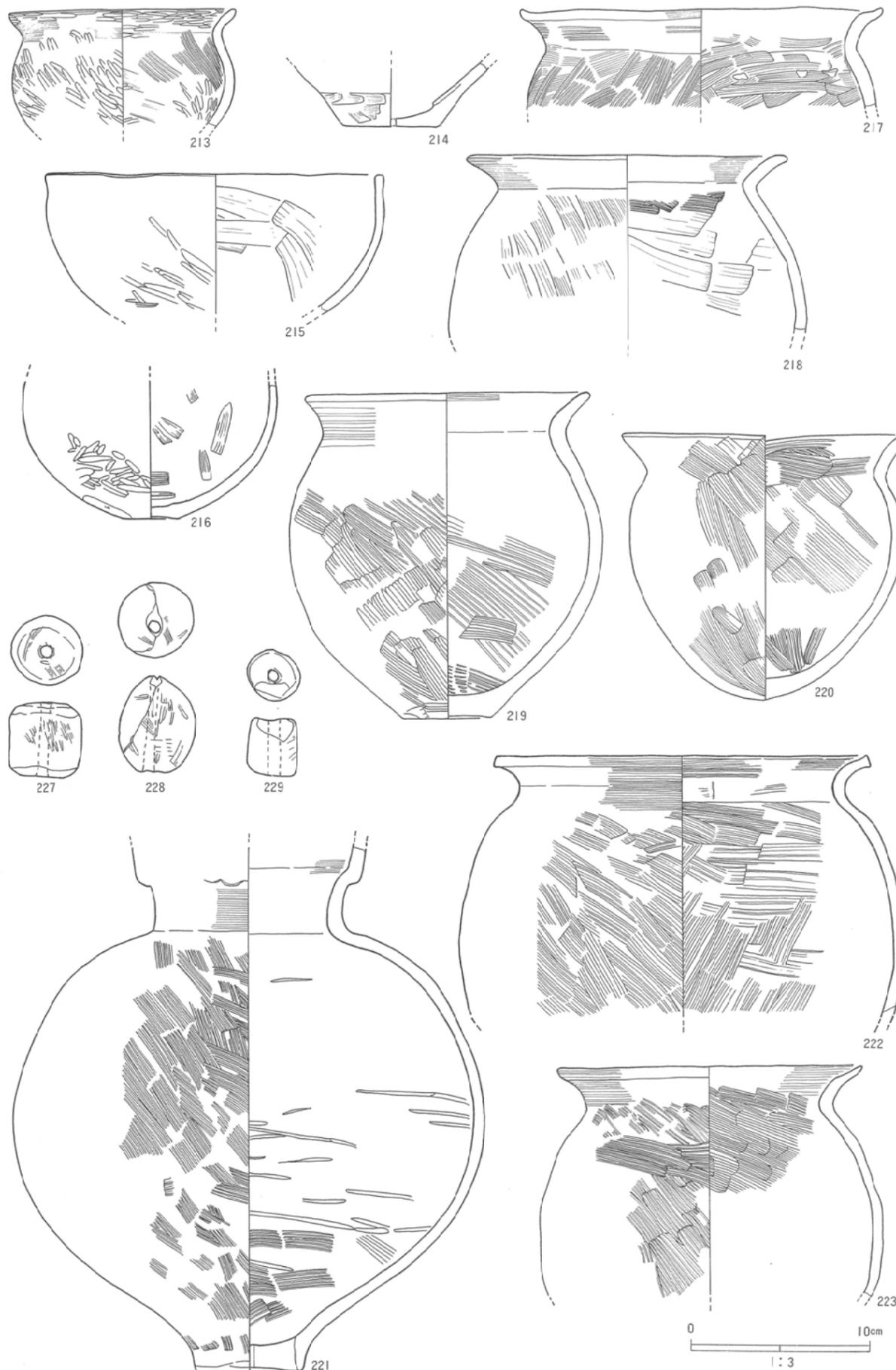
8. 鞍部・遺構外の遺物

B区は、遺構が集中する区域とほ場整備の際に瓦礫が埋められた攪乱部分と鞍部の3区域に分けることができる。この鞍部とは、周囲の地山より落ち込んでいる部分をさす。鞍部には、4ヶ所のトレンチを設定した結果、遺構が集中する微高部分から次第に落ち込む。覆土については、南側は黄色を基調とした細砂で炭化粒を多量に含み、北側は上層が灰色を基調とした粘質シルト、下層は灰黄褐色の砂から成り炭化粒を多量に含む。底面は砂層であるが、レベルが周囲より低いため水はけが悪くかなりの凹凸がある。居住区域には考えにくいところと思われたが、トレンチを設定したことによりST232等の遺構が確認された。また、遺物は南側・北側共に多量に出土した。

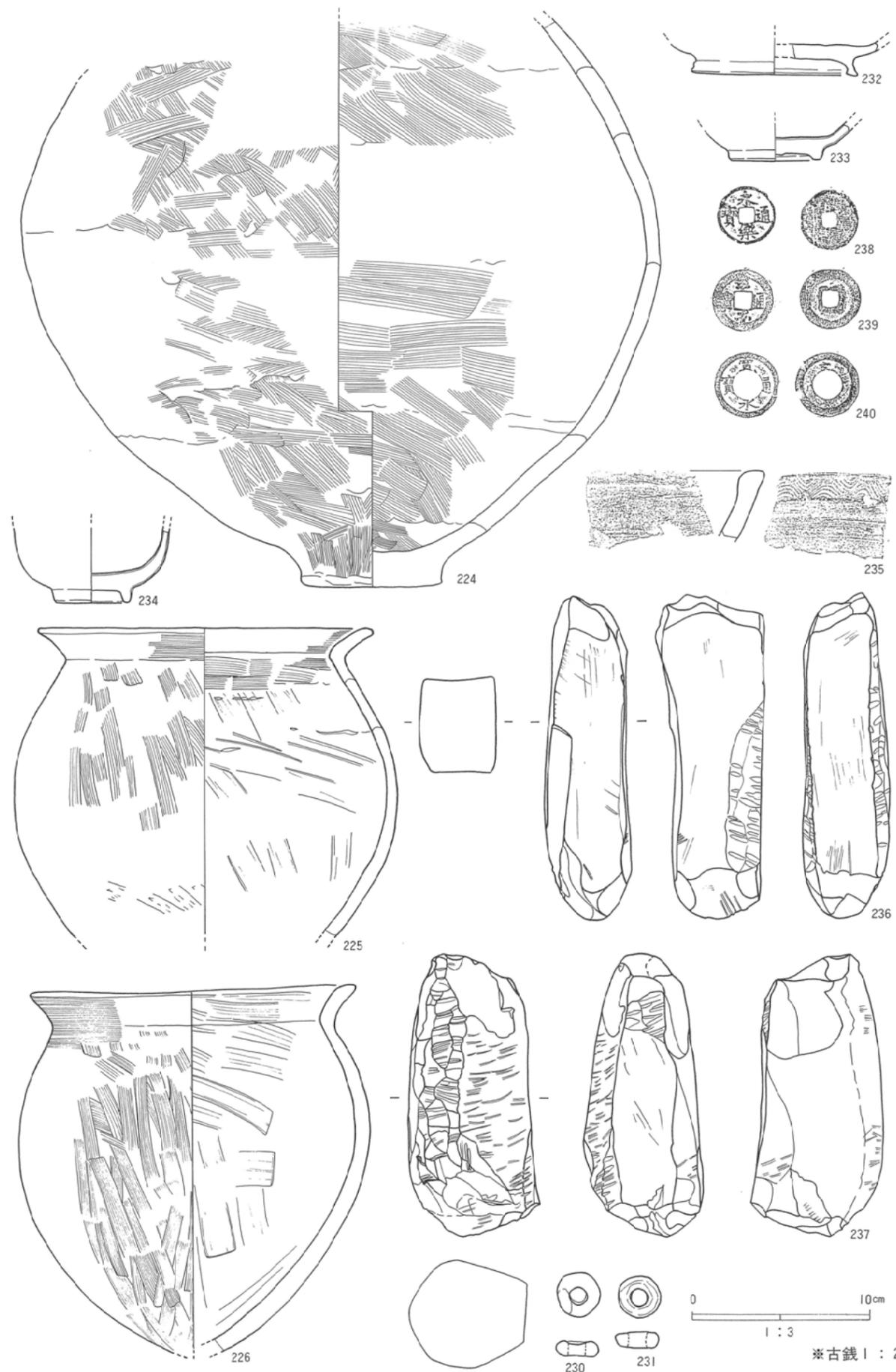
遺物 特殊器台(200)は口縁端部を外弯させ、下端に稜をもつ。器台(201~206)は厚手で口縁部をややつまみ上げるもの(201)、高坏(207~212)は中実のもの(209)、中空のもの(208・210・211)がある。212は脚部の裾が内弯気味に開くものである。有孔鉢(215)は外面にミガキが認められる。216は直口壺である。221・224は壺である。甕(213・217~223・225・226)には小型で外面にミガキがあるもの(213)、口縁部が外反して端部を丸くおさめるもの(218~220・225・226)、口縁端部をつまみ上げ、面取りをしているもの(217・222)がある。平底と丸底のものが認められる。須恵器の高台付坏(232)、青磁碗(233)、近世陶磁器(234)、珠洲系陶器溜鉢(235)、土製品(227~231)は土錘、古銭(238~240)、石製品(236・237)の砥石がある。



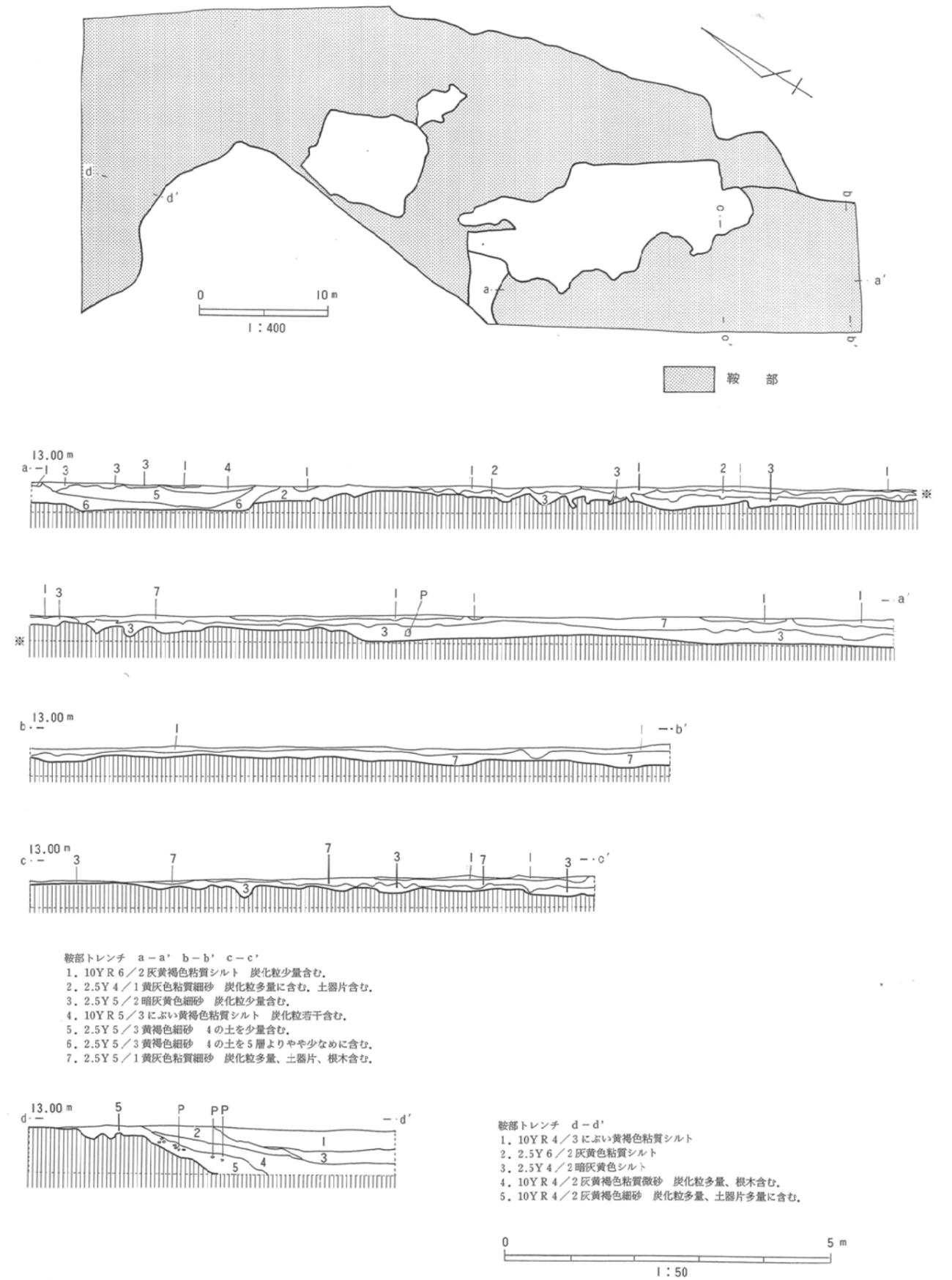
第53図 鞍部他出土遺物(1)



第54図 鞍部他出土遺物(2)



第55図 鞍部他出土遺物(3)



第56図 B区鞍部土層断面

表-2 遺構観察表(1)

《凡例》 長さの単位はmとし、()内の数値は、他遺構もしくは壁に切られる等して正確な数値を計測できないため、残存する部分を計測した数値である。

住居跡

遺構番号	グリッド	主軸方向	平面形態	規模 (m)				深 さ	挿図番号
				上 端		下 端			
				長軸	短軸	長軸	短軸		
ST103	R-8	N-30°-W	方形	5.44	5.36	5.36	5.28	0.16	第4図
ST150	P-8	N-33°-W	隅丸方形	8.16	7.60	7.52	6.56	0.08~0.24	第10図
ST181	K-6	N-30°-W	不整形	(5.23)	(5.00)	(5.14)	(4.95)	0.04~0.17	第20図
ST182	J-9	N-10°-W	隅丸方形	4.74	3.83	4.56	3.46	0.19	第22図
ST201	R-10	N-87°-W	楕円形	(7.83)	5.88	(7.65)	5.67	0.04~0.39	第14図
ST232	X-12	N-35°-W	隅丸方形	4.92	(4.12)	4.74	(4.04)	0.24	第23~24図

周溝

遺構番号	グリッド	規模 (m)				深 さ	挿図番号
		外 径	内 径	幅			
				上 端	下 端		
SD100	R-8	(12.94~14.00)	9.4~10.00	0.88~3.04	0.41~2.44	0.16~0.32	第4~8図
SD202	R-9	(12.21~18.20)	(10.70~13.98)	(1.10~1.60)	(0.37~1.42)	(0.10~0.40)	第14~17図
SD249	O~P-7~9	(14.40~16.41)	(11.64~13.12)	(1.20~3.74)	(0.61~4.10)	(0.20~0.24)	第10~12図

溝跡

遺構番号	グリッド	規模 (m)				深 さ	挿図番号
		上 端		下 端			
		長軸	幅	長軸	幅		
SD101	Q-9	(55.70)	(2.30~9.20)	(55.70)	(2.10~8.70)	(0.20~1.10)	第34~40図
SD128	Q-7	(6.03)	(1.06~2.02)	(7.16)	(0.46~1.32)	(0.22)	第33図
SD151	O-9	(10.60)	(0.30~0.70)	(6.80)	(0.16~0.22)	(0.14)	第32図
SD152	O-9	11.20	0.26~1.38	8.20	0.13~0.93	0.14	〃
SD153	P-9	(9.40)	(0.26~0.94)	(7.00)	(0.13~0.58)	(0.10)	〃
SD155	P-10	(5.80)	(0.34~1.56)	(4.30)	(0.13~1.60)	(0.10)	〃
SD157	P-10	5.00	0.32~0.70	3.54	0.42	0.12	〃
SD158	P-10	(8.96)	(0.48~0.88)	(4.40)	(0.30)	0.14	〃
SD183	J-9~10	7.00	0.55	5.85	0.31	0.13	第33図
SD198	H-10	2.75	0.65	2.63	0.35	0.05	
SD241	P-10~11	(8.13)	(2.33)	(8.06)	(1.80)	(0.49)	
SD245	O-10	(5.70)	(0.22~0.68)	(4.14)	(3.60)	(0.14)	第32図

表-3 遺構観察表(2)

土坑

遺構番号	グリッド	平面形態	規 模 (m)				深 さ	挿図番号
			上 端		下 端			
			長軸	短軸	長軸	短軸		
SK105	R-9	不整楕円形	2.67	1.39	2.47	1.23	0.20	第26図
SK111	P-11	不整楕円形	3.72	1.85	3.39	1.44	0.25	第26図
SK112	P-11	不整楕円形	1.00	0.80	0.90	0.60	0.15	
SK113	P-11	不整形	1.20	1.10	1.00	0.80	0.10	
SK125	Q-6	不整楕円形	2.00	(1.18)	0.95	(0.34)	(0.35)	第26図
SK127	Q-7	円形	1.10	1.09	0.95	0.90	0.16	
SK129	Q-7	長楕円形	2.68	0.84	2.49	0.67	0.18	第26図
SK132	Q-8	楕円形	1.85	(1.62)	1.60	(1.52)	(0.20)	第26図
SK133	O-6	楕円形	1.35	0.84	0.39	0.34	0.40	第26図
SK140	O-7	楕円形	0.94	0.40	0.90	0.30	0.70	
SK145	P-7	長楕円形	1.70	0.75	0.84	0.28	0.32	第27図
SK161	N-6	円形	0.70	0.60	0.40	0.30	0.10	
SK162	N-6	不整楕円形	1.30	0.70	1.00	0.40	0.20	
SK165	N-7	不整形	2.17	1.82	0.68	0.67	0.40	第27図
SK166	O-8	不整楕円形	1.20	0.40	1.00	0.30	0.05	
SK167	O-8	円形	0.50	0.20	0.40	0.13	0.03	
SK174	O~P-8~9	不整円形	1.53	1.34	1.13	1.03	0.27	第27図
SK175	Q-7	不整楕円形	1.82	1.44	1.50	1.22	0.30	第27図
SK176	K-7	不整楕円形	(1.70)	1.10	(1.47)	0.74	0.17	第27図
SK177	K-7	不整楕円形	1.46	(0.68)	1.15	(0.53)	0.22	第27図
SK178	J-6	不整楕円形	2.67	1.38	2.33	1.15	0.19	第28図
SK179	J-6	円形	1.00	0.90	0.80	0.30	0.20	
SK180	J-6	不整楕円形	0.60	0.40	0.50	0.20	0.14	
SK184	J-10	長楕円形	2.32	1.90	2.00	0.50	0.20	
SK185	J-10	不整楕円形	3.02	1.89	2.21	1.55	0.17	第28図
SK186	I-10	円形	0.80	0.60	0.50	0.10	0.10	
SK191	I-8	不整楕円形	0.70	0.50	0.60	0.20	0.10	
SK192	I-8	楕円形	1.00	0.80	0.70	0.30	0.08	
SK193	I-8	楕円形	0.90	0.60	0.70	0.20	0.07	
SK200	K-6	不整楕円形	1.23	0.85	0.85	0.49	0.17	第28図
SK203	U-11	不整形	2.27	1.30	1.93	0.68	0.33	第28図
SK206	U-11	円形	0.70	0.50	0.30	0.20	0.20	
SK213	U-11	楕円形	1.20	0.40	1.00	0.40	0.21	
SK215	U-11	楕円形	1.67	0.97	0.88	0.66	0.30	第28図
SK221	R-8	不整円形	1.20	0.90	0.70	0.50	0.20	
SK233	X-11	不整円形	1.16	1.25	0.89	0.70	0.30	第28図
SK235	X-12	不整円形	1.27	1.07	0.89	0.72	0.27	第28図

遺構内土坑・柱穴

遺構番号	グリッド	平面形態	規 模 (m)				深 さ	挿図番号
			上 端		下 端			
			長軸	短軸	長軸	短軸		
EK102	R-8	円形	0.21	0.12	0.12	0.07	0.04	第4図
EK262	X-11	楕円形	1.73	0.57	1.35	0.39	0.23	第24図
EP230	R-7	不整円形	0.90	0.80	0.70	0.60	0.17	第4図
EP231	R-8	不整円形	0.60	0.40	0.35	0.20	0.20	第4図
EP257	R-10	楕円形	0.11	0.09	0.08	0.05	0.16	第14図
EP258	R-10	不整楕円形	0.11	0.05	0.08	0.02	0.18	第14図
EP259	P-8	楕円形	0.70	0.66	0.42	0.38	0.17	第10図
EP260	P-8	楕円形	0.34	0.26	0.20	0.38	0.23	第10図
EP261	P-8	楕円形	0.40	0.36	0.14	0.04	0.18	第10図

表-4 遺構観察表(3)

柱穴

遺構番号	グリッド	平面形態	規模 (m)				深さ	挿図番号
			上端		下端			
			長軸	短軸	長軸	短軸		
S P114	P-11	円形	0.50	0.40	0.30	0.20	0.10	
S P118	R-7	不整楕円形	0.70	0.30	0.50	0.20	0.12	
S P119	R-7	円形	0.30	0.20	0.10	0.10	0.07	
S P120	R-7	楕円形	0.30	0.20	0.20	0.10	0.10	
S P122	S-6	円形	0.72	0.70	0.41	0.35	0.63	第30図
S P124	Q-6	円形	0.80	0.40	0.40	0.20	0.38	
S P136	O-6	不整楕円形	0.97	0.64	0.27	0.25	0.26	第30図
S P139	O-7	不整楕円形	1.41	0.63	0.52	0.27	0.42	第30図
S P143	O-7	不整楕円形	0.93	0.70	0.39	0.24	0.28	第30図
S P163	N-6	不整楕円形	1.00	0.40	0.80	0.20	0.10	
S P168	O-7	不整円形	0.65	0.49	0.41	0.21	0.20	第30図
S P205	U-11	不整円形	0.43	0.38	0.24	0.13	0.25	第30図
S P207	T-11	円形	0.58	0.57	0.37	0.36	0.07	第30図
S P209	U-11	長楕円形	1.30	0.37	1.16	0.19	0.20	第31図
S P210	U-11	円形	0.40	0.30	0.30	0.20	0.10	
S P211	U-11	不整円形	0.61	0.50	0.33	0.41	0.43	第31図
S P212	U-11	不整楕円形	0.45	0.25	0.33	0.15	0.20	
S P214	U-11	円形	0.81	0.64	0.56	0.14	0.10	第31図
S P216	U-11	円形	0.40	0.40	0.30	0.20	0.16	
S P217	U-11	楕円形	0.70	0.50	0.20	0.10	0.20	
S P218	V-11	楕円形	0.30	0.20	0.20	0.10	0.06	
S P219	R-8	長楕円形	1.26	0.43	1.01	0.25	0.11	第31図
S P222	U-11	円形	0.60	0.50	0.15	0.10	0.26	
S P223	U-10	不整楕円形	0.90	0.84	0.57	0.50	0.23	
S P224	V-10	不整楕円形	(0.50)	0.40	(0.32)	0.30	0.13	
S P226	W-10	楕円形	0.40	0.30	0.30	0.20	0.02	
S P229	R-8	不整円形	0.65	0.50	0.48	0.43	0.14	
S P236	W-11	円形	0.30	0.30	0.20	0.20	0.20	
S P237	W-12	不整楕円形	0.40	0.20	0.20	0.20	0.20	
S P242	P-10	楕円形	0.45	0.28	0.31	0.20	0.13	
S P243	P-10	楕円形	0.58	0.43	0.39	0.22	0.10	
S P247	P-9	不整円形	0.35	0.35	0.27	0.25	0.76	第31図
S P248	R-10	楕円形	0.32	0.17	0.25	0.11	0.16	第31図

不明遺構

遺構番号	グリッド	平面形態	規模 (m)				深さ	挿図番号
			上端		下端			
			長軸	短軸	長軸	短軸		
S X104	R-7	不整形	4.00	1.20	3.80	1.00	0.23	
S X107	S-8	不整形	1.78	1.20	1.63	0.99	0.42	第46図
S X110	R-10	不整方形	2.65	2.05	(2.50)	1.78	0.09	第46図
S X126	Q-6~7	不整形	4.80	2.30	2.20	0.23	0.23	
S X130	Q-8	不整形	(1.85)	(1.56)	(1.85)	(1.45)	0.26	第47図
S X141	O-7	不整形	2.50	0.60	2.30	0.30	0.10	
S X154	P-9	不整形	(4.80)	(2.50)	(4.56)	(1.03)	0.10	
S X156	P-10	不整形	4.10	1.57	3.80	1.23	0.13	第47図
S X164	N-7	不整形	1.50	1.10	1.30	0.90	0.20	
S X172	O-8	楕円形	(0.60)	0.40	(0.50)	0.30	(0.10)	
S X196	I-9	不整楕円形	2.80	1.30	2.60	1.10	0.70	
S X234	X-11	長楕円形	5.25	1.64	4.55	1.17	0.30	
S X238	Q-9	不整形	(0.80)	0.25	(0.75)	0.20	0.36	
S X244	O-10	不整形	2.85	2.28	2.75	0.78	0.01	
S X246	Q-9	不整形	(1.13)	0.33	1.11	0.27	1.05	

表-5 遺物観察表(1)

凡例

- 1 法量はmm単位で示した。口径について図上復元した推定値をも含む。
()内は遺物の残存状況を示すため、残存する最大値を示している。
残存しない部位、及び底部が丸底で計測値が出せない場合は - で表した。
- 2 胎土欄の粗は粗砂混入、細は細砂混入、緻は緻密の略である。
- 3 調整は主なものを記し、調整順序の解るものについて → で示した。
- 4 備考欄にはその他の観察事項を記した。

遺物番号	RP番号	出土地点	種別	器種	法量			胎土	調整		備考	図版番号
					口径	底径	器高		外面	内面		
1	214	SD100	土師器	器台	91	-	(66)	細	ミガキ	ケズリ・ミガキ	2孔一対で4孔カ	2
2	202	SD100	土師器	高坏	-	80	(52)	細	ミガキ	ナデ	朱彩 小型精製土器	4
3	122	SD100・R-8	土師器	壺	100	20	72	細	ミガキ	ケズリ・ミガキ	埴	11
4	204	SD100	土師器	高坏	-	-	(54)	細	ハケメ			8
5	215	SD100	土師器	器台	105	-	(32)	粗	ミガキ		内面調整不明	6
6	239	SD100	土師器	器台	96	-	(58)	粗			外内面調整不明	1
7	66	SD100	土師器	鉢	203	57	140	粗	ケズリ・ハケメ・ナデ	ナデ・ヘラナデ	平底くぼみあり	20
8	206	SD100	土師器	鉢	-	70	93	細	ミガキ	ミガキ・ナデ	平底くぼみ若干あり	15
9	61	SD100	土師器	鉢	170	-	(72)	細	ミガキ	ミガキ	外面朱彩	14
10	122	SD100・R-8	土師器	鉢	118	-	(45)	細	ミガキ	ヘラナデ	外面朱彩 内面摩滅	10
11	220	SD100	土師器	鉢	112	53	61	細	ナデ	ナデ	平底くぼみあり	9
12	209	SD100	土師器	鉢	-	(35)	(63)	細	ハケメ・ケズリ	ハケメ	底部に単孔	21-1
13	203	SD100	土師器	甕	154	-	(59)	粗	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ		17
14	190・201	SD100	土師器	甕	154	-	(32)	細	ナデ	ナデ・ハケメ	外面煤付着	73-2
15	122	SD100・R-8	土師器	甕	158	-	(47)	細	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	外面朱彩・内面もカ 精製土器の胎土	19
16	190	SD100	土師器	甕	179	-	(27)	粗	ナデ	ナデ		73-1
17	128	SD100	土師器	甕	186	-	(78)	粗	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ		18
18	120	SD100	土師器	壺	140	(80)	385	粗	ナデ・ハケメ・ミガキ	ナデ・ハケメ		29
19	240	SD100	土師器	甕	161	38	218	粗	ケズリ・ナデ・ハケメ	ケズリ・ナデ	粗製 ケズリ痕残る	22
20	201	SD100	土師器	甕	166	-	(163)	細	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	煤付着	13
21	241	SD100	土師器	鉢	-	(35)	(132)	粗	ハケメ	ハケメ	底部に単孔	16
22	359	ST150	土師器	壺	93	24	72	細	ケズリ・ミガキ	ミガキ	埴 ほぼ完形	12
23	224	ST150	土師器	鉢	116	45	76	緻	ハケメ・ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	ほぼ完形	26
24	225	ST150	土師器	鉢	125	26	73	細	ケズリ・ミガキ	ケズリ・ミガキ	完形	25
25		ST150	土師器	鉢カ	-	48	(32)	粗	ケズリ	ハケメ		28
26	311	ST150	土師器	鉢	-	35	(36)	細	ミガキ	ミガキ	朱彩カ	-
27	181	SD249	土師器	鉢	104	(100)	152	緻	ミガキ	ハケメ	台付鉢	24
28		ST150・EK254	土師器	鉢	152	-	(57)	粗	ケズリ・ナデ	ハケメ・ナデ		73-4
29		ST150	土師器	壺	-	42	(72)	緻	ミガキ	ヘラナデ・ハケメ	直口	46
30	258	SD202	土師器	器台	-	(120)	(44)	細	ミガキ		脚部に6孔 上下不揃	35
31	261	SD202	土師器	鉢	84	67	18	粗	ミガキ	ミガキ		36
32	258	SD202・ST201	土師器	高坏	-	190	(87)	緻	ミガキ	ハケメ・ミガキ	脚部に3孔 上下不揃	34
33	362	ST201	土師器	壺	140	-	(63)	細	ハケメ→ヘラナデ	ハケメ→ヘラナデ	埴	44
34	263	SD202	土師器	鉢	126	29	75	細	ナデ・ハケメ・ミガキ	ヘラナデ		38
35		SD202・R-9	土師器	壺	120	-	(58)	細	ミガキ	ミガキ	埴	39
36	274	SD202	土師器	鉢	162	-	(64)	細	ハケメ・ミガキ	ミガキ		40
37	254	SD202	土師器	鉢	120	-	73	細	ミガキ	ミガキ	粗いミガキ 完形	41
38	269	SD202	土師器	壺	110	25	73	細	ハケメ・ミガキ	ミガキ	埴	43
39	271・272	SD202・ST201	土師器	鉢	208	-	91	細	ケズリ・ハケメ・ナデ	ハケメ・ミガキ・ナデ		37
40		ST201	土師器	鉢	-	(32)	(32)	粗	ケズリ	ハケメ	底部に単孔	27

表-6 遺物観察表(2)

遺物番号	RP番号	出土地点	種別	器種	法 量			胎土	調 整		備 考	図版番号
					口径	底径	器高		外 面	内 面		
41	400	SD202・ST201	土師器	壺	165	-	(65)	細	ハケメ・ナデ	ハケメ		48
42	262	SD202	土師器	不明	-	20	(97)	細	ハケメ	ハケメ	臍カ	42
43	273	SD202	土師器	壺	-	-	(79)	細	ミガキ	ハケメ	直口	47
44	259	SD202	土師器	壺	188	-	(75)	細	ケズリ・ナデ	ヘラナデ・ハケメ		50
45	283	SD202	土師器	壺	260	-	(68)	細	ナデ・ハケメ・ミガキ	ハケメ・ミガキ	退化した複合口縁カ	57
46	361	ST201	土師器	鉢	236	68	148	粗	ナデ・ハケメ	ハケメ		49
47	281	ST201	土師器	甕	184	-	(96)	粗	ハケメ・ナデ	ハケメ		52
48	265	SD202	土師器	甕	192	-	(58)	粗	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		51
49	258・260	SD202	土師器	甕	190	-	(83)	粗	ハケメ・ナデ	ハケメ	内面 煤がしみ込む	54
50	267	SD202	土師器	甕	194	-	(172)	細	ハケメ・ナデ	ハケメ・ヘラナデ		59
51	259	SD202	土師器	壺	-	60	(30)	粗	ナデ	ヘラナデ		56
52	56	SD202(上層)	土師器	甕	186	-	(228)	細	ケズリ・ハケメ・ナデ	ハケメ・ヘラナデ		58
53	350	ST181	土師器	器台	-	(136)	(45)	細	ミガキ	ヘラナデ・ミガキ	脚部に1孔確認	65
54	324	ST181	土師器	壺	142	-	(53)	粗	ハケメ・ミガキ・ナデ	ハケメ・ミガキ・ナデ		62
55	351	ST181	土師器	鉢	-	32	(74)	粗	ケズリ・ミガキ	ミガキ	底部に単孔	31
56		ST181	土師器	鉢	75	(42)	68	細	ハケメ・ナデ	ヘラナデ		61
57	323	ST181	土師器	甕	-	-	(145)	細	ハケメ	ハケメ		60
58	323	ST181	土師器	甕	76	-	(107)	細	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		71
60	232	ST182	土師器	壺	164	-	(39)	細	ミガキ	ハケメ・ミガキ		23-1
61	234	ST182	土師器	甕	166	-	(116)	粗	ハケメ・ナデ		内面不明	66
62	353	ST232	土師器	器台	82	(150)	(80)	緻	ミガキ	ハケメ・ミガキ・ナデ		69
63	294	ST232	土師器	鉢	157	15	130	粗	ハケメ・ナデ	ハケメ	底部に単孔 ほぼ完形	79
64	295	ST232	土師器	甕	160	-	135	粗	ハケメ	ハケメ・ナデ	外面炭化物付着	72
65	288	ST232	土師器	甕	-	-	(185)	粗	ハケメ・ナデ	ハケメ		75
66	295	ST232	土師器	壺	-	52	(144)	粗	ハケメ	ハケメ		67
67	296	ST232	土師器	甕	202	(35)	(250)	粗	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		78
68		ST232	土師器	壺	118	-	(138)	細	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ・ヨコナデ		70
69	293	ST232	土師器	壺	-	(50)	(105)	粗	ハケメ	ハケメ	No68と同一個体カ	64
70	191	ST232	土師器	甕	174	23	237	細	ケズリ・ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		82
71	194	SK111	土師器	甕	210	35	183	粗	ハケメ・ナデ	ヘラナデ・ナデ		89
72	81	SK203	土師器	甕	178	-	272	粗	ハケメ・ナデ	ヘラナデ・ハケメ		88
73	329	SK176	土師器	甕	185	-	(148)	細	ハケメ・ナデ	ハケメ	外面頸部貼り付け痕	77
74	195	SK111	土師器	器台	-	134	(62)	粗	ミガキ	ミガキ	脚内面ナデ・4孔	68
75		SX128	土師器	高坏	158	-	(51)	細	ハケメ・ミガキ・ナデ	ハケメ		85
76	193	SK111	土師器	鉢	171	38	82	細	ケズリ・ミガキ	ミガキ	底部 ケズリ	76
77		SK229	土師器	鉢	122	-	(49)	細	ハケメ・ナデ	ヘラナデ	口縁部に指頭圧痕	63
78	198	SK111	土師器	鉢	-	34	(66)	粗	ケズリ・ミガキ	ヘラナデ・ミガキ	底部 ケズリ	-
79	332	SX156	土師器	鉢	-	57	(58)	粗	ミガキ	ヘラナデ		86
80	199	SK111	土師器	甕	198	-	(81)	粗	ハケメ・ナデ	ハケメ・ヘラナデ		-
81		SK200	土師器	鉢	-	57	(31)	粗	ハケメ	ハケメ	底部 ハケメ	-
82	193	SK111	土師器	壺	196	-	(74)	粗		ハケメ・ナデ→ミガキ	外面 不明	74
83	191	SK111	土師器	甕	183	25	228	細	ケズリ・ハケメ・ナデ	ヘラナデ・ナデ	ほぼ完形	90
84	194	SK111	土師器	甕	216	32	278	粗	ハケメ・ナデ	ハケメ		87
85	194	SK111	土師器	甕	186	32	215	細	ハケメ・ナデ	ヘラナデ・ハケメ		83
86	126	SD101	土師器	器台	-	(140)	(102)	細	ミガキ	ミガキ	脚部4孔・器受部20単位	98
87	174	SD101・P-10	土師器	器台	-	-	(20)	細			器受部孔10単位カ	95
88	24	SD101・Q-8	土師器	器台	226	-	(37)	粗	ナデ	ナデ	器受部に2孔確認	106
89		SD101・Q-9	土師器	器台	-	-	(35)	粗	ミガキ	ミガキ		96
90	150	SD101	土師器	器台	-	(130)	(75)	粗	ミガキ	ミガキ・ヘラナデ	脚部に孔3単位	93

表-7 遺物観察表(3)

遺物番号	RP番号	出土地点	種別	器種	法 量			胎土	調 整		備 考	図版番号
					口径	底径	器高		外 面	内 面		
91	79	SD101	土師器	器台	90	112	140	粗	ハケメ・ミガキ	ハケメ・ミガキ・ナデ		102
92		SD101・Q-9	土師器	器台	100	(140)	(82)	細	ケズリ・ミガキ	ミガキ・ハケメ・ナデ		103
93	170・221	SD101	土師器	器台	-	-	(44)	細	ミガキ	ナデ	外面 朱彩	3
94	150	SD101	土師器	器台	-	128	(74)	細	ミガキ	ミガキ・ハケメ	外面 朱彩	94
95	118	SD101・Q-9	土師器	器台	-	(128)	(61)	緻	ハケメ・ミガキ	ヘラナデ・ハケメ	脚部に孔4単位	91
96		SD101・Q-9	土師器	器台	-	158	(90)	粗	ミガキ	ハケメ・ナデ	脚部に孔4単位カ	97
97	149	SD101・Q-9	土師器	高坏	141	93	94	緻	ケズリ・ミガキ	ミガキ	朱彩	122
98	137	SD101	土師器	高坏	-	(108)	(175)	細	ハケメ	ハケメ		-
99	301	SD101	土師器	高坏	-	(98)	(35)	粗		ミガキ・ナデ	外面 朱彩	104
100	58	SD101	土師器	高坏	196	-	(56)	粗	ハケメ・ミガキ	ハケメ・ミガキ		101
101		SD101・P-8	土師器	高坏	-	(219)	(35)	細	ナデ	ハケメ・ナデ	外面 朱彩	-
102	125	SD101	土師器	鉢	130	35	76	細	ケズリ→ミガキ→ナデ	ミガキ	完形	108
103	309	SD249	土師器	鉢	150	-	70	細	ミガキ	ミガキ	内外面に煤付着	210
104		SD101・Q-9	土師器	鉢	148	-	70	緻	ミガキ	ミガキ		114
105	117	SD101・Q-9	土師器	壺	91	42	57	細	ケズリ・ミガキ	ミガキ	坩 完形	107
106	147	SD101	土師器	壺	120	20	54	粗	ハケメ・ミガキ	ハケメ・ミガキ	坩	109
107		SD101・Q-9	土師器	鉢	158	-	(75)	細	ミガキ	ミガキ	外面に煤付着	-
108	71	SD101・Q-9	土師器	鉢	138	-	(52)	粗	ケズリ・ミガキ	ミガキ		113
109	299	SD101	土師器	鉢	102	34	49	粗	ハケメ・ナデ	ヘラナデ	完形	110
110	178	SD101・Q-10	土師器	壺	-	33	(60)	緻	ケズリ・ミガキ		坩	119
111	54	SD101	土師器	壺	90	-	(90)	細	ミガキ	ミガキ	直口	116
112	147	SD101	土師器	壺	-	-	(125)	細	ミガキ	ハケメ・ミガキ		129
113	115	SD101・Q-9	土師器	壺	152	-	(57)	細	ハケメ・ミガキ・ナデ	ハケメ		-
114	142	SD101・Q-9	土師器	壺	314	-	(73)	細	ケズリ・ミガキ・ナデ	ハケメ・ナデ		128
115	308	SD101	土師器	壺	275	-	(99)	粗	ミガキ	ハケメ・ナデ		126
116	116	SD101・Q-9	土師器	壺	198	-	(57)	粗	ナデ	ナデ		-
117	160	SD101・Q-9	土師器	壺	218	-	(53)	粗	ナデ	ハケメ・ナデ		130
118	186	SD249	土師器	壺	150	-	(215)	細	ハケメ・ミガキ	ハケメ・ミガキ	直口 外面に煤付着	115
119		SD101・Q-9	土師器	壺	134	40	-	細	ミガキ	ハケメ	直口 外面と口縁内面朱彩	105
120	164	SD101	土師器	壺	-	-	(52)	細	ナデ		疑似口縁露出	112
121	157	SD101・Q-9	土師器	甕	-	108	(62)	粗	ハケメ	ハケメ	台付甕	155
122	144	SD101・Q-9	土師器	壺	155	79	465	細	ハケメ・ミガキ・ナデ	ハケメ・ナデ	ほぼ完形	140
123	93	SD101	土師器	甕	170	-	(42)	緻	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ		-
124	146	SD249	土師器	甕	165	-	(44)	緻	ナデ・ハケメ	ヘラナデ・ナデ		144
125		SD101・Q-9	土師器	甕	168	-	(65)	細	ナデ・ハケメ	ヘラナデ・ナデ	胎土良好粗砂少ない	145
126	51	SD101・Q-10	土師器	甕	182	-	(88)	粗	ナデ・ハケメ		内面調整不明 煤付着	152
127		SD244	土師器	甕	173	-	(147)	粗	ナデ・ハケメ			156
128	158	SD101・Q-9	土師器	甕	149	-	(149)	粗	ハケメ・ナデ	ハケメ・ミガキ・ナデ		160
129	174	SD101	土師器	壺	-	70	(104)	粗	ハケメ	ハケメ・ナデ		136
130	153	SD101・Q-9	土師器	壺	-	74	(84)	粗	ハケメ・ナデ	ハケメ	底部ハケメ 外部煤付着	133
131	62	SD101	土師器	壺	-	70	(89)	緻	ハケメ	ハケメ		127
132		SD101・R-11	土師器	甕	142	-	(101)	細	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	口縁部内側につまむ 布留糸	163-1
133	169	SD101・Q-8	土師器	甕	190	-	(167)	細	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		124
134		SD101・Q-9	土師器	壺	-	64	(35)	粗	ハケメ	ハケメ		139-2
135		SD101・Q-9	土師器	甕	-	31	(34)	粗	ハケメ	ハケメ		158-2
136		SD101・Q-9	土師器	壺	-	74	(55)	粗	ヘラナデ・ハケメ	ハケメ		139-1
137		SD101・Q-9	土師器	甕	-	36	(40)	粗	ハケメ	ハケメ		158-1
138	124	SD101	土師器	甕	256	-	(104)	細	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	胎土良好	142
139	155	SD101・Q-9	土師器	甕	202	-	(142)	粗	ナデ・ハケメ	ヘラナデ・ハケメ		153
140	142	SD101・Q-9	土師器	甕	254	-	(162)	細	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ		159

表-8 遺物観察表(4)

遺物番号	RP番号	出土地点	種別	器種	法 量			胎土	調 整		備 考	図版番号
					口径	底径	器高		外 面	内 面		
141	36	SD101・J-10	土師器	甕	176	44	290	粗	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ		232
142	54	SD101	土師器	甕	160	36	216	細	ハケメ	ハケメ	外面 帯状に煤付着	151
143	165	SD101	土師器	甕	-	-	(232)	粗	ハケメ・ナデ	ハケメ・ヘラナデ		148
144	173	SD101	土師器	甕	184	-	(215)	細	ハケメ・ナデ	ハケメ・ヘラナデ		125
145	142	SD101・Q-9	土師器	甕	334	-	(67)	粗	ハケメ・ナデ	ケズリ・ナデ		143
146	156	SD101	土師器	甕	216	-	(110)	粗	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		141
147	90・104	SD101・Q-10	土師器	甕	120	-	(72)	粗	ケズリ・ヘラナデ	ヘラナデ・ハケメ		137
148	176	SD101・Q-10	土師器	甕	234	-	(45)	細	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		146
149	142	SD101	土師器	甕	188	-	(74)	粗	ナデ・ハケメ	ハケメ		138
150	167	SD101	土師器	甕	114	-	(107)	細	ミガキ	ヘラナデ		147
151		SD241	土師器	甕	-	(40)	(80)	粗	ケズリ・ハケメ	ハケメ		154
152	148	Q-9	土師器	甕	186	28	130	粗	ハケメ・ナデ	ハケメ・ヘラナデ		131
153		SD101・P-8	土師器	甕	180	-	(90)	粗	ハケメ	ハケメ	口縁部に指頭圧痕	30
154	140	SD101	土師器	鉢	-	15	(48)	粗	ヘラナデ・ミガキ	ヘラナデ	底部に単孔	111
155	183	SD249	土師器	甕	-	23	(54)	粗	ケズリ	ハケメ		-
156	303	SD101	土師器	甕	-	38	(56)	粗	ケズリ・ハケメ	ハケメ	底部 ケズリ→ハケメ	-
157	29	SD101	土師器	甕	-	26	(114)	粗	ケズリ・ハケメ	ハケメ	底部 ケズリ→ハケメ	134
158		SD101・Q-9	土師器	鉢	-	36	(21)	細	ケズリ	ミガキ	底部に単孔	-
159		SD101・Q-9	土師器	鉢	-	64	(25)	粗	ナデ	ハケメ	底部に単孔	-
160		SD101・Q-9	土師器	鉢	-	-	(28)	細	ハケメ		底部に単孔	-
161		SD244	土師器	鉢	-	32	(27)	細	ケズリ	ヘラナデ	底部に単孔	-
162		Q-9	須恵器	甕カ	-	-	-	緻	タタキ	タタキ・アテ	古式須恵器カ	-
164	314	SG	土師器	器台	96	133	87	緻	ミガキ	ハケメ→ヨコナデ	脚部に孔3単位	180
165	317	SG	土師器	器台	90	128	75	緻	ミガキ	ヘラナデ・ミガキ	脚部に孔	165
166		SG L-10	土師器	器台	-	-	(40)	細	ミガキ	ミガキ・ヘラナデ	脚部に孔4単位	172
167		K-6	土師器	壺	118	-	(81)	細	ミガキ	ナデ	直口	213
168	30	I-10	土師器	器台	91	-	(53)	細	ケズリ・ミガキ	ミガキ・ハケメ	脚部に輪痕・3孔	200
169	34	I-10	土師器	器台	86	-	(60)	粗		ミガキ	調整・脚部孔不明	195
170		SG I-9	土師器	器台カ	94	-	(18)	細	ナデ・ミガキ			175
171		SG L-10	土師器	壺	-	22	(27)	細	ミガキ		埴 外面朱彩痕	176
172		SG L-10	土師器	壺	124	-	(52)	細	ミガキ	ハケメ→ミガキ		177
173		SG L-7	土師器	高坏	-	(132)	(70)	粗		ミガキ	内黒	199
174		SG L-10	土師器	器台	-	(130)	(60)	細	ミガキ	ミガキ・ハケメ	脚部に3孔カ	166
175		鞍部 I-10	土師器	器台	-	(104)	(58)	粗	ハケメ・ミガキ	ハケメ・ミガキ	脚部に4孔	198
176		SG L-10	土師器	鉢	144	-	(44)	細	ハケメ・ミガキ	ミガキ		171
177	322	SG	土師器	鉢	110	35	55	緻	ハケメ・ミガキ	ミガキ		170
178		SG L-10	土師器	鉢	152	43	77	細	ケズリ・ナデ・ミガキ	ヘラナデ・ミガキ		169
179		SG L-10	土師器	鉢	160	-	(50)	細	ケズリ・ミガキ	ハケメ・ミガキ	外面煤付着 二次焼成カ	173
180		鞍部 I-10	土師器	鉢	164	-	(56)	細	ハケメ・ミガキ	ヨコナデ→ミガキ		209
181	317・320	SG	土師器	鉢	196	-	(100)	緻	ケズリ・ミガキ	ハケメ・ミガキ		181
182		I-10	土師器	鉢	186	-	(51)	粗	ミガキ		内面調整不明	208
183		SG L-10	土師器	壺	150	-	(76)	細	ハケメ・ミガキ	ヘラナデ・ミガキ	直口	183
184		SG M-10	土師器	壺	164	-	(64)	細	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	口縁部棟状浮文・円形浮文 ニケ一対	168
185	316	SG	土師器	壺	130	23	188	緻	ミガキ	ハケメ・ミガキ	直口 底部ミガキ	182
186	322	SG L-10	土師器	甕	102	-	(55)	細	ミガキ	ヘラナデ・ミガキ	No.187と同一個体カ	190
187		SG L-10	土師器	甕	-	25	(44)	細	ミガキ	ミガキ		-
188		K-8	土師器	器台	-	110	(53)	細	ナデ	ナデ		223
189	313	SG	土師器	甕	155	-	(66)	細	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ		188
190		SG L-10	土師器	甕	184	-	(45)	細	ナデ・ハケメ	ハケメ		189

表-9 遺物観察表(5)

遺物番号	RP番号	出土地点	種別	器種	法 量			胎土	調 整		備 考	図版番号
					口径	底径	器高		外 面	内 面		
191		SG L-10	土師器	甕	192	-	(81)	細	ナデ・ハケメ	ヘラナデ・ハケメ		186
192	317	SG	土師器	甕	194	-	(109)	細	ナデ・ハケメ	ヘラナデ・ハケメ	異質な単純口縁甕	184
193	320	SG L-10	土師器	甕	-	(28)	(72)	粗	ハケメ	ヘラナデ・ハケメ	底部 若干くぼむ	187
194		K-8	土師器	壺	-	68	(92)	粗	ハケメ	ヘラナデ		211
195	322	SG	土師器	甕	150	-	(143)	細	ハケメ・ナデ	ハケメ	付け平底カ	192
196		SG L-10	土師器	甕	178	-	(125)	細	ナデ・ハケメ	ヘラナデ・ハケメ		193
197		H-8	土師器	甕	184	-	(195)	粗	ナデ・ハケメ	ハケメ・ヘラナデ		227
198	320	SG	土師器	甕	148	26	158	細	ケズリ・ハケメ	ハケメ		178
199		L-11	土師器	甕	-	-	(39)	細	ナデ		外・内面ヘラ描き 胎土異質	174
200		R-8	土師器	器台	182	-	(49)	細	ミガキ	ミガキ	受部に10孔カ・炭化物付着	-
201	83	鞍部	土師器	器台	91	150	92	粗	ケズリ・ミガキ→ナデ	ミガキ・ハケメ・ナデ		206
202		O-7	土師器	器台	120	(150)	90	細	ケズリ・ミガキ→ナデ	ナデ	脚部4孔	194
203		SD101・ST201	土師器	高坏	96	-	(25)	緻	ミガキ	ミガキ	外・内面 朱彩	99
204	138	SD101・G-9	土師器	器台	84	(122)	78	細	ハケメ・ミガキ→ナデ	ミガキ		196
205		鞍部 U-10	土師器	器台	-	104	(68)	細	ハケメ・ミガキ	ハケメ・ミガキ	2孔一対で4孔カ	197
206		Q-8	土師器	器台	-	(125)	(71)	粗	ミガキ	ミガキ→ナデ	脚部4孔	-
207	39	Q-10	土師器	高坏	-	-	(25)	緻	ミガキ	ミガキ	外面に煤付着	100
208		鞍部 Aトレンチ	土師器	高坏	-	-	(100)	緻	ミガキ	ハケメ	脚部中空	204
209		U-11	土師器	高坏	-	-	(68)	緻	ミガキ	ヘラナデ	脚部中空	202
210	9	D-7	土師器	高坏	-	110	(76)	粗	ミガキ	ナデ	輪痕残る	203
211	22	SD101	土師器	高坏	-	-	(70)	緻	ミガキ		脚部中空 ソケット 式に裾部と接合カ	201
212		S-7	土師器	高坏	175	(150)	126	細	ハケメ・ミガキ	ハケメ・ミガキ		205
213	67	R-7	土師器	甕	128	-	(66)	粗	ナデ・ミガキ	ハケメ・ミガキ		221
214		R-9	土師器	不明	-	(52)	(36)	緻	ナデ			214
215		鞍部 Y-11	土師器	鉢	185	-	(56)	細	ミガキ	ナデ	有孔鉢カ	207
216		鞍部 U-10	土師器	壺	-	28	(76)	粗	ケズリ・ミガキ	ハケメ・ヘラナデ	直口	-
217		SG K-11	土師器	甕	204	-	(54)	粗	ナデ・ハケメ	ハケメ		219
218	57	R-9	土師器	甕	172	-	(96)	細	ナデ・ハケメ	ヘラナデ・ハケメ	煤付着	150
219	42	E-7	土師器	甕	160	50	182	細	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	外面 煤付着	225
220	41	E-8	土師器	甕	158	-	148	粗	ハケメ	ハケメ		-
221		E-7	土師器	壺	-	(60)	(291)	粗	ナデ・ハケメ	ハケメ・ミガキ→ナデ		224
222		鞍部 Cトレンチ	土師器	甕	208	-	(142)	細	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ		220
223	320	SG O-10	土師器	甕	174	-	(128)	細	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	外面 煤付着	217
224		鞍部 U-10	土師器	壺	-	80	(320)	細	ケズリ・ハケメ	ハケメ		216
225	63	SD202	土師器	甕	190	-	(172)	細	ハケメ・ナデ	ヘラナデ・ハケメ		226
226	44	ST181	土師器	甕	185	-	(203)	細	ハケメ・ナデ	ヘラナデ		241
232		K-6	須恵器	高台坏	-	(92)	(18)	細	ロクロ	ロクロ	底部 ヘラ切	231
233		Q-6・7	磁器	碗	-	(52)	(16)	緻			青磁15~16C 疊付の釉割ぎ不徹底	229
234		Q-8	磁器	碗	-	40	(40)	緻			肥前系 17C~ 貫入あり	228
235		K-6	中世陶器	摺鉢	-	-	(34)	粗			珠洲系 縁端面に波状文	230

9. まとめ

本遺跡では周溝をもつ住居3軒、竪穴住居3軒、土坑37基、溝跡15条（畝状溝を含む）、柱穴33基、河川跡がA区東南の自然堤防上を中心に検出された。ここでは周溝をもつ住居他の検出状況等について若干補足説明と疑問点を提示したい。

周溝をもつ住居は平地式の形態をとり、高地には見られず、底湿地に見られるものと言われ⁽²³⁾、水位の高い当遺跡においても竪穴ではなく、平地式であった可能性がある。住居跡の内部は凹凸が激しく当初は掘り方と認識していたが、平地式住居とすれば疑問が残る。またS T 150・201には各々S D 249・202という住居を囲む溝跡が伴うと考えられるが、前節でも触れたとおり、当初は住居のプランと考えていた壁際の鞍部は独立した溝と考えても不自然ではない。S D 249・202は明らかに住居を囲む溝ではある。これらの遺構を検出した当時、どちらも現S T 150・201に切られる形で検出される遺構らしきものが存在した。これらの覆土は炭化粒を含み、0.03mも掘り下げるとすぐに消滅してしまい、遺構とは認識しなかった。即ちS D 249・202が囲む住居は別にあり、それらは精査中に消滅してしまった可能性も考えられる。

竪穴住居としたS T 181・182・232についてはⅢ層上面から掘り込まれていたとしても、その深さは0.3mにも満たないものであり、竪穴住居とするには疑問が残る。またⅢ層上面には炉跡と考えられる円形の焼土面が3基ほど確認されている。この炉跡に伴う住居は検出できなかったが、重複関係も含めて3軒以上存在した可能性もある。

N～Q-6～7付近は柱穴群が密に分布する。深く掘り込まれているものも見受けられた。しかし建物を構成するには至っていない。この地区の遺構の覆土は上層のものは地山と顕著な違いは見られず、下層には土色の変化や混入物が認められた。おそらく未検出のものも相当数存在したものと予想され、掘立柱建物の存在が考えられる。

水田跡の生産遺跡も検出できなかった。ただし助作遺跡で検出されたような畝状の溝跡は存在するものの、これが生産遺構であるかどうかは検討を要する。

今回の調査で一括性の高い遺物群は住居跡ではS T 182・232、土坑ではS K 111、実測図は掲載されていないがS D 185内出土遺物である。遺構と同時性の高いものはS T 181・182・232、S K 111・176である。S T 182で復元できた実測図は3点程しか掲載されていない。その他やや不安は残るがS D 100・202も遺構の時期をある程度反映した資料と言えるかもしれない。S D 101や河川跡の遺物は今回の調査で最も大量の遺物が出土しているが例えば河川跡の場合の出土状況は底面からの出土はなく、立ち上がり部分である。S D 101では時期差が認められる遺物が混入している状況である。

なお鉄石英はS D 100・S T 232・S K 111・S D 101・河川跡等で破片や石核の形で出土しているが、玉類や石器の完成品はない。碧玉製品も検出できなかった。土師器では蓋も出土していない。

第V章 中野遺跡

1 遺跡の概要

調査区の概要

畑田遺跡から北西に約100m程隔てた所に位置し、中野集落の南側にあたる。この辺りの標高は南～北へ低くなっているが、中野も例外ではなく畑田よりわずかに低い。調査面積は、トレンチ・拡張部分合わせて3,544平方mである。調査区を拡張する前に7本のトレンチを設定し、遺構・遺物の確認を行ったがその結果は以下のとおりである。尚、グリッドY軸に沿って設定したため、トレンチ番号は、そのグリッド番号とした。

- (7) 南から50mの範囲まで、攪乱されており、遺構は認められない。
- (8) 遺構は認められない。
- (9) 南から30mの範囲まで溝跡・土坑等が確認された。
- (10) 南から30mの範囲まで溝跡・土坑等が確認され、また土器片も出土した。
- (11) 南から40mの範囲まで溝跡・土坑等が確認され、100～130mの範囲に新しい溝が切り合って確認された。
- (12) 南から70mの範囲に遺構・攪乱が交錯するように多数確認された。
- (13) 南端に2条の溝跡が確認された。

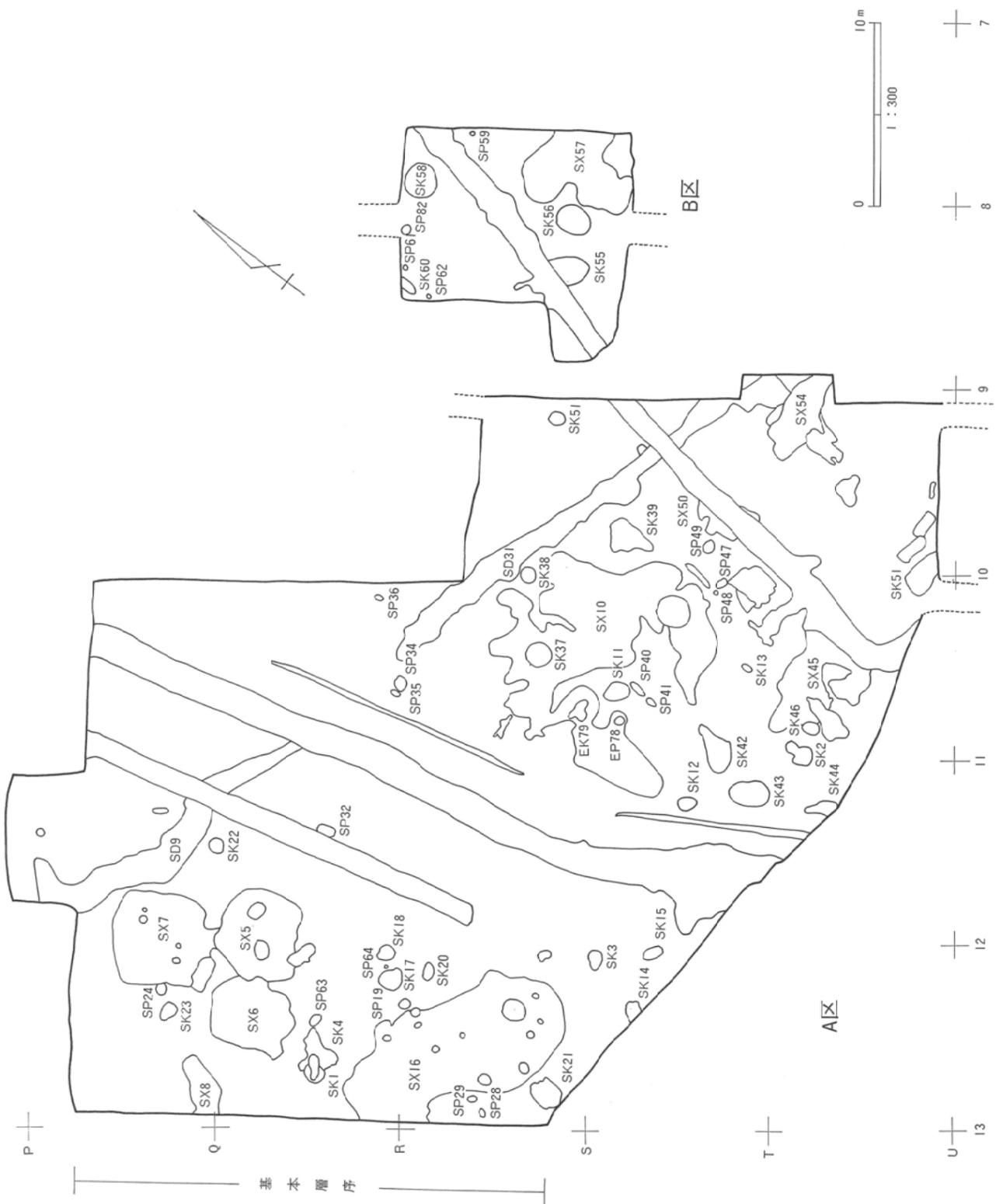
上記のとおり、遺構は殆ど南側から確認され、また断面より南から北へ次第に地山が低くなっていくことが確認された。これらの結果を元に工事範囲の南側を調査区として南側のA区、北側のB区合わせて1,500平方mを拡張することとした。

基本層序

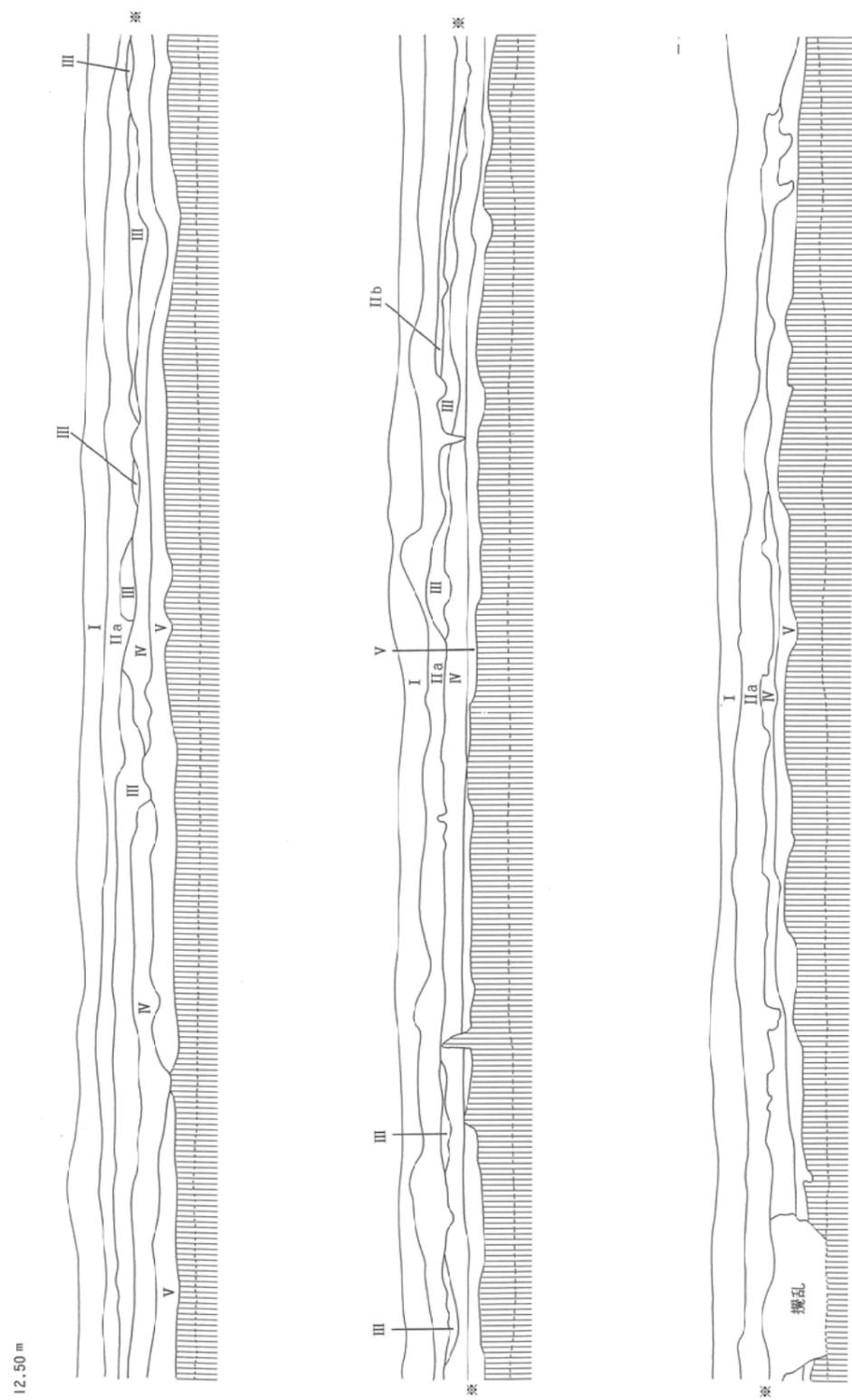
層序は6層から成る。Ⅰ～Ⅲ層の上層を除けば、比較的安定しており、黄色～褐色を主体とした微砂～シルトで形成される。Ⅴ層の包含層は、上下層に比較して炭化粒をかなり多量に含んでおり他層との区別が明確である。B区においては、土坑から須恵器が出土したが、B区の層序から明確な平安時代の包含層と思われる層は確認することができず、地山についてもA区とほぼ同様の土色・土質であった。表土から地山までは約50cmあり、標高は約12.5mを測る。

遺構と遺物の分布

この辺りは、水田として整備される以前は集落があったと言われ、今回の調査において遺構は多数確認されたが、それにかかわる遺構は認められなかった。遺構は、溝跡2条、土坑26基、柱穴25基、不明遺構9基、遺構内土坑・柱穴17基の合計79基検出された。A区は、広い面積を有するS Xが大部分を占め、その周囲にS K・S Pが分布する。調査区の南北対角線上に走る2条の溝は、その堆積土からごく最近のものと思われる。その溝付近にはS X10が認められるが、攪乱を受けている。また、東側に検出された溝は多数の遺構を切っている。遺物は、5箱分出土したが、S K、S D 9、S X 5・6・7・10からの出土がその殆どを占める。



第57図 中野遺跡遺構配置図(1:300)



- 中野遺跡基本層序
- I 10Y R 5 / 2 灰黄褐色砂質シルト 草の根多く含む。(黄土)
 - II a 2.5Y 4 / 2 暗灰黄色砂質シルト (耕作土)
 - II b 2.5Y 3 / 2 黒褐色砂質シルト
 - III 10Y R 5 / 3 にぶい黄褐色砂混り粘質シルト (擾乱層)
 - IV 2.5Y 5 / 3 黄褐色粘質シルト 炭化粒多く含む。(包含層)
 - V 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質微砂 炭化粒多く含む。(包含層)
 - VI 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色細砂 (地山)

第58図 中野遺跡基本層序

2. 遺構と遺物

土坑

SK1・4 Q-12内、SX6の南西隅に接して位置し、SX同様攪乱に切られている。長軸1.23m程の楕円形を呈するSK1が長軸2.75m程の不整形を呈するSK4と重なって検出された。断面よりSK1と4の重複部分に長軸1.4mの長楕円形の遺構が確認され、そこから遺物がまとめて出土した。深さは、東側で浅く、中央部分は0.21mと深い。また、底面はほぼ水平で、堆積土は暗灰黄色を基調とした砂である。

SK39 S-9内、SX10の東側に位置する。長軸2.02mの不整楕円形を呈する。深さは周囲が0.05mと浅く、長軸1.20mの円形を呈する中心部分が0.37mと深く掘り込まれている。堆積土は灰色を基調としたシルトで4層下部には土器片が数点認められた。

SK56 B区の南側、R-8に位置する。長軸1.83mの楕円形を呈し、深さは0.36mで底面中心より緩やかに立ち上がる。堆積土は褐色を基調としたシルト～砂で炭化粒を含む。底からは、須恵器の坏が底部を上にして2点良好な状態で出土した。

その他のSK 長軸0.53～2.81mの楕円形・不整形を呈し、深さは0.07～0.38mである。堆積土は、黄色を帯びた灰色～褐色で、やや砂質・粘質のシルトがその殆どを占める。土器のまとまった出土は認められず、その用途は判然としない。

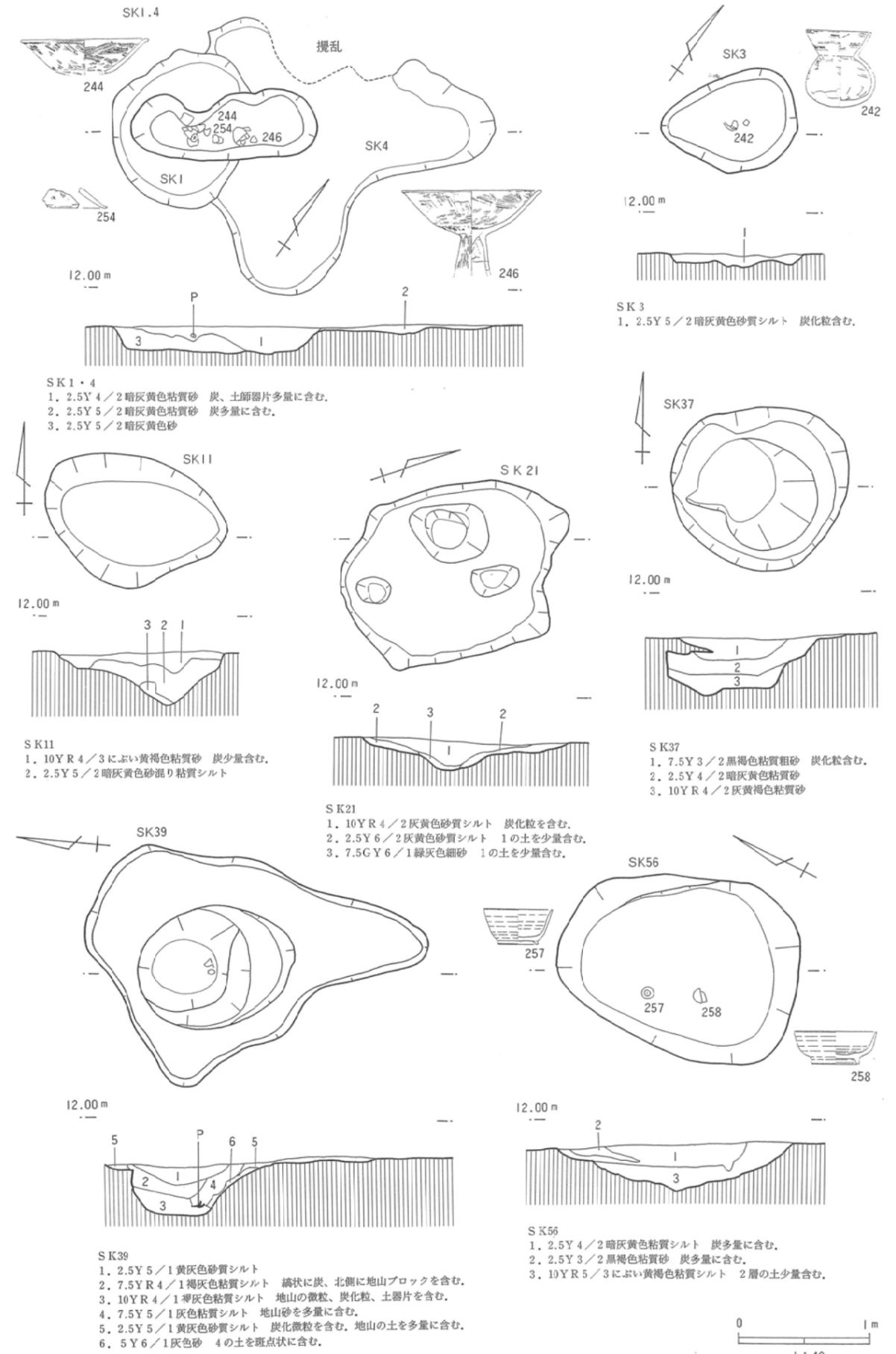
柱穴

柱穴は、調査区全域に認められるが、長軸0.22～1.78m、深さ0.04～0.21mの楕円形・不整形を呈する。これらの柱穴から、建物跡の存在を確認することはできなかった。遺物の出土も殆ど認められない。

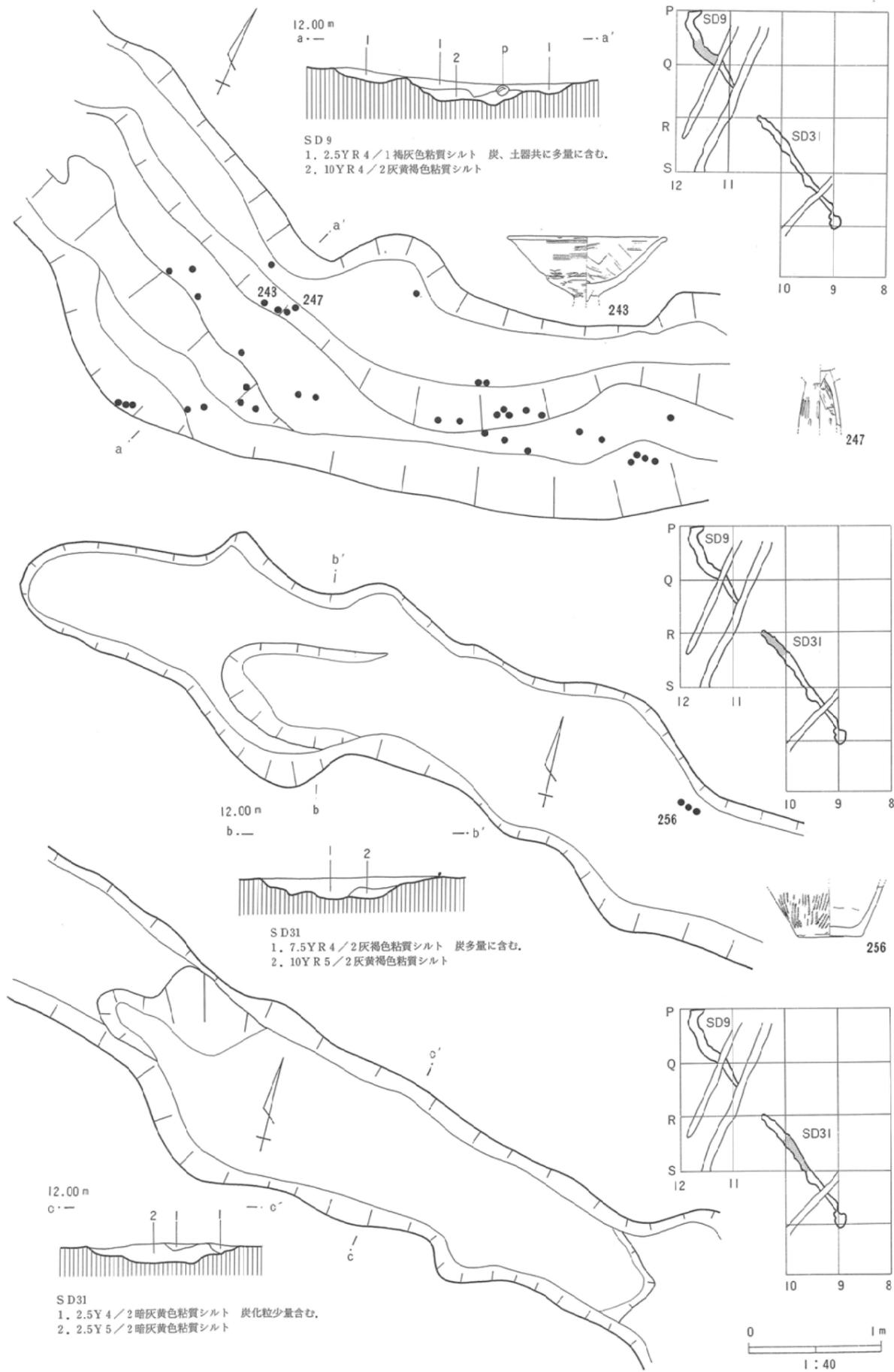
溝跡

溝跡は、調査区を南北に走る新しい溝3条に直交するように東西に走る2条の溝が検出された。SD9と31は、その方向から同一の溝であったと推定される。また、SD9は、やや蛇行し北西端は調査区外に続くものと考えられるが、SD31は、ほぼ真直に流れ南東端は攪乱されている。幅は0.32～1.65mで、深さは0.15～0.17mと比較的浅い。堆積土は、2層から成り、黄色・褐色を帯びた灰色を基調としており、粘性のあるシルトである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸があることから、自然に形成された溝と考えられる。遺物は、SD9の北西部分から土器片が多数出土した。

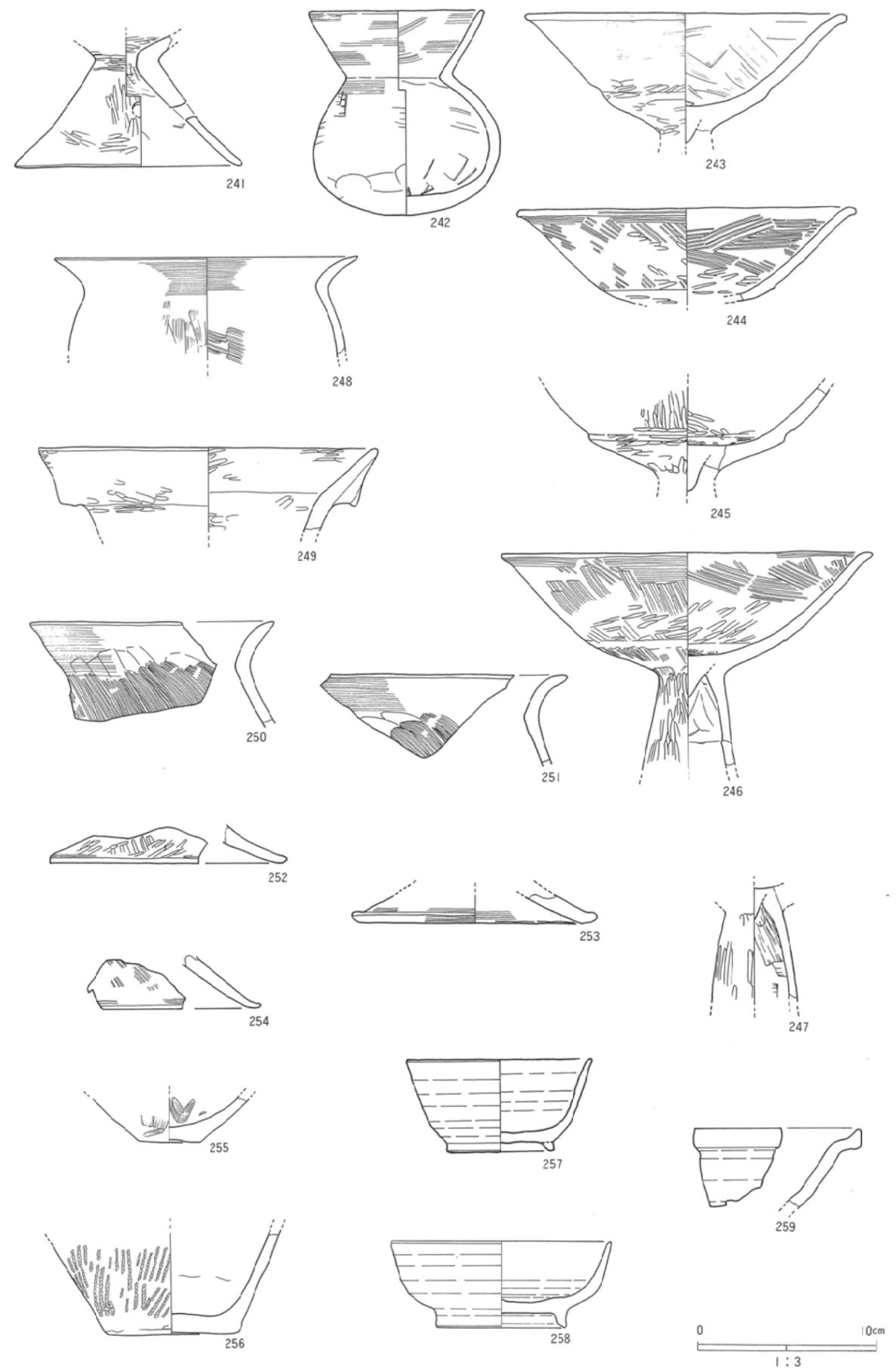
遺物 器台241は脚部端部の屈曲がないものである。高坏は243・247・252・254である。口縁下端に屈曲して段をなすもの(243・245)、無段のもの(244・246)の二つに分けられる。252～254は脚部端部である。242は直口壺である。全体に扁平なプロポーションをもつ。249は複合口縁壺である。甕はいずれも丸い口縁端部をもつが、単純口縁のもの(250)と端部で屈曲し外反するもの(251)とがある。256は撚糸文をもつ深鉢である。須恵器は二つとも直立気味の口縁をもつ高台付坏である。



第59図 SK1・4・3・11・21・37・39・56土坑



第60図 SD9・SD31溝跡



第61図 遺構内出土遺物

SX5～7・16不明遺構・遺構外遺物

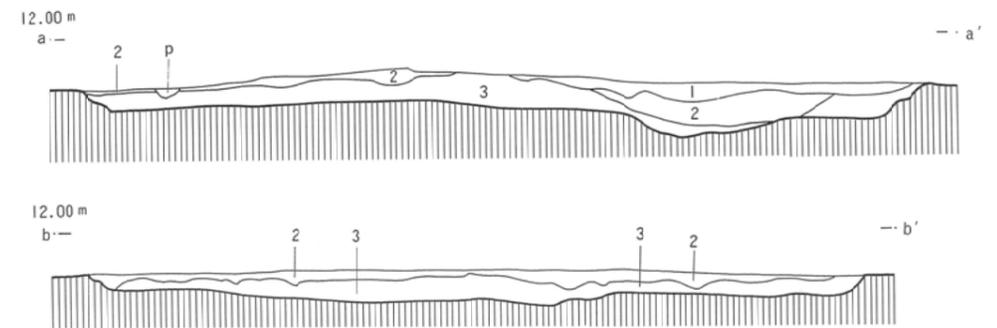
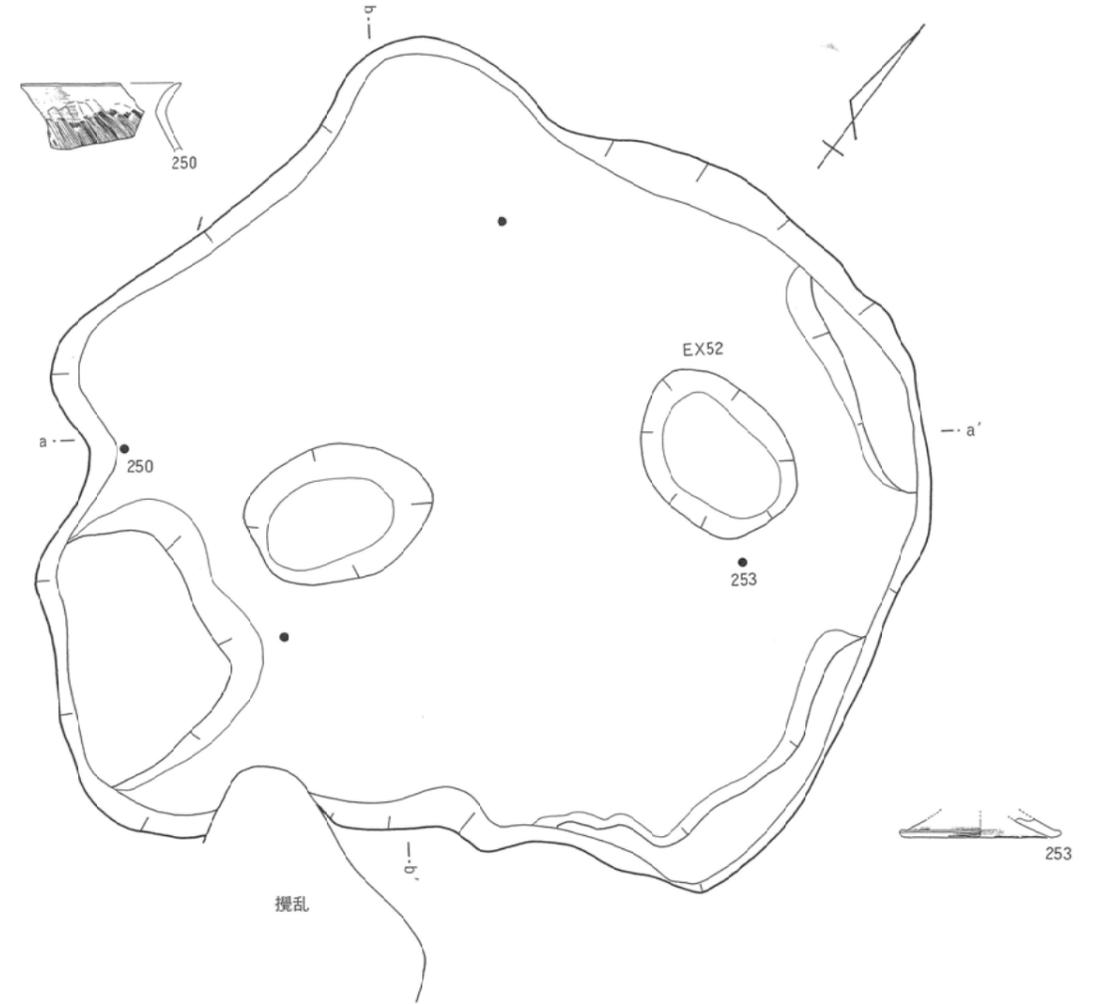
SX5 Q～R-12～11内、SX6・7に囲まれて位置する。南側が攪乱に切られているが、不整形と推測される。長軸4.76m、短軸4.39m、深さは0.08～0.2mを測る。検出時には、中心部分に炭の拡がり認められ、堆積土は、黄～褐色を基調とした粘質シルトの3層から成り、壁は緩やかに立ち上がる。遺構中程には、土坑状の掘り込みが2基認められたが、特にEK52は炭化粒を多量に含みしっかりとした掘り込みが認められた。また、南東壁際には0.1m程の段差が認められた。遺物は、全てが検出面より出土したもので底面からの出土は認められない。これらの規模・形・遺物の出土状況等により住居跡の掘り方部分の可能性が考えられるが検討を要する。

SX6 Q-12内、SX5の西側に位置する。SX5同様、南側が攪乱に切られているが、不整形と推測される。長軸4.53m、短軸3.4m、深さは0.02～0.04mを測り、西辺のわずかな落ち込みを除けば底面はほぼ一定している。堆積土は、1層において、SX5・7と異なり、腐植した木片も含んでいることから、自然木の下層部分の可能性も考えられ、検討を要する。壁の立ち上がり、遺物の出土状況は、SX5と同様である。

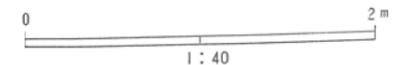
SX7 P-12～13内、SX5の北側に位置する。SX5・6と同様南隅が攪乱に切られるが、不整形と推測される。長軸5.33m、短軸4.88m、深さ0.05～0.14mを測り、一定して掘り込まれている。堆積土は2層から成り黄色を基調としたシルトで、壁の傾斜はSX5・6に比べかなり緩い。また、底面の凹凸は見られずほぼ水平で、南北対角線上に4基の径0.2～0.4m程の落ち込みが認められたが、いずれも掘り込みが浅く、柱穴として機能していたものかは定かではない。遺物は、検出面において多数の土器が出土し、西壁中程には細片であるが集中して認められた。これらの状況から、SX5同様住居跡の可能性も考えられるが検討を要する。

SX16 Q～S-12の調査区西側に位置し、西側は壁に切られている。長軸11.55m、短軸5.67m、深さは0.1mを測り、不整形円形を呈する。検出時は、西側と南側に炭の拡がり認められたが、堆積土は黄色～灰色を基調とした砂～シルトで壁は緩やかに立ち上がる。底面は、凹凸がなくほぼ水平であるが、径0.25～0.7mを測る10基の柱穴と、径1.3mを測る1基の土坑、高さ0.1mを測る壁際の段差が認められる。柱穴の存在から、住居跡の可能性も考えられるがプランは判然としない。また遺物の出土は認められない。

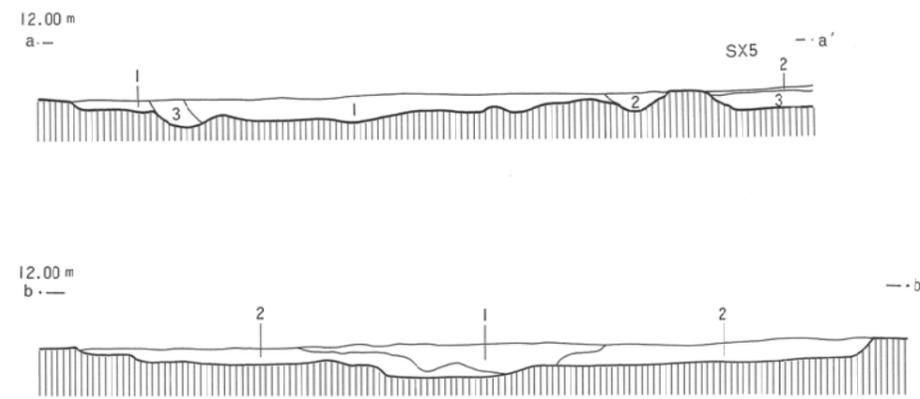
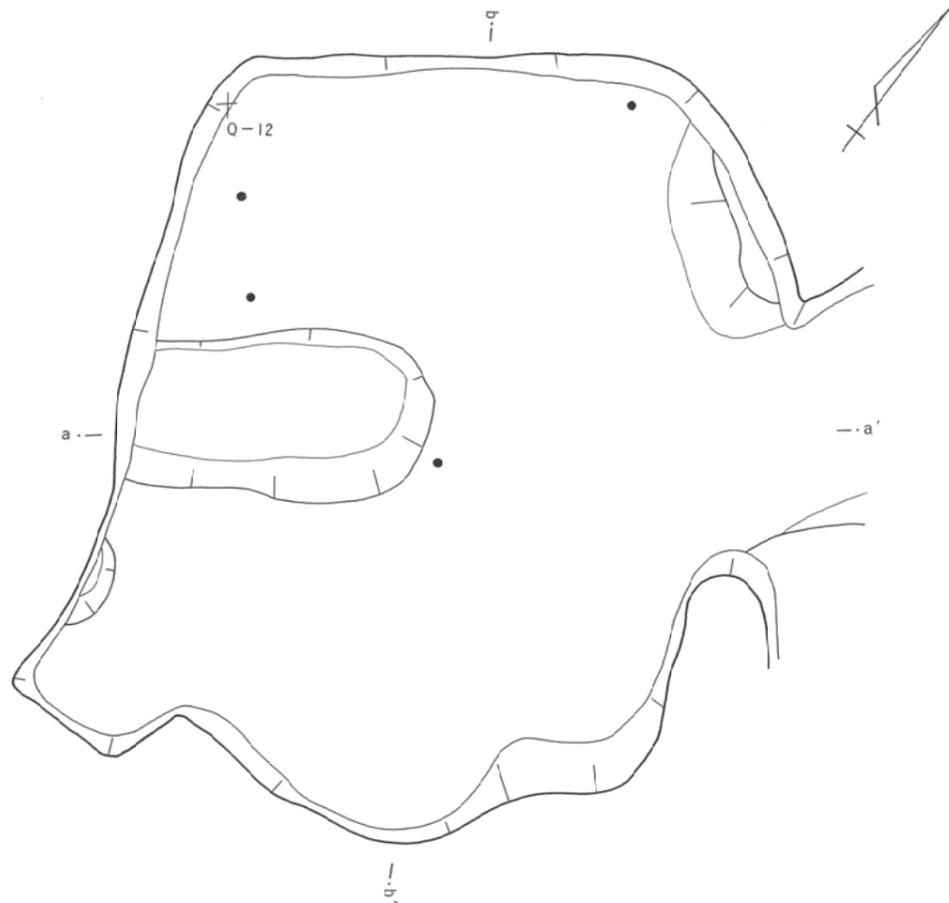
遺物 260・261は高坏の脚部である。内面に輪積みの痕跡を残す。下位になるに従い膨らむ。252は高坏の口縁部である。263～245は高坏脚部である。270は壺の底部である。甕は比較的厚手で口縁端部を横方向に屈曲させるもの(266)、外弯させるもの(267)、口縁部が短く内弯して立ち上がるもの(268)がある。269・271は底部である。須恵器は高台付坏(272)、坏(273)がある。



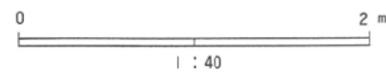
SX5
 1. 5Y3/1 オリーブ黒色粘質シルト 炭、炭化粒共に多量に含む。
 2. 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト 炭若干含む。
 3. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト 炭、炭化粒若干含む。5GY5/1 オリーブ灰色粘質シルト30%含む。



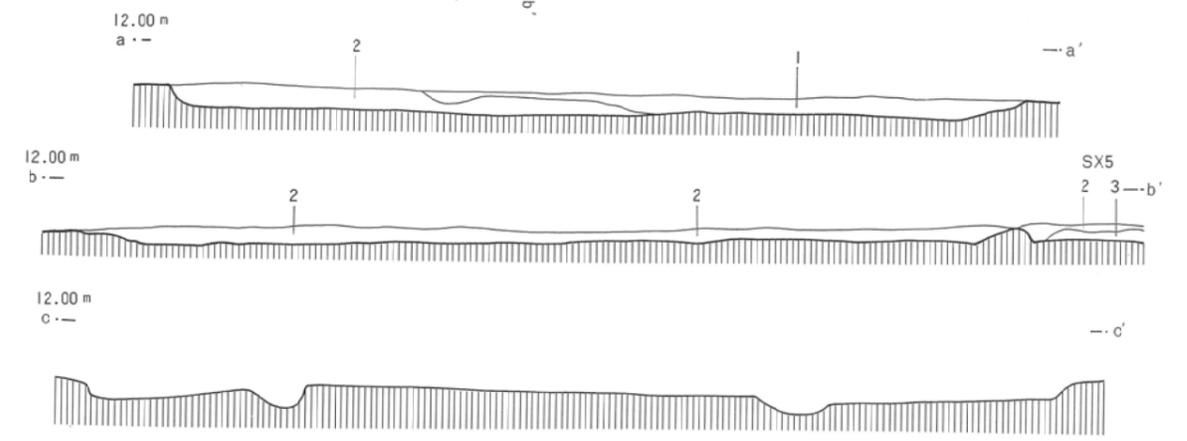
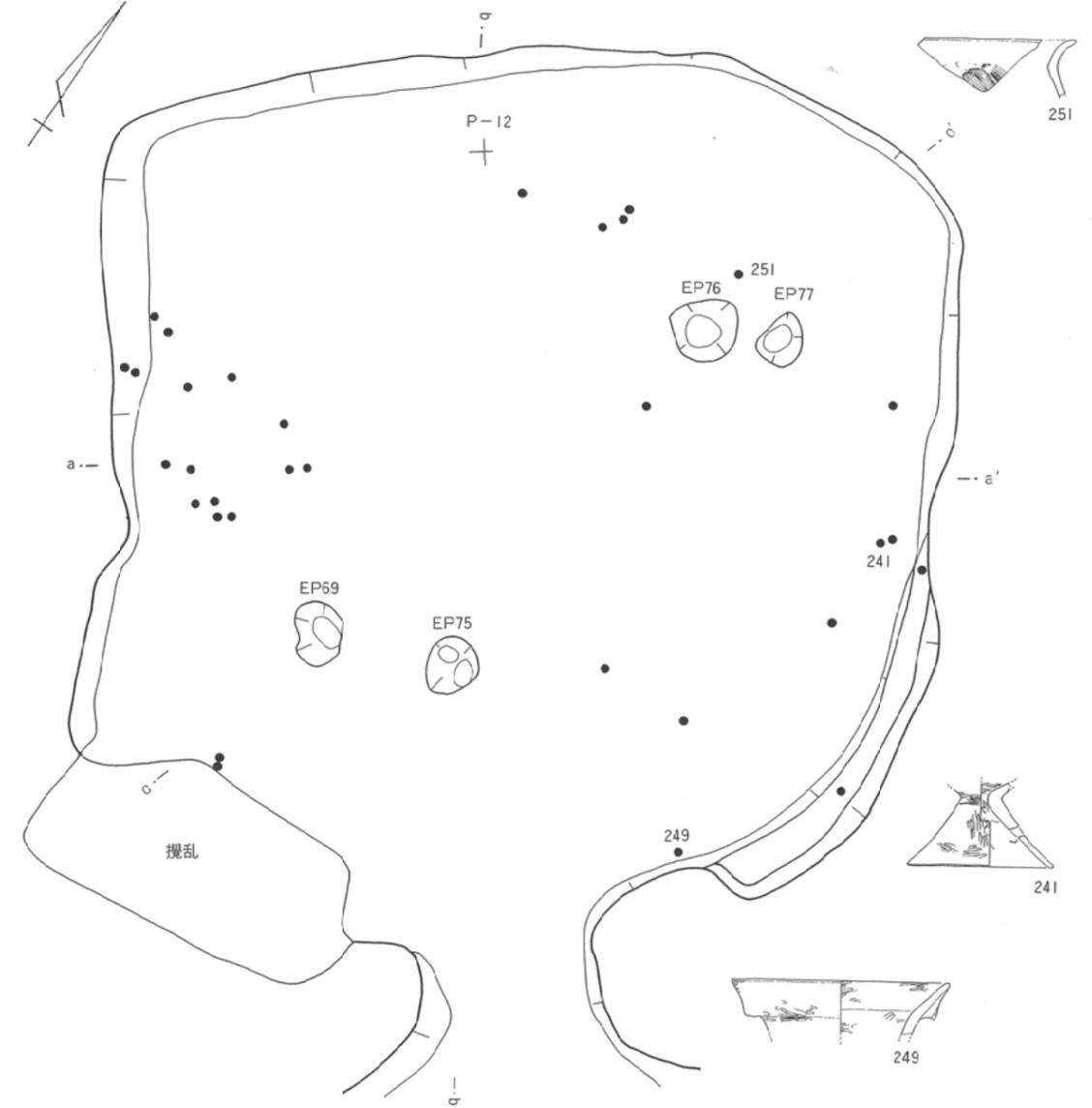
第62図 SX5不明遺構



- SX6
 1. 10YR 4 / 2 灰黄褐色粘質シルト 炭化粒、腐木含む。
 2. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色粘質シルト 炭、炭化粒若干含む。
 5GY 5 / 1 オリーブ灰色粘質シルト30%程含む。
 3. 10Y 5 / 1 灰色粘質細砂(SX5)



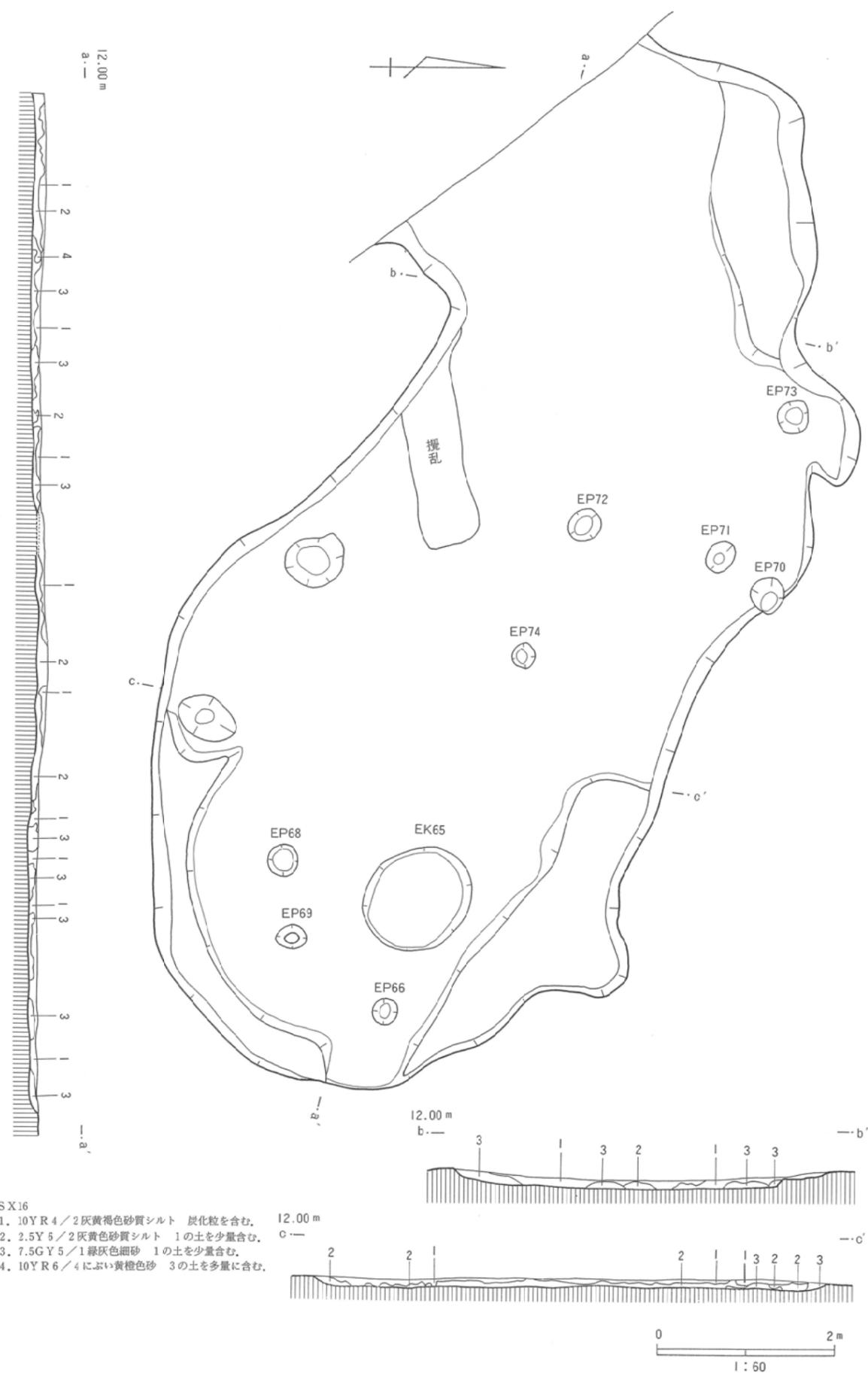
第63図 SX6不明遺構



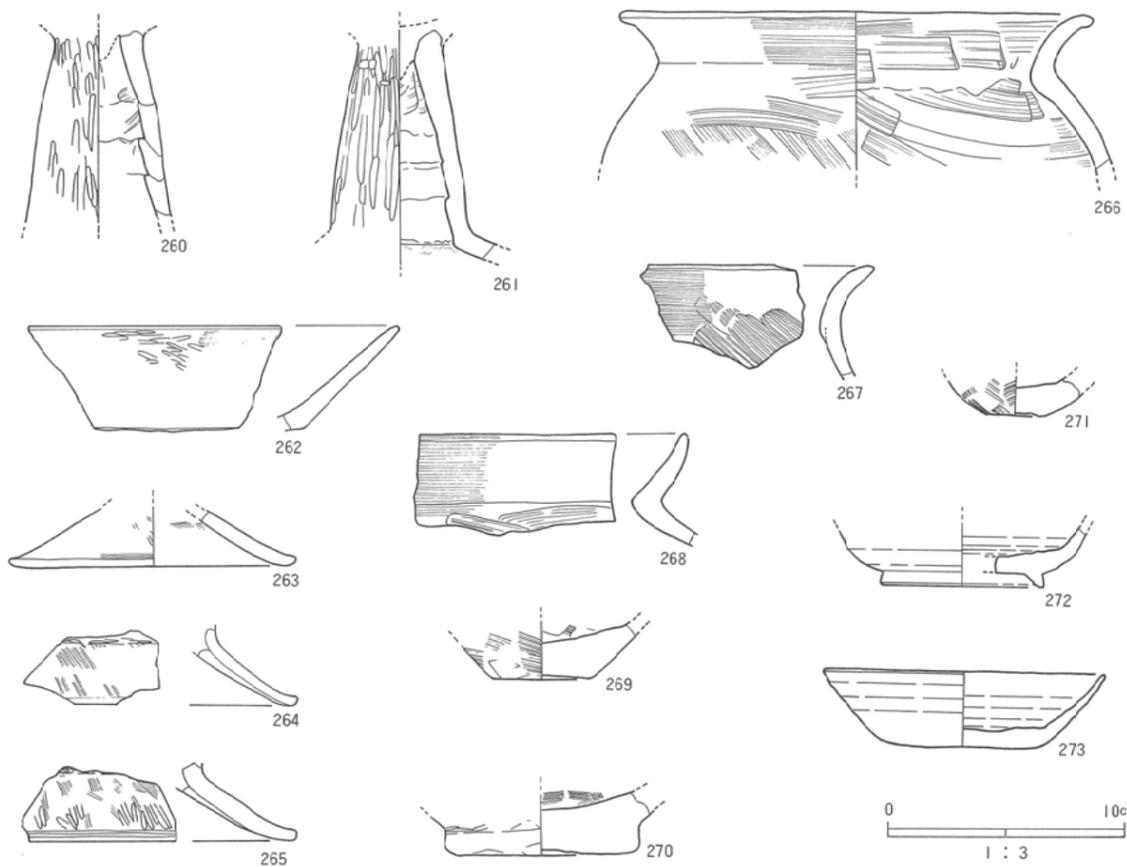
- SX7
 1. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色シルト 炭化粒若干含む。
 2. 2.5Y 5 / 3 黄褐色粘質シルト
 3. 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色粘質シルト 炭化粒若干含む。 5GY 5 / 1 オリーブ灰色粘質シルト30%含む(SX5)



第64図 SX7不明遺構



第65図 SX16不明遺構



第66図 遺構外出土遺物

3. まとめ

拡張した調査区においては、1500m²という面積に比して溝跡・土坑・柱穴等多くの遺構が検出されたが、後世の攪乱を受けたものもかなり多く確認された。その大半の遺構の性格を明かにすることができなかったが、SX 5・6・16は住居跡の可能性が考えられる。その他のSXからも土器の出土が認められた。また、SX 5・6・7、SD 9、SK 1・4に比較的多数の土器の出土が認められることから、居住域が北西側に存在し、調査区外西側にも及ぶものと推定される。SD 31からは撚糸文のある土器が出土し、かつB区のSK 56からは須恵器が出土したため、長い時間に断続的に形成された集落であったと考えられる。

遺物量そのものは畑田よりは格段に少ないもののほぼ畑田と似通ったものが出土している。その中で高坏はやや様相が異なるようである。土坑や溝からの出土であるが、畑田よりはやや時期の下るものと考えられる。これについては漆編年で10・11群が該当するものと考えられる。SD 31から単品で出土した縄文をもつ土器(256)は原体Rの撚糸文を縦方向に転がしたものと考えられる。破片資料のため形式については検討を要する。平安時代の遺物としてSK 56より須恵器の高台付坏が出土する。比較的口径と底径の差は少なくやや古い様相をもつ。9世紀前半代と考えられる。調査区の北隣に位置する集落(現在3軒)には天正16(1588)年の十五里ヶ原の合戦の際、30数軒が焼亡したという伝承が残る。調査区内には中世村落の広がり確認できなかった。

表-12 遺構観察表(1)

【凡例】 長さの単位はmとし、()内の数値は、他遺跡もしくは壁に切られる等して正確な数値を計測できないため、残存する部分を計測した数値である。

遺構番号	グリッド	平面形態	規 模 (m)				深 さ	挿図番号
			上 端		下 端			
			長軸	短軸	長軸	短軸		
SD9	P~Q-11		16.30	(0.60~2.05)	(16.30)	(0.32~1.15)	0.15	第60図
SD31	R~S-9~10		(21.90)	(0.85~1.90)	(21.75)	(0.62~1.65)	0.17	第60図
SK1	Q-12	不整形	(1.23)	(1.00)	0.95	(0.87)	(0.21)	第59図
SK2	T-10~11	不整形	1.64	1.20	1.41	0.95	0.17	
SK3	S-12	楕円形	1.00	0.74	0.83	0.60	0.10	第59図
SK4	Q-12	不整形	(2.75)	(2.14)	(2.41)	(2.00)	(0.07)	第59図
SX5	Q-11~12	不整五角形	4.76	4.39	4.53	1.10	0.08~0.20	第62図
SX6	P~Q-12	不整形	4.53	3.40	4.34	3.15	0.02~0.04	第63図
SX7	P-11~12	不整形	5.33	4.88	4.73	4.63	0.05~0.14	第64図
SX8	P-12	不整楕円形	(3.32)	1.40	(3.26)	1.27	(0.04)	
SX10	R~S-9~11	不整形	14.40	12.00	14.25	11.85	0.12	
SK11	S-10	楕円形	1.24	1.00	1.04	0.63	0.40	第59図
SK12	S-11	不整楕円形	(1.20)	0.74	(0.69)	0.43	(0.25)	
SK13	S-10	楕円形	0.53	0.37	0.27	0.16	0.20	
SK14	S-12	隅丸方形	(0.87)	0.90	(0.82)	0.73	(0.07)	
SK15	S-12	不整楕円形	1.16	0.56	0.87	0.37	0.10	
SX16	Q~R-12	不整楕円形	(11.55)	5.67	(11.50)	5.55	(0.10)	第65図
SK17	Q-12	不整形	1.23	1.19	1.08	0.75	0.09	
SK18	Q-12	不整形	0.95	0.83	0.43	0.27	0.08	
SP19	Q~R-12	不整楕円形	0.67	0.51	0.24	0.22	0.13	
SK20	R-12	不整楕円形	0.97	0.56	0.77	0.39	0.10	
SK21	R-12	不整楕円形	1.52	1.33	1.31	1.19	0.22	第59図
SK22	Q~R-11	不整形	0.93	0.83	0.60	0.44	0.07	
SK23	Q-12	楕円形	1.70	0.70	0.73	0.39	0.04	
SP24	Q-12	楕円形	0.64	0.53	0.50	0.33	0.18	
SP25	Q-11	楕円形	0.24	0.13	0.13	0.07	0.14	
SP26	Q-12	楕円形	0.24	0.19	0.13	0.08	0.04	
SP27	Q-12	楕円形	0.25	0.12	0.07	0.06	0.04	
SP28	R-12	楕円形	0.43	0.32	0.30	0.18	0.21	
SP29	R-12	隅丸方形	0.42	0.32	0.23	0.18	0.19	
SP32	Q-11	楕円形	1.00	0.56	0.77	0.33	0.10	
SP34	Q-10	不整楕円形	0.87	0.59	0.78	0.48	0.05	
SP35	Q-10	不整長方形	0.42	0.29	0.39	0.18	0.09	
SP36	Q-10	楕円形	0.38	0.27	0.26	0.13	0.16	
SK37	R-10	円形	1.32	1.24	1.23	1.00	0.38	第59図
SK38	R-9~10	円形	0.75	0.90	0.45	0.60	0.05	
SK39	S-9	不整三角形	2.02	1.80	1.80	1.65	0.37	第59図
SP40	S-10	楕円形	1.05	0.29	0.70	0.12	0.06	
SP41	S-10	楕円形	0.52	0.30	0.45	0.15	0.08	
SK42	S-10~11	不整形	2.81	1.37	2.53	1.10	0.17	
SK43	S-11	楕円形	(2.12)	(1.16)	(2.02)	(0.67)	(0.17)	
SK44	T-11	不整三角形	(1.86)	(0.70)	(1.52)	(0.49)	(0.13)	
SX45	T-10	不整形	(5.58)	3.76	(5.19)	3.57	(0.07)	
SK46	T-10	楕円形	0.85	0.61	0.60	0.45	0.07	
SP47	S-10	不整楕円形	0.68	0.36	0.28	0.27	0.15	
SP48	S-10	円形	0.29	0.28	0.19	0.20	0.09	
SP49	S-9	円形	0.70	0.58	0.41	0.35	0.12	
SK51	R-9	円形	0.85	0.73	0.54	0.73	0.06	
EK52	Q-11	楕円形	1.00	0.75	0.87	0.49	0.32	
SP53	T-9	不整楕円形	0.84	0.20	0.80	0.13	0.05	
SX54	T-9	不整形	(5.50)	2.37	(5.30)	2.15	(0.07)	
SK55	R-8	楕円形	(1.73)	(1.47)	(0.79)	(0.78)	(0.29)	
SK56	R-8	楕円形	1.83	1.37	1.47	1.13	0.36	第59図
SX57	R-7	不定形	(6.20)	(2.80)	(6.00)	(2.68)	(0.13)	
SK58	Q-R-7	円形	1.84	1.84	1.32	0.17	0.18	
SP59	R-7	楕円形	0.32	0.24	0.14	0.10	0.12	
SP60	Q-8	不整楕円形	(0.95)	(0.34)	(0.90)	(0.23)	(0.14)	
SP61	Q-8	楕円形	0.20	0.22	0.10	0.06	0.07	
SP62	R-8	円形	(0.24)	(0.24)	(0.14)	(0.15)	(0.10)	
SP63	Q-12	不整楕円形	0.85	0.40	0.25	0.22	0.12	
SP64	Q-12	不整楕円形	0.22	0.20	0.11	0.09	0.05	
EK65	R-12	円形	1.76	1.15	1.13	0.95	0.09	
EP66	R-12	円形	0.36	0.33	0.25	0.20	0.15	
EP67	R-12	楕円形	0.35	0.27	0.12	0.13	0.06	
EP68	R-12	円形	0.36	0.33	0.25	0.20	0.07	
EP69	R-12	不整形	0.33	0.31	0.19	0.12	0.10	
EP70	R-12	円形	0.40	0.36	0.25	0.15	0.05	
EP71	R-12	円形	0.37	0.30	0.13	0.12	0.05	
EP72	R-12	円形	0.37	0.35	0.23	0.17	0.07	
EP73	Q-12	円形	0.40	0.36	0.20	0.19	0.08	
EP74	R-12	円形	0.25	0.25	0.14	0.10	0.08	
EP75	P-12	円形	0.33	0.30	0.14	0.10	0.11	
EP76	P-11	円形	0.40	0.39	0.21	0.17	0.12	
EP77	P-11	不整楕円形	0.31	0.23	0.15	0.13	0.03	
EP78	S-10	円形	0.53	0.47	0.27	0.25	0.09	
EP79	R-10	不整楕円形	1.33	0.79	0.84	0.37	0.50	
EP80	R-12	不整楕円形	0.67	0.62	0.37	0.30	0.19	
SP81	S-9	長楕円形	1.77	0.22	1.43	0.09	0.10	
SP82	Q-8	円形	0.48	0.47	0.35	0.32	0.06	

表-13 遺物観察表

凡 例

- 1 法量はmm単位で示した。口径については図上復元した推定値をも含む。
()内は遺物の残存状況を示すため、残存する最大値を示している。
残存しない部位、及び底部が丸底で計測値が出せない場合は - で表した。
- 2 胎土欄の粗は粗砂混入、細は細砂混入、緻は緻密の略である。
- 3 調整は主なものを記し、調整順序の解るものについて → で示した。
- 4 備考欄にはその他の観察事項を記した。

遺物番号	RP番号	出土地点	種別	器種	法 量			胎土	調 整		備 考	図版番号
					口径	底径	器高		外 面	内 面		
					241	1056	SX7		土師器	器台		
242	1002	SK3	土師器	壺	98	-	115	細	ケズリ・ナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	直口	245
243	1015	SD9	土師器	高坏	180	-	(72)	粗	ミガキ・ヨコナデ	ヘラナデ		244
244	1032	SK1	土師器	高坏カ	190	-	(52)	細	ミガキ・ナデ・ハケメ	ハケメ・ミガキ		246
245	1004	SX45	土師器	高坏	-	-	(55)	細	ミガキ	ハケメ・ミガキ		251
246	1032	SK1	土師器	高坏	208	-	(118)	細	ミガキ・ナデ・ハケメ	ミガキ・ハケメ・ナデ		243
247	1016	SD9	土師器	高坏	-	-	(62)	細	ミガキ	ヘラナデ		260-3
248	1007	SX10	土師器	甕	170	-	(52)	粗	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ		255
249	1051	SX7 Q-11	土師器	壺	190	-	(43)	粗	ミガキ	ミガキ		252
250	1039	SX5	土師器	甕	-	-	(55)	細	ハケメ→ナデ	ハケメ	外面煤付着 破片資料	261-3
251	1045	SX7	土師器	甕	-	-	(47)	細	ハケメ→ナデ	ハケメ・ナデ	同上 No250と同一個体カ	261-2
252	1004	SX45	土師器	高坏	-	-	(20)	細	ナデ・ミガキ	ハケメ・ナデ	破片資料	248-4
253	1035	SX5	土師器	高坏	-	-	(138)	細	ナデ・ハケメ	ナデ		248-8
254	1032	SK1	土師器	高坏	-	-	(27)	細	ナデ・ハケメ	ハケメ	破片資料	248-3
255	1007	SX10	土師器	甕カ	-	35	(24)	粗	ハケメ	ハケメ		256-1
256	1066	SD31	弥生土器	鉢	-	75	(55)	細	燃糸文			253
257	1028	SK56	須恵器	高台坏	104	60	52	細	ロクロ	ロクロ	底部 ヘラ切	258
258	1027	SK56	須恵器	高台坏	124	(74)	(48)	緻	ロクロ	ロクロ	底部 ヘラ切	257
259		SK56	赤焼土器	埴	-	-	(43)	細	ロクロ	ロクロ	破片資料	249-3
260		Q-11	土師器	高坏	-	-	(78)	細	ミガキ	ヘラナデ	朱彩カ	260-1
261	1003	R-12	土師器	高坏	-	-	(95)	粗	ミガキ	ヘラナデ・ハケメ		247
262		6トレンチ	土師器	高坏	-	-	(44)	細	ナデ・ミガキ	ミガキ	破片資料	248-5
263		S-11	土師器	高坏	-	(122)	(23)	細	ハケメ・ナデ	ハケメ		248-6
264		SK1	土師器	高坏	-	-	(32)	細	ハケメ・ミガキ	ハケメ	破片資料	248-2
265		R-12	土師器	高坏	-	-	(33)	細	ハケメ・ミガキ	ヘラナデ	破片資料	248-7
266		Q-11	土師器	甕	200	-	(56)	細	ハケメ・ナデ	ヘラナデ		254
267		P-11	土師器	甕	-	-	(45)	細	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	破片資料	261-5
268		S-10	土師器	甕	-	-	(47)	粗	ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	破片資料	248-1
269		P-11	土師器	甕	-	40	(23)	粗	ケズリ・ハケメ	ハケメ		249-1
270		新溝	土師器	壺	-	82	(26)	粗	ナデ	ハケメ		249-4
271		P-12	土師器	甕	-	21	(15)	粗	ハケメ	ナデ		249-5
272		2トレンチ	須恵器	高台坏	-	70	(23)	緻	ロクロ	ロクロ	底部 ヘラ切	249-2
273	1000	Q-7	須恵器	坏	120	(64)	32	緻	ロクロ	ロクロ	底部 ヘラ切	-

第VI章 畑田遺跡・中野遺跡まとめ

1 畑田遺跡検出の周溝をもつ住居について

ここでは各地で急速に注目されている「周溝をもつ住居」について簡単に整理してまとめたい。北陸では「周溝をもつ建物」と呼称されている。近年急速に検出例を増やしており、現在では弥生時代中期から古墳時代前期にかけての住居の一般的な形態の一つとして認識されている^(20,22,23)。構造は溝ないし土坑状遺構を環状あるいは台形状に配置し、中心には柱穴や貯蔵穴と考えられる土坑が存在する。性格は周溝墓とする理解⁽¹⁷⁾、玉作り工房との関連と理解する説⁽¹⁹⁾があるが、周溝を掘り上げた土を周堤とする平地式住居の可能性が高い⁽¹⁸⁾。底湿地帯に多く分布する。また竪穴住居と併存する例は現在のところ確認されておらず、竪穴住居に先行、あるいは併存しない建物形式であるらしい⁽²⁰⁾。本遺跡で検出された住居の屋内施設には切り合い関係の可能性も含めて不明な点が多い。周溝は排水の機能をもつ⁽¹⁸⁾と考えたいが、SD100・249・202のいずれとも接続するSD101大溝はQ-9付近が最も深く、南北端は浅いことから流れていたとは考えにくいのでやや疑問が残る。唯一開口部を検出できたSD249についてもその方角は北に向いており従来の説とは符合しない。今後さらなる検討を要する。

2 畑田遺跡・中野遺跡出土の土師器について

不十分ではあるが分類・集成を行った。その基準は次のとおりである。器台にはI類とII類がある。I類は装飾器台である。aとbに細分した。b類は受部の下端に稜をもつタイプで、c類は受部中位に稜をもち、円窓の数は不明である。II類はバリエーションが豊富で、口縁部の形態を基準として4大別した。aは上方につまみ上げるものである。2種に細分できる。bは口縁部の下端ないし中位に稜をもつタイプである。cは口縁端部が丸いものである。dは脚部中位が内湾する。

高坏はI～II類まで分類した。I類は中実、II類は中空である。III類は下端に稜をもつ。IV類は中位でくびれ、端部で短く外反する。下端が狭小である。V類は端部が若干外反する。下端は広い。VI～VII類は個性的なものである。VI類は脚部が内湾し裾部が大きく開いて外反する。VII類は口縁端部がやや直立する。脚部は偏平で小さくなる。X類は円窓が6孔認められる。XI類は大型のもの。円窓は3孔である。

鉢はI～VII類まで分類される。I～IV類は小型のもので、I・II類は口径が体部径より小さい。どちらも口縁部は直立するが、平底と丸底に区別される。III類は碗型に近いタイプである。II類のみミガキが見られるが他はハケメ調整である。V類は基本的に口縁部は外反し、底部が丸底のものである。VI類は平底ないし窪み底のものである。VII類は台付きである。ミガキ調整が確認できる。有孔鉢には全体が明確なのはI類のみである。II類は浅いタイプで外面にミガキ調整が確認できる。III類は平底状の底部をもつ。

埴には2類ある。I類はいびつなもので、口縁部が短くあまり開かない。II類は口縁部が開き、長いものである。

直口壺はI～III類である。I類は口縁部が直立するもの。II類は口縁部が短く外反するもの。III類は口縁部が大きく外反するものである。

壺は複合口縁のものをI類、口縁中位に稜をもつものをII類、口縁端部をつまみ出し、面取りをしているものをIII類、口縁部が外反し体部の下位に最大径が位置するものをIV類とした。I類には棒状浮文と円形浮文がセットになるもの等バリエーションが認められる。

甕は大別してI～IV類に分類できる。I類は単純口縁で端部を丸くおさめるものである。I類は更にa～1に細分できる。aは口縁部が短く小型で外面と内面の口縁部にミガキを施す。gは口縁部の屈曲が弱い。底部はやや窪み、調整は内外面ともミガキのもの(g-1)、ハケメ調整のもの(g-2)が見られる。hは口縁部が長く外傾する。iは口縁端部が内面に肥厚する。頸部はしまる。胎土も緻密で極めて丁寧な作りである。布留系の甕と考えられる。jはやや肩の張るプロポーションである。この類にヘラ描きの土器も含まれる。II類は口縁部がやや外傾しつつ外面中位に弱い稜をもつタイプで、体部は膨らむ。量は極めて少ない。III類は口縁部が外傾し端部で短く屈曲する。尖り底である。IV類は過半以上を占める割合で出土している。このタイプは口縁端部を面取りし底部は極めて狭い平底ないし窪み底をもつ。ほとんど安定性がない。細別してa～cの3種が認められるが、個体差の要因もかなり含まれているものと考えられる。

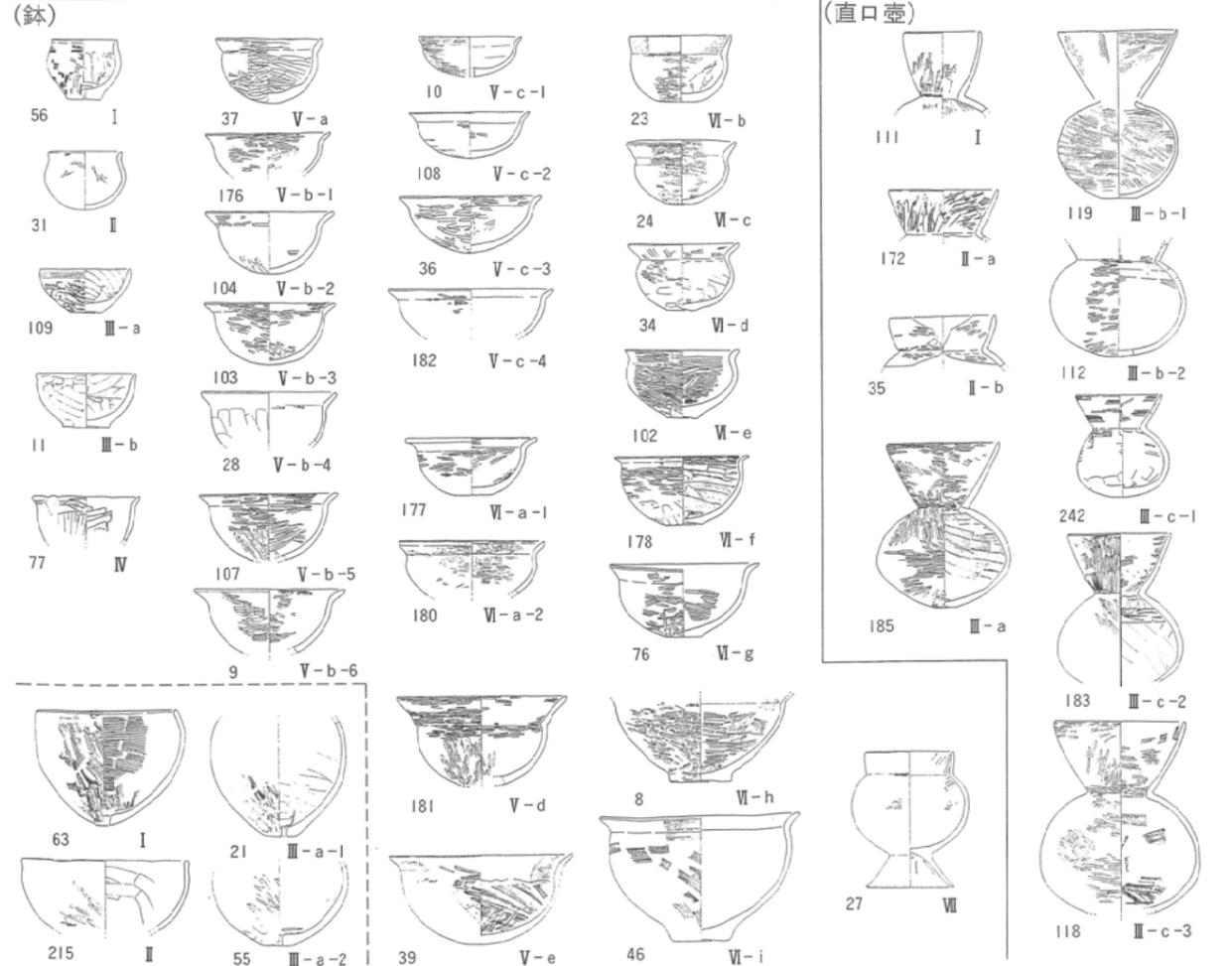
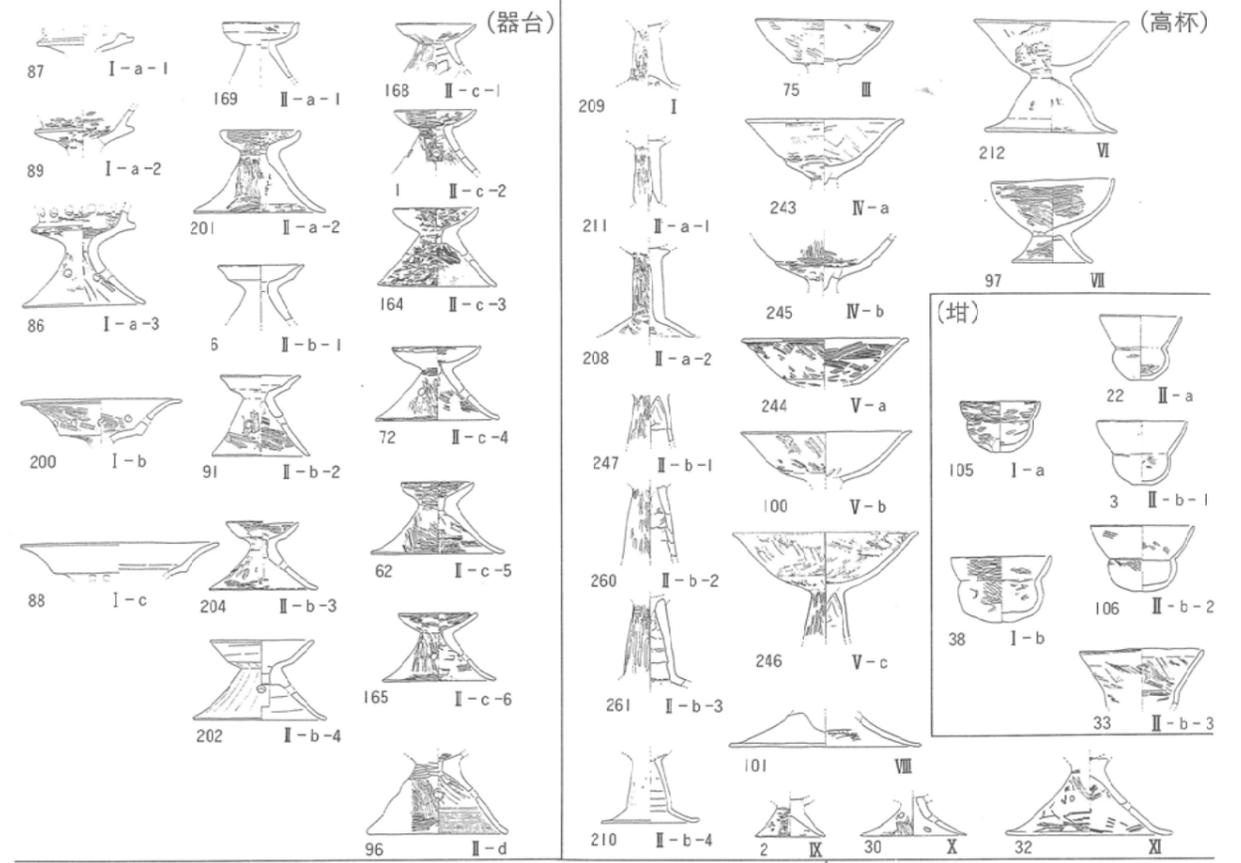
最後に不十分ではあるがこれらの遺物群の時期的な検討を行いたい。遺物群自体はほぼ北陸北東部域の土器群と大差ない状況である。坂井・川村編年で言えばII-2期からIV期、新潟シンポジウム編年では6期から9期に該当するものと思われる⁽²⁴⁾。なお一括性の高いST232内出土遺物はほぼ胎土・調整工具等が同一のものと思われ、6～7期の様相をもつものと考えられる。SK111は甕の体部の最大径が中位以下にみられるものも存在するが口縁端部の処理に注目すれば6～8期に該当すると考えられる。

なお辻秀人氏、石川県埋蔵文化財センターの皆様をはじめとする方々には貴重なご指導・ご鞭撻を賜りながら、力不足で報告書に反映できなかった点をお詫び申し上げます。

《参考文献》

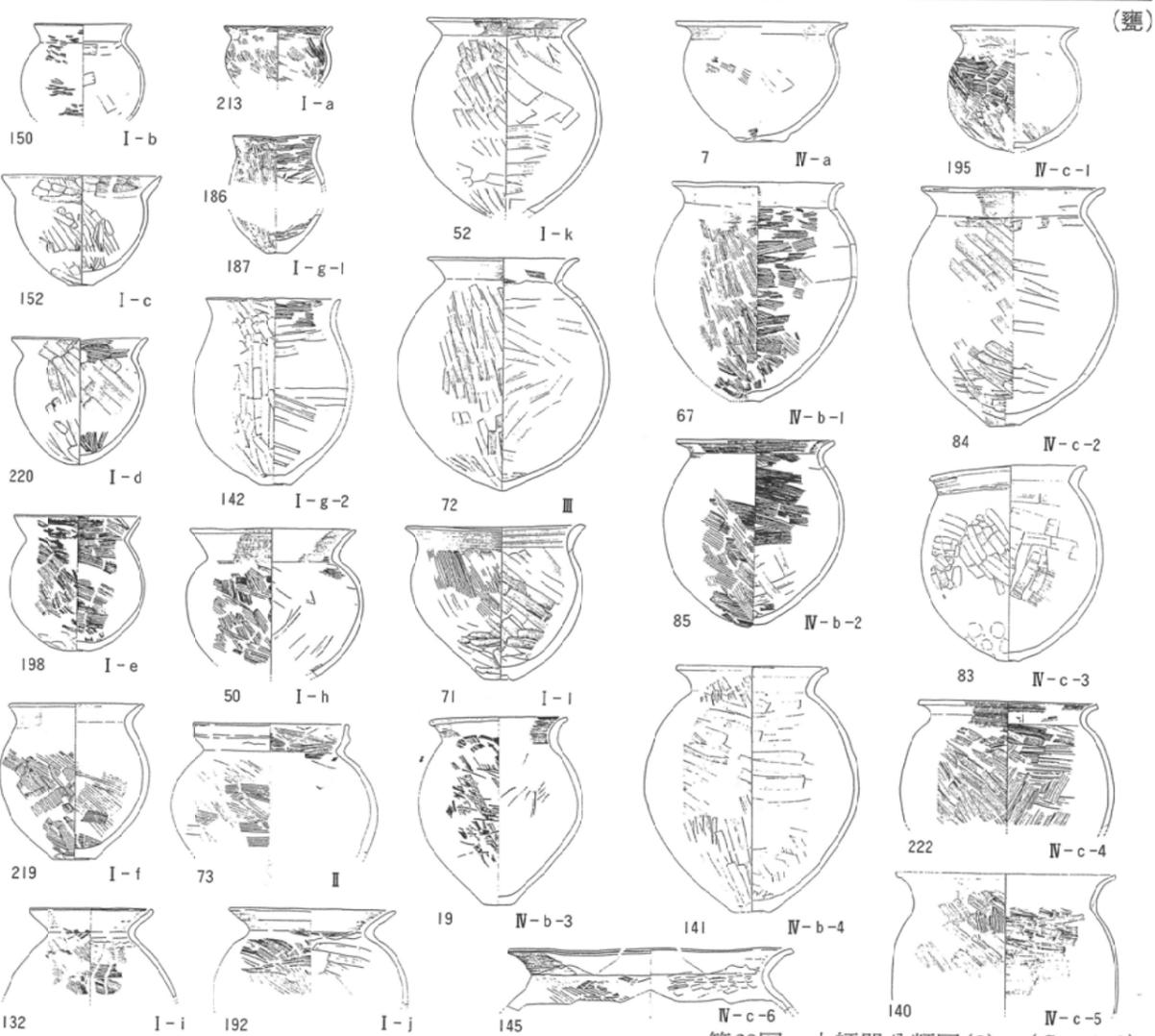
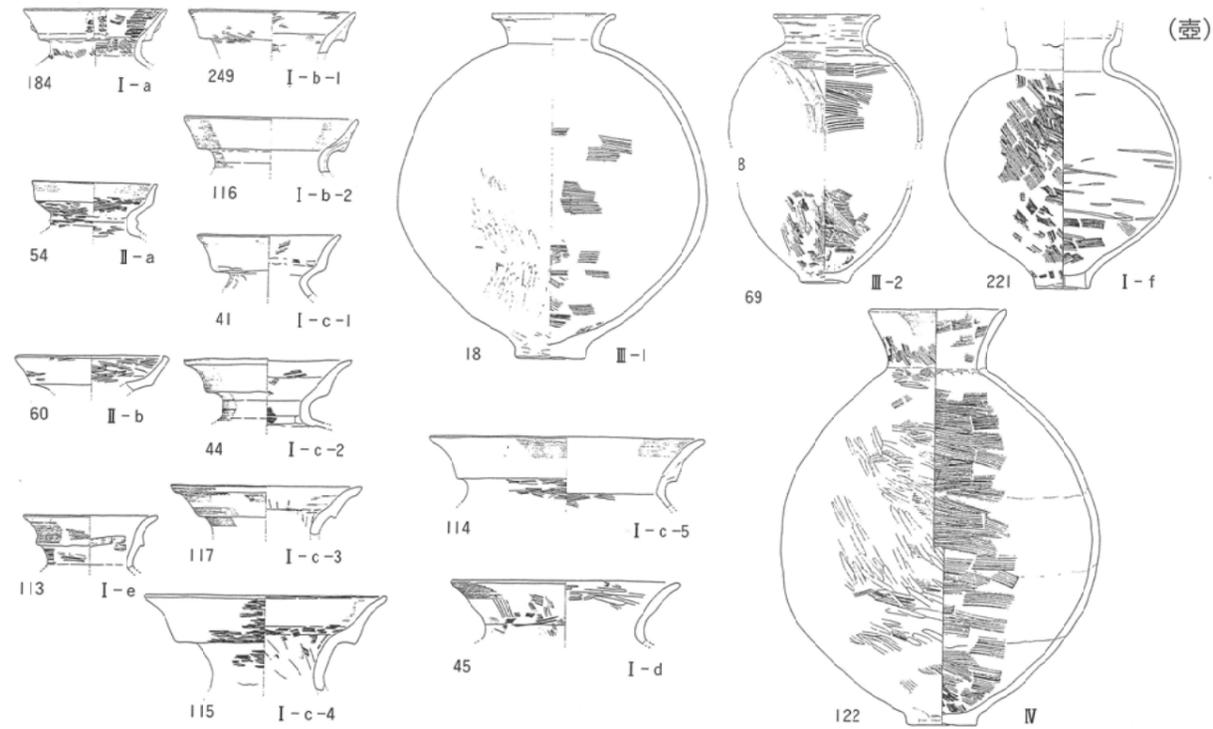
- (1) 阿部正己 1921 「古墳時代に於ける庄内の文化」(『考古学雑誌』第11巻5号)
- (2) 川崎利夫 1972 「庄内平野の土師式土器」(『庄内考古学』第11号 庄内考古学研究会)
- (3) 米地文夫 1978 「地形分類」(『土地分類基本調査 鶴岡』)
- (4) 川崎利夫 1980 「古墳時代の庄内地方」(『庄内考古学』第17号 庄内考古学研究会)
- (5) 佐藤庄一 1983 「関B遺跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第68集 山形県教育委員会
- (6) 阿部明彦 1985 「矢馳A遺跡・矢馳B遺跡・清水新田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第127集 山形県教育委員会
- (7) 酒井英一 1986 「東田川郡藤島町三和出土の古式土師器」(『庄内考古学』第17号 庄内考古学研究会)
- (8) 安部 実 1987 「生石2遺跡発掘調査報告書(3)」山形県埋蔵文化財調査報告書第117集 山形県教育委員会
- (9) 阿部明彦 1989 「助作遺跡・山田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財報告書第143集 山形県教育委員会
- (10) 阿部明彦 1990 「(9)畑田遺跡」(『分布調査報告書(7)』山形県埋蔵文化財報告書第148集 山形県教育委員会)
- (11) 黒坂雅人 1990 「助作遺跡第1次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第162集 山形県教育委員会
- (12) 佐々木洋治 1991 「(4)畑田遺跡」(『分布調査報告書(8)』山形県埋蔵文化財調査報告書第163集 山形県教育委員会)
- (13) 阿部明彦 1992 「庄内地方の古墳時代史」(『加藤稔選歴記念論文集』)
- (14) 佐藤庄一 1994 「五百刈遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 山形県埋蔵文化財センター

- (15) 阿子島功 1994 「山形県海岸平野と内陸盆地の遺跡分布と微地形 — 250m格子データベースから」(『日本地理学会予稿集』No45 日本地理学会)
- 鈴木雅寿
- 佐野浩士
- (16) 高橋 保 1979 「北陸自動車道 埋蔵文化財発掘調査報告書 下谷地遺跡」新潟県教育委員会
- (17) 櫻田 誠 1987 「第一小学校々地内漆町遺跡発掘調査報告書」石川県小松市教育委員会
- (18) 楠 政勝 1989 「金沢市西念・南新保遺跡II」金沢市教育委員会
- (19) 森田克行 1990 「住まいと生産活動」(『季刊考古学』第32号)
- (20) 田嶋明人 1991 「北陸の掘立柱建物」(『弥生時代の掘立柱建物』埋蔵文化財研究会)
- (21) 南 久和 1991 「金沢市新保本町東遺跡」金沢市教育委員会
- (22) 久田正弘 1991 「北陸地方西部における弥生時代の地域性について」(『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報3』社団法人石川県埋蔵文化財保存協会)
- (23) 浜崎悟司 1993 「加賀の集落構造の推移」(『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会)
- (24) 坂井秀弥 1993 「古墳出現前後における越後の土器様相」(『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』)
- 川村浩司 1993 「I 北陸北東部の古墳出現前後の様相」(『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会)
- 辻 秀人 1993 「東北南部における古墳出現期の土器編年— その1 会津盆地—」(『東北学院大学論集』歴史学・地理学第26号)



※各遺物実測図下の番号は左が遺物番号、右が分類番号である。

第67図 土師器分類図(1) (S=1:8)

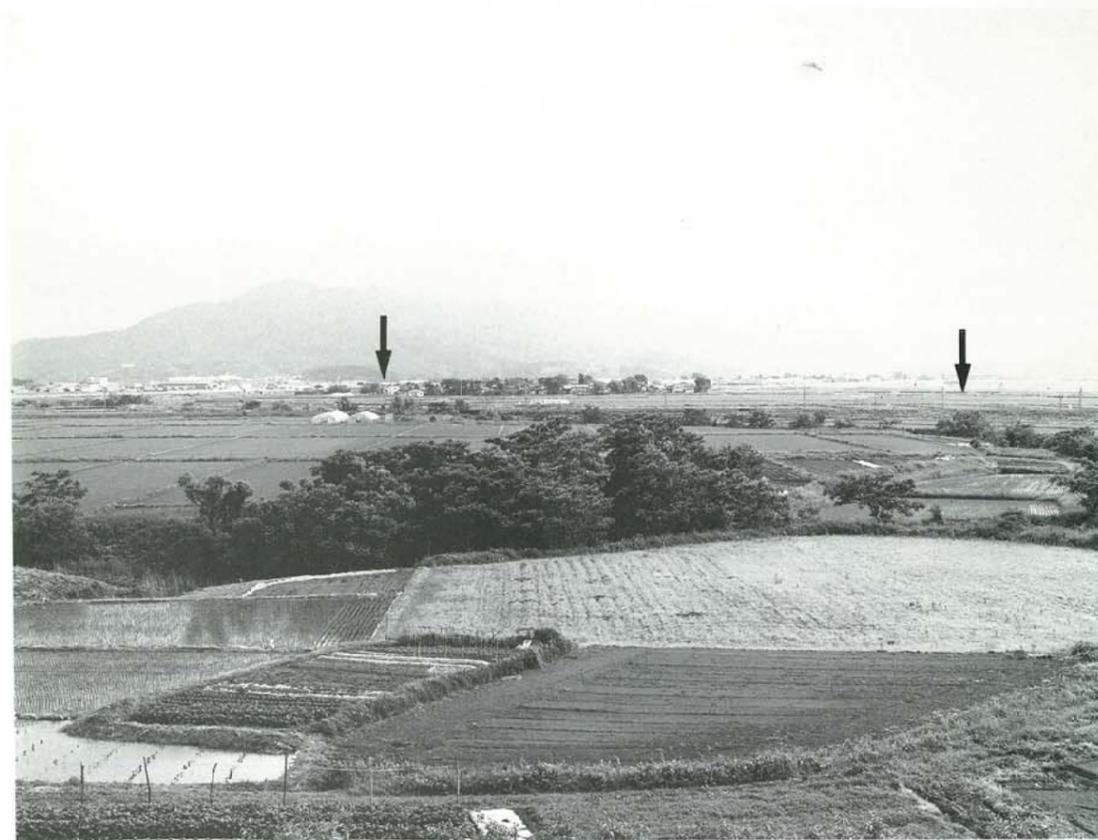


第68図 土師器分類図(2) (S=1:8)

報告書抄録

ふりがな	はたけだいせき・なかのいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	畑田遺跡・中野遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第22集							
編著者名	眞壁 建 丸山晶子 黒坂広美							
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-31 山形県上市市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301							
発行月日	西暦 1995年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はたけだ 畑田	やまがたけん 山形県 つるおかし 鶴岡市 おおあざおおよどがわ 大字大淀川 あざはたけだ 字畑田	06203	昭和63 年度登 録	38度 44分 14秒	139度 47分 35秒	19930512~ 19931119	11,060	東北横断自 動車道(朝 日~酒田間) 建設工事
なかの 中野	やまがたけん 山形県 つるおかし 鶴岡市 おおあざおおよどがわ 大字大淀川 あざなかの 字中野	06203	昭和63 年度登 録	38度 44分 25秒	139度 47分 25秒	19930517~ 19930922	3,544	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
畑田	集落跡	古墳前期	周溝を伴う住居 3軒 竪穴住居 3軒 土坑 37基 柱穴 33基 溝 15条 性格不明遺構 15基 河川跡	土師器 甕、壺、埴、鉢 器台、高坏 須恵器 甕 土製品 土錘 石器 凹石 石製品 砥石	周溝を伴う住居を中 心に大溝や河川跡か ら北陸系の土師器が 出土する。			
中野	集落跡	古墳前期 ~中期	土坑 26基 柱穴 25基 溝跡 2条 性格不明遺構 8基	土師器 甕、壺、器台 高坏 弥生土器 深鉢				
		平安	土坑 1基	須恵器 高台付坏、坏 赤焼土器 土埴				

版 圖



遺跡遠景（北から） 左：畑田遺跡 右：中野遺跡



中野遺跡発掘前状況（南から）

図版2



重機稼動状況（西から）



鍬入れ式風景（南から）



表土除去風景（北から）



作業風景（東から）

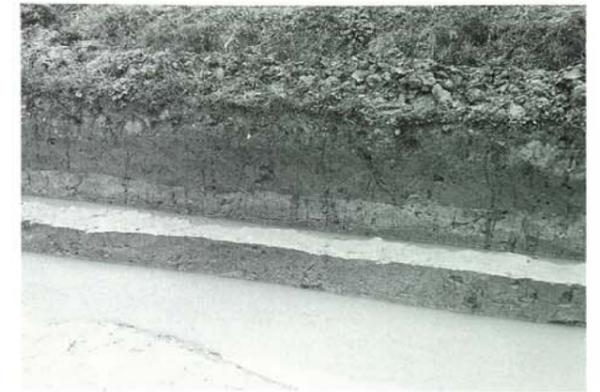


現地説明会風景（南から）

図版3



調査区南側北壁基本層序（北から）



基本層序d（東から）



調査区北西側検出状況（南から）



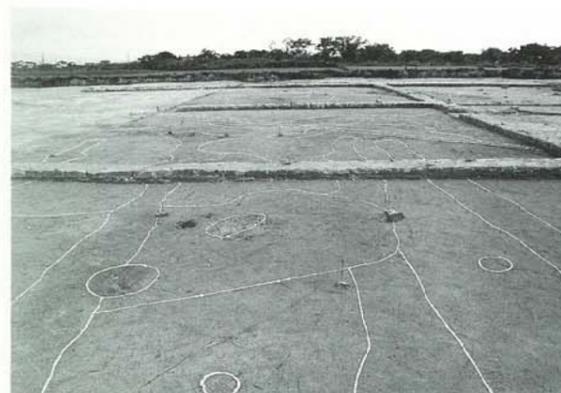
調査区北西側検出状況（西から）



ST182付近検出状況（南から）



調査区北東側検出状況（南から）



畝状遺構検出状況（西から）

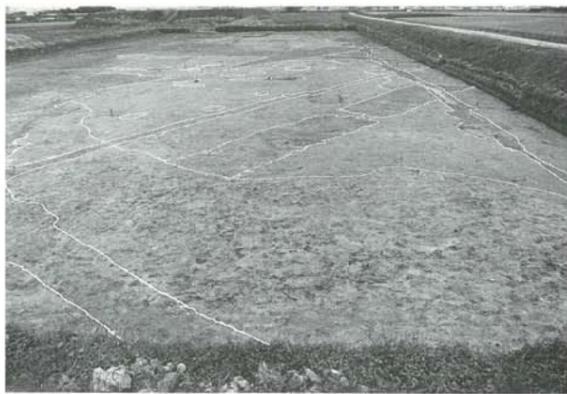


SD202検出状況（南から）

図版4



SD202検出状況 (東から)



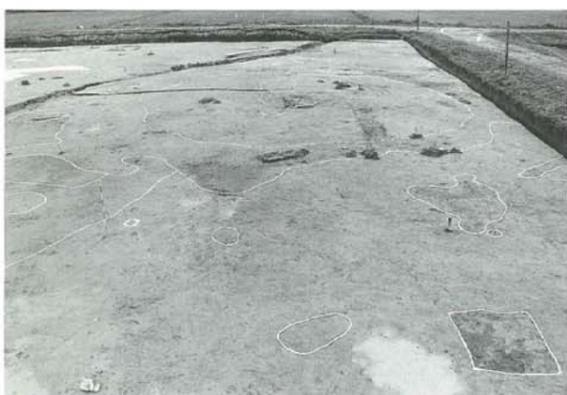
調査区南側検出状況 (北から)



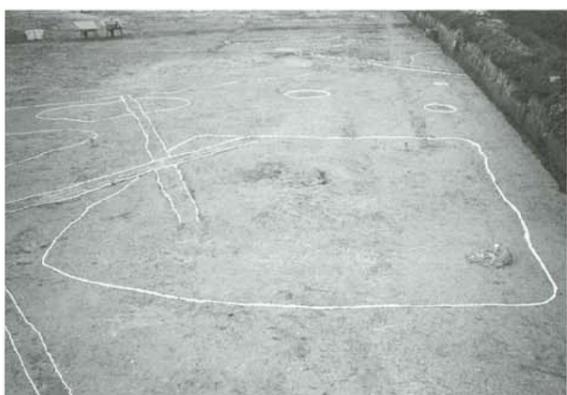
河川跡検出状況 (東から)



ST150検出状況 (西から)



SD100検出状況 (西から)



ST181検出状況 (南から)



ST103検出状況 (東から)



SD101検出状況 (東から)

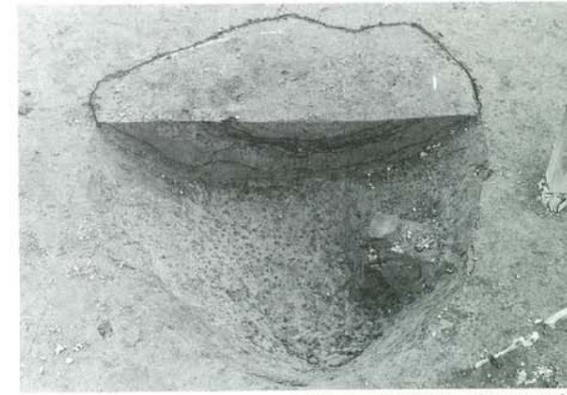
図版5



ST103検出状況 (東から)



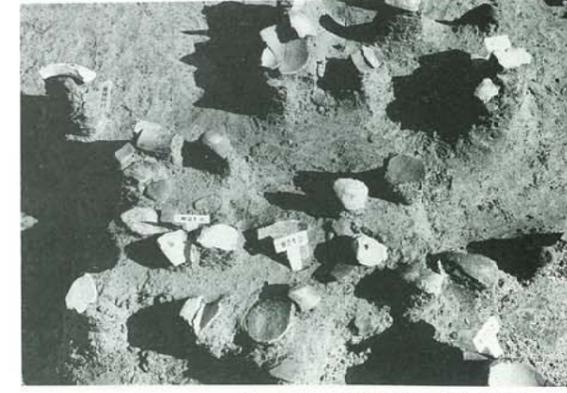
SD100西側土層断面 (東から)



EK102土層断面 (南から)

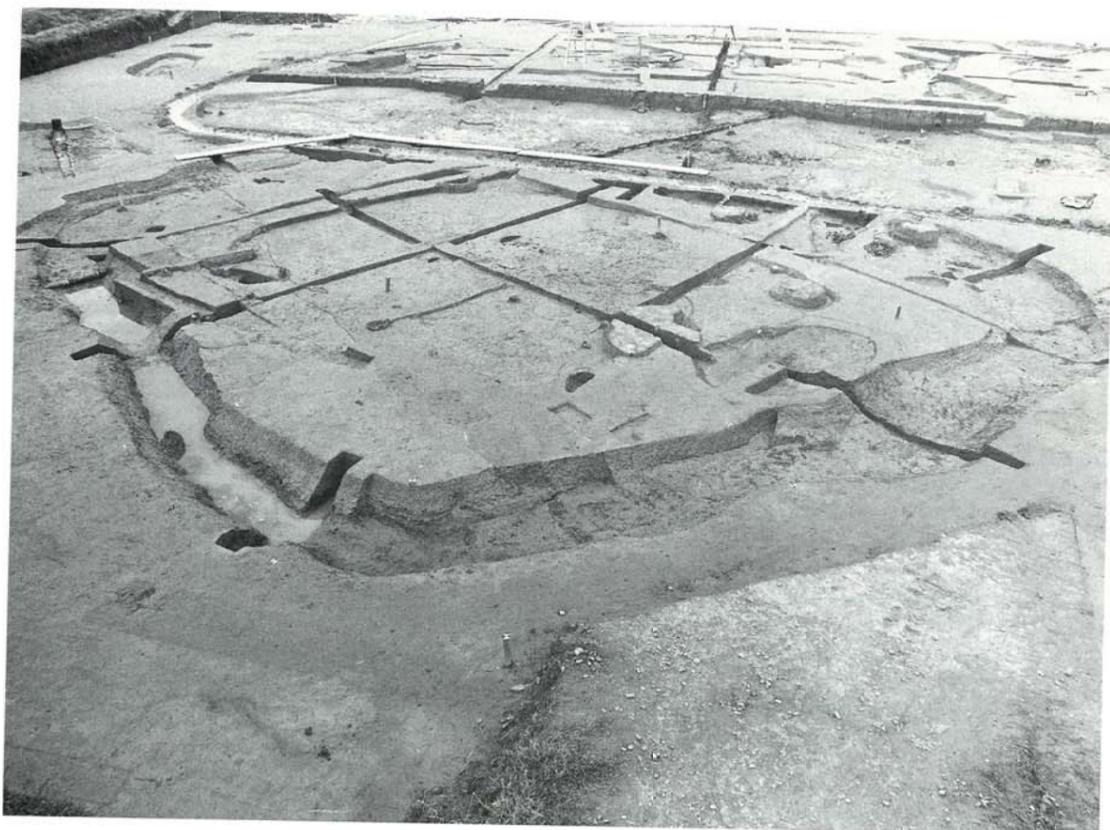


RP120出土状況 (南から)

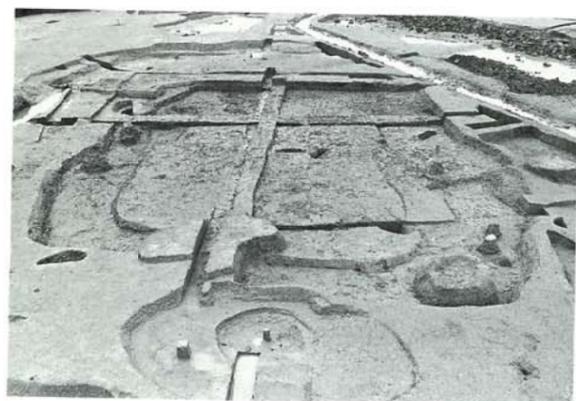


SD100土器出土状況 (西から)

図版6



ST201、SD202完掘状況（東から）



ST201完掘状況（東から）



東西ベルト土層断面（東から）



SD202ベルト土層断面（東から）

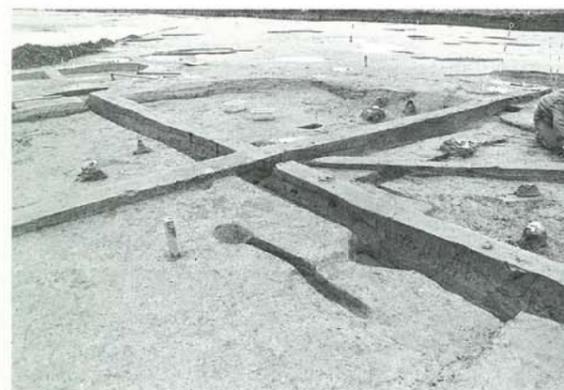


RP259出土状況（南から）

図版7



ST150完掘状況（南から）



ST150南北土層断面（西から）



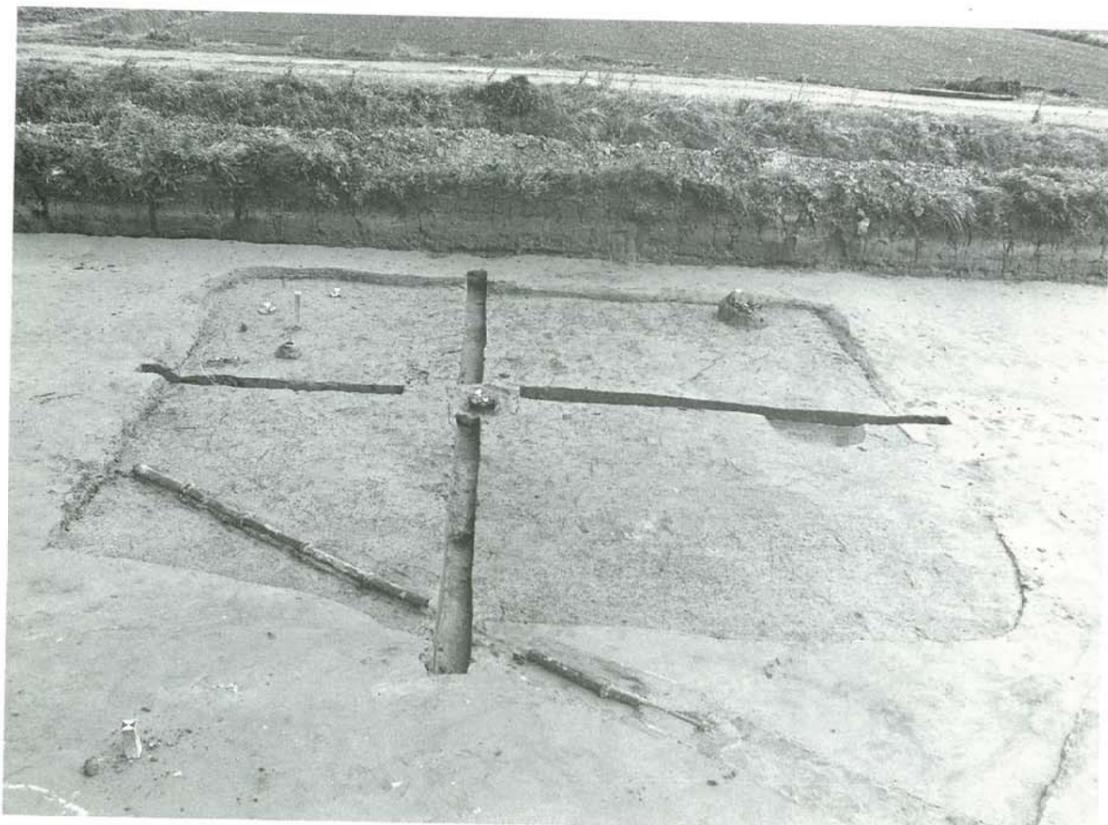
ST150東側土層断面（北から）



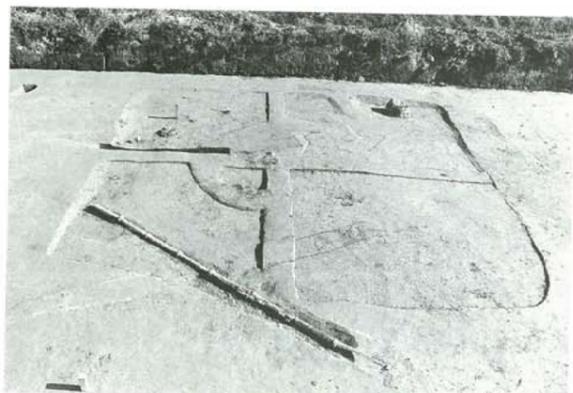
RP181出土状況（南から）



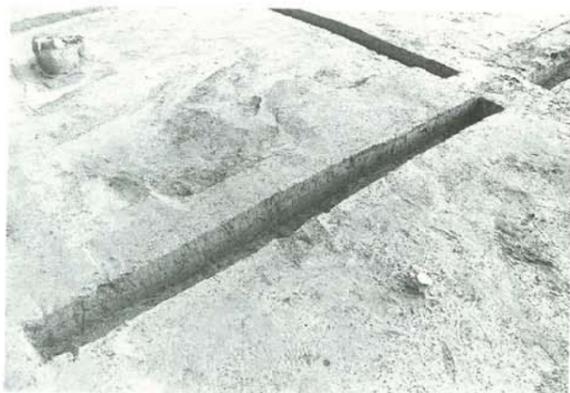
RP224・225出土状況（南から）



ST181完掘状況（西から）



ST181検出状況（西から）



ST181東側土層断面（北から）



RP324出土状況（東から）



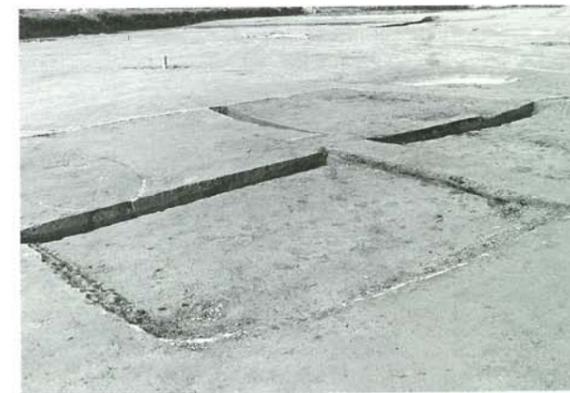
ST181北側土層断面（東から）



ST182土器出土状況（南から）



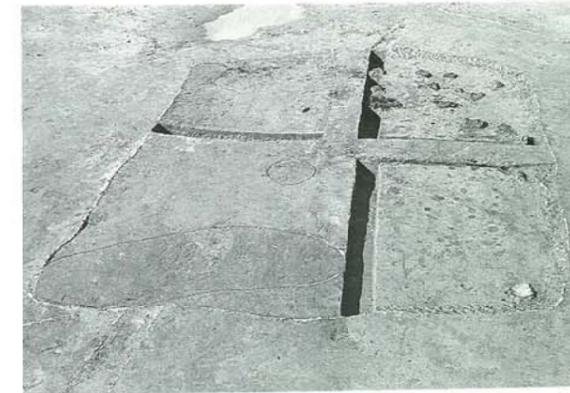
ST182完掘状況（北から）



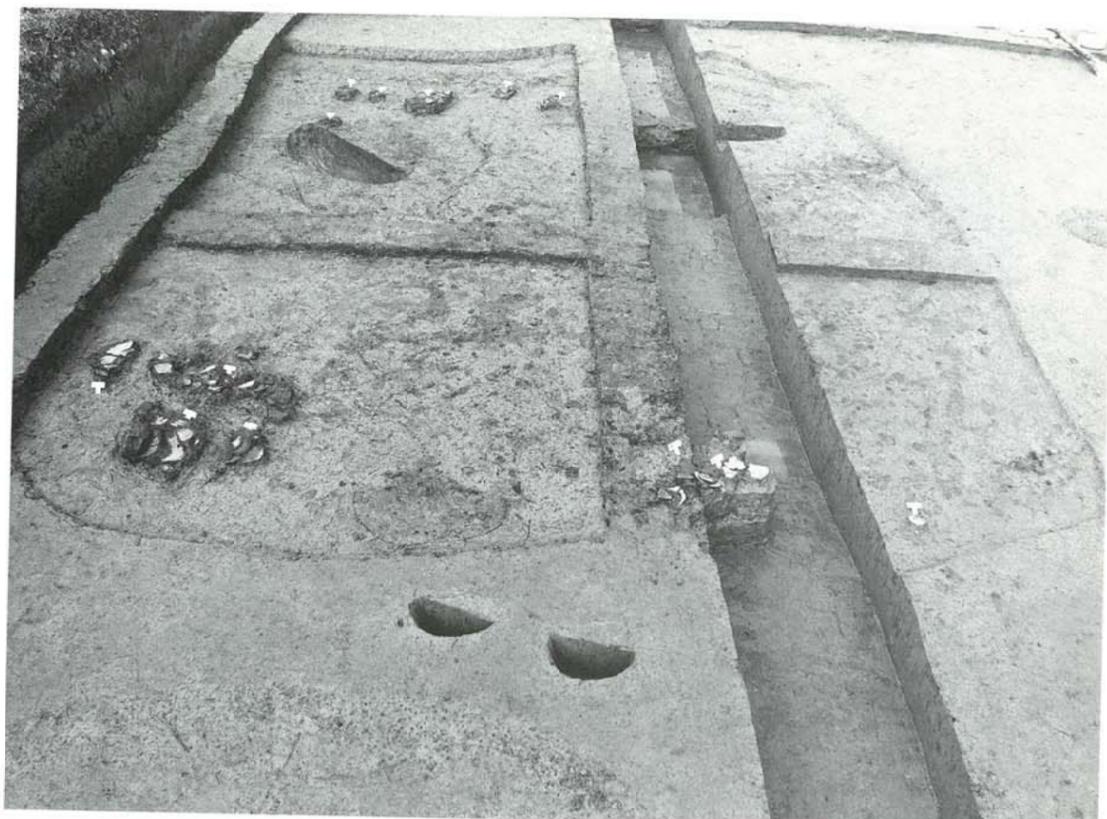
ST182北側土層断面（東から）



RP226出土状況（南から）



ST182精査状況（東から）



ST232検出状況 (南から)



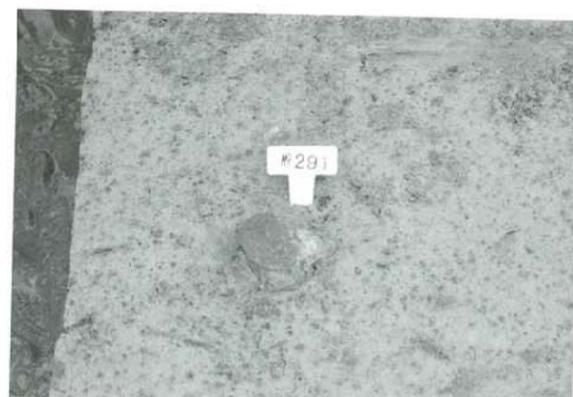
ST232土層断面 (東から)



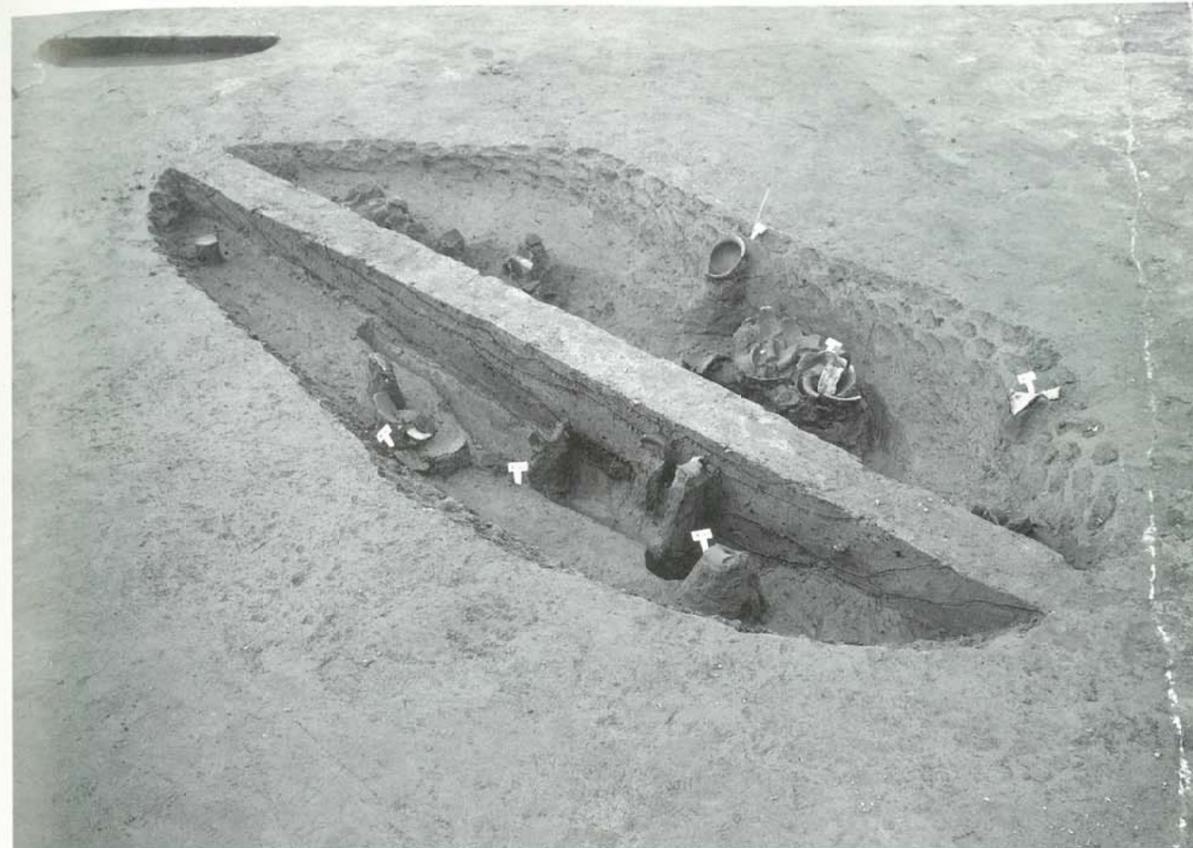
EK263土層断面 (南から)



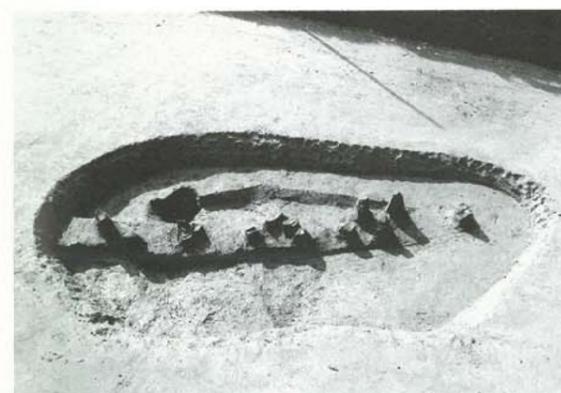
ST232土器出土状況 (南から)



RQ291出土状況 (南から)



SK111検出状況 (南から)



SK111完掘状況 (北から)



RP192出土状況 (東から)

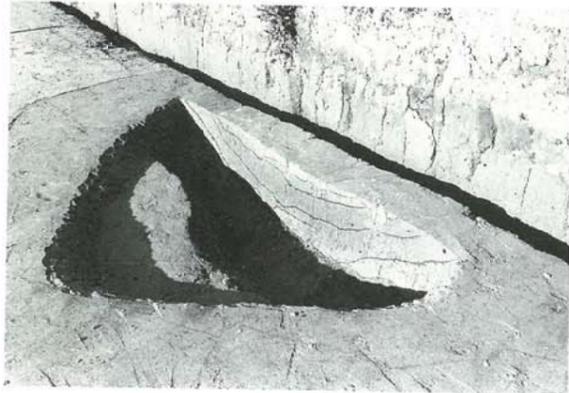


RP193出土状況 (西から)



RP194出土状況 (西から)

図版12



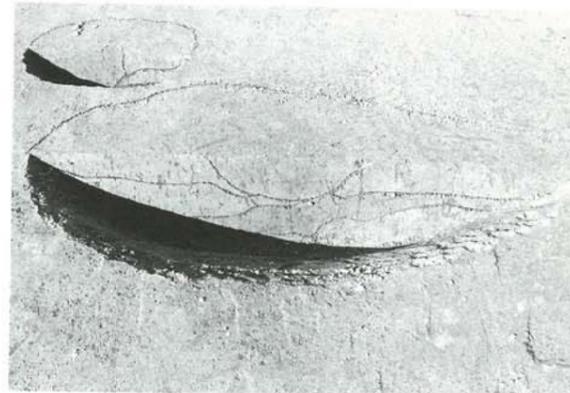
SK125土層断面 (南から)



SK132土層断面 (西から)



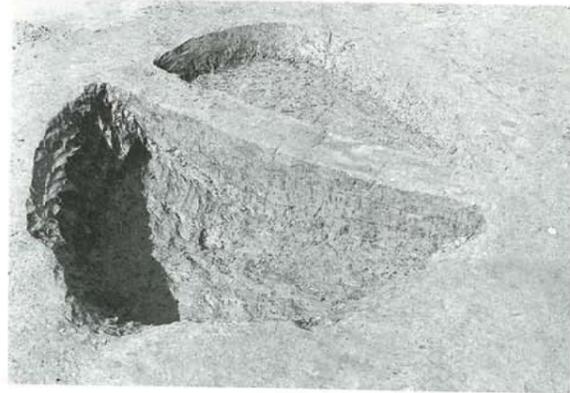
SK133土層断面 (南から)



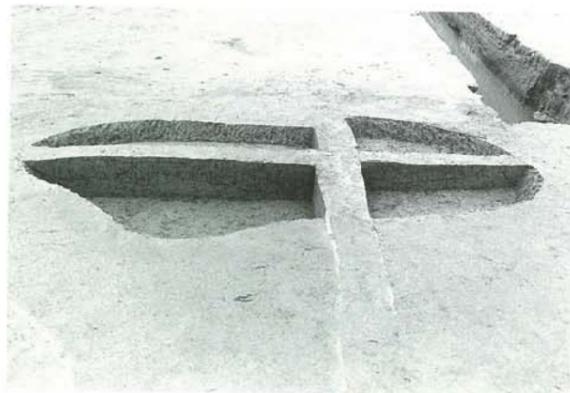
SK145土層断面 (南から)



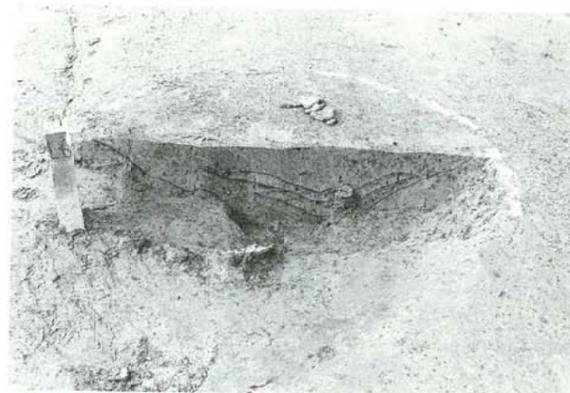
SK165土層断面 (北から)



SK175土層断面 (南から)



SK178土層断面 (南から)

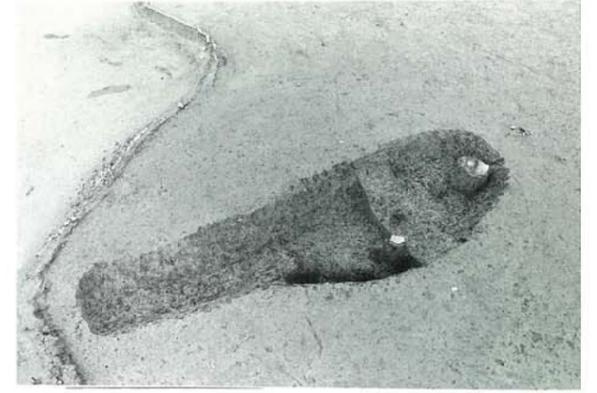


SK200土層断面 (南から)

図版13



SK129土層断面 (西から)



SK129完掘状況 (西から)



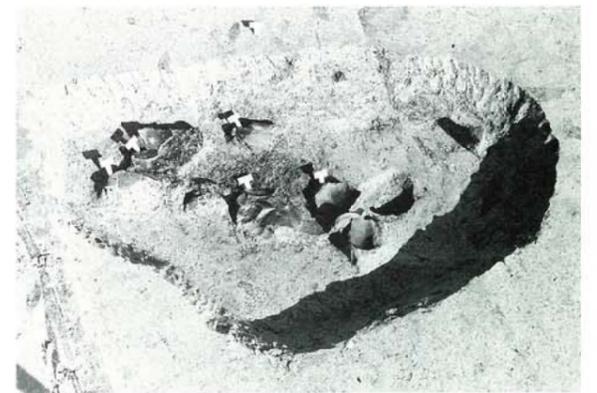
SK174土層断面 (南から)



SK174完掘状況 (南から)



SK176土層断面 (東から)



SK176完掘状況 (南から)

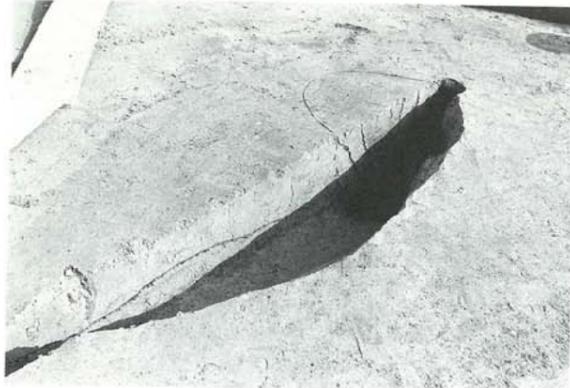


SK203完掘状況 (西から)

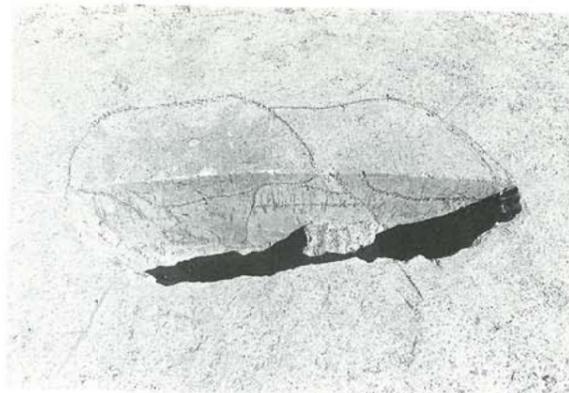


SK233完掘状況 (西から)

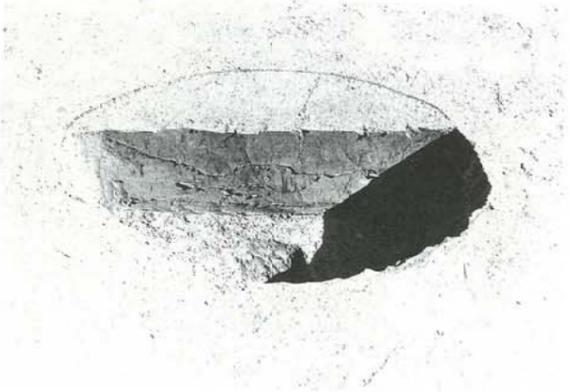
図版14



SP122土層断面 (西から)



SP139土層断面 (西から)



SP143土層断面 (西から)



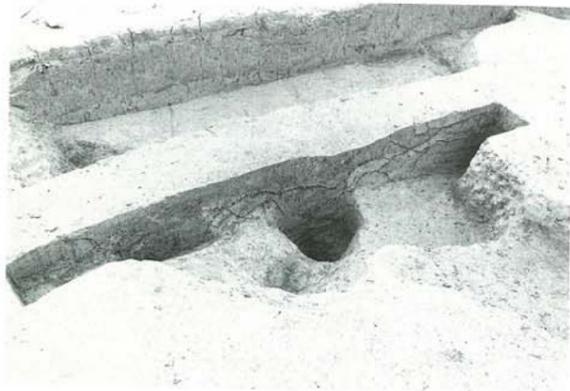
SP168土層断面 (南から)



SP209土層断面 (西から)



SP207完掘状況 (西から)



SP247土層断面 (東から)



SP247完掘状況 (東から)

図版15



SD101、Q-9土器出土状況 (南から)



SD101、Q-9東側土器出土状況 (南から)



SD101、Q-9下層土器出土状況 (南から)



SD101、Q-10~11土器出土状況 (南から)



SD101、Q-10土器出土状況 (南から)

図版16



RP126出土状況 (南から)



RP117出土状況 (南から)



RP125、119出土状況 (南から)



RP118出土状況 (南から)



RP142出土状況 (南から)



RP158出土状況 (南から)



RP178、173出土状況 (南から)



RQ305出土状況 (南から)

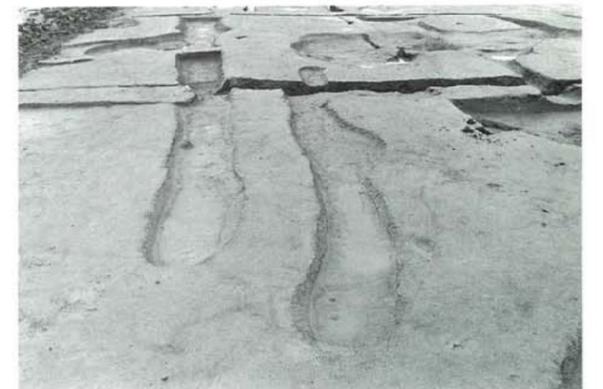
図版17



畝状遺構完掘状況 (西から)



SD152・153完掘状況 (東から)



SD157・158完掘状況 (東から)



SD128完掘状況 (西から)



SD183完掘状況 (南から)

図版18



SX156土層断面 (南から)



SX156完掘状況 (南から)



EP242土層断面 (東から)



EP243土層断面 (南から)



SX107完掘状況 (西から)



SX110土層断面 (北から)



SX130・131完掘状況 (西から)

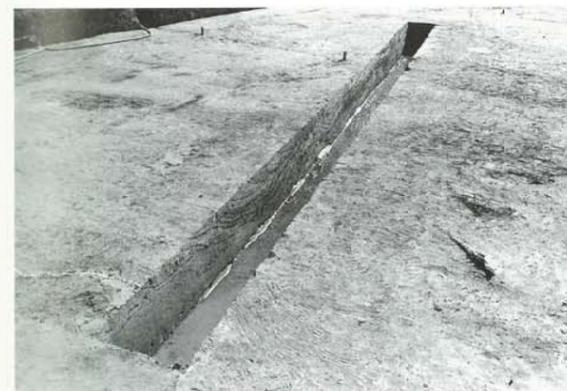


SX234土層断面 (西から)

図版19



河川跡土器出土状況 (南から)



河川跡Aトレンチ土層断面 (西から)



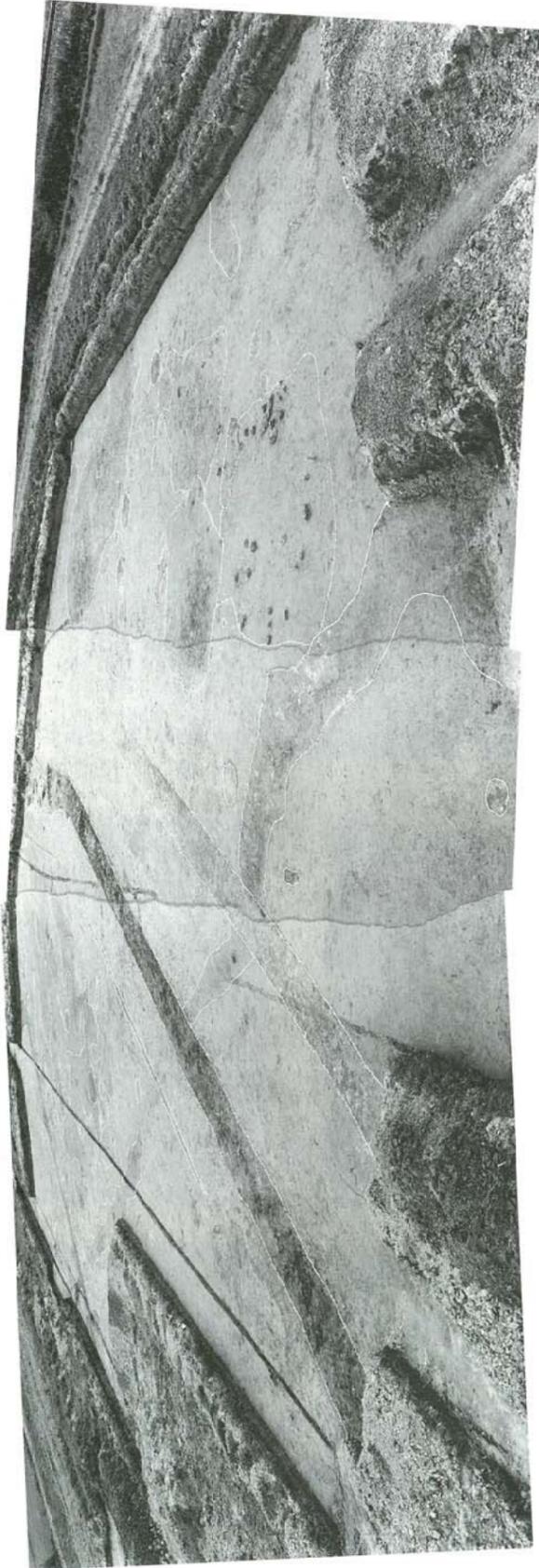
河川跡Bトレンチ土層断面 (南から)



RP318出土状況 (南から)



RP321出土状況 (南から)



A区検出状況全景（北から）



B区検出状況全景（北から）



B区南東部検出状況（南から）



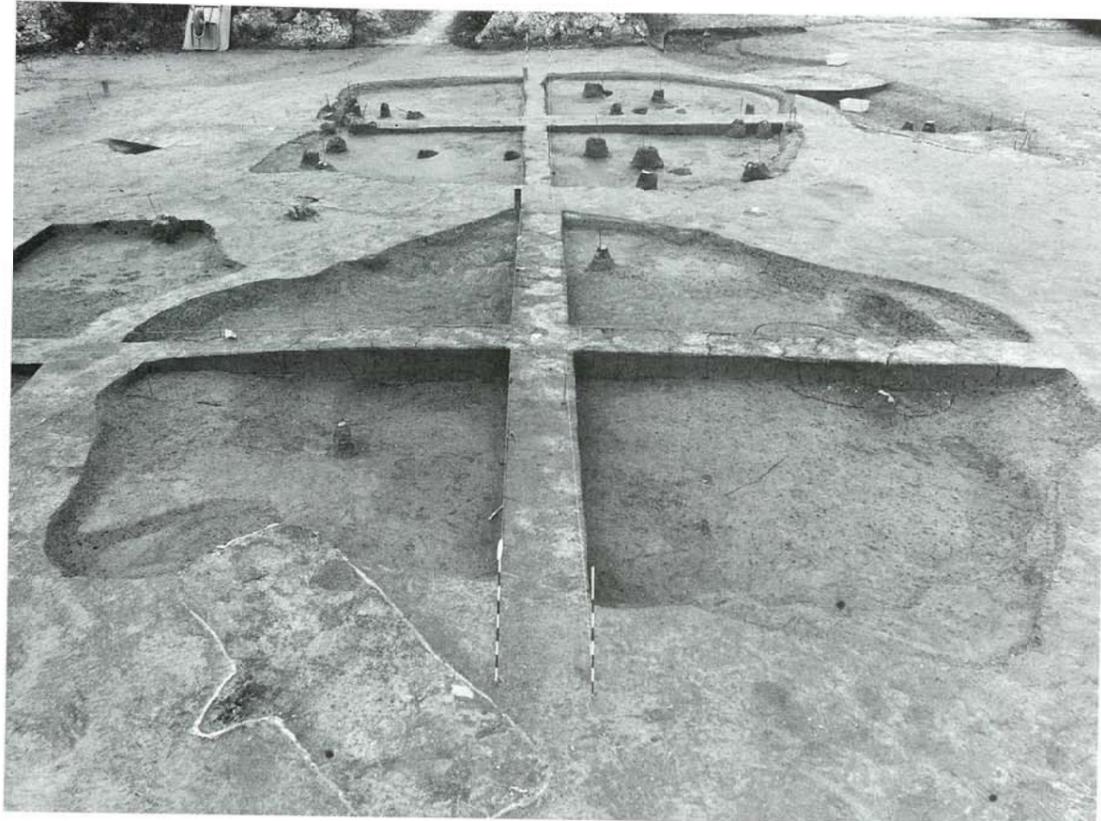
B区南西部検出状況（南から）



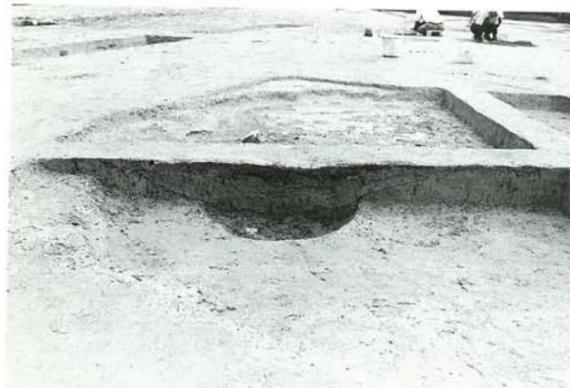
B区北東部検出状況（北から）



B区北西部検出状況（北から）



SX5完掘状況 (南から)



SX5東側土層断面 (北から)



SX5土層断面 (南から)



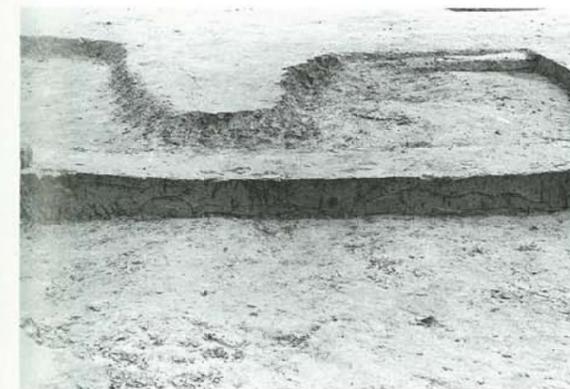
SX7土器出土状況 (南から)



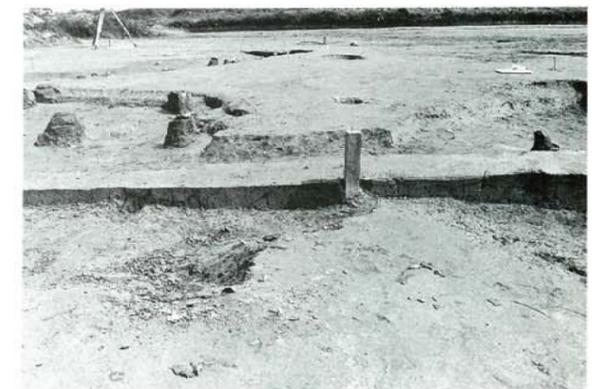
SX6土層断面 (西から)



SX5・6・7完掘状況 (北から)



SX5・6土層断面 (北から)



SX5・7土層断面 (西から)



SX7土器出土状況 (南から)



SX7土器出土状況 (東から)



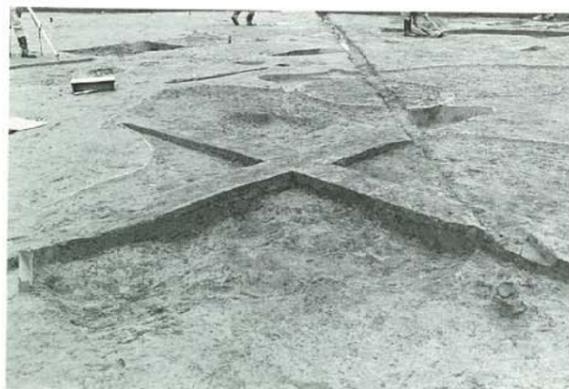
E79土層断面 (東から)



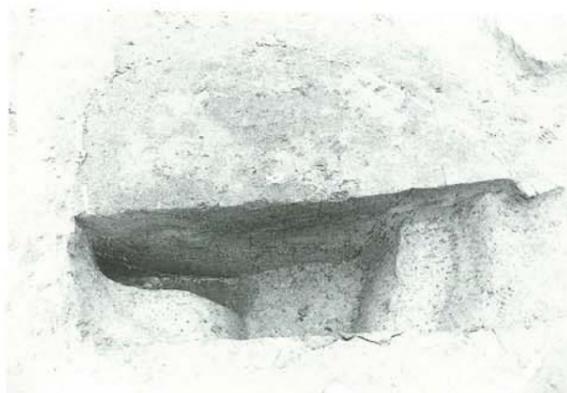
SX10東側完掘状況 (北から)



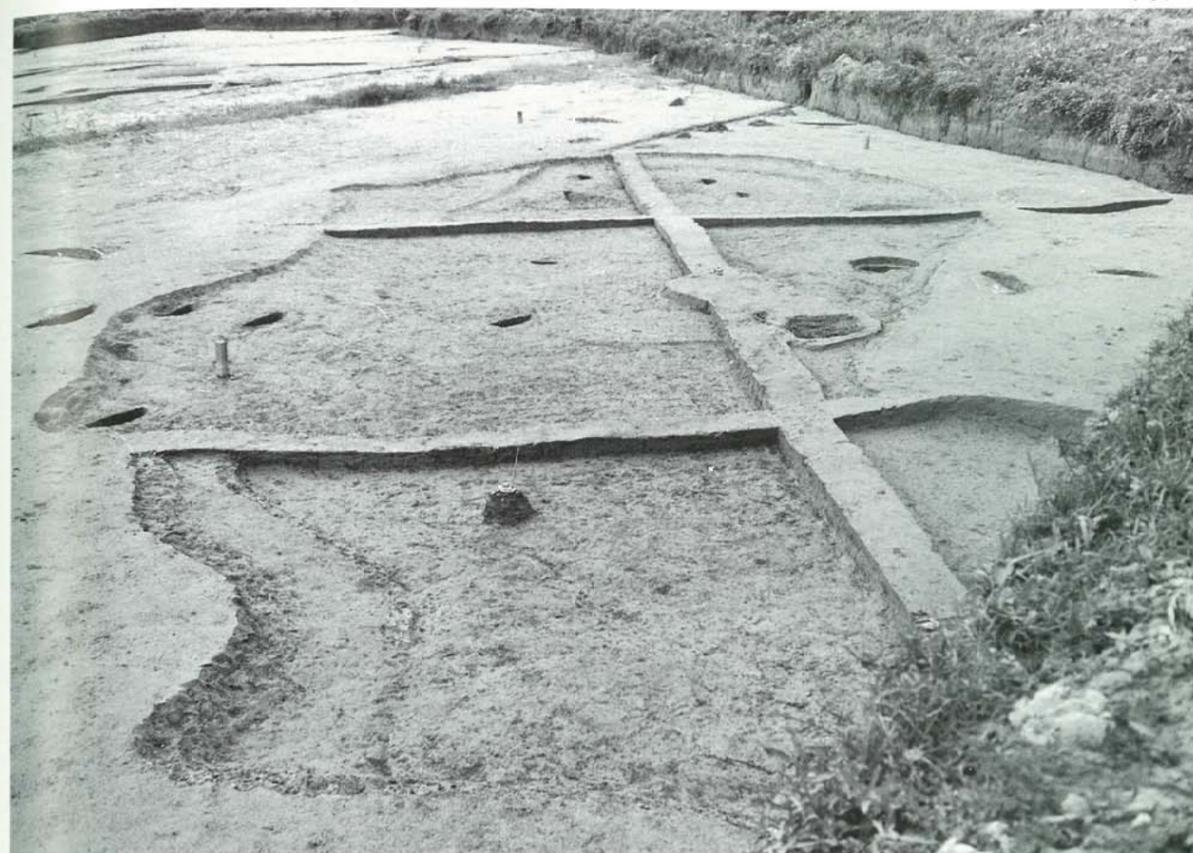
SX10西側完掘状況 (北から)



SX10東側土層断面 (西から)



E37土層断面 (西から)



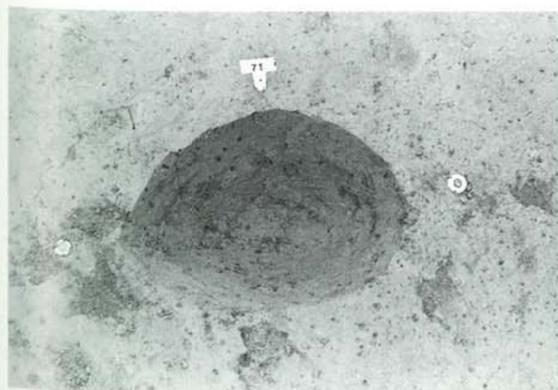
SX16完掘状況 (西から)



SX16完掘状況 (西から)



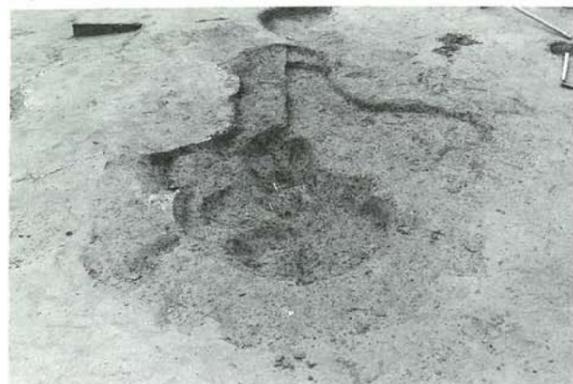
EK65完掘状況 (南から)



EP71完掘状況 (西から)



EP73完掘状況 (西から)



SK1・4土層断面 (南から)



SK1遺物出土状況 (南から)



SK39土層断面 (西から)



SK39完掘状況 (西から)



SK21完掘状況 (西から)



SK56土層断面 (東から)



RP1027出土状況 (東から)



RP1028出土状況 (東から)



SD9完掘状況 (西から)



SD31完掘状況 (西から)



SD31土層断面 (西から)

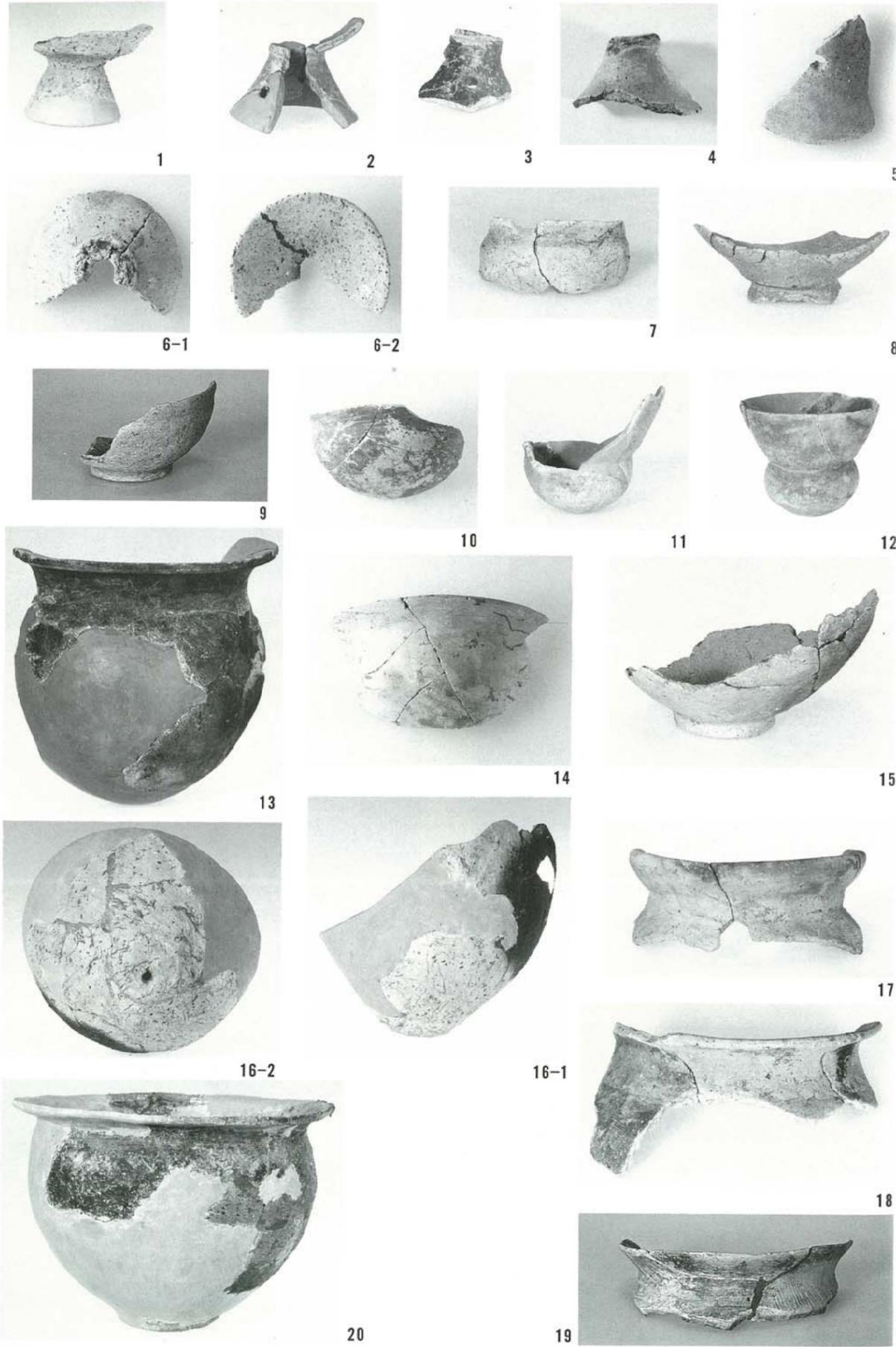


SD9土器出土状況 (西から)

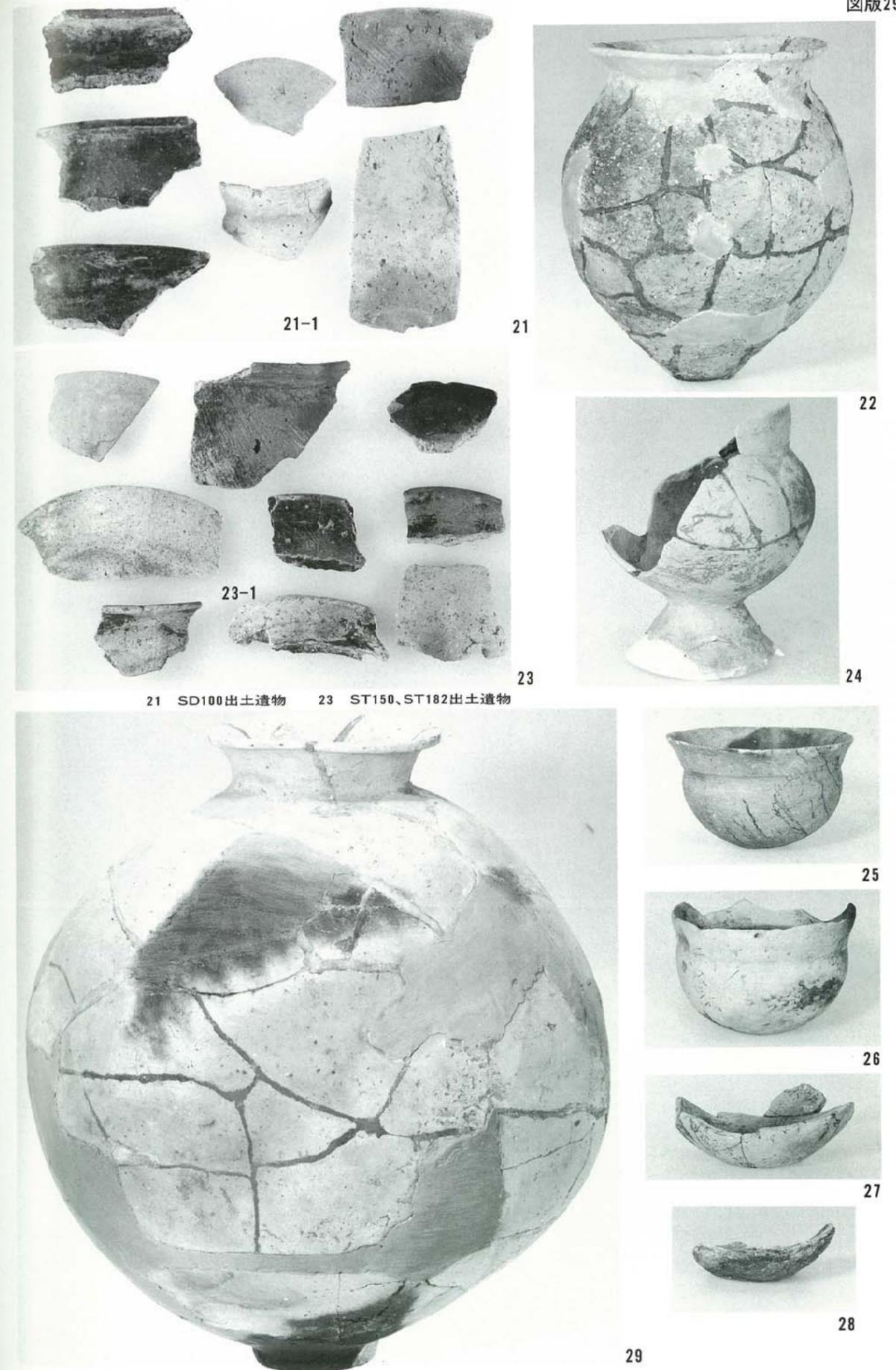


RP1066出土状況 (西から)

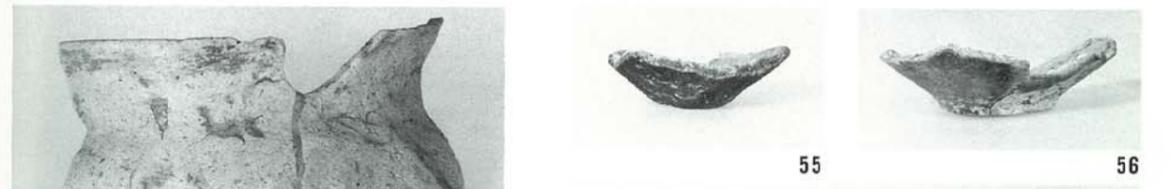
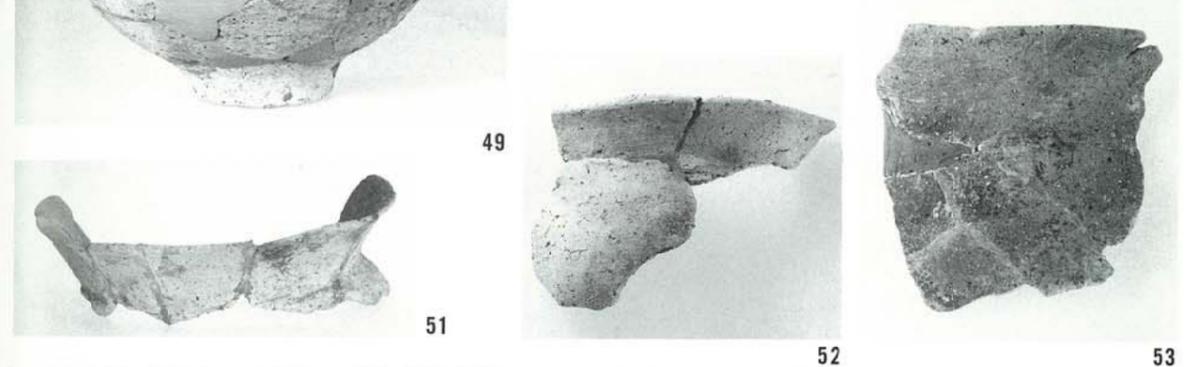
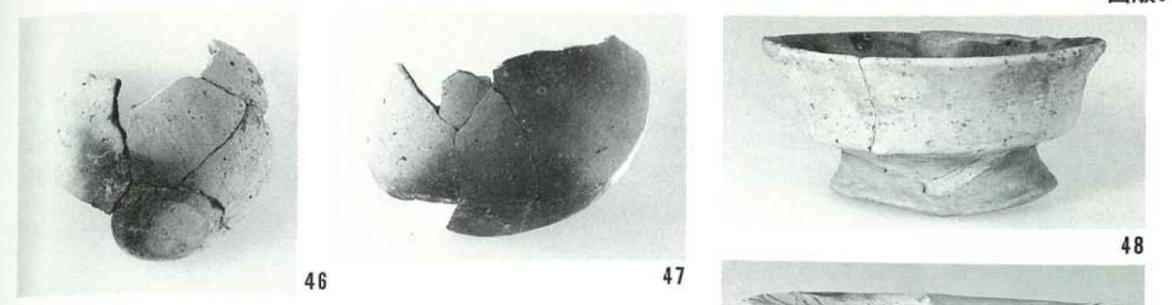
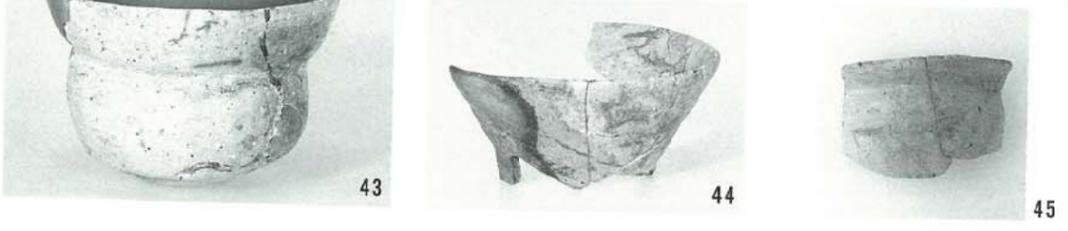
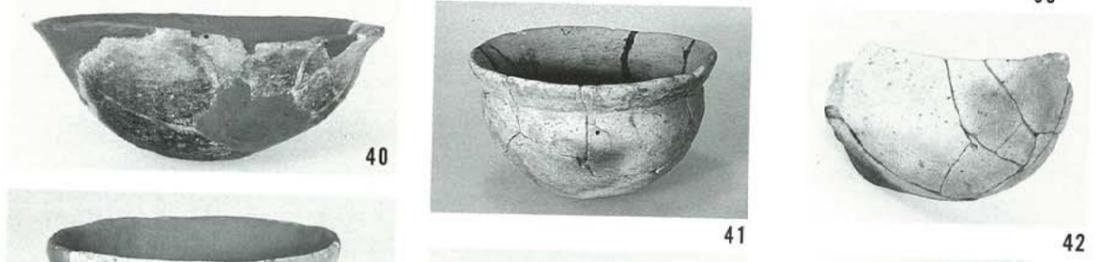
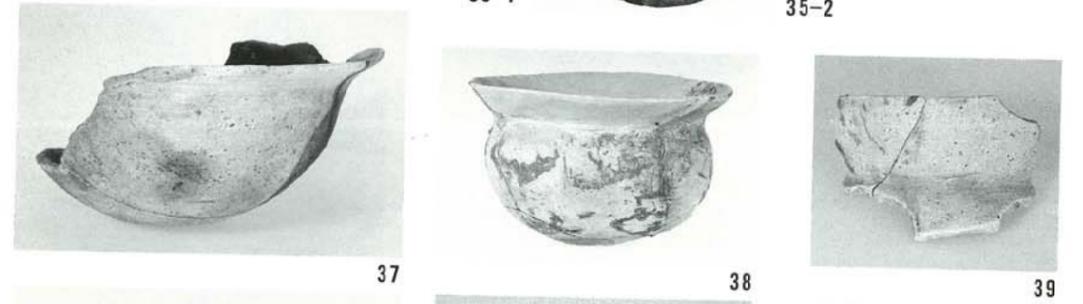
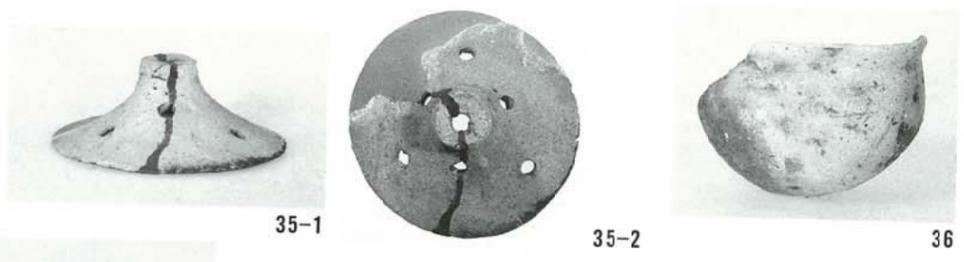
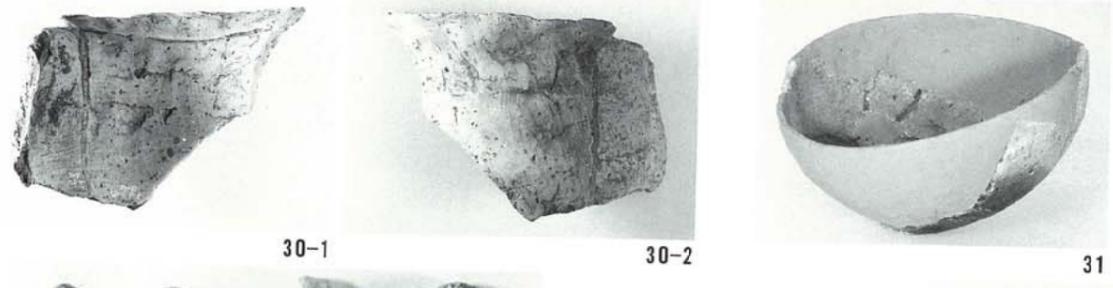
図版28



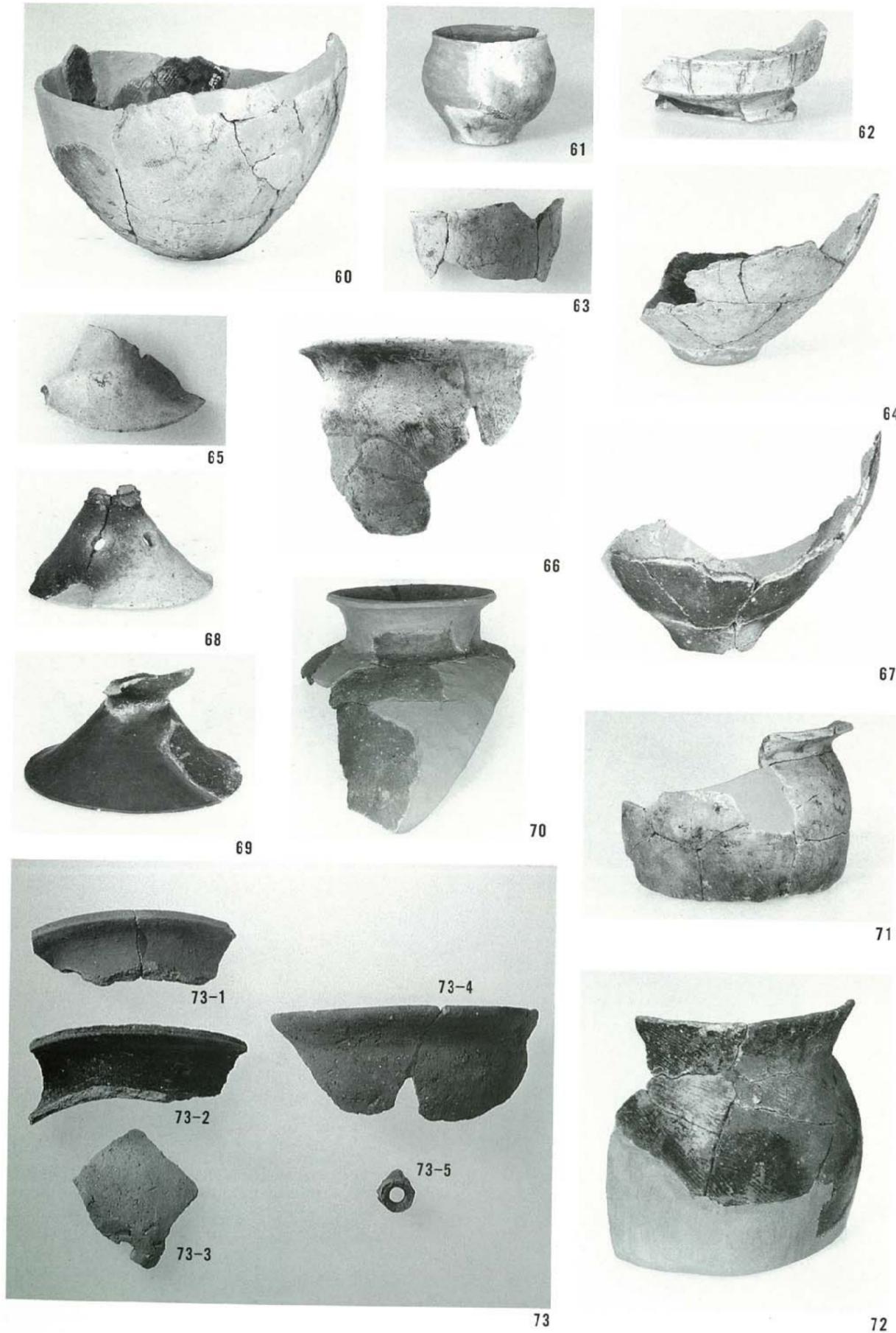
図版29



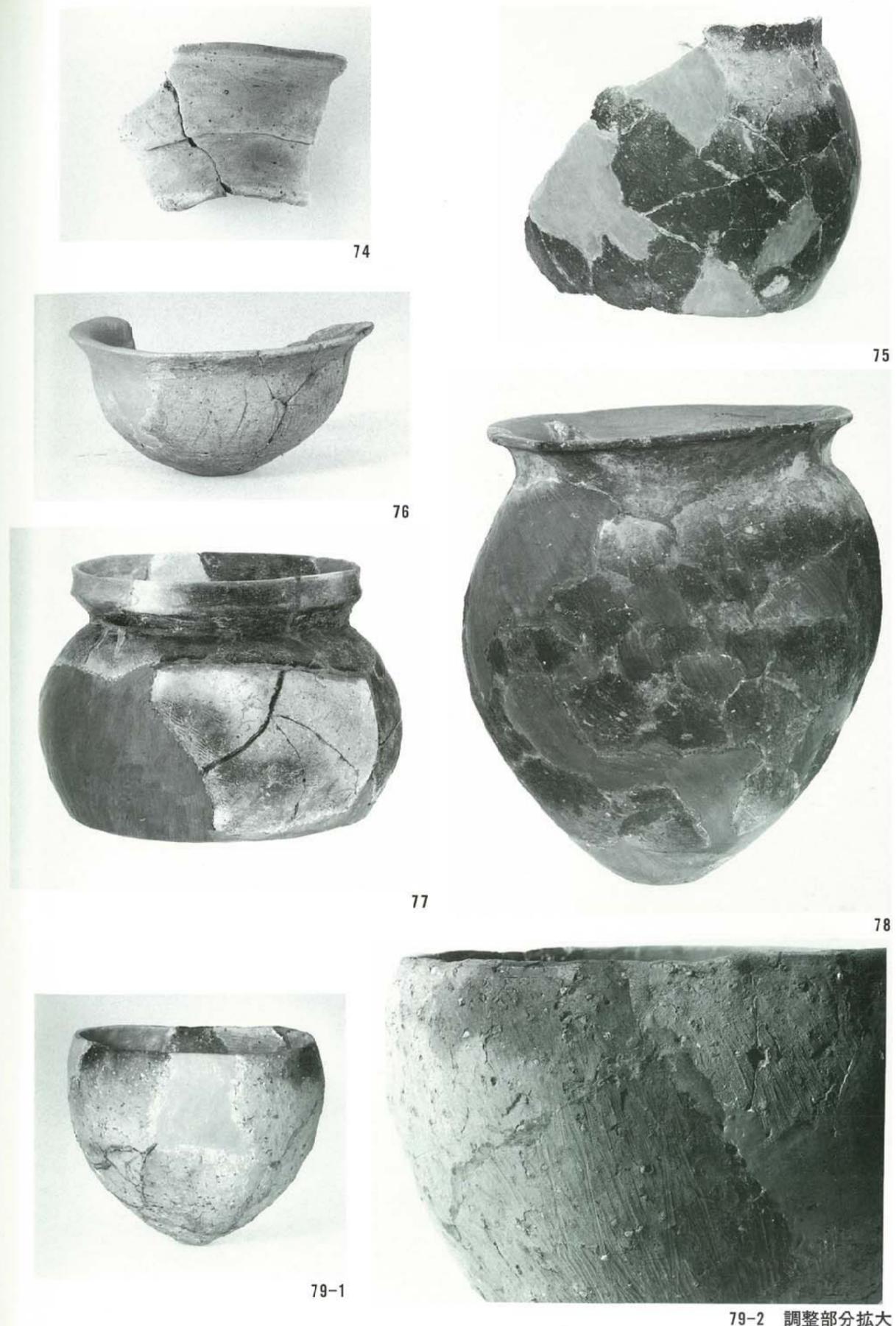
21 SD100出土遺物 23 ST150、ST182出土遺物



図版32



図版33





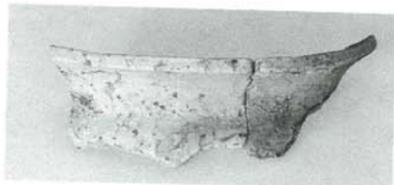
80



81 SK111出土鉄石英



82



84



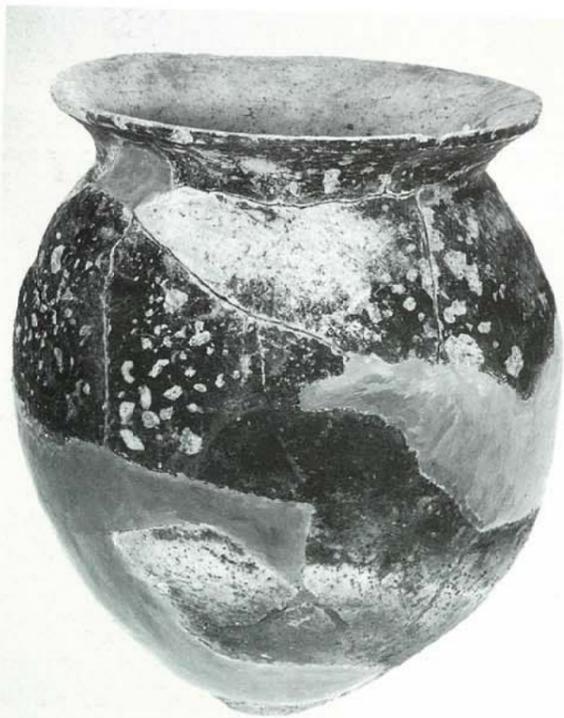
85



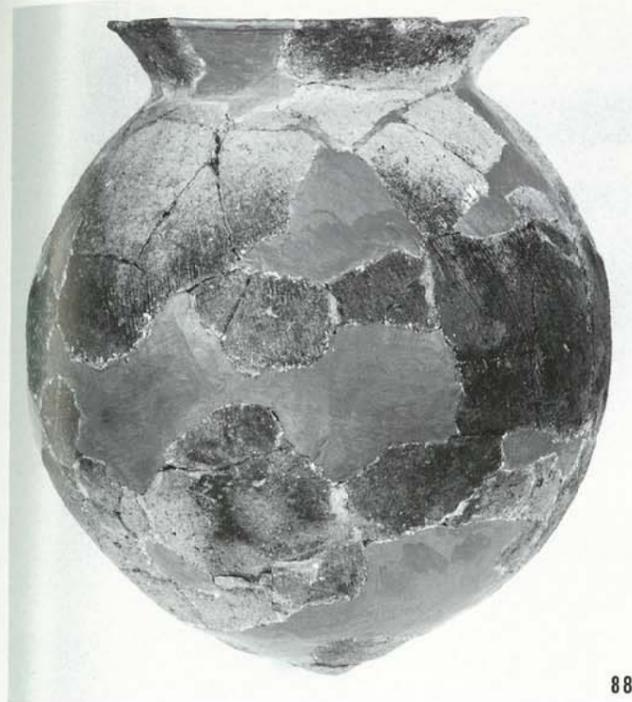
86



87-2 調整部分拡大



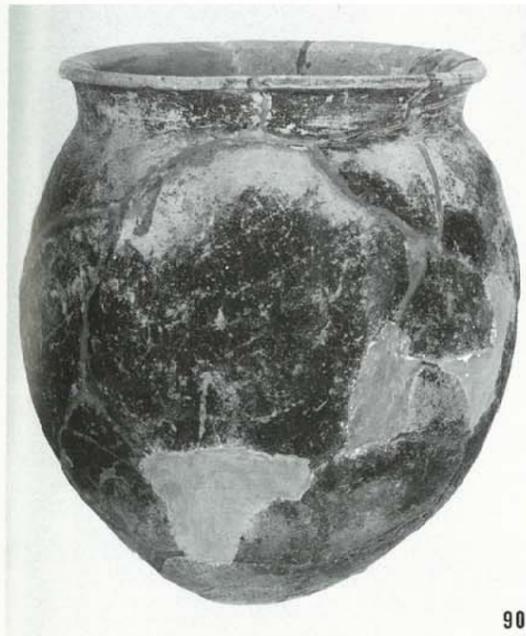
87-1



88



89



90



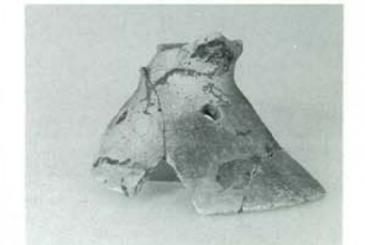
91



92



93



94



95



96



97-1



97-2



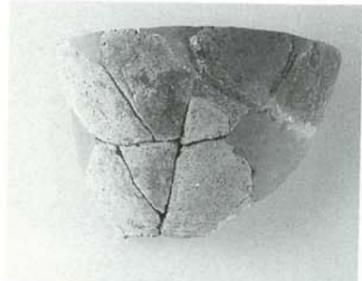
98



99



102



105



108



111-1



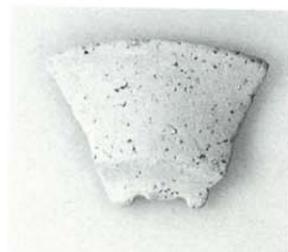
111-2



100



103



106



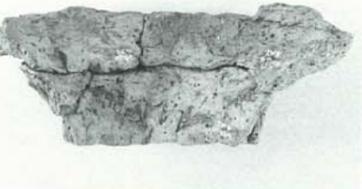
109



112-1



112-2



112-3



101



104



107



110



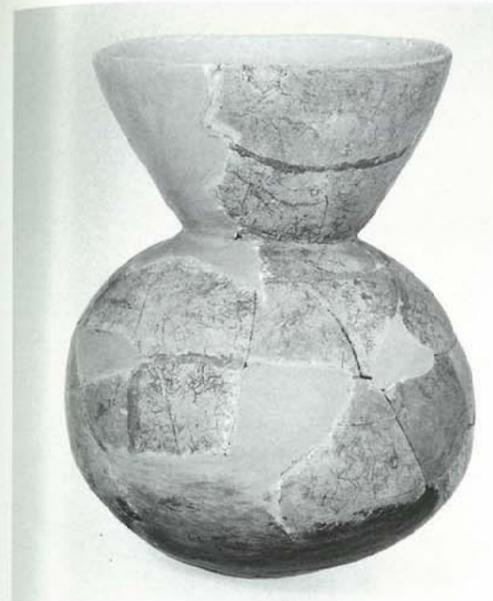
113



114-1



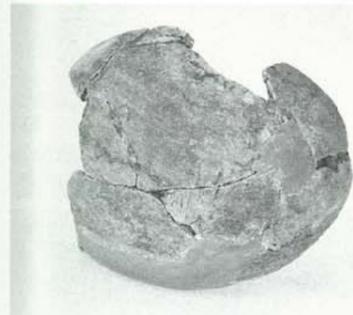
114-2



115



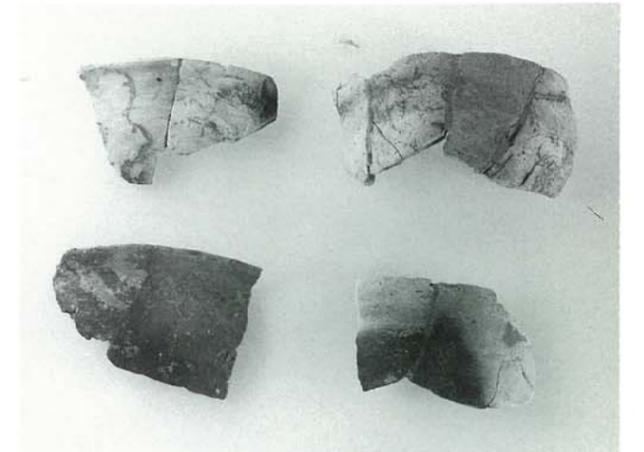
116



117



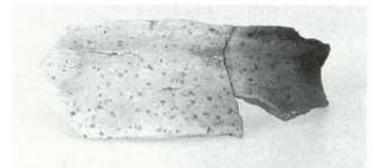
124



118 SD101土師器鉢口縁部



119



120



121



122



123



125

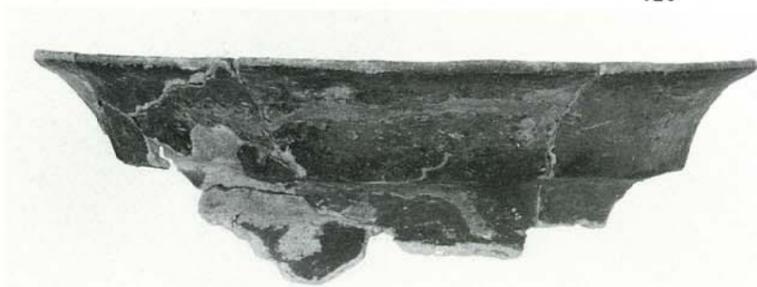
図版38



126



127



128



129



130



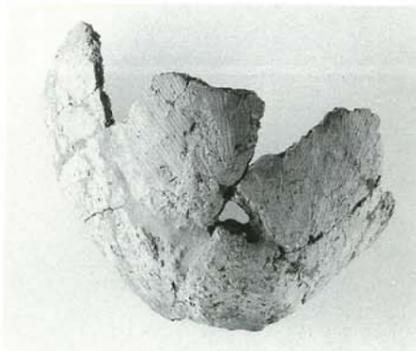
131



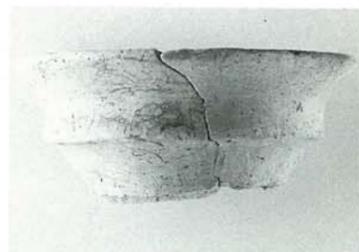
132



133



134



135

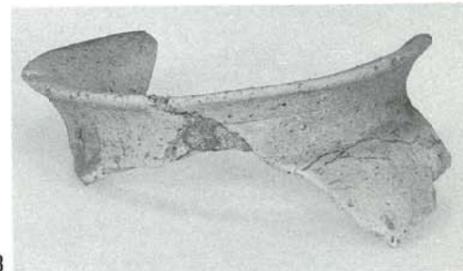
図版39



136



137



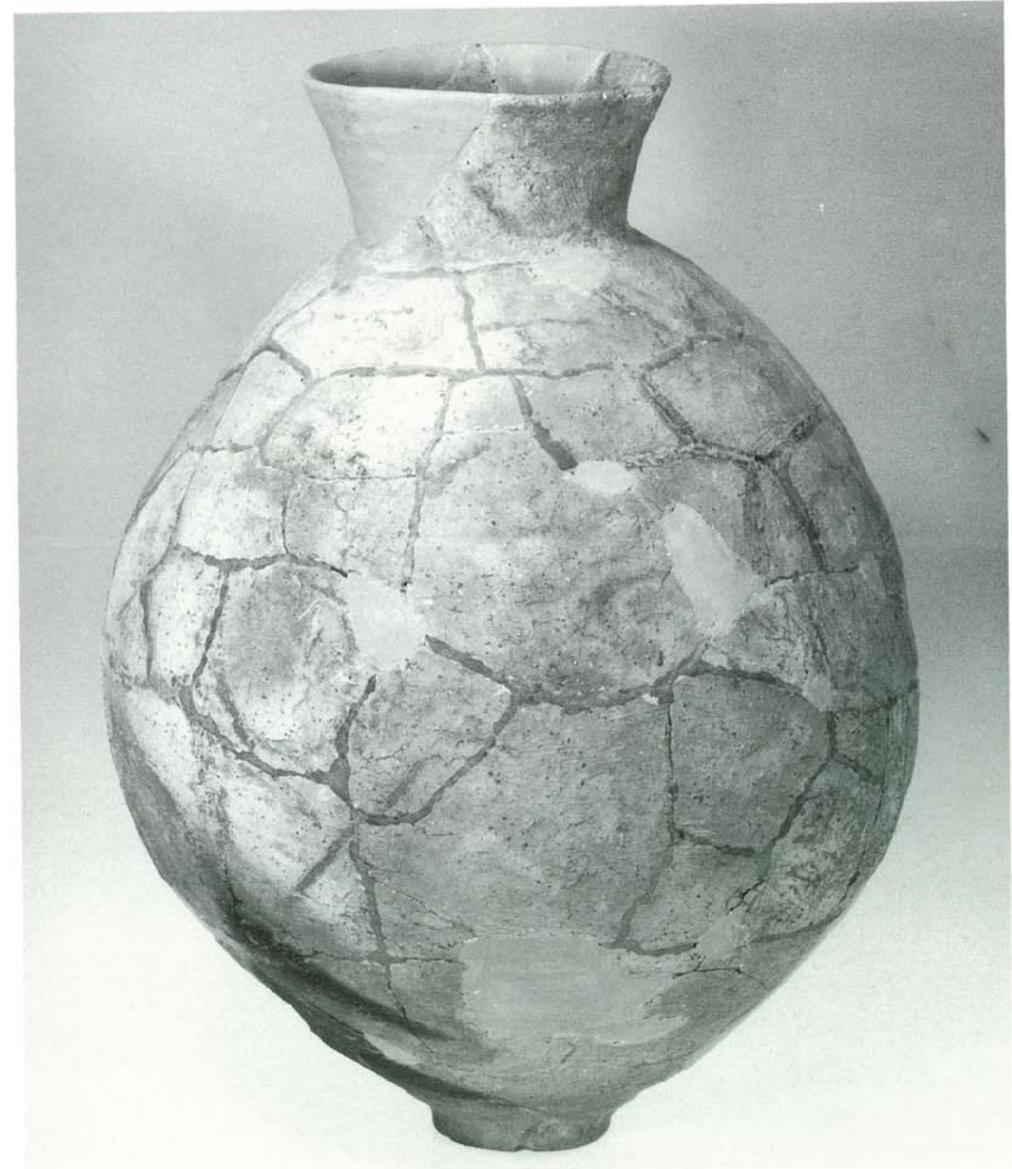
138



139-1

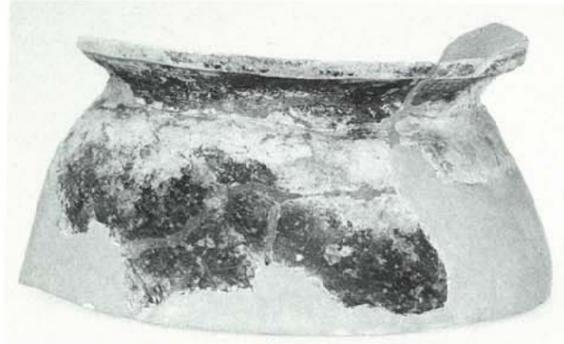


139-2

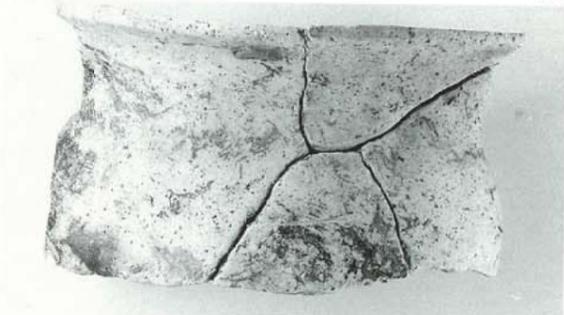


140

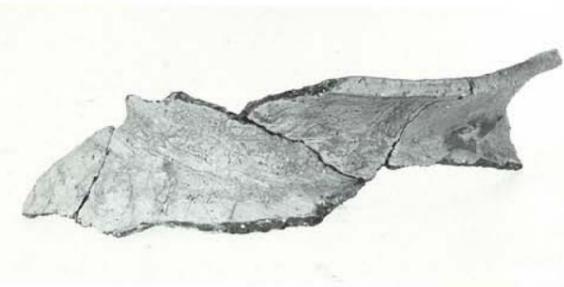
図版40



141



142



143



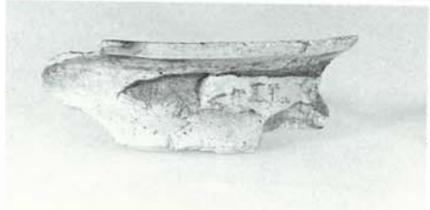
148



144



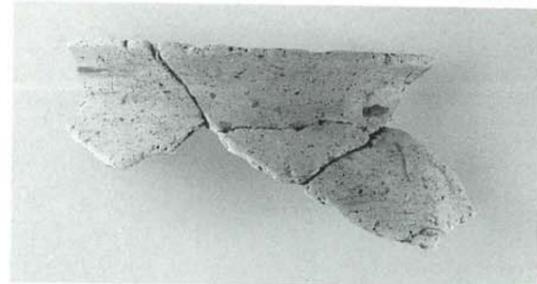
145



146



147



149



150

図版41

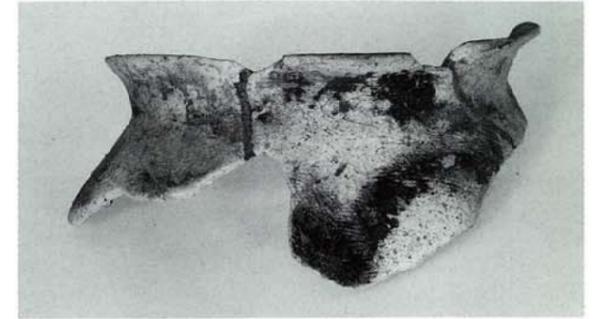


151-1



151-2

調整部分拡大



152



153



156



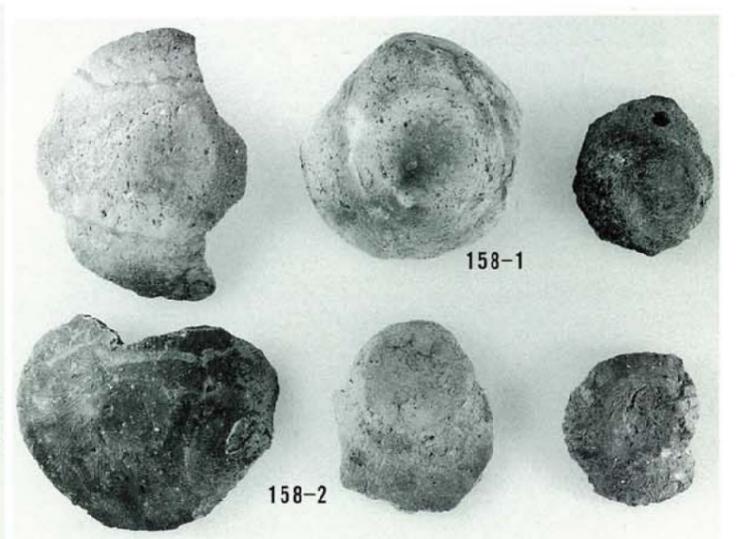
154



155



157 SD101出土甕底部



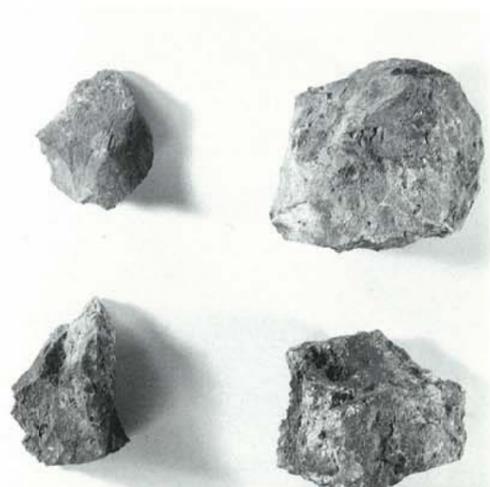
158-1

158-2

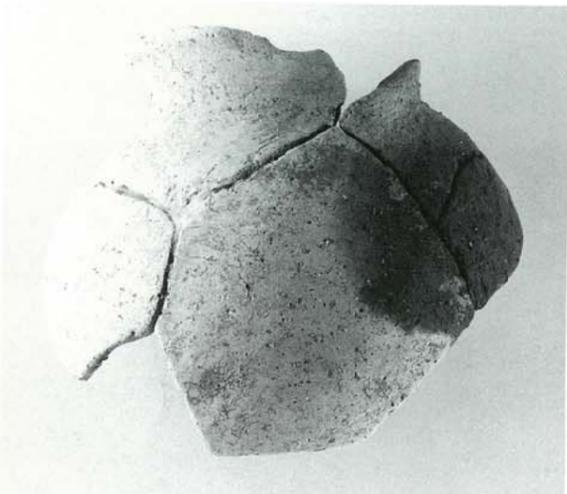
158 SD101出土甕底部



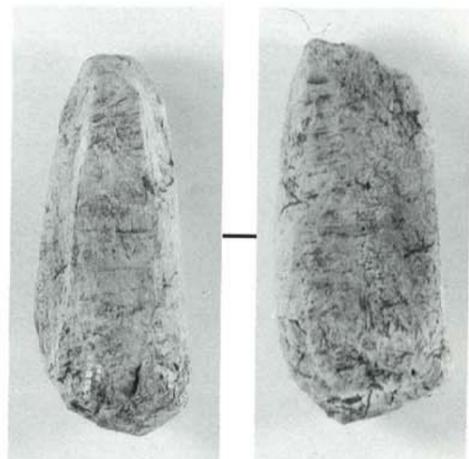
159



161 SD101出土鉄石英

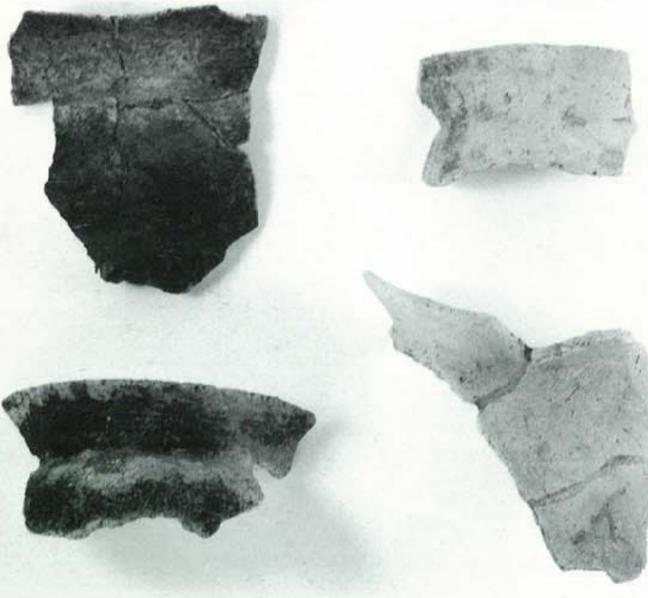


160

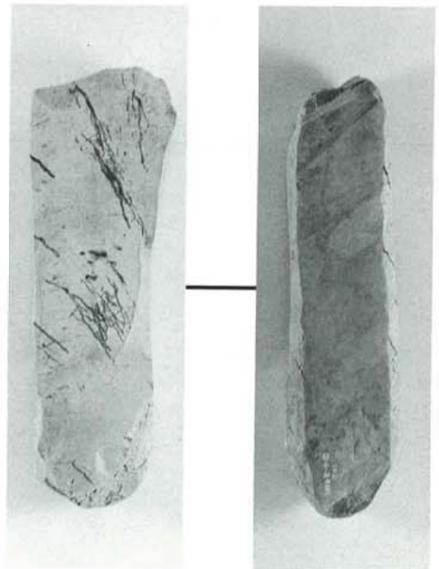


162-1

162-2



163 SD101甕口縁部



164-1

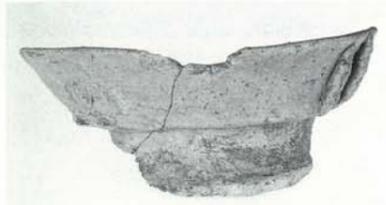
164-2



165



166



168



171



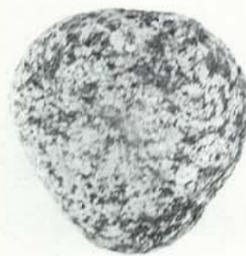
174-1



174-2



178



167 SD101出土石器



169



170



172



173



175



176



177



179 河原跡出土鉄石英



180-1



180-2 調整部分拡大



181-1



181-2 調整部分拡大



182-1



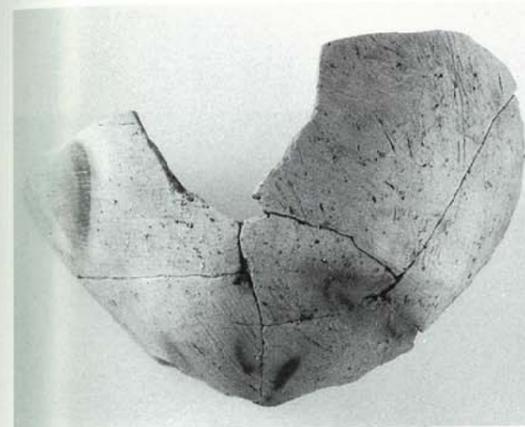
182-2 調整部分拡大



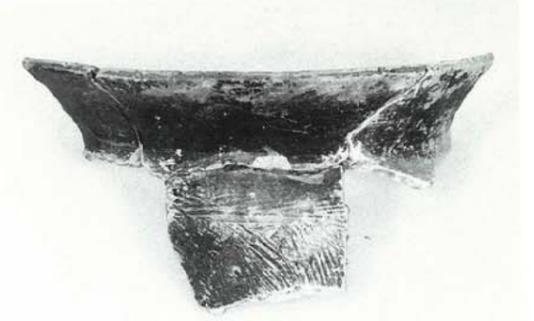
183



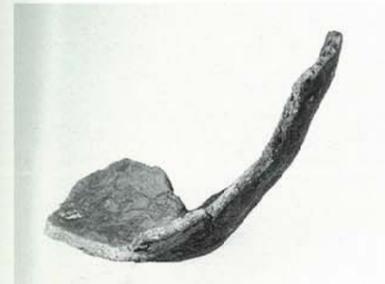
184



185



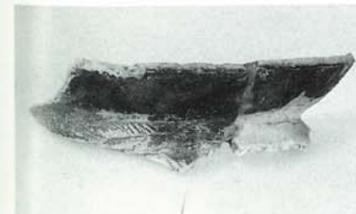
186



187



188



189



190



191 SG出土甕口縁部



192-1



192-2 調整部分拡大



193-1



193-2 調整部分拡大



193-3



193-4 調整部分拡大



194



195



196



197



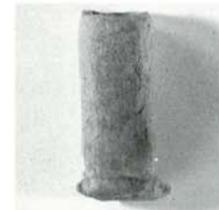
198



199



200



201



202



203



204



206-2



205

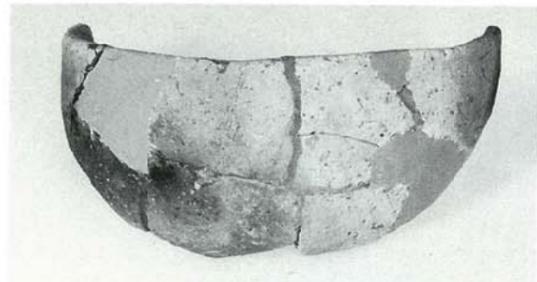


調整部分拡大

206-3



206-1



207



208



209



210



211



212



213



214



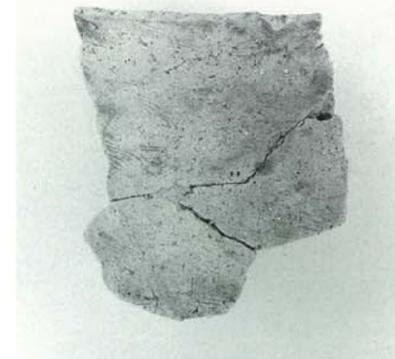
215



216



217



218



219



220



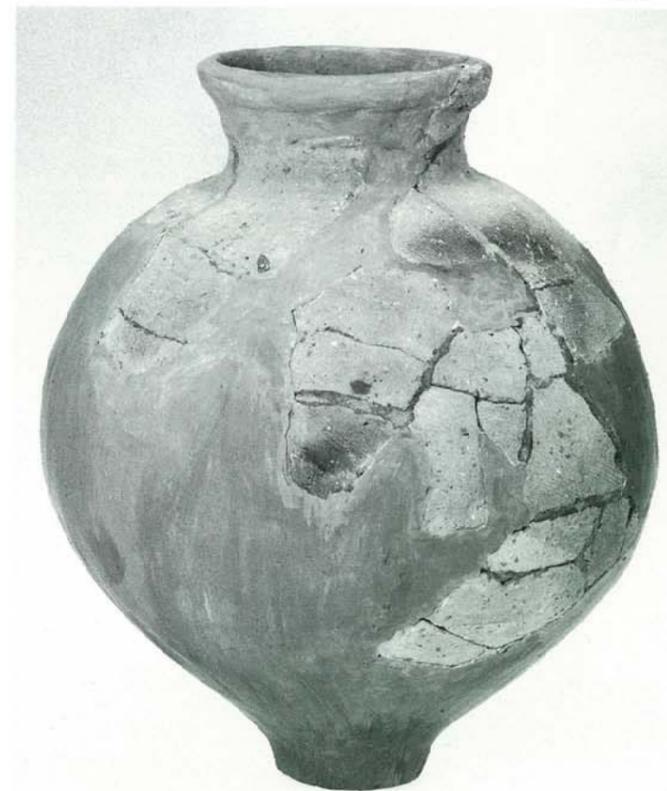
221



222



223



224



225



226



227



228



229



230-1

230 珠洲系陶器

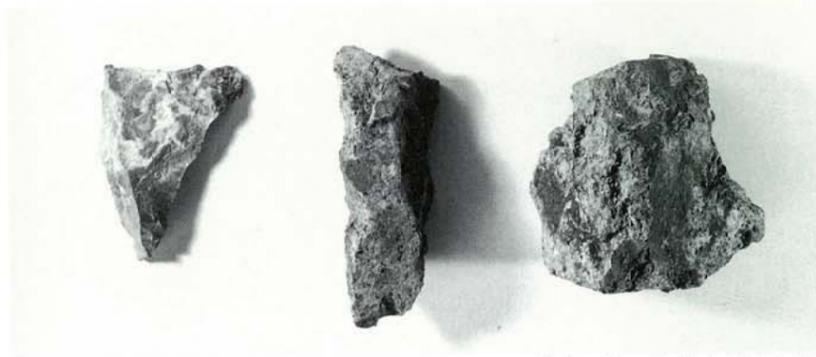


231-1

231 須恵器



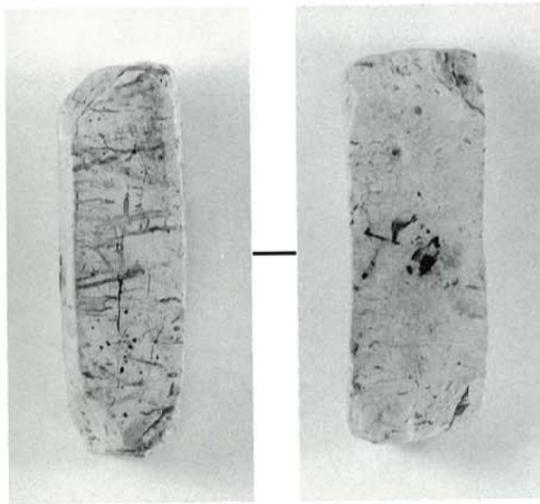
232



233 グリッド・鞍部出土鉄石英

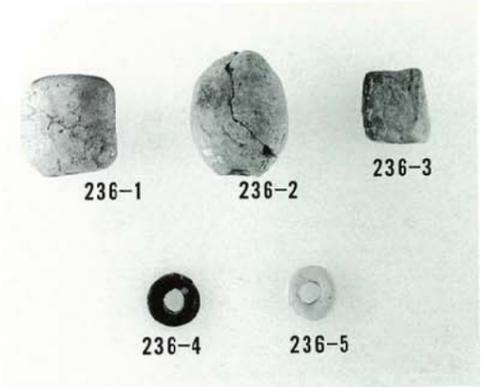


234
河川跡出土鉄石英



235-1

235-2



236-1

236-2

236-3

236-4

236-5

236

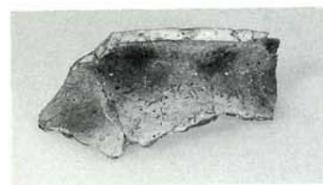


237-1

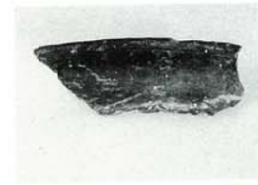
237-2

237-3

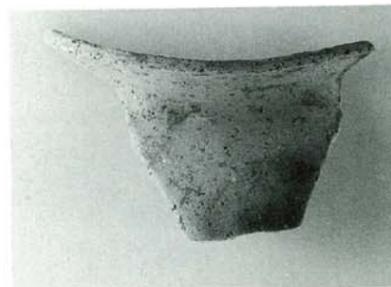
237



238



239



240



241



242



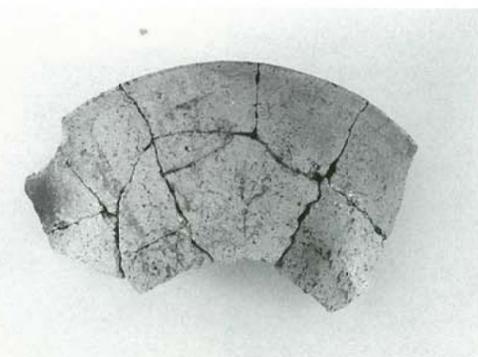
243



244



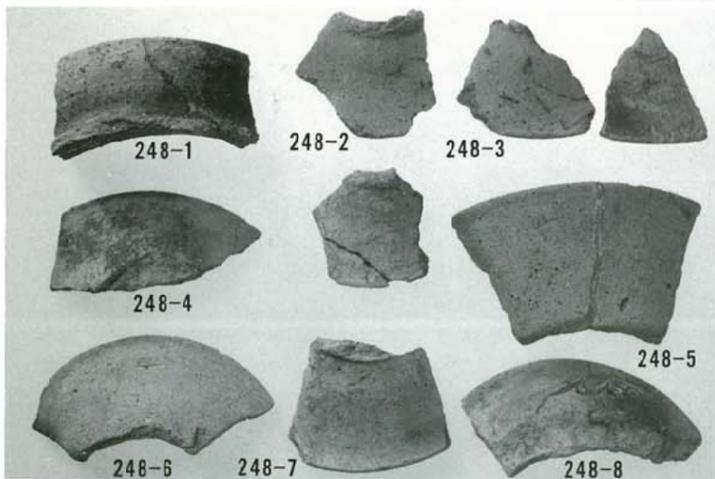
245



246



247



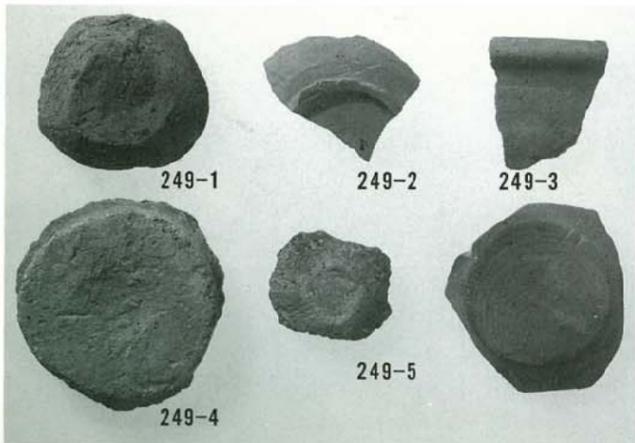
248



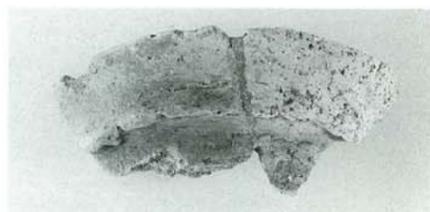
250



251



249



252



253



254



255



256-1

256-2



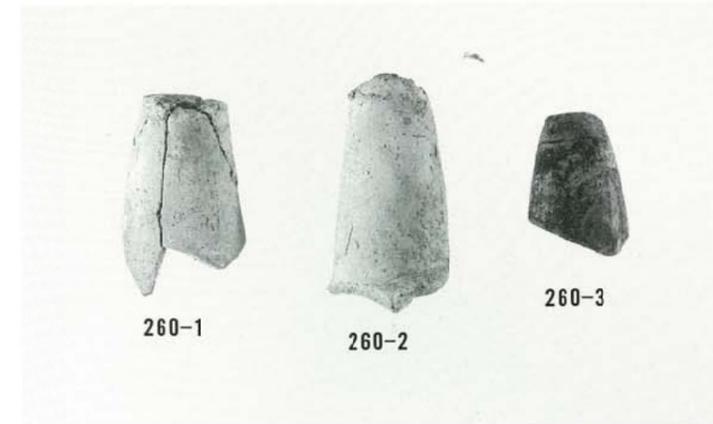
257



258



259 種子

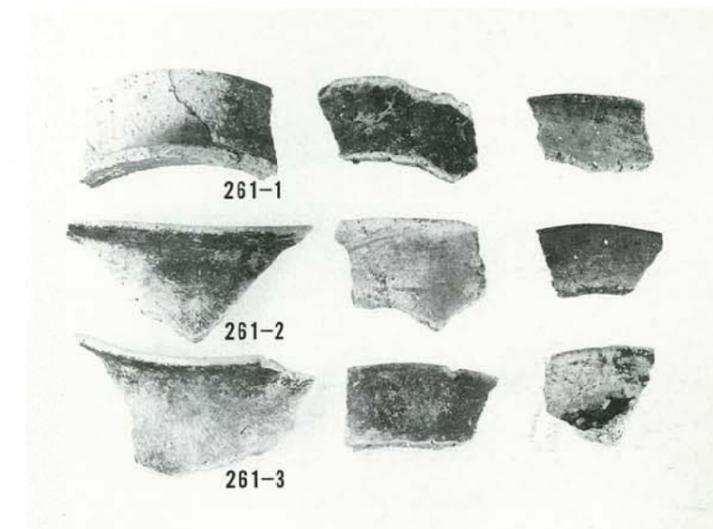


260-1

260-2

260-3

260 高坏脚部

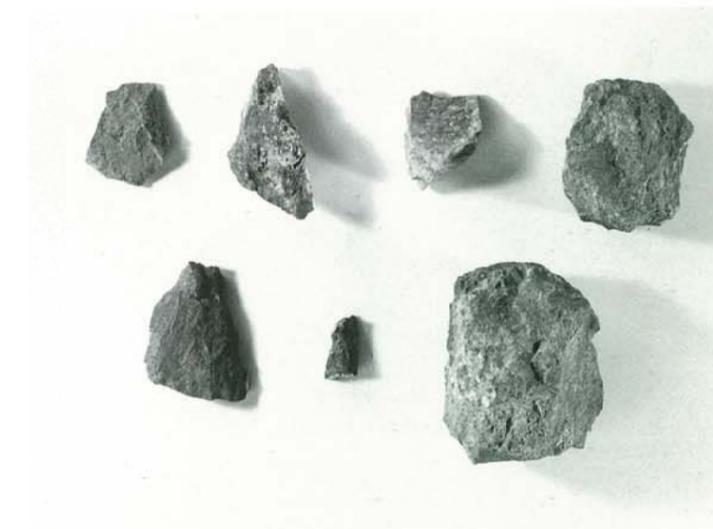


261-1

261-2

261-3

261 中野遺跡出土甕底部



262 中野遺跡出土鉄石英

付 編

I 畑田遺跡の放射性炭素年代測定

株式会社 パレオ・ラボ

山形県鶴岡市の畑田遺跡の住居跡(S T182, S T103)より出土した炭化材2点について放射性炭素年代測定が行なわれた。年代測定は学習院大学年代測定室の木越邦彦先生にお願いした。

なお、年代値の算出には ^{14}C の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。また、付記した誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代である。また試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してある。また試料の β 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が 2σ 以下のときには、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記してある。

各試料の測定結果を以下の表に示す。

なお、試料No.1, 2ともに古墳時代の遺構より出土し、古墳時代前期の年代が推定されていたが、測定結果はともに弥生時代を示す年代値が得られている。このことは、可能性の1つとして、試料中に堆積物などにもなう古い時代の炭素が混入していることが考えられる。

表. 畑田遺跡の放射性炭素年代測定結果

試料	GaK-Code No	年代(1950年よりの年数)
炭化材 No.1 (ST182住居跡)	GaK-17645	2,170 \pm 180 220 B.C.
炭化材 No.2 (ST103住居跡)	GaK-17646	1,930 \pm 80 A.D. 20

II 畑田・中野遺跡における堆積物について

株式会社 パレオ・ラボ

1. はじめに

畑田・中野遺跡は庄内平野の南西部、山形県鶴岡市大淀川地区に位置している。周辺には大山川、およびその支流の湯尻川、千安川が流れており、遺跡の立地する沖積平野はこれらの河川的作用によって形成された自然堤防や後背湿地からなると考えられている(角田, 1976, 山形県・山形県教育委員会, 1988など)。遺跡の調査区内にはシルト、砂を主体とする堆積物が分布しており、古墳時代の遺物包含層を覆う灰色から灰オリーブ色を呈する、シルトから粘土質の堆積物が全体に広く分布している。ここでは、この堆積物を「灰色粘土層」とよび、その特徴を明らかにするため、粒度分析を行なう。

2. 試料

畑田・中野遺跡の調査区内において、灰色粘土層の堆積物を中心に試料採取した。

(1) 畑田遺跡A区北西基本層序C地点

HD 1-1: 灰色粘土層で、層厚約25cmである。径2~3mmの管状の褐鉄鉱の団塊(高師小僧)が含まれる。下部はやや砂質である。

HD 1-2: 灰色粘土層の下位で、古墳時代遺物包含層である層厚約13cmの暗緑灰色の砂質シルトからシルト質砂である。径5~10mmの炭化物が点在する。比較試料として分析する。

HD 1-3: HD 1-2の下位の砂質シルトからシルト質砂である。表面は暗緑灰色であるが、内部の新鮮な部分は青灰色を呈する。地山層である。比較試料として分析する。

(2) 畑田遺跡A区南東

HD 2: 灰色粘土層で、SD101の溝の部分に分布するため、層厚約35cmと最も厚い。径約2mmの高師小僧が少量みられる。径約4mmの黒褐色斑点状の植物根跡が点在する。

HD 3: 灰色粘土層である。ST150住居跡内に凹地にたまるように堆積している。やや紫灰色がかり、層中に植物遺体が層状に堆積しており、砂質の部分がブロックからパッチ状にみられる。

HD 4: 遺構覆土に含まれる明灰白色を呈する粘土であり、灰色粘土層とは異なり自然堆積したものではない。高師小僧が含まれる。比較試料として分析する。

(3) 中野遺跡A区基本層序地点

NN 1: 灰色粘土層に相当する層である。高師小僧が少量みられる。A区南西部の壁面より採取した。

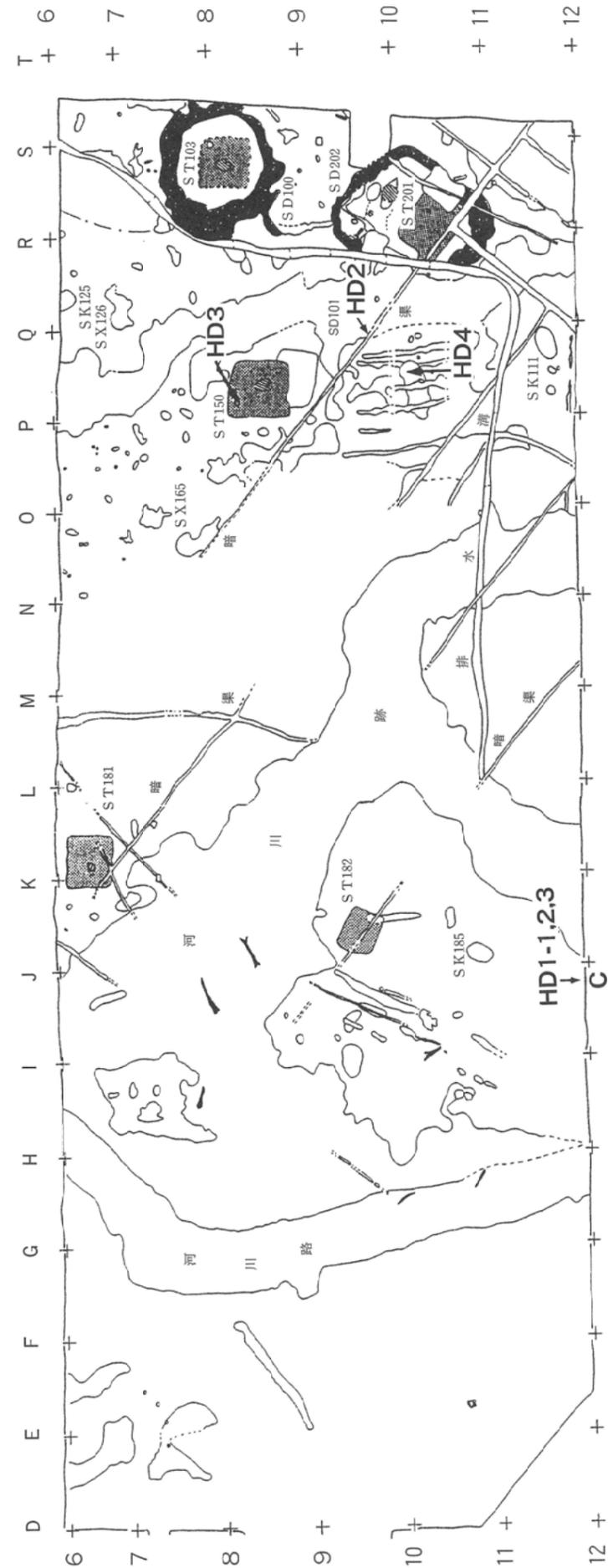


図1 畑田遺跡における試料採取地点

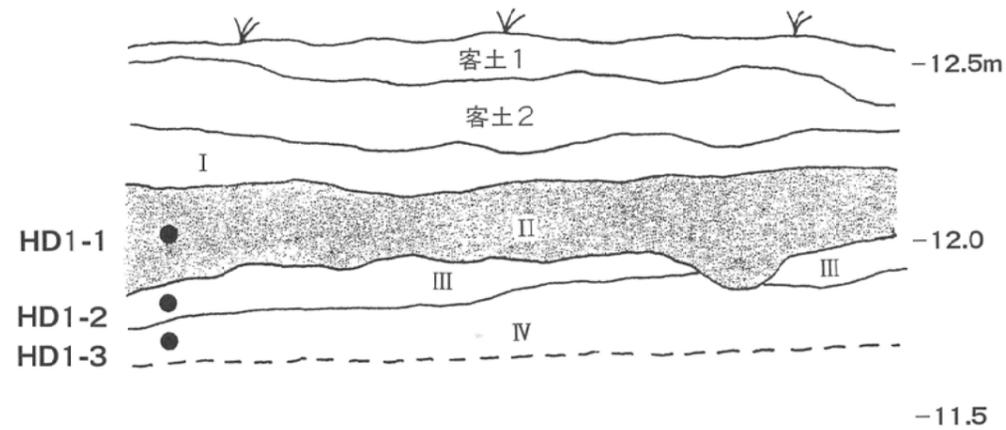


図2 畑田遺跡基本層序C地点における試料採取位置
(スクリーントーンの部分はいわゆる灰色粘土層)

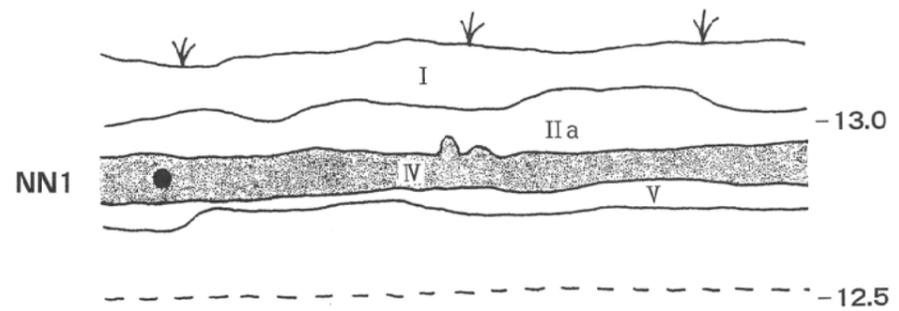


図3 中野遺跡基本層序地点における試料採取位置
(スクリーントーンの部分はいわゆる灰色粘土層)

3. 分析方法

- (1) 湿潤重量で約100gの試料を秤量後1000ccのビーカーに入れ、過酸化水素水(H₂O₂) 6%溶液を加え分散させる。分散後水を加え、4.5φ(0.044mm)の標準フルイを通して、粗粒成分と細粒成分に分離する。
- (2) 粗粒成分については恒温乾燥器で110°Cで乾燥し、標準フルイを1/2φ間隔で4.5φまで重ねて振とうしフルイ分けする。
- (3) 細粒成分については遠心沈降式粒度分布測定装置(島津SA-CP2)により光透過法による粒度分析を行なう。
- (4) 測定結果は、粒度分布をヒストグラムにして表した(図4, 5)。また、Friedman(1961, 1967)の積率法により平均粒径、淘汰度、歪度、尖度を算出した(表1)。計算式は以下の通りである。

$$\text{平均粒径} \quad x\phi = (\sum fi xi) / 100$$

$$\text{淘汰度} \quad \sigma\phi = \sqrt{(\sum fi (xi - x\phi)^2) / 100}$$

$$\text{歪度} \quad \alpha\phi = (\sum fi (xi - x\phi)^3) / 100 (\sigma\phi)^3$$

$$\text{尖度} \quad \beta\phi = (\sum fi (xi - x\phi)^4) / 100 (\sigma\phi)^4$$

fi: 各粒度階の重量% xi: 各粒度階の中央粒径値(ファイ尺度)

粒度分析結果はすべてφ(phi, ファイ)尺度で表示している。ファイ尺度では、粒径d mmの粒子は $\phi = -\log_2 d$ となり、1 mmが0 φである。これより粒径が半減するごとにφの値は1ずつふえ、粒径が倍になるほど1ずつ減る。すなわち、0 φを基準に正(+)の値が大きいほど細粒で、負(-)の値が大きいほど粗粒になる。また、統計的諸指標値のうち、平均粒径は粒度分布全体を代表する値である。淘汰度は粒子の大きさのそろい方を表し、値が0に近いほど粒径がよくそろっていることを示す。歪度は、粒度分布のかたよりを表し、0を対称に正ほどモードが平均より粗粒の方にかたより、逆に負は細粒の方に偏していることを示す。尖度は粒度分布曲線の山の尖り方を表し、値の大きいものは突出した曲線を、小さいものは偏平な曲線を表す。

- (5) 堆積物中の碎屑粒子の粒径区分は、-1.0φ(2 mm)~4.0φ(1/16mm : 0.0625mm)が砂、4.0φ~8.0φ(1/256 : 0.0039mm)がシルト、8.0φ未満のものが粘土である。なお、分析結果では9.5φ未満の粒子は10.0φとして一括する。
- (6) HD 1-1の灰色粘土層とHD 4の粘土層について、30×20×5 mm程度のチップを切り出し、乾燥させ、エポキシ系樹脂で固化処理をして、岩石薄片作製と同様な方法で0.03~0.02mmの厚さの薄片を作製する。堆積物の特徴を記載するために偏光顕微鏡により観察を行なう。

4. 堆積物の特徴

(1) 粒度組成

畑田遺跡の基本層序C地点においては、灰色粘土層のHD 1-1は4.0φ以上の砂サイズの粒子はほとんど含まれない。平均粒径0.0081mmでシルトが主体となり、8.0φ未満の粘土粒子も比較的多く含まれる。HD 1-2は灰色粘土層とは明らかに異なり、砂サイズの粒子も比較的多く粗粒である。平均粒径0.0511mmで、細粒砂からシルトが主体となる。HD 1-3はHD 1-2と同様に砂サイズの粒子が含まれ、平均粒径0.0424mmで、5.0φ付近の割合が少ないが細粒砂からシルトが主体となる。HD 2は分析した灰色粘土層の中では最も細粒である。砂サイズの粒子はほとんど含まれず、平均粒径0.0065mmで、シルトが主体で粘土分も多く、9.5φ未満の細粒な粒子も多くみられる。HD 3は砂サイズの粒子はごくわずかで、平均粒径0.0105mmで、シルトが主体で粘土分も多く、9.5φ未満の細粒な粒子も多くみられる。NN 1も他の灰色粘土層と同様に砂サイズの粒子は少なく、平均粒径0.0095mmでシルトが主体で粘土分も多い。9.5φ未満の粒子も比較的多く含まれる。遺構覆土であるHD 4の粘土は平均粒径0.0129mmで、シルトから粘土がほとんどで、9.5φ未満のものも多く含まれ全体に非常に細粒であることがわかる。さらに、-0.5φ(1.41mm)~1.5φ(0.35mm)の部分に粗粒な砂が含まれるのが特徴的である。このように細粒なものと同粒なものも含まれるため、淘汰度が2.624であり、他の試料より淘汰が悪い。

表1 畑田・中野遺跡堆積物の統計的諸指標値

試料No	平均粒径 φ (mm)	淘汰度 φ	歪度 φ	尖度 φ
HD 1-1	6.950(0.0081)	1.381	0.219	3.000
HD 1-2	4.286(0.0511)	1.911	0.945	3.560
HD 1-3	4.561(0.0424)	1.916	0.705	3.000
HD 2	7.265(0.0065)	1.442	0.130	2.654
HD 3	6.586(0.0104)	1.634	-0.030	3.582
HD 4	6.282(0.0129)	2.624	-0.878	3.399
NN 1	6.717(0.0095)	1.560	0.089	3.008

φ : phi, ファイ

(2) 堆積物の薄片の観察 (図版参照)

[HD 1-1] : 灰色粘土層

シルト、粘土サイズの粒子から構成され、全体に均質で細粒である。構成粒子は石英、長石類、風化した雲母類およびその他の粘土の粒子などからなる。また、部分的に褐色を呈するパッチ状の褐鉄鉱の部分が見られ、これは高師小僧とよばれる地下水中に溶解している鉄分が堆積物中の植物体を交代して生じた水酸化鉄の沈澱物である。

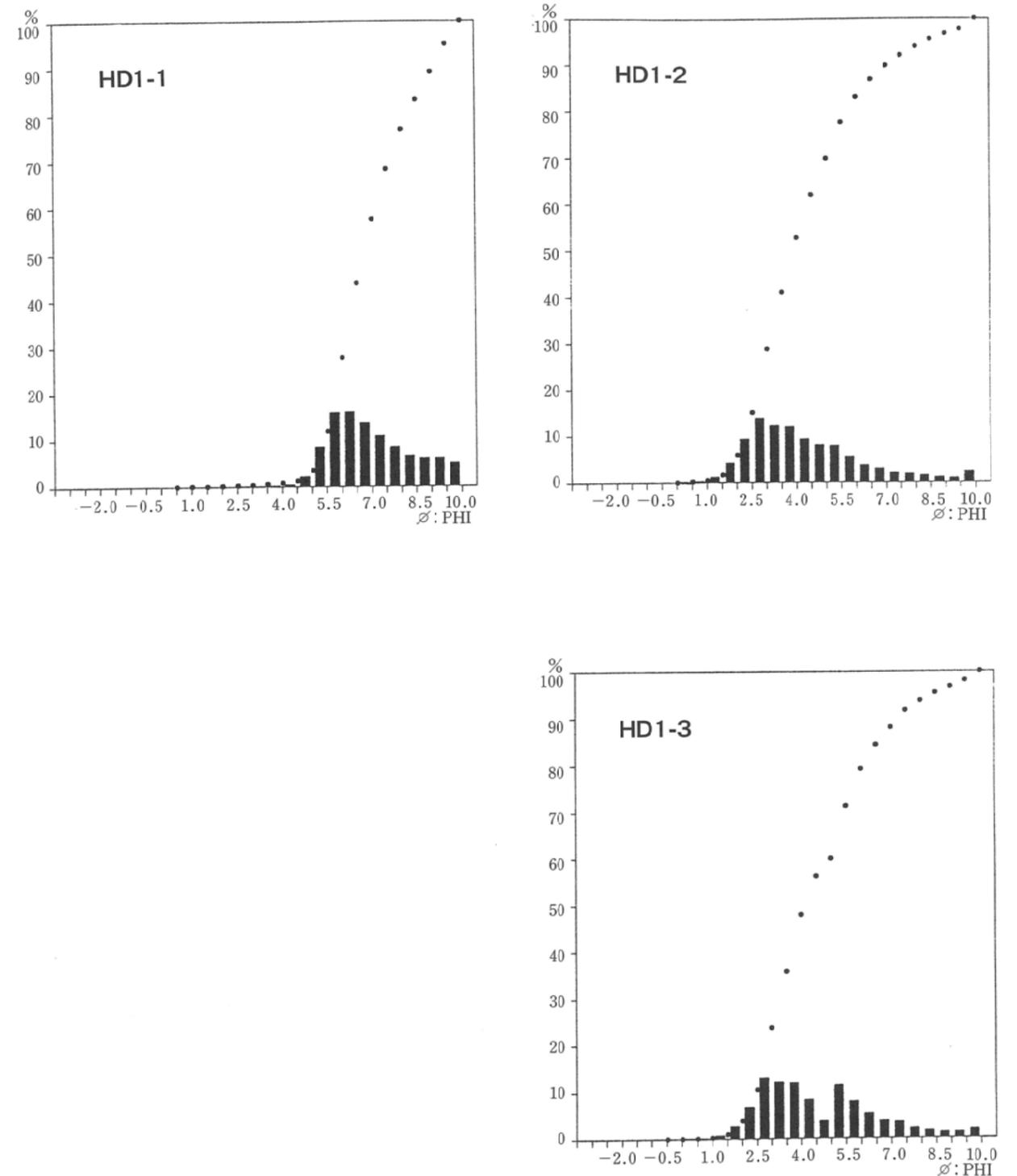


図4 畑田遺跡基本層序C地点堆積物の粒度組成(・は積算%示す)

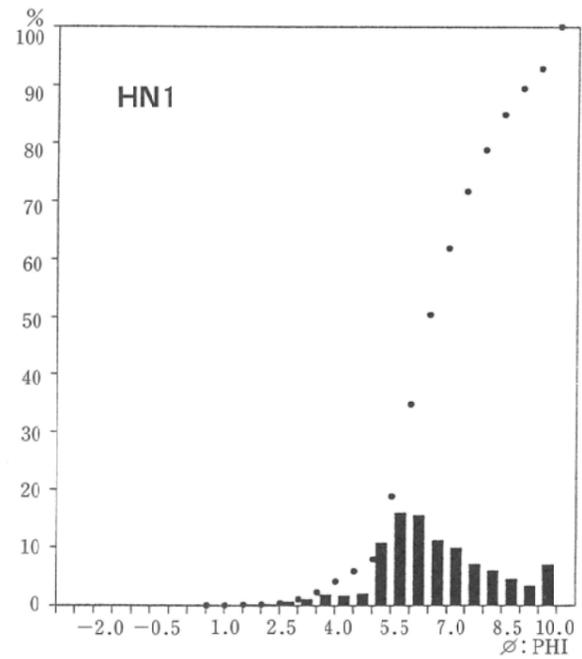
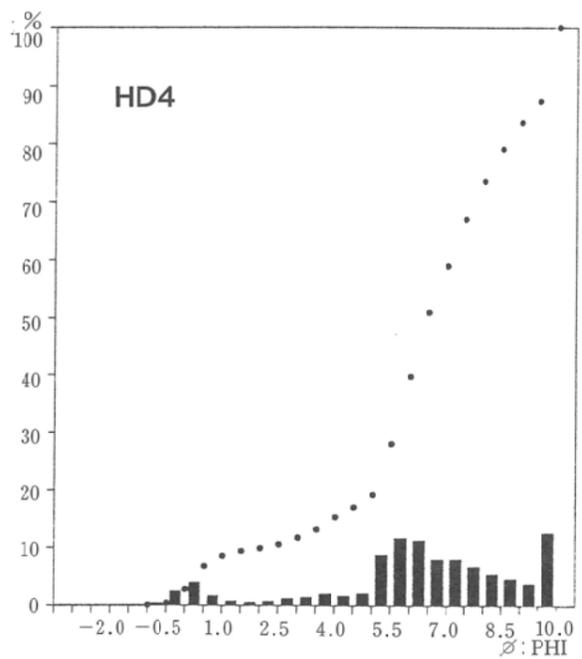
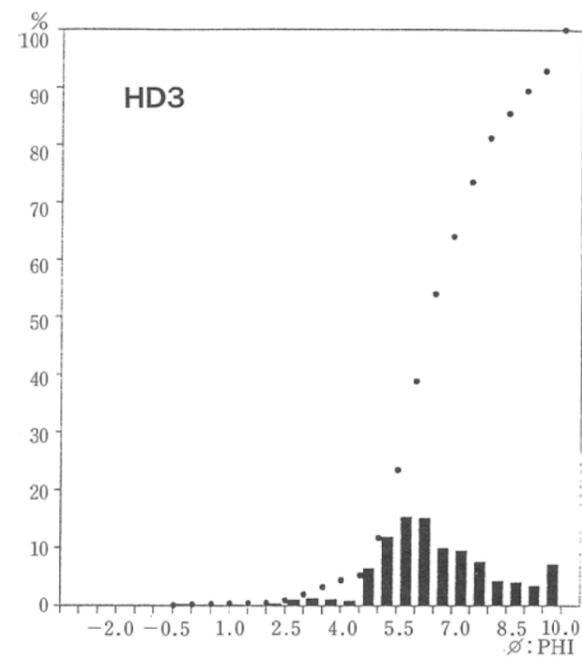
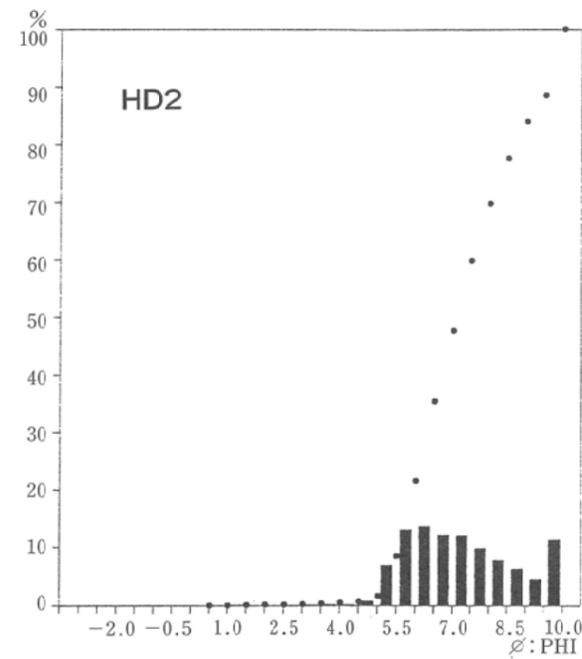


図5 畑田・中野遺跡の堆積物の粒度組成(・は積算%示す)

[HD4]: 遺構覆土の粘土

基質(マトリックス)の部分は石英、長石類、風化して粘土化した雲母類をはじめとするシルト、粘土サイズの細粒な粒子からなり、均質である。これらの基質の中に量的には多くはないものの、粒径約0.5~1.0mmの粗粒な火山岩の岩片や石英、長石類、雲母類の粒子が含まれる。そのため、淘汰が悪く不均質な部分がみられる。この結果からもわかるように、この粘土は灰色粘土層とは明らかに特徴が異なり、発掘調査段階で露出した周辺の堆積層には類似したものはみられない。この粘土は出土状況から自然堆積のものではないので、なんらかの目的でどこからか持ち込まれた可能性がある。その起源については、この遺跡でさらに発掘面より深い層準の地層のものか、あるいは全く異なる外部からのものである可能性が考えられるが、現段階では産地を特定するようなデータが少ないため不明な部分が多く、今後の課題として検討したい。

(3) 灰色粘土層の堆積環境

山形県・山形県教育委員会(1988)によると空中写真により微地形分類から畑田・中野遺跡周辺地域には自然堤防状の微高地と後背湿地からなっているとされている。また、角田(1976)は庄内平野南部の大山川流域における沖積層のボーリング試料から、堆積層が砂層と泥層の互層からなることを見だし、この地域は自然堤防と後背湿地のくりかえしからなる自然堤防性平野と考えることができるとしている。畑田・中野遺跡周辺地域は大山川、湯尻川、千安川などの河川が流れており、これらの河川の増水、氾濫にとともに氾濫原となり自然堤防および後背湿地が河道にそって形成され、さらに、この地域では、これらの河川の流路変遷による侵食、堆積作用により、自然堤防堆積物、後背湿地堆積物がくりかえし堆積していると推定される。このような状況は古墳時代に至っても続いていたと考えられ、遺跡内にも河川跡が埋積されているところからみられることから、増水、氾濫が起りやすい環境であったと考えられる。

また、洪水時などに河川が増水、氾濫した場合、砂などの比較的粗粒な物質は河道近くに堆積し、自然堤防堆積物を形成するが、河道から遠ざかるにつれて流速が遅くなるので堆積物はシルト、粘土などの細粒物質になり、外側の氾濫原に広がり、一部は凹地をなし後背湿地となることが多い(大矢, 1981など)。今回の粒度分析結果から畑田・中野遺跡の調査区内に分布する灰色粘土層(HD 1-1, HD 2, HD 3, NN 1)はどれもシルトから粘土を主体とした細粒で比較的均質な堆積物であることがわかり、下位の古墳時代の包含層(HD 1-2)および地山層とされる層(HD 1-3)とは明らかに異なるものである。この灰色粘土層の粒度組成の特徴と、遺跡全体に広く分布することを考慮して堆積環境を考える。まず、古墳時代の遺物包含層堆積後に近くの河川で増水、氾濫が起り、氾濫時の水中にシルト、粘土の粒子が浮遊し、懸濁した流水が河道を越えて氾濫原を広く覆う。そして、水の流れがほとんどない比較的静穏な環境で懸濁した水が氾濫原となった遺跡内に停滞し、その後減水したため、シルト、粘土の細粒で均質な粒

子が灰色粘土層として堆積したものと考えられる。

引用・参考文献

Friedman, G. H. (1961) Distinction between dune, beach and river sands from the textural characteristics. *Jour. Sed. Petrol.* 31 : 514-529.

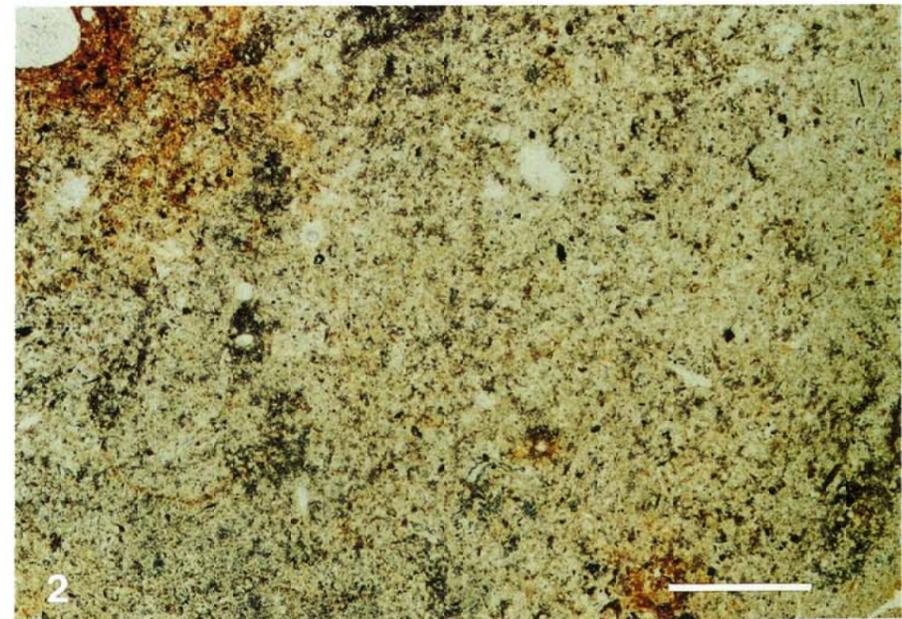
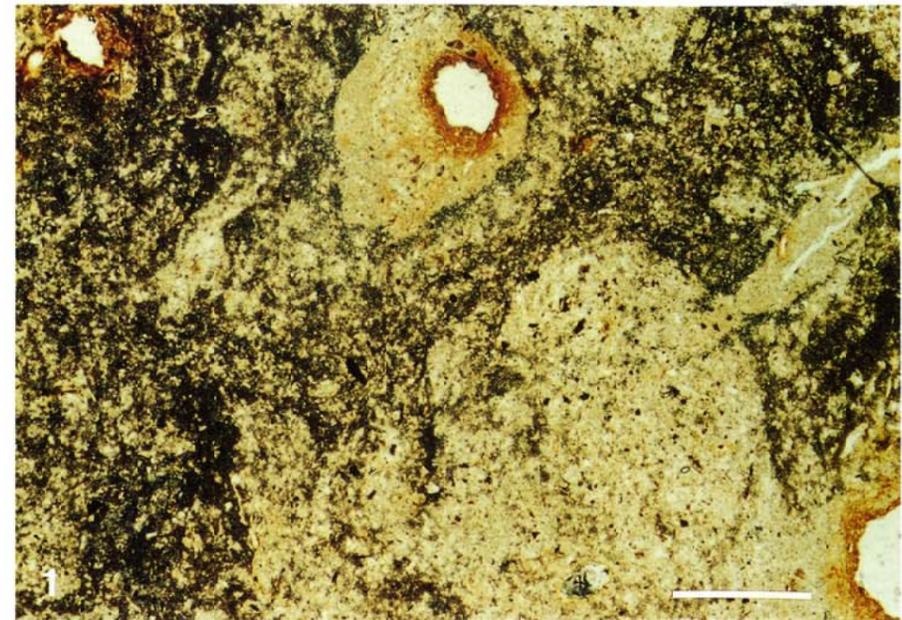
Friedman, G. H. (1967) Dynamic processes and statistical parameters compared for size frequency distribution of beach and river sands. *Jour. Sed. Petrol.* 37 : 327-354.

竈瀬良明(1990) 「自然堤防の諸類型－河岸平野と水害－」, 202pp. 古今書院.

角田清美(1976) 庄内平野の地形について. *庄内考古学*, 13 : 1-20

大矢雅彦(1981) 自然堤防. 「地形学辞典」: p.240, 二宮書店.

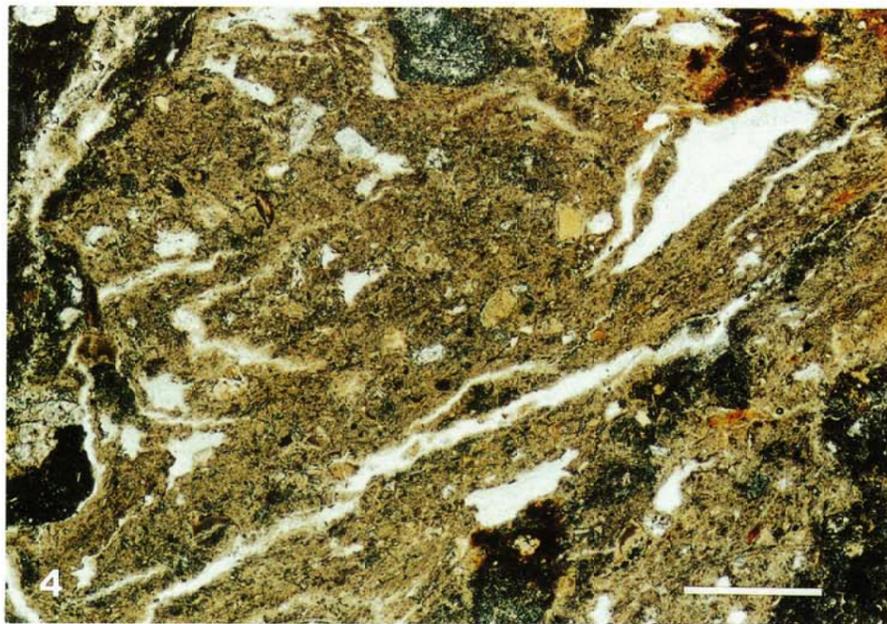
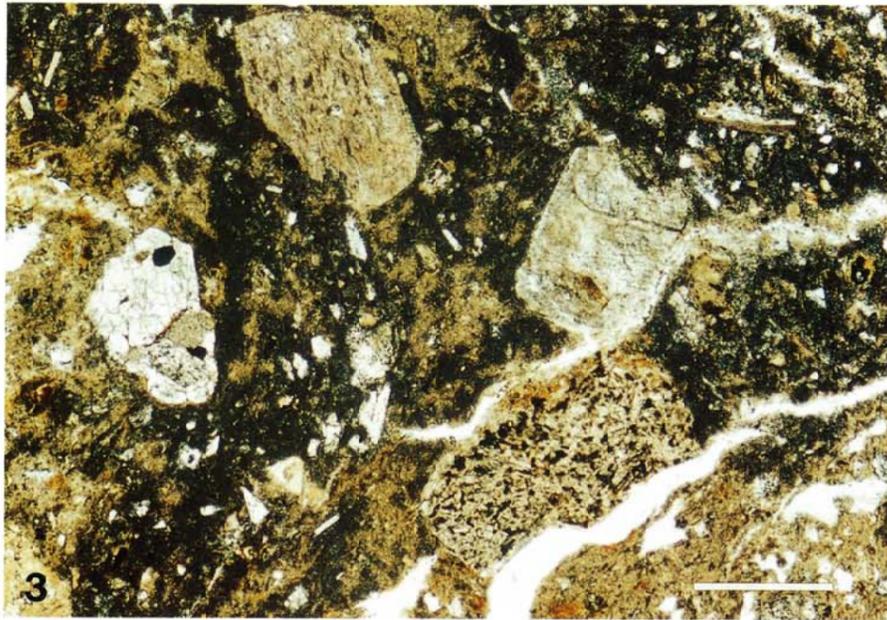
山形県・山形県教育委員会(1988) 「矢馳A遺跡・矢馳B遺跡・清水新田遺跡 発掘調査報告書」.



図版1 試料HD 1-1の薄片写真(スケール:0.5mm, 偏光顕微鏡, 下方ポーラーのみ)

1: やや不均質な部分, 上部に植物根跡がみられる

2: 細粒で均質な部分



図版2 試料HD 4の薄片写真(スケール:0.5mm, 偏光顕微鏡, 下方ポーラーのみ)
 3:岩片が含まれる部分
 4:細粒で比較的均質な部分

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第22集

はたけ だ 遺 跡
 畑 田 遺 跡
 なか の 野 遺 跡
 発掘調査報告書

1995年3月31日 発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
 〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号
 電話 0236-72-5301

印刷 株式会社 田宮印刷所

1995-583